常磐自動車道遺跡調査報告37

後作（うしろさく）Ａ遺跡（２次調査）
上平（うわだいら）Ａ遺跡
道　平（どう　だいら）遺跡

口絵　福島県大熊町上平Ａ遺跡調査区全景　（上空から）

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間が開通し，現在は富岡までの区間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設予定地内には，先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成14年度に行った富岡町に所在する後作Ａ遺跡（２次調査）と大熊町に所在する上平Ａ遺跡・道平遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

この調査では，後作Ａ遺跡から縄文時代早期の土器や土坑が発見されました。また，上平Ａ遺跡では，馬蹄形に配置された縄文時代前期の竪穴住居跡，道平遺跡からは縄文時代後・晩期の土器が発見されました。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する御理解を深めるとともに地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた日本道路公団，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成15年12月

福島県教育委員会
教育長　　髙　城　俊　春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に先立ち，対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査につきましては，平成６年度から平成８年度までに，いわき中央ＩＣからいわき四倉ＩＣ間のうち，いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに，平成９年度以降はいわき四倉ＩＣから富岡ＩＣ予定地間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており，平成14年度からは富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地間にかかる遺跡調査に着手いたしました。これまでにいわき市四倉町・広野町・楢葉町・富岡町・大熊町の38遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は，平成14年度に実施した発掘調査のうち，富岡町に所在する後作Ａ遺跡（２次調査）と大熊町に所在する上平Ａ遺跡・道平遺跡の調査成果をまとめたものです。

後作Ａ遺跡からは，縄文時代早期の押型文土器や大平式土器，田戸下層式土器などの貴重な土器が発見されました。また，縄文時代早期中葉から後葉の土坑も見つかっています。上平Ａ遺跡では，縄文時代前期前葉の遺構と遺物が発見されました。竪穴住居跡は，直径約30ｍほどの広場を囲むように馬蹄形に配置されていました。また，火災で焼失したと考えられる住居跡も１軒見つかりました。道平遺跡は，遺跡の縁辺部の調査になりましたが，縄文時代後期から晩期にかけての土器が発見されました。

今後，この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，この調査に御協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所，福島県担当部局，富岡町・大熊町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお，埋蔵文化財の保護につきまして，今後ともより一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年12月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　佐　藤　栄　佐　久

緒　　言

1　本書は，平成14年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡発掘調査にかかる埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2　本書には，富岡町と大熊町に所在する下記の遺跡の調査成果について収録した。なお遺跡所在地の小字名と遺跡名が異なるが，遺跡名は福島県遺跡地図（福島県教育委員会編：1996）に従っている。

遺跡番号　54300055；後作Ａ遺跡（富岡町大字上手岡字後作地内）
54500015；上平Ａ遺跡（大熊町大字大川原字南平1892，1893，1894番地）
54500014；道　平遺跡（大熊町大字大川原字西平1845，1846，1847番地）

3　この発掘調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託により実施したものであり，実際の調査業務は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化振興事業団に委託して行ったものである。

4　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員が調査を行った。

専門文化財主査　山内　幹夫　　文化財主査　宮田　安志
文化財主事　門脇　秀典　　文化財主事　坂田　由紀子

また，臨時的に下記の遺跡調査部遺跡調査課の職員の協力を得た。

発掘調査：　福島　雅儀・吉野　滋夫・福田　秀生
整理調査：　国井　秀紀・山元　出・大波　紀子・笠井　崇吉

5　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行い，文責は文末に示した。

6　本報告書は，後作Ａ遺跡については坂田が，上平Ａ遺跡については門脇が，道平遺跡については宮田が編集し，全体を山内が総括した。

7　本書に掲載の地図は，国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の１および５万分の１地形図を複製使用したものである。「（承認番号）平15東複第249号」

8　発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の機関と研究者からご指導・御助言をいただいた。
（順不同・敬称略）　富岡町教育委員会・富岡町公民館・大熊町教育委員会・大熊町民俗伝承館・大熊町文化センター・仙台市教育委員会・七ヶ浜町歴史資料館
主浜　光朗・木村　浩二・佐藤　甲二・酒井　正直・川村　正・山田　廣

9　本文中の氏名については，敬称を省略させていただいた。

10　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県文化財センター白河館（まほろん）で保管する予定である。

用　　例

1　本文中，もしくは挿図中に使用した略号は次の通りである。

ＴＯ：富岡町　ＯＫ：大熊町　ＵＳ．Ａ：後作Ａ遺跡　ＵＤ・Ａ：上平Ａ遺跡　ＤＤＲ：道平遺跡

Ｌ：遺構外の堆積土　ℓ：遺構内および遺物包含層の堆積土　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＸ：竪穴状遺構

ＳＫ：土　坑　ＳＳ：集石遺構　ＳＧ：焼土遺構　ＳＣ：木炭窯跡　ＳＨ：遺物包含層

Ｐ：小　穴　Ｆ：風倒木痕　Ｔ：トレンチ　Ｇ：グリッド

2　本書の遺構図の用例は次の通りである。

（１）方位の表記がない遺構図は，全て真北を指す。座標南北線は真北を示す。

（２）挿図中に示した標高は，東京湾平均海水面からの海抜高度を表している。

（３）縮尺率は掲載する遺構の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については，スケールの脇に表示した。原則として竪穴住居跡・竪穴状遺構・焼土遺構は１/50，土坑は１/40・１/50，集石遺構は１/25・１/50の縮尺率とした。

（４）ケバは原則として遺構内の傾斜部は╥で表示したが，相対的に緩傾斜の部分は╤で表している。また，╤は後世の削平が明らかである場合に使用した。

（５）挿図中の網かけ等については，その用例を同図中に表示した。

（６）竪穴住居跡等でピット番号の下に示した，（　）内に表記した数字は，床面からの小穴の深さを，〔　〕内に表記した数字は検出面からの小穴の深さを示している。単位：cm。

（７）挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖22版』（小山正忠・竹原秀雄編著1999，日本色研事業株式会社発行）に記載された色調に基づいている。

3　本書の遺物実測図の用例は次のとおりである。

（１）縮尺率は掲載する遺物の大きさと性格により適宜決定した。選定した縮尺率については，スケールの脇に表示した。原則的には，土器・土製品を１/３縮尺，石器を１/２・２/５・１/４・１/６縮尺，拓本を１/３縮尺とした。

（２）縄文土器の断面は白ヌキで表示した。粘土紐の積み上げ痕跡は断面では一点鎖線で表記した。胎土中に植物繊維を混和する縄文土器については，断面に▲を表示した。

（３）遺物実測図中の網かけ等については，その用例を同図中に表示した。

（４）計測値は各実測図の下に，推定値は（　）で表示した。

4　文章中の遺物点数は，すべて破片点数である。

5　遺物については挿図ごとに１番から番号を振り，その番号を挿図番号と組み合わせて遺物番号としている。　［例］　図７の１番の土器…７図１

6　挿図中の遺物番号は，自然科学分析・写真図版の個々の遺物に付けた番号と一致する。

7　引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略し，巻末にまとめて収めた。

目　　次

口　　絵
序　　文
あいさつ
緒　　言……i
用　　例……ii
目　　次……iii
挿図目次……v
表 目 次……vi

序　　章
第１節　調査にいたる経緯……1
常磐自動車道建設事業の概要（１）　平成14年度の調査経過（２）
第２節　遺跡の位置と自然環境……3
第３節　周辺の遺跡と歴史的環境……6
富 岡 町（６）　大 熊 町（７）
第４節　調査の方法……10

第１編　後作Ａ遺跡（２次調査）
第１章　遺跡の環境と調査経過……13
第１節　遺跡の位置と地形……13
第２節　調査経過と調査方法……13
第２章　遺構と遺物……16
第１節　遺跡の概要と基本土層……16
第２節　土　　坑……18
33号土坑（18）　34号土坑（18）　35号土坑（18）
36号土坑（18）　37号土坑（20）　38号土坑（20）
第３節　遺物包含層……21
第１遺物包含層（21）
第３章　ま　と　め……29

第２編　上平Ａ遺跡
第１章　遺跡の環境と調査経過……33
第１節　遺跡の位置と地形……33
第２節　調査経過と調査方法……35
第２章　遺構と遺物……37
第１節　遺跡の概要と基本土層……37

第２節　竪穴住居跡……43
１号住居跡（44）　２号住居跡（45）　３号住居跡（46）　４ａ号住居跡（49）
４ｂ号住居跡（52）　５号住居跡（54）　６号住居跡（56）　７号住居跡（57）
８号住居跡（58）　９号住居跡（60）　10号住居跡（68）　11号住居跡（72）
12号住居跡（73）　13号住居跡（79）　14号住居跡（80）　15号住居跡（82）
16号住居跡（85）　17号住居跡（88）
第３節　竪穴状遺構……90
１号竪穴状遺構（90）　２号竪穴状遺構（92）　３号竪穴状遺構（92）
第４節　土　　坑……93
分　　類（93）　１類土坑（93）　２ａ類土坑（94）　２ｂ類土坑（96）
３ａ類土坑（96）　３ｂ類土坑（98）　４類土坑（100）
第５節　その他の遺構 ……102
１号集石遺構（102）　２号集石遺構（103）　１号焼土遺構（103）　１号木炭窯跡（105）
第６節　遺構外出土遺物 ……108
第３章　自然科学分析 ……121
第１節　上平Ａ遺跡の種実遺体分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）……121
第２節　上平Ａ遺跡出土の炭化材樹種同定（古環境研究所）……123
第３節　上平Ａ遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定（古環境研究所）……127
第４節　上平Ａ遺跡出土石器の蛍光Ｘ線分析（奥山誠義）……128
第４章　ま　と　め ……130
第１節　遺物について ……130
第２節　遺構について ……134

第３編　道平遺跡
第１章　遺跡の環境と調査経過……139
第１節　遺跡の位置と地形 ……139
第２節　調査経過と調査方法 ……140
第２章　遺構と遺物 ……143
第１節　遺跡の概要と基本土層 ……143
第２節　土　　坑 ……144
１号土坑（144）　２号土坑（145）　３号土坑（145）　４号土坑（146）
第３節　遺構外出土遺物 ……146
第３章　ま　と　め ……152

引用・参考文献……153

写真図版
第１編　後作Ａ遺跡（155）　第２編　上平Ａ遺跡（165）　第３編　道平遺跡（213）

報告書抄録 ……219

挿 図 目 次

序　章

図１　常磐自動車道位置図……１
図２　遺跡周辺の環境……４
図３　後作Ａ・上平Ａ・道平遺跡間の地形断面図……５
図４　周辺の遺跡……８

第１編　後作Ａ遺跡（２次調査）

図１　後作Ａ遺跡調査区位置図……14
図２　遺構配置図・基本土層・第１遺物包含層断面図……17
図３　33～38号土坑……19
図４　土坑出土遺物……20
図５　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（１）……22
図６　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（２）……23
図７　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（３）……25
図８　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（４）……26
図９　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（５）……27

第２編　上平Ａ遺跡

図１　上平Ａ遺跡調査区位置図……34
図２　調査区位置図とグリッド配置図……36
図３　遺構配置図・基本土層作成位置（Ａ～Ｇ）……38
図４　遺構の配置と分布域……39
図５　風倒木痕分布図と基本土層……40
図６　１号住居跡と出土遺物……45
図７　２号住居跡と出土遺物……46
図８　３号住居跡と出土遺物（１）……48
図９　３号住居跡出土遺物（２）……49
図10　４ａ号住居跡と出土遺物（１）……51
図11　４ａ号住居跡出土遺物（２）……52
図12　４ｂ号住居跡……53
図13　５号住居跡と出土遺物……55
図14　６号住居跡と出土遺物……56
図15　７号住居跡と出土遺物……58
図16　８号住居跡と出土遺物……59
図17　９号住居跡と出土遺物（１）……61
図18　９号住居跡出土遺物（２）……63
図19　９号住居跡出土遺物（３）……64
図20　９号住居跡出土遺物（４）……65
図21　９号住居跡出土遺物（５）……66
図22　９号住居跡出土遺物（６）……67
図23　10号住居跡……69
図24　10号住居跡出土遺物（１）……70
図25　10号住居跡出土遺物（２）……71
図26　11号住居跡と出土遺物……73
図27　12号住居跡（１）……75
図28　12号住居跡（２）と出土遺物……77
図29　13号住居跡と出土遺物……79
図30　14号住居跡と出土遺物……81
図31　15号住居跡と出土遺物（１）……83
図32　15号住居跡出土遺物（２）……84
図33　16号住居跡と出土遺物（１）……86
図34　16号住居跡出土遺物（２）……87
図35　17号住居跡と出土遺物……89
図36　１～３号竪穴状遺構と出土遺物……91
図37　１～９号土坑……95
図38　10～19号土坑……97
図39　20～25号土坑……99
図40　土坑出土遺物……101
図41　１・２号集石遺構，１号焼土遺構と出土遺物……104
図42　１号木炭窯跡と出土遺物……106
図43　遺構外出土遺物（１）……111
図44　遺構外出土遺物（２）……112
図45　遺構外出土遺物（３）……113
図46　遺構外出土遺物（４）……114
図47　遺構外出土遺物（５）……115
図48　遺構外出土遺物（６）……117
図49　遺構外出土遺物（７）……118
図50　遺構外出土遺物（８）……119
図51　上平Ａ遺跡出土の種実遺体……123
図52　上平Ａ遺跡の炭化材（１）……126
図53　上平Ａ遺跡の炭化材（２）……127
図54　上平Ａ遺跡出土石匙の褐色変化範囲と分析箇所……129
図55　蛍光Ｘ線分析顕微鏡写真……129
図56　上平Ａ遺跡Ⅱ群土器分類図……131

第３編　道平遺跡

図１　道平遺跡調査範囲 ……139
図２　道平遺跡調査区位置図 ……141
図３　遺構配置図と基本土層 ……143
図４　１～４号土坑 ……145
図５　グリッド，トレンチ別土器出土点数 ……146
図６　遺構外出土遺物（１） ……148
図７　遺構外出土遺物（２） ……149
図８　遺構外出土遺物（３） ……150

表　目　次

序　章

表１　後作Ａ・上平Ａ・道平遺跡周辺の
遺跡一覧…… 9

第２編　上平Ａ遺跡

表１　土坑一覧表……94
表２　小穴一覧表 ……107
表３　遺構外出土遺物グリッド別点数 ……109
表４　種実遺体分析結果 ……121
表５　上平Ａ遺跡における樹種同定結果 ……124
表６　試料と方法 ……127
表７　測定結果 ……128

序　　章

第１節　調査にいたる経過

常磐自動車道建設事業の概要

常磐自動車道は，埼玉県三郷市を起点として，千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る，太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この計画の内，三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)からいわき市のいわき中央ＩＣまでは，昭和63年に供用が開始され，さらに，いわき中央ＩＣからいわき四倉ＩＣまでは平成11年３月に供用を開始している。また，平成14年３月には，いわき四倉ＩＣから広野ＩＣまでの区間が開通している。

これらの供用が開始された区間の内，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの間に所在する埋蔵文化財に関しては，昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して４遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央ＩＣからいわき四倉ＩＣ間までの埋蔵文化財に関しては，平成６年から９年まで好間から平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し，四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査を，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線については，平成３年にいわき四倉ＩＣから富岡ＩＣ間が整備計画路線に格上げされ，平成５年には施工命令が下されている。さらに，富岡ＩＣ以北についても，平成８年に相馬ＩＣまでの区間が整備計画路線となり，平成10年に施工命令が下されている。

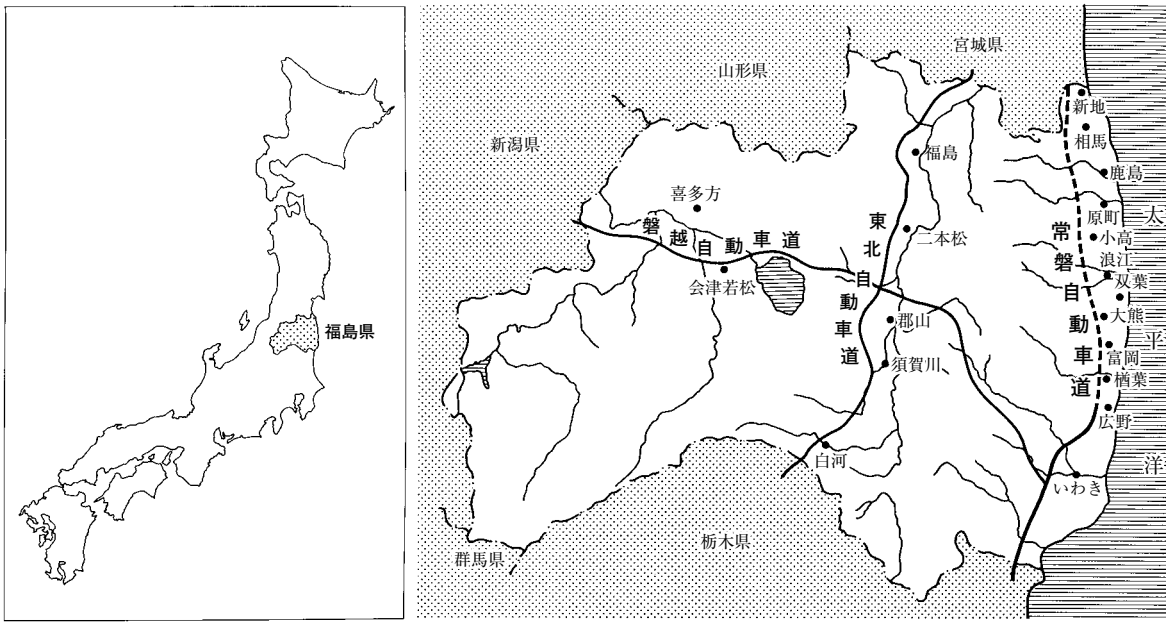


図１　常磐自動車道位置図

福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣから宮城県境の間の路線内に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年度より表面調査を開始し，平成10年度までに終了している。この成果を受けて，平成７年度よりいわき四倉ＩＣから富岡ＩＣ間までの試掘調査を実施し，平成９年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成９年度はいわき市内の５遺跡と広野町内の１遺跡の発掘調査を実施し，平成10年度はいわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡，楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，いわき市内に所在する遺跡の発掘調査は全て終了した。平成11年度は，広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡について実施した。平成12年度は，広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡について実施した。この平成12年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，広野町内に所在する遺跡の発掘調査は全て終了した。平成13年度は，楢葉町の１遺跡，富岡町内の５遺跡について実施した。平成13年度の調査では，路線内に所在する遺跡の内，楢葉町内に所在する大谷上ノ原遺跡の楢葉パーキングエリア２期線部分を残して終了した。

平成14年度の調査経過

平成14年度常磐自動車道遺跡発掘調査事業は，４名の調査員を配置して対応した。調査対象は，第12次工事区間の双葉郡富岡町から第13次工事区間の大熊町までの３遺跡である。当初第12次工事区間の富岡ＩＣまでについては日本道路公団東北支社いわき工事事務所，第13次工事区間の大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管理していたが，７月１日付けをもって富岡ＩＣから浪江ＩＣまでの区間についてもいわき工事事務所が管理することとなった。

平成13年度から継続発掘調査となる富岡町後作Ａ遺跡については，県内遺跡分布調査事業により４月12日から未試掘範囲3,800㎡の試掘調査が開始され，その結果，路線内要保存面積2,500㎡が確認された。４月19日に福島県教育委員会と日本道路公団東北支社いわき工事事務所との間で保存協議がなされ，確認された要保存面積2,500㎡の発掘調査を実施することとなった。それを受けて福島県文化振興事業団は発掘作業員雇用手続きや連絡所設置・駐車場整備などの準備作業を進め，４月23日に現地の発掘調査を開始した。調査区は第１次調査区の東側で，段丘上平坦面と沢谷頭部の調査となった。段丘上平坦面からは縄文時代早期の土坑，沢谷頭部からは縄文時代早・前・晩期の遺物包含層が検出された。古くは日計型押型文土器や田戸下層式土器が伴う土坑が確認され，遺物包含層からは数多くの縄文土器が出土した。発掘調査は富岡ＩＣの工事と並行して進められ，調査区内の町道茂手木１号線部分については，工事用道路の交差計画と合わせて迂回路を造った後に調査した。発掘調査は６月20日に終了し，現地引渡しを行った。

大熊町以北の遺跡については，５月７日から県内遺跡分布調査事業により試掘調査が行われ，大熊町道平・上平Ａ遺跡についてそれぞれ要保存面積が確認された。その結果を受けて６月19日に福島県教育委員会と日本道路公団東北支社相馬工事事務所との間で保存協議がなされ，工区内の１期線部分について，上平Ａ遺跡を先行して発掘調査することが確認された。その後７月１日付けで富

岡ＩＣから浪江ＩＣまでの区間がいわき工事事務所に管理替えとなったことにともない，改めて７月17日にいわき・相馬両工事事務所を交えた協議を実施した。その結果，調査条件の整った上平Ａ遺跡3,300㎡については先行して発掘調査を開始し，道平遺跡については2,400㎡について調査条件が整った後に調査を開始することが確認された。このことを受けて，上平Ａ遺跡は７月29日から現地調査を開始した。同遺跡は調査が進むにつれて，縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑が多数検出され，集落跡であることが確認された。道平遺跡についても駐車場用地や残土置き場の確保等条件整備作業が行われ，９月２日より現地調査が開始された。今回の調査区は以前に大熊町が発掘調査を行い土器埋設遺構をはじめ数多くの縄文時代後・晩期の遺構・遺物が検出された箇所よりも北西側に離れており，縄文時代晩期・平安時代の土坑と希薄な遺物包含層が確認されたのみであった。

上平Ａ遺跡は縄文時代前期前葉のまとまった集落跡であることが確認されたため，11月７日に空中写真撮影を実施，11月21日には福島県教育委員会・大熊町教育委員会共催による現地見学会を開催した。現地見学会には地元大熊町を中心として約130名の参加があった。その後調査は順調に進み，道平遺跡は12月４日，上平Ａ遺跡は12月24日に調査を終了し，両遺跡とも12月24日に現地引渡しを行った。

（山　内）

第２節　遺跡の位置と自然環境

位　置　福島県は東北地方南端に位置し，面積13,782㎢である。この内，およそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈高地，中央部には奥羽山脈，西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。

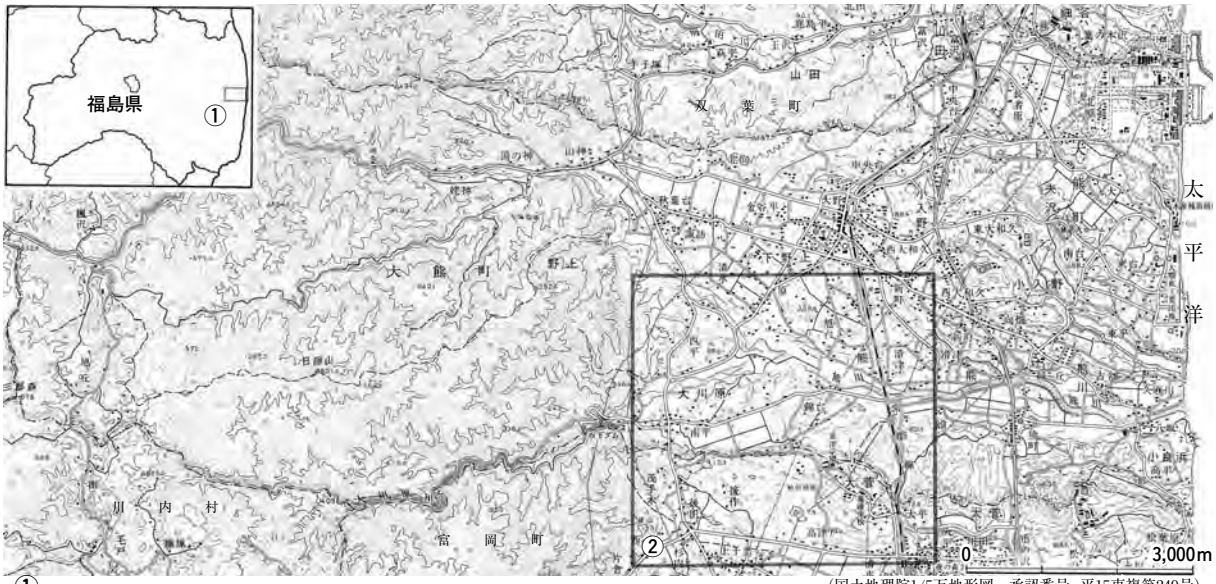
本報告書に掲載した３遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では，第１編で扱う後作Ａ遺跡は双葉郡富岡町上手岡地区に，第２編上平Ａ遺跡・第３編道平遺跡は双葉郡大熊町大川原地区に位置する。

後作Ａ遺跡は双葉郡富岡町大字上手岡字後作に所在し，北緯37°22′27″，東経140°57′55″（世界測地系，以下同じ）に位置する。遺跡は大熊町との町境に近い富岡町北端部に所在し，ＪＲ夜ノ森駅から西北西に約2.5km，県道いわき・浪江線から東へ700ｍの地点に位置する。

上平Ａ遺跡は双葉郡大熊町大字大川原字南平に所在し，北緯37°23′10″，東経140°58′0″に位置する。ＪＲ大野駅から南西に約３km，県道いわき・浪江線から東へ１kmの地点に位置する。

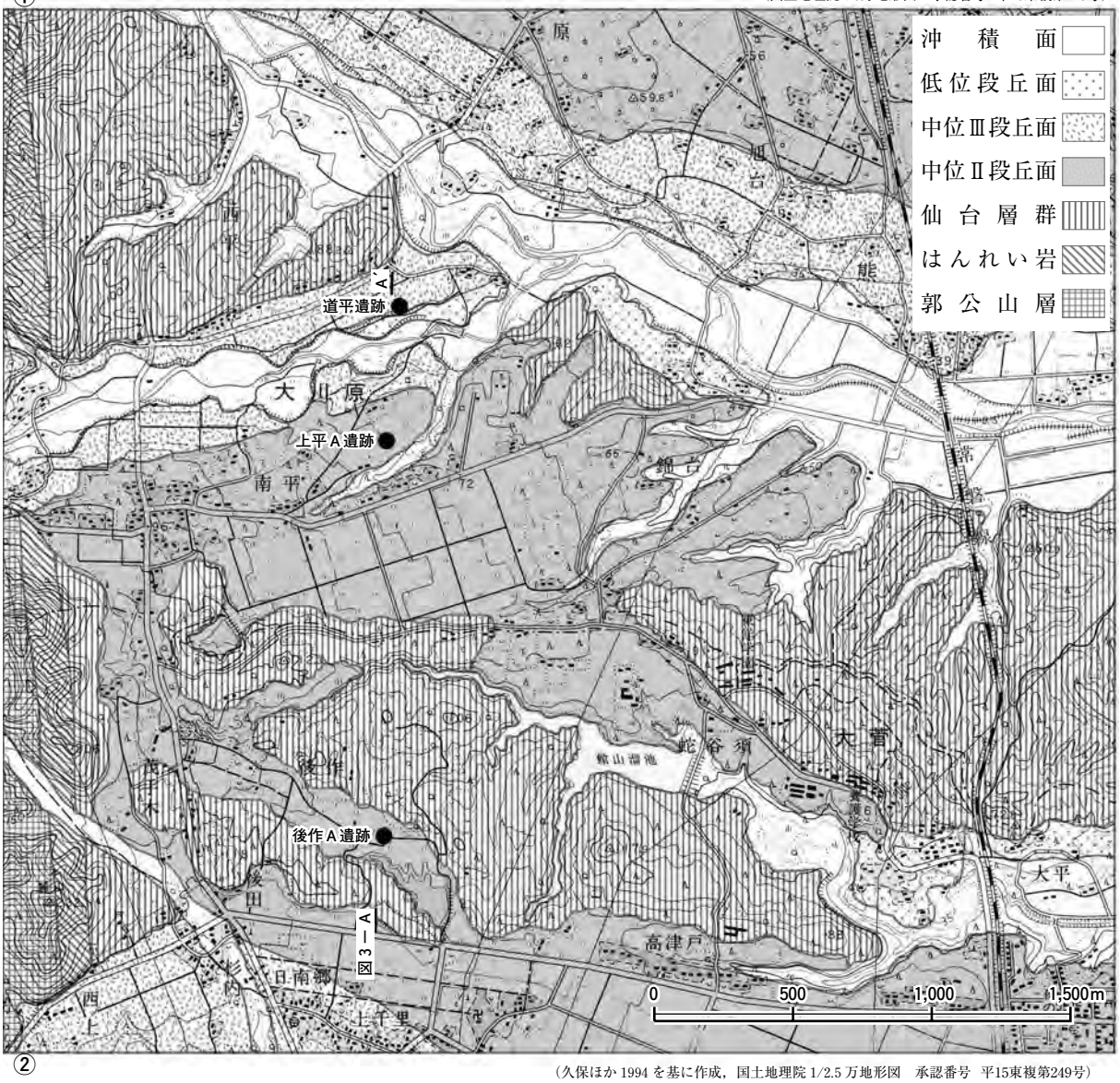
道平遺跡は双葉郡大熊町大字大川原字西平に所在し，北緯37°23′26″，東経140°57′59″に位置する。ＪＲ大野駅から南西に約2.5km，県道いわき・浪江線から東へ700ｍの地点に位置する。

地　形　浜通り地方の地形は，おおむね西高東低であり，西の阿武隈高地から河岸段丘地帯・海岸低地の順に標高が低くなり，太平洋に至る。したがって大熊町・富岡町の地形も同様に，西半部は阿武隈高地東縁部の山地で占められる。また太平洋から西へ約７km地点には，標高100ｍの等高線



①

（国土地理院1/5万地形図　承認番号　平15東複第249号）



②

（久保ほか 1994 を基に作成，国土地理院 1/2.5 万地形図　承認番号　平15東複第249号）

図 2　遺跡周辺の環境（上：大熊町・富岡町の地勢，下：大熊町・富岡町の地形・地質）

に沿うように双葉断層が南北に縦走し，山地と河岸段丘地帯の境界をなしている。

大熊町・富岡町を流れる主な河川は，北から夫澤川・小入野川・熊川(大熊町)と富岡川・紅葉川(富岡町)である。これらの河川は阿武隈山地に源を発し，山間部で険峻で樹枝状の渓谷を刻んでいる。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり，富岡川や熊川などの河川両岸には河岸段丘地形が発達している。

この段丘は，標高の高いもの(年代の古いもの)から，高位段丘，中位Ⅰ段丘・中位Ⅱ段丘・中位Ⅲ段丘，中位Ⅳ段丘，低位Ⅰ段丘，低位Ⅱ段丘と呼ばれている。この内，富岡・大熊町には主に中位面が発達し，その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。これら中位段丘面は，更新世後期の最終間氷期の海進・海退に伴って形成されたと考えられている(久保ほか 1994)。

平成14年度に調査した後作Ａ遺跡・上平Ａ遺跡・道平遺跡は，共に海岸線から約６㎞付近に位置している。これらは熊川と富岡川の間に発達した段丘面上に立地している。

後作Ａ遺跡は南北を仙台層群から成る丘陵地に挟まれた中位Ⅱ段丘面上に位置し，標高は約84～89mである。遺跡の南北は標高差約５ｍの開折谷によって浸食されている。さらにこの開折谷を挟んで丘陵地が拡がっている。

上平Ａ遺跡は熊川支流の大川原川右岸の中位Ⅱ段丘面上に位置し，遺跡の標高は約74mである。後作Ａ遺跡とは同一段丘面に立地する。上平Ａ遺跡の南側は，標高差約15mの開折谷が刻まれている。

道平遺跡は大川原川左岸の沖積面から低位Ⅰ・中位Ⅲ段丘面上に立地する。今年度の調査区は中位Ⅲ面上に位置し，標高は約62mである。大川原川河床までの標高差は約12mである。

地　質　富岡・大熊町の地質構造は，浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている。まず断層の西側にあたる阿武隈山地の山間部には，中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには，はんれい岩やアプライト，結晶片岩などが散在的に発達する。また花崗岩類に伴出する有用鉱物は多目的に利用され，富岡町には嘉永６年(1853)より磁鉄鉱の採掘が始まった上手岡鉱山が存在し，海岸部には砂鉄などの分布も認められる。さらに双葉断層に沿った周辺では，破砕された未変成・弱変成の古生層(高倉山層・郭公山層)が，帯状に発達している。これら古生層の堆積物には，粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれている。

本地域では中生代から第三紀中新世の地層の分布は希薄である。ちなみに石器石材として用いられている流紋岩は，第三紀中新世に形成された湯長谷層群椚平層・五安層に含まれていることが指

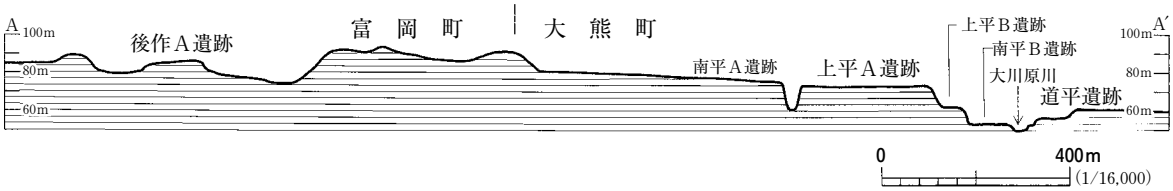


図３　後作Ａ・上平Ａ・道平遺跡間の地形断面図

摘されている(根本1991)。このことから，本地域で流紋岩を採取することは難しく，椚平層・五安層が確認されている楢葉町・広野町・いわき市といった本地域より南に流紋岩の採取可能地が求められそうである。

次に鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し，第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり，多くの火山灰層を介在している。

（門　脇）

第３節　周辺の遺跡と歴史的環境

富　岡　町

富岡町では近年になって旧石器時代の遺物が，本町西Ａ・後作Ａ遺跡で確認されている。縄文～古代の遺跡は富岡川沿いの大字上手岡・小浜と，紅葉川に沿った上郡山・下郡山に発見されている。縄文時代早～前期の遺跡は，阿武隈高地から東へ延びる丘陵上に存在する。この時期の主な遺跡としては大菅地区の蛇谷須遺跡が知られていたが，平成13年に本岡地区の上本町Ｇ遺跡・本町西Ａ遺跡・本町西Ｃ遺跡等の発掘調査が行われ，縄文時代前期初頭から後葉にかけての集落跡が確認された。縄文時代中期の遺跡としては紅葉川右岸の段丘上に立地する前山Ａ遺跡が挙げられ，平成13年に行われた発掘調査により出現期の複式炉を有する住居跡が多数検出された。縄文時代後・晩期には，蛇谷須・上ノ町Ｂ・上郡Ｂ・上本町Ｆ・片倉・関根各遺跡が挙げられる。上郡山の一本松遺跡では土偶が出土，関根遺跡からは大洞Ｃ２～Ａ式期の好資料が出土している。

弥生時代の遺跡は少ないが，毛萱遺跡の発掘調査によって中期前葉の土器の他，土偶や石庖丁が出土している点が特筆される。真壁地区の下郡山Ａ・下郡山Ｂ・下郡山Ｃの各遺跡からは，天神原式土器が若干出土している。

古墳時代の遺跡は，富岡川下流域の低地一帯や海岸付近に多く分布している。古墳は円墳が多く，直刀が出土した本岡の王塚古墳や小浜古墳群や下郡山古墳がある。また小浜横穴群や清水尻横穴群，佛浜横穴群なども古墳時代の遺跡である。

奈良・平安時代になると，海岸近くの小さな支谷開発が進み，遺跡の数が増加する。代表的な遺跡は小浜代遺跡であろう。８世紀中頃～後半の遺跡で，東北地方で初めて奈良三彩陶器が出土し注目された。２棟の礎石建物跡から瓦や鉄鉢模倣須恵器などの仏教的遺物，猿形土製品などが出土した。瓦は陸奥国府系の六葉重弁蓮華文軒丸瓦が出土している。

中世の富岡地域は，岩城氏と相馬氏との勢力の境界となり，しばしば争乱の舞台となった。この時代の代表的遺構は城館跡であろう。富岡町内では毛萱館跡，真壁城跡，日向館跡，上郡山館跡などがかつての陸前浜街道沿いにあり，上手岡の高津戸館跡や本岡の諸沢館跡はやや内陸部の城館跡である。

富岡町の近世は，天正18(1590)年の奥州仕置きで，岩城氏領となることから始まる。慶長７(1602)年以降岩城藩領となるが一揆や騒動が多発し，延享４(1747)年以降は幕府天領となり小浜代官の支配を受ける。近世の遺跡では新夜ノ森の新田野一里塚や上郡山の清水一里塚があるように，陸前浜街道沿いの宿場町として発展する。遺跡としては近世末の製鉄遺跡が以前から注目されており，上手岡鉄山高炉跡では本県唯一の洋式技術が導入された。富岡川上流には滝川製鉄遺跡が存在する。

大　熊　町

大熊町における原始・古代の遺跡については，戦後，竹島國基・檜野照武各氏により精力的な踏査が行われ，大平遺跡をはじめとして，数多くの遺跡が確認，周知されることとなった。その後も大熊町教育委員会による発掘調査や，町史編纂事業にともなう遺跡分布調査が行われ，『大熊町史第二巻』に収録された史料は，縄文時代を中心として福島県内でも屈指のものとなった。

遺跡は，熊川・小入野川・夫澤川の各流域に分布している。特に熊川は中流域から下流域にかけて数多く分布している。

旧石器時代の遺跡としては小入野遺跡，南金谷遺跡，上総屋敷遺跡，北原遺跡，日向遺跡・北台遺跡が知られ，踏査により槍先形尖頭器や削器・彫器などが表採されている。いずれも後期旧石器時代の所産で，上総屋敷遺跡から出土した削器・彫器は旧石器時代終末期のものと推定されている。

縄文時代の遺跡は数が最も多い。草創期の遺跡としては長身の尖頭器などが出土した南金谷遺跡や北台遺跡が挙げられる。早期の遺跡では，竹島國基が1957年『石器時代第５号』に三戸式酷似の沈線文系土器を報告した大平Ａ遺跡をはじめとして，貝殻沈線文土器や絡条体圧痕文土器が多く出土した砂出遺跡などが知られている。前期になると熊川中・上流域や小入野川流域に遺跡数が増えてくる。1984年に発掘調査された上総屋敷遺跡では浮島Ⅰ式期の土坑が検出され，今回発掘調査が行われた上平Ａ遺跡からは大木１式期の集落跡が確認されている。小入野川流域の南澤遺跡からは前期後～末葉の好資料が得られている。中期も同じく熊川中・上流域や小入野川流域に多く分布している。発掘調査された遺跡はないが，砂出遺跡や蛇保遺跡，南澤遺跡，腰巻遺跡からは中期中葉～末葉そして後期中葉に至るまでの資料が得られている。いずれも大型の土器片が数多く採集されており，集落跡の存在が推定される。縄文時代後～晩期は，小入野川流域においては晩期初頭で資料の所属時期が途絶えるが，熊川流域においては縄文時代晩期終末～弥生時代まで継続する遺跡が確認されている。砂出遺跡や道平遺跡，落合Ｂ遺跡などがそうである。後期は綱取１式から新地式まで，晩期は大洞Ｂ式から大洞Ｃ２式まで継続した後，浮線文系土器が多く出土している。「工字文」を主文様とした大洞Ａ式土器が極端に少なくなる点は東北地方南部の特徴といえるだろう。

弥生時代の遺跡は比較的少ない。熊川中流域の道平遺跡や落合Ｂ遺跡などは縄文時代から継続した遺跡であるが，弥生時代に出現する遺跡は松ノ下Ｂ遺跡くらいである。小入野川流域では北原・日向遺跡や女迫遺跡などが確認されている。

古墳時代になると，遺跡は熊川下流域や夫澤川流域に分布するようになる。前期に属する女迫遺

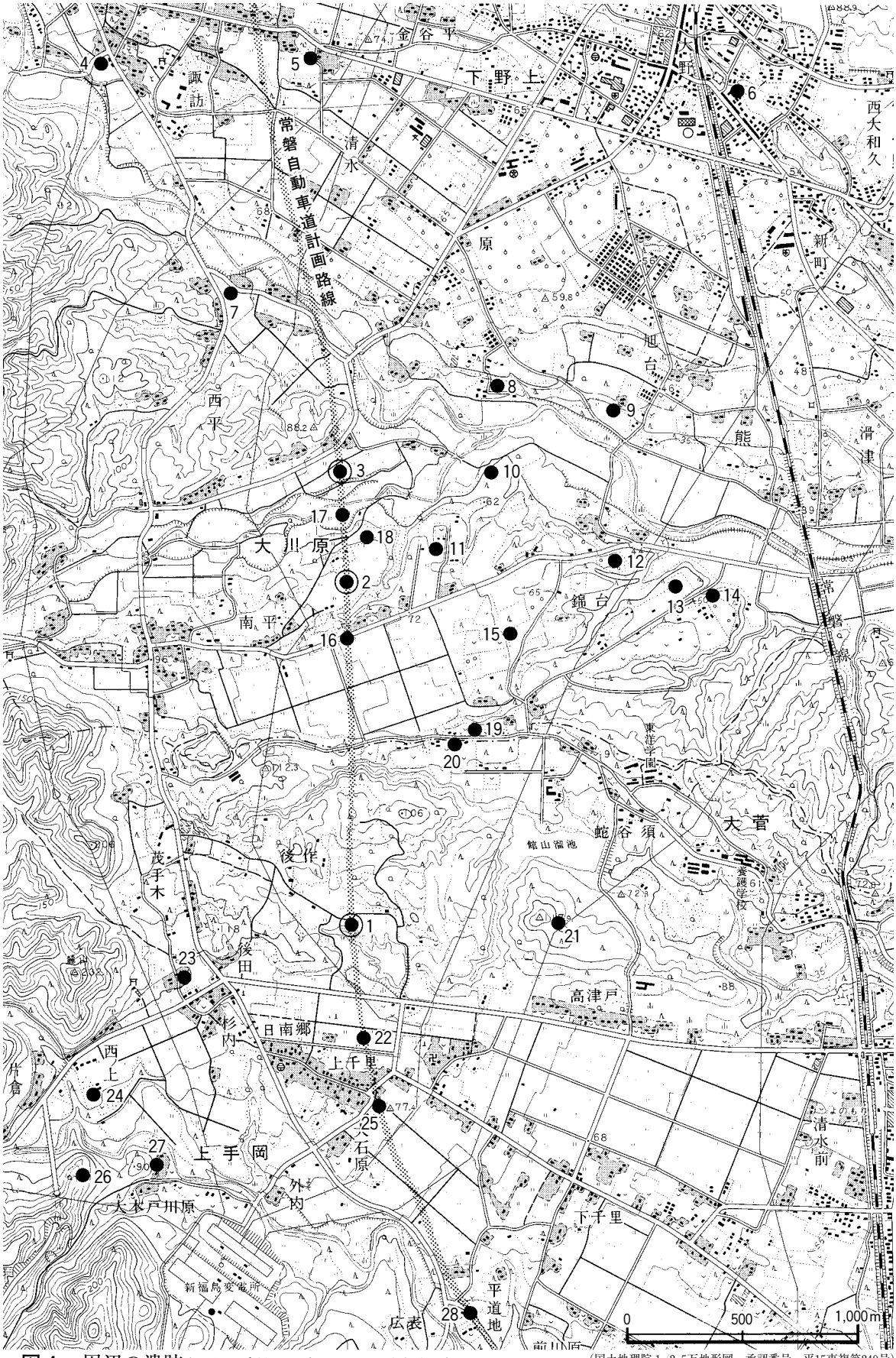


図 4　周辺の遺跡(図中の番号は，表 1 のNo.と対応する)

(国土地理院 1 /2.5万地形図　承認番号　平15東複第249号)

表１　後作Ａ・上平Ａ・道平遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	遺跡の概要	備　　考
1	**後作Ａ遺跡**	54300055	富岡町大字上手岡字後作	縄文時代の集落跡	**本報告**
2	**上平Ａ遺跡**	54500015	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡	**本報告**
3	**道平遺跡**	54500014	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の集落跡	**本報告**・『道平遺跡の研究』他
4	下谷地窯跡	54500009	大熊町大字野上字諏訪	近世の窯跡	
5	南金谷遺跡	54500010	大熊町大字下野上字清水	旧石器時代の散布地	『大熊町史』
6	鮒沢古墳	54500011	大熊町大字下野上字大野	古墳	『大熊町史』
7	上総屋敷遺跡	54500039	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の散布地	『大熊町史』
8	落合Ｂ遺跡	54500012	大熊町大字熊字旭台	縄文・弥生時代の散布地	『大熊町史』
9	落合Ａ遺跡	54500013	大熊町大字熊字旭台	縄文時代の散布地	『大熊町史』
10	松ノ下Ａ遺跡	54500017	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地	『大熊町史』
11	廻谷地遺跡	54500016	大熊町大字大川原字南平	縄文・奈良・平安時代の散布地	『大熊町史』
12	松ノ下Ｂ遺跡	54500042	大熊町大字熊字錦台	縄文・弥生時代の散布地	『大熊町史』
13	大平Ａ遺跡	54500019	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地	『石器時代』・『大熊町史』
14	大平Ｂ遺跡	54500043	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地	『大熊町史』
15	羽山嶽遺跡	54500018	大熊町大字熊字錦台	弥生時代の散布地	『大熊町史』
16	南平Ａ遺跡	54500062	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地	『県内分布３』
17	南平Ｂ遺跡	54500063	大熊町大字大川原字南平	近世の散布地	『県内分布３』
18	上平Ｂ遺跡	54500040	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地	『大熊町史』
19	蛇保遺跡	54500041	大熊町大字大川原字南平	縄文・古墳時代の散布地	『大熊町史』
20	蛇谷須遺跡	54300001	富岡町大字大菅字蛇谷須	縄文時代の散布地	
21	高津戸館跡	54300003	富岡町大字上手岡字高津戸	中世の城館跡	
22	日南郷遺跡	54300054	富岡町大字上手岡字日南郷・後田	縄文時代の狩猟場跡	『常磐道33』
23	茂手木遺跡	54300002	富岡町大字上手岡字茂手木	縄文時代の散布地	
24	片倉遺跡	54300004	富岡町大字上手岡字西の上	縄文時代の散布地	
25	大石原遺跡	54300053	富岡町大字上手岡字大石原	縄文時代の散布地	
26	大木戸川原遺跡	54300006	富岡町大字上手岡字大木戸川原	縄文時代の散布地	
27	上手岡鉄山鉱炉跡	54300005	富岡町大字上手岡字大木戸川原	近世の製鉄遺跡	
28	平道地遺跡	54300008	富岡町大字上手岡字平道地	縄文・平安時代の散布地	

跡のような集落遺跡の他に，大塚平古墳や蕨平古墳，熊川古墳，鮒澤古墳のような後期古墳が熊川や夫澤川の沖積地を臨む段丘上に立地し，段丘崖には馬具や直刀が出土したことで知られる長者ケ原横穴のような横穴墓群が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡については羽山嶽遺跡や下田子橋遺跡，和尚前遺跡などが知られているが，詳細についてはなお不明である。ただ，熊川下流沖積地には，熊川六丁目条里跡のような条里遺跡が残されており，今後の調査によっては，律令期以後の様相が明らかになる可能性もある。

中世以降になると，楢葉氏や標葉氏等の在地武士団の歴史が文書等に記されるようになる。熊川が楢葉郷と標葉郷との境にあたり，佐山館などの城館跡も確認されている。近世には熊川以北の標葉郷までが相馬氏の治めるところとなった。現在では，毎年７月23～25日に行われる相馬野馬追いに標葉郷騎馬隊として参陣している。この頃の遺跡について知られているのは数少ないが，大夫澤遺跡のように中世末期～近世初期に属する蓬莱鏡が出土した遺跡もある。近世後半期になると，18世紀以降浪江町大堀を中心として盛んに行われた陶器窯業が大熊町でも行われるようになり，18世紀後葉の山神窯跡が発掘調査されている。その他，阿武隈高地寄りの山間部では製鉄も行われ，逐一遺跡名を挙げることはできないが，鉄滓が散布している箇所が確認されている。（宮　田・山　内）

第４節　調査の方法

平成14年度の常磐自動車道遺跡（後作Ａ遺跡・上平Ａ遺跡・道平遺跡）においては，基本的に次に述べる方法で発掘調査を実施し，報告書の作成もそれに基づいている。なお，各遺跡の調査において特別に実施した項目がある場合は各編で述べる。ここでは調査方法の共通項目をまとめる。

グリッドの設定　国土座標（日本測地系公共座標第Ⅸ系）に基づいて，調査区全域に10mの方眼を単位とするグリッドを設定し，その基点となる座標を調査区外の北西側に定めた。各遺跡のグリッド基点の国土座標値は次のとおりである。後作Ａ遺跡（Ｘ：152,780・Ｙ：100,480）・上平Ａ遺跡（Ｘ：154,200・Ｙ：100,600）・道平遺跡（Ｘ：154,900・Ｙ：100,500）。

実測基準線番号　グリッドの名称とは別に，平面図作成に際して１ｍごとに水糸ラインを設ける必要があったため，実測基準線番号を設定した。これは，各グリッドの北西端部を原点として，ここから東にＥ１～９，南にＳ１～９とし，それぞれのグリッド番号との組み合わせで使用した。

（例・・Ｆ10－Ｓ９・Ｅ２は，Ｆ10グリッドの北西端部の杭の位置から南に９ｍ，東に２ｍ離れた場所を示す。Ｆ10－Ｅ２は，Ｆ10グリッドの北西端部の杭の位置から南に０ｍ，東に２ｍ離れた場所を示す。）

発掘調査　各遺跡の表土除去作業は，重機を用いて行った。この作業にあたっては，表土層の厚さが一定しないことや検出面の上位に遺物包含層が予想されたため，調査員の指示のもと，慎重にこれを実施した。その後，人力により遺構・遺物の検出作業を行った。この際に使用した道具は，草削り・唐鍬・移植ベラ等である。遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。竪穴住居跡は４分割法を用いた。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。

遺物の取り上げに際しては，次の点を留意した。遺構内出土遺物は，遺構名と層位名を付して，さらに出土位置を実測図に記録した遺物については，その採上№を付した。遺構外出土遺物については，設定したグリッドごとに取り上げ，そのグリッド名と層位名を付した。なお層位名を付す際には，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表し，遺構内堆積層は算用数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録の方法　遺構の記録は，平面図と土層断面図を原則とし，基本的には1/20の縮尺で作成した。微細な出土記録が必要となる場合は，1/10の縮尺で随時作成した。また，調査区内の地形図や遺構配置図は，1/200の縮尺で作成した。土層観察における色調の注記は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を用いた。調査現場での写真撮影は，35㎜小型一眼レフカメラと６×4.5判の中型一眼レフカメラを併用して行った。

遺物と記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。（門　脇）

第１編　後作（うしろさく）Ａ遺跡

（２次調査）

遺跡記号　ＴＯ－ＵＳ．Ａ
所　在　地　福島県双葉郡富岡町大字上手岡字後作
時代・種類　縄文時代・弥生時代，集落跡
調査期間　平成14年４月23日～６月12日
調　査　員　山内　幹夫・宮田　安志・坂田　由紀子

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

後作Ａ遺跡は双葉郡富岡町大字上手岡字後作に所在し，北緯37°22′27″，東経140°57′55″に位置する。遺跡は富岡町の北端に近く，ＪＲ常磐線夜ノ森駅から北西へ約２㎞，国道６号線から西へ3.5㎞の所にあって，遺跡の西側約500ｍには県道いわき浪江線が存在する。遺跡の南側には家老溜池がある。

富岡町の地形は西から大きく阿武隈高地・丘陵地帯・河岸段丘・沖積地に分けられ，遺跡はこのうち阿武隈高地から続く河岸段丘の中位Ⅱ段丘面に立地する。遺跡のある段丘面は，南北両側を樹枝状に開析された西から東へ延びる河岸段丘で，標高83～89ｍを測る。遺跡面積はこの平坦面を主としたおよそ55,000㎡で，１次調査ではこの平坦面の中央部分と北側斜面部の6,400㎡を，２次調査ではそこからやや東寄りの2,500㎡を対象範囲とした。

調査前の状況は，調査区の中央を東西に横断するように町道茂手木１号線が走り，この南北両側は宅地・水田・畑であった。戦後に広範囲にわたって削平が行われた影響もあり，遺構・遺物は段丘平坦面の縁辺部と北側斜面にわずかに残るのみであった。

本遺跡の周辺には，北東へ約１㎞に縄文時代の遺物散布地である蛇谷須遺跡がある。一方，南には，縄文時代の石器や落し穴状土坑などが発見された日南郷遺跡がある。南西の麓には縄文・奈良・平安時代の散布地の茂手木遺跡や，片倉遺跡，大木戸川原遺跡が存在する。本遺跡の500ｍ程東に位置する高津戸館跡は，14世紀の南北朝時代に構築された城館跡である。　（宮　田）

第２節　調査経過と調査方法

調査経過　後作Ａ遺跡は，平成６年度に福島県教育委員会から委託を受けた財団法人福島県文化センター(平成13年４月より財団法人福島県文化振興事業団と改称)が実施した，常磐自動車道建設に伴う表面調査で確認された遺跡(遺跡番号54300055)である。

平成13年度には，平成９・11・13年度の試掘調査の結果を受けて工事区西側の6,400㎡について発掘調査が実施され，旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代早期の土坑群，晩期の竪穴住居跡，土器埋設遺構などの良好な資料が得られた。

平成14年度は発掘調査に先立ち，日本道路公団東北支社いわき工事事務所と福島県教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団の３者で協議を行い，工区の東寄りの未試掘部分を試掘調査した結果，工事区内の２,500㎡を対象とした発掘調査を行うこととなった。

２次調査は調査員３名，作業員17名の体制で平成14年４月22日に開始し，６月12日までの延べ32

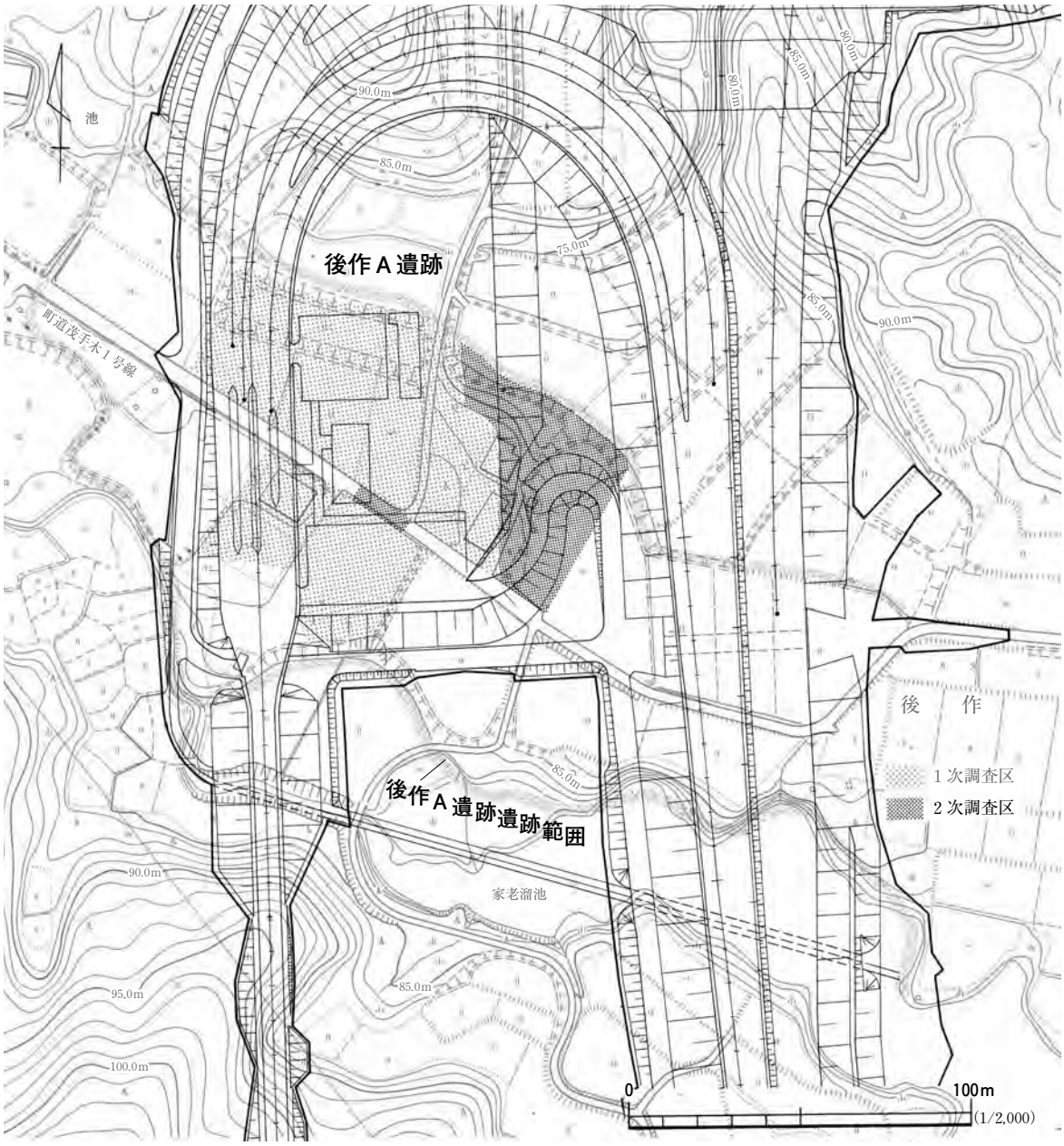


図１　後作Ａ遺跡調査区位置図

日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

４月下旬。発掘調査準備。発掘器材の搬入や調査連絡所，仮設トイレ設置等の条件整備を行う。また重機を導入して表土剝ぎを行い，南側の平坦部分から遺構検出作業を開始した。

５月上旬には１次調査区から測量基準杭，ベンチ・マークの移設を行う。また，１次調査で確認した第１遺物包含層の東側のつづきを検出し，掘り下げを開始した。この包含層を南北に縦断するように，土層観察用のベルトを設定し，基本土層の確認・記録用とした。

５月中旬からは第１遺物包含層の掘り込みが本格化する。また，南側の平坦面での遺構検出作業を継続して行った。調査区南西側で33・35号土坑を検出，精査を行う。33号土坑からは，縄文時代早期前葉の日計型押型文土器の小片が出土した。第１遺物包含層からは，縄文時代早期中葉～後葉，

晩期の土器が主に出土した。

５月下旬には第１遺物包含層の掘り込みを終了し，遺物包含層の下から，縄文時代早期の落し穴と考えられる36号土坑を検出，精査した。この他に遺跡の地形測量，全景写真の撮影を行った。

６月上旬には町道茂手木１号線下部分の調査を行う。38号土坑を検出し，記録を行った。同時に，町道下部分の全景写真を撮影，調査を終了した。

本遺跡は平成14年６月20日に，日本道路公団いわき工事事務所へ引き渡しを行った。

調査方法　本遺跡の調査に際しては，遺構の位置や遺物出土地点を明確にするため，国土座標第Ⅸ系の数値に基づいた10m四方の方眼を調査区内に設定し，これをグリッドと呼称した。グリッドの番号は昨年度のものを引き継ぎ，西から東へはアラビア数字で１・２・３・・・７，北から南へはアルファベットを用いてＡ・Ｂ・Ｃ・・・Ｈとし，グリッドの表示・呼称にはこれらを組み合わせてＤ10・Ｅ11・Ｆ12・・・とした。

発掘調査にあたっては，バックホーやクローラダンプなどの大型機械を導入して表土除去を行い，その下層は人力で掘り下げて，遺構・遺物の確認に努めた。今回検出した遺構は土坑６基と遺物包含層であり，土坑は番号を１次調査のものから引き続いて使用した。掘り込みについては，２分割して土層を観察しながら精査・記録を行った。遺物包含層の調査に際しては，南北に土層観察用の畦を設け，その畦を観察しながら分層発掘を実施した。

土層の表記に際しては，基本土層にはＬとローマ数字を組み合わせてＬⅠ・ＬⅡ・・・というように示した。第１遺物包含層の土層表記には，１次調査で設定した基本土層と対応できなかったため，新たに区分を設けて土層を細分化し，ＳＨ01ℓ１・ℓ２・・・というようにℓ４まで土層番号を付した。遺構内堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせて，ℓ１・ℓ２・・・というように示した。

図化については遺構を1/20縮尺で，遺跡の全体図は1/200縮尺で行った。記録写真は遺構の断面，全景を35㎜判カメラで撮影し，基本土層や調査区の全景は６×4.5判カメラを使用した。ともにモノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて撮影し，同一コマ同一アングルで記録した。

調査で得られた記録・資料については財団法人福島県文化振興事業団で整理を行い，報告書刊行後は各種台帳を作成して閲覧可能な状態にした後，福島県文化財センター白河館で収蔵・管理の予定である。

（宮　田）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

概　要（図２，写真１・２）

後作Ａ遺跡は平成13・14年度にかけて調査が行われ，検出された遺構は竪穴住居跡１軒，土坑38基，土器埋設遺構１基，溝跡５条，遺物包含層１カ所である。今回の２次調査の対象は，１次調査区の東側に接する区域と町道茂手木１号線部分で，土坑６基と遺物包含層を確認した。１・２次調査区はその大部分が段丘の平坦面に当たるが，中央部は近年の開墾により著しく削平されているため，遺構や遺物は削平の少ない段丘縁辺部を中心に確認されている。

今回検出した土坑の分布を概観すると，縄文時代早期中葉頃に位置づけられる38号土坑は１次調査区北東部に位置する同時期の土坑集中域に含まれ，他５基はこの土坑集中域から東側に離れた段丘縁辺部および開析谷斜面中位に散在している。調査区北西側の斜面部においては遺物包含層が形成されており，１次調査ではその西半部を，今回は東半部を調査している。遺物包含層の遺物包含密度は低い。

２次調査で出土した遺物は，縄文土器片493点，縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器片１点，弥生土器片３点，石器15点で，そのほとんどは遺物包含層から出土している。縄文土器は早期中葉～後葉と，晩期に比定されるものが大半を占め，他に早期前葉や前期，後期の土器片が少量ある。

基本土層（図２，写真３・４）

本遺跡の基本土層は１次調査において大きく５つに分けられており，２次調査ではこの層位区分を踏襲している。以下に各層の特徴を述べる。

ＬⅠは現表土・耕作土である。黒色土で，段丘平坦面では約20～30cmの厚さで堆積していた。調査区北側の斜面部では近年の宅地・畑地造成に伴う盛土が厚く堆積している。層中には縄文～弥生時代の遺物が少量含まれる。

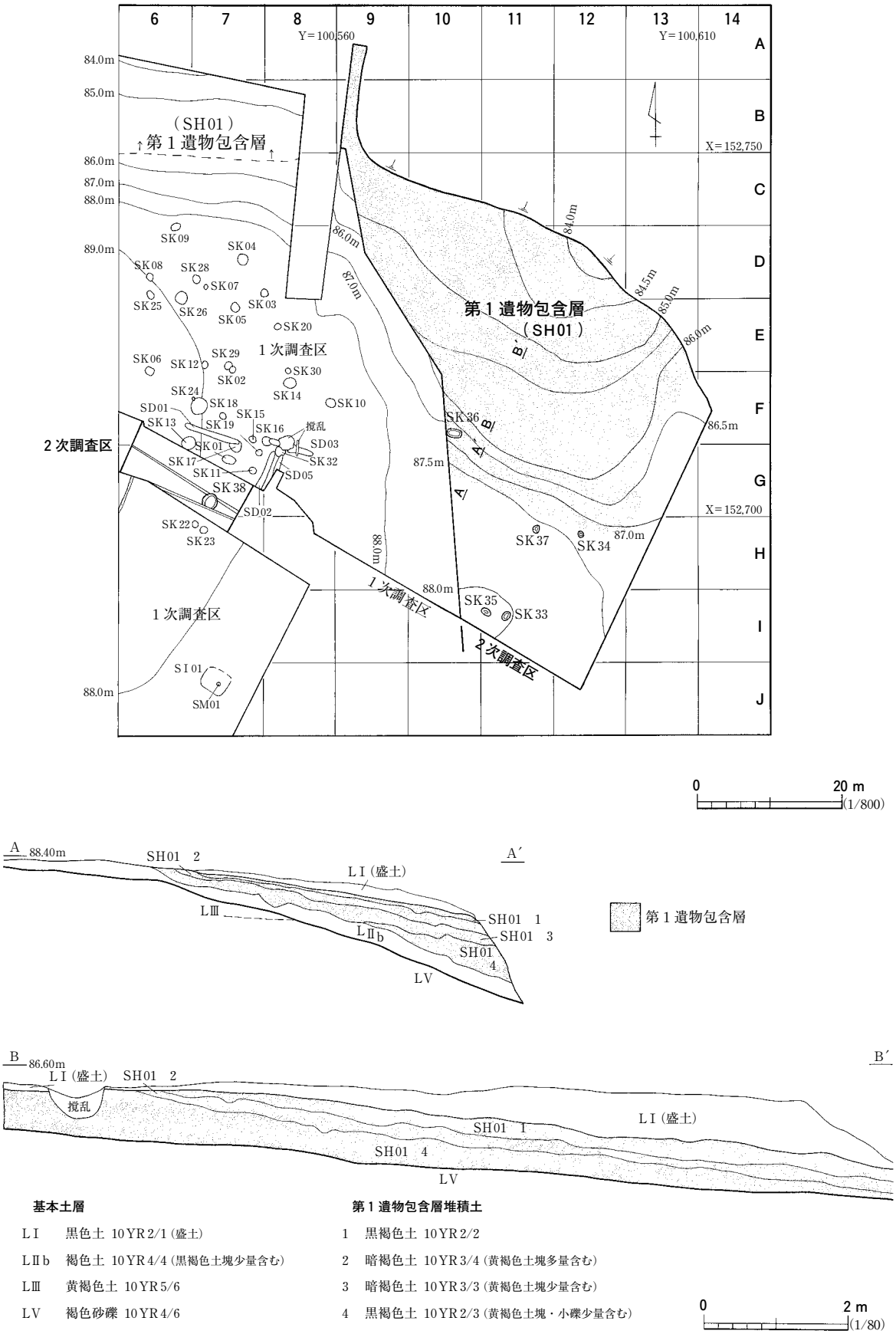
ＬⅡａは褐色土で，１次調査区の南東側に認められるが，２次調査区では確認されていない。

ＬⅡｂは褐色土で，黒褐色土粒を少量含む。調査区南端の平坦面から中央部の斜面中位まで20cm前後の厚さで堆積している。調査区北西側の斜面部では，この上面に遺物包含層が形成されている。１次調査区では本層から縄文土器が出土しているが，２次調査区内では遺物は出土していない。

ＬⅡｃは褐色砂礫層で，１次調査区の斜面下位に認められるが，２次調査区には堆積していない。

ＬⅢは，その上面が本遺跡の基底面を構成する黄褐色土である。調査区南端から斜面中位まで認められる。今回検出した土坑はこの上面で確認している。

ＬⅣはＬⅤの漸移層となる黄褐色土である。１次調査区内の北西側や町道茂手木１号線の南側に堆積しているが，２次調査区内には認められない。



基本土層

LⅠ	黒色土	10YR2/1（盛土）
LⅡb	褐色土	10YR4/4（黒褐色土塊少量含む）
LⅢ	黄褐色土	10YR5/6
LV	褐色砂礫	10YR4/6

第１遺物包含層堆積土

1	黒褐色土	10YR2/2
2	暗褐色土	10YR3/4（黄褐色土塊多量含む）
3	暗褐色土	10YR3/3（黄褐色土塊少量含む）
4	黒褐色土	10YR2/3（黄褐色土塊・小礫少量含む）

0　2 m（1/80）

図２　遺構配置図・基本土層・第１遺物包含層断面図

ＬＶは褐色砂礫層である。調査区北側の斜面中位以下で露頭し，遺物包含層がこの上面に形成されている。36・38号土坑の底面は本層を一部掘り込んでいる。（坂　田）

第２節　土　　坑

33号土坑　ＳＫ33　（図３・４，写真５～７）

本遺構は調査区南側，Ｉ11グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。地形的には平坦である。

堆積土は，ℓ１が微量の炭化物粒を含んだ褐色土，ℓ２は崩落土で，ともにＬⅢを基質とした自然埋没土である。平面形は楕円形を呈し，大きさは135cm×100cm，検出面からの深さは約15cmを測る。周壁の立ち上がりは約45°である。

堆積土中（ℓ１）から縄文土器片１点が出土し，これを４図１に示した。重層山形の押型文が施されており，日計型押型文土器に比定される。

出土土器から，本遺構は縄文時代早期頃に属すると考えられる。（宮　田）

34号土坑　ＳＫ34　（図３，写真５・６）

本土坑は調査区南側，段丘緩斜面上位のＨ12グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出された。

堆積土は褐色土塊を多く含む暗褐色土１層で，人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。平面形は円形を呈し，規模は直径約100cm，検出面から底面までの深さは18cmを測る。底面はほぼ平坦で，周壁の立ち上がりは南東壁が一部急であるが，他は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく，本遺構の性格・所属時期は不明である。（坂　田）

35号土坑　ＳＫ35　（図３，写真５・６）

本遺構は調査区南東側，Ｉ11グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出された。地形的には平坦である。

堆積土は２層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を多量に含む暗褐色土，ℓ２は褐色土で，堆積状況から共に人為堆積土と考えられる。木根で南西部を一部壊されるが，平面形は東西方向に長い不整な楕円形を呈すると推定される。大きさは120cm×90cm，検出面から底面までの深さは32cmを測る。周壁の立ち上がりは緩やかで，底面は西から東に向かって緩やかに傾斜する。

遺物は出土しておらず，本遺構の性格・所属時期は不明である。（坂　田）

36号土坑　ＳＫ36　（図３・４，写真５～７）

本遺構は調査区の西側，段丘斜面中位のＦ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，第１遺物包含層の下から暗褐色土と黒褐色土の広がりとして検出した。

堆積土は３層に分けられ，レンズ状の堆積状況を示すことから，すべて自然堆積土と考えられる。平面形は隅丸長方形をなし，大きさは190cm×93cm，検出面からの深さは55cmを測る。底面はほぼ平

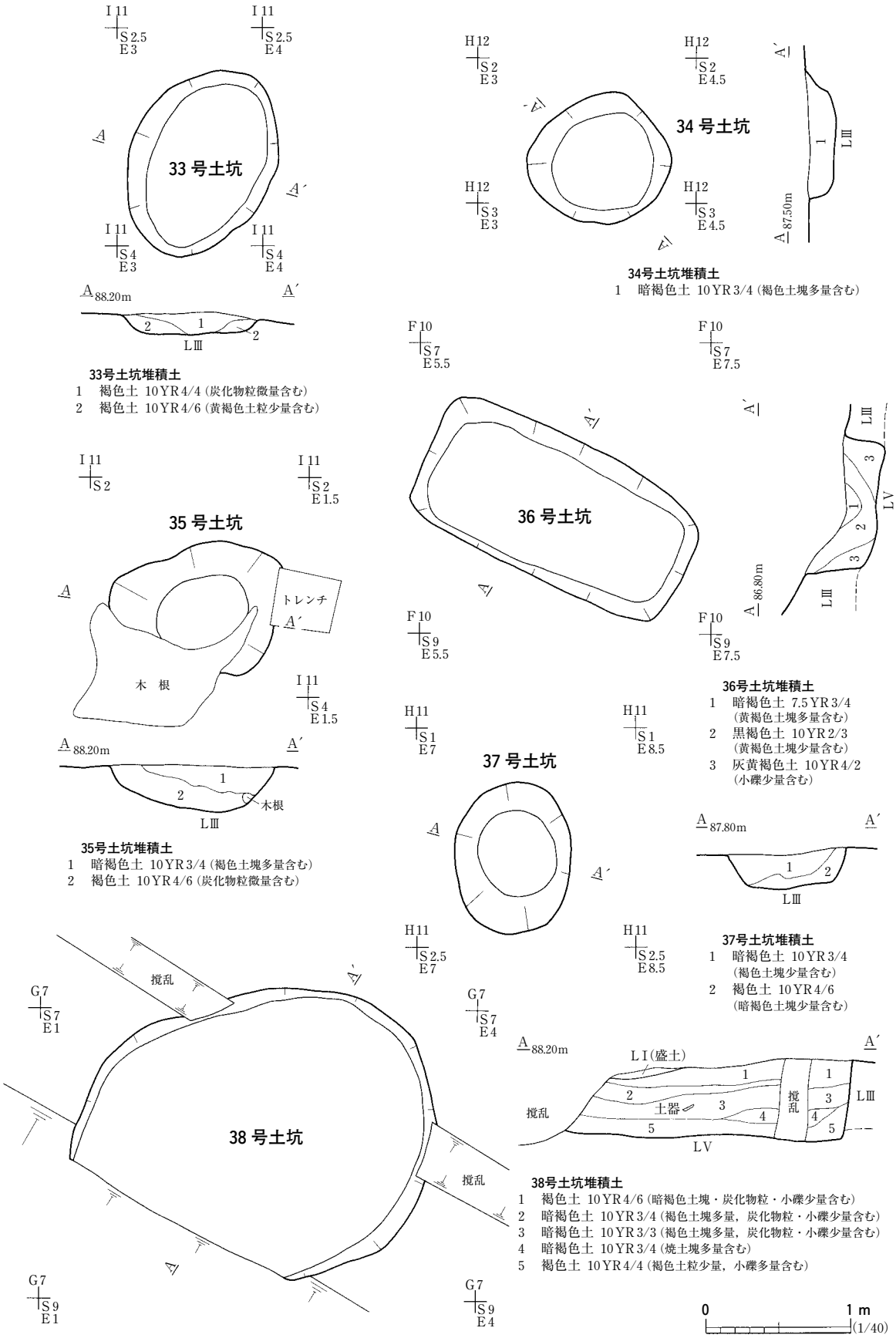

33 号土坑
33号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/4（炭化物粒微量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）
34 号土坑
34号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（褐色土塊多量含む）
35 号土坑
トレンチ
木　根
35号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（褐色土塊多量含む）
2　褐色土 10YR4/6（炭化物粒微量含む）
36 号土坑
36号土坑堆積土
1　暗褐色土 7.5YR3/4（黄褐色土塊多量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3（黄褐色土塊少量含む）
3　灰黄褐色土 10YR4/2（小礫少量含む）
37 号土坑
37号土坑堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（褐色土塊少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（暗褐色土塊少量含む）
38 号土坑
撹乱
38号土坑堆積土
1　褐色土 10YR4/6（暗褐色土塊・炭化物粒・小礫少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（褐色土塊多量，炭化物粒・小礫少量含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（褐色土塊多量，炭化物粒・小礫少量含む）
4　暗褐色土 10YR3/4（焼土塊多量含む）
5　褐色土 10YR4/4（褐色土粒少量，小礫多量含む）
0　1 m
(1/40)

図 3　33～38号土坑

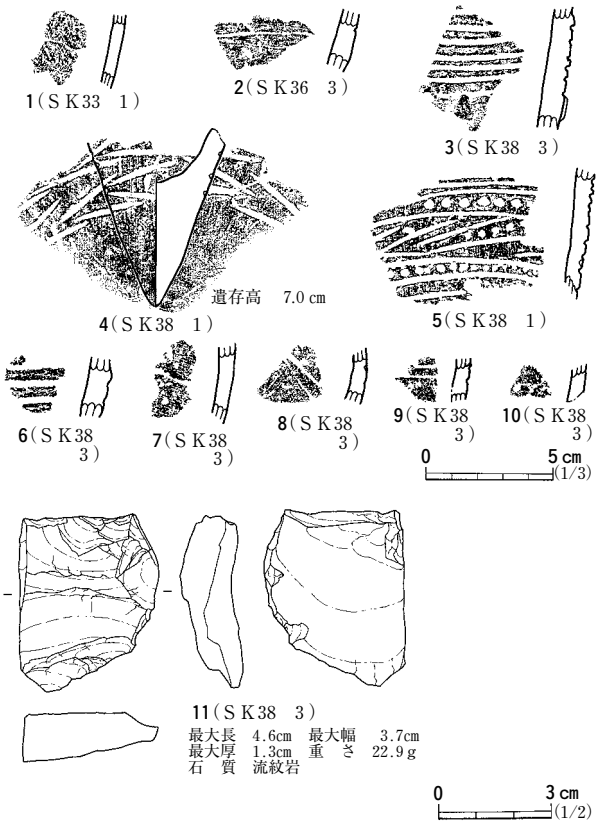


図４　土坑出土遺物

本遺構からは遺物が出土しておらず，所属時期や機能は不明である。　（宮　田）

38号土坑　ＳＫ38　（図３・４，写真５～７）

本遺構は町道部分，Ｇ７グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出された。地形的には平坦である。

堆積土は５層に分けられる。ℓ１～３・５は自然堆積土，ℓ４は人為堆積土と推定される。後世の削平で南西部を壊されるが，平面形は楕円形を呈すると推察される。長軸方向はN65°Ｅを示し，遺存している部分の大きさは230ｍ×200cmを測るが，長軸は約250cmあったものと推定される。検出面から底面までの深さは57cmを測る。周壁の立ち上がりは急で，底面はほぼ平坦である。

本遺構は，堆積土中（ℓ１・３）から縄文土器片８点，石器１点が出土している。４図３・６は同一個体の破片である。数条の横位平行沈線文が巡り，沈線文下部には粘土粒が貼付されている。同図４は尖底深鉢の底部周辺の資料で，方向の異なる斜位の短沈線により矢羽根状の文様が描かれている。同図５は横位と斜位の平行沈線文により文様が描かれ，沈線間には先端がペン先状の工具による連続刺突文が加えられている。同図８～10も同一個体と考えられる。小片のため文様構成は不明である。横位と斜位の細沈線で文様が描かれ，沈線間に連続刺突文が施されている。４図３～10はいずれも田戸下層式と考えられる。同図11は流紋岩製の剝片である。

本遺構は出土土器と土坑の形態から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴の可能性が高いと推測される。

（坂　田）

第３節　遺物包含層

第１遺物包含層　ＳＨ01　（図２，写真３・４）

概　要

遺物包含層は北向きの斜面一帯に広がっている。２次調査区の遺物包含層の分布範囲は，調査区北半部のＡ・Ｂ９，Ｃ９～11，Ｄ９～12，Ｅ・Ｆ９～13，Ｇ10～13グリッド，面積にして約1,400㎡に及んでいる。なお，ＬＩにも比較的多くの遺物が含まれており，層位とグリッド名を表記して，本節に遺物を掲載した。

２次調査において第１遺物包含層は４層に分けられるが，いずれの層も１次調査区内で確認された２層に対応させることはできなかった。遺物包含層から出土した遺物の総数は467点で，遺物の包含密度は低い。

ℓ１は黒褐色土である。斜面一帯に10～30cmの厚さで堆積しており，その上面は厚く盛土されていた。本層からは縄文時代早期中葉，晩期，晩期から弥生時代初頭の土器片44点と石器５点が出土しているが，縄文時代早期中葉と晩期の土器片が比較的多い。

ℓ２は暗褐色土である。黄褐色土を多量含み，斜面一帯に20cm前後の厚さで堆積している。本層からは縄文時代早期中葉～後葉，晩期，弥生時代後期の土器片84点と石器３点が出土しているが，縄文時代晩期の土器片が比較的多い。

ℓ３はℓ２より明るい色調の暗褐色土で，黄褐色土と小礫を少量含んでいる。斜面上位から中位にのみ確認され，10～20cm前後の厚さで堆積している。本層からは縄文時代早期後葉の土器片が１点のみ出土している。

ℓ４は黒褐色土で，黄褐色土と小礫を少量含んでいる。斜面中位から下位の広い範囲に30～70cmの厚さで分布している。本層からは早期前葉～後葉，前期，晩期の土器片325点と石器５点が出土しているが，縄文時代早期中葉の土器片が主体を占める。遺物の出土量は本層が最も多いが，その大半は層上位から出土しており，層の下位に遺物はほとんど含まれていない。なお，遺物包含層は斜面上位から中位ではＬⅡｂ上面に，斜面下位ではＬⅤ上面に形成されている。

遺物の分布状況を時期別に見ると，出土量の最も多い縄文時代早期中葉の土器は，斜面中位のＥ10・Ｆ11グリッド付近からまとまって出土している。次に出土量の多い縄文時代晩期の土器はＥ～Ｇ11グリッド付近から比較的多く出土している。いずれも南西側の平坦面には，１次調査でこの時期に比定される遺構が多数検出されており，遺物包含層もこの時期に形成されたものと考えられる。

（宮　田）

土　器（図５～８，写真８～14）

第１遺物包含層からは縄文土器片452点，縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器片１点，弥生土器片１点，基本土層ＬＩからは縄文土器片31点，弥生土器片２点が出土した。

５図１，６図１は三戸式に比定される土器である。５図１はほぼ直線的に外傾する器形の深鉢で，文様帯の上下を数条の横位平行沈線文により区画されている。区画内は縦位に垂下する帯状格子目文と集合沈線文でさらに区画され，方向の異なる斜位の集合沈線文で斜格子文もしくは菱形状文が施されている。６図１は小片のため文様構成は不明であるが，細い沈線で横位と斜位の帯状格子目文が施されている。

６図２～50，７図１～29は田戸下層式に相当する土器群である。いずれも小片のため全体的な器形を窺えるものは少ない。口縁部が直線的に外傾する器形のものが多く，他に口縁部が緩やかに外反するものが見られる。６図２～16は口縁部破片である。口縁部は平坦口縁のものが多いが，緩い波状口縁を呈するもの(２・４・６)も見られる。口唇部は平坦に調整されるものが多く，他に外削ぎ状のもの(４・５・７・16)や，内削ぎ状のもの(12)，先細り状(14)のもの，丸みをもつもの(９・15)がある。２は傾きの異なる斜位の平行沈線文に沿って連続刺突文が加えられている。刺突文は棒状工具によるもので，工具を押しつけた際の粘土の盛り上がりが認められる。３は口縁部上端に横位の平行沈線文が５条巡る。平行沈線文下部には太い沈線で山形状の文様が描かれ，これに連続刺突文が沿う。４～６はいずれも口縁に沿って３～５条の平行沈線文が巡り，沈線間には半截竹管による連続刺突文が加えられている。７は横位の平行沈線文に沿って，ヘラ状工具による押し引き状の連続刺突文が施されている。

６図８～13・17～30・32は横位や斜位の平行沈線文が施されているものである。17は数条の横位平行沈線文の上部に，方向の異なる斜位の集合沈線文が施されている。21は半截竹管で重層する菱形状の文様が描かれている。６図33は数条の弧線文が多段にウロコ状に施されている。同図14～16・31・34～43は格子目文が施され，34・37・39・41～43は横位の沈線文によって格子目文の上下が区画されている。

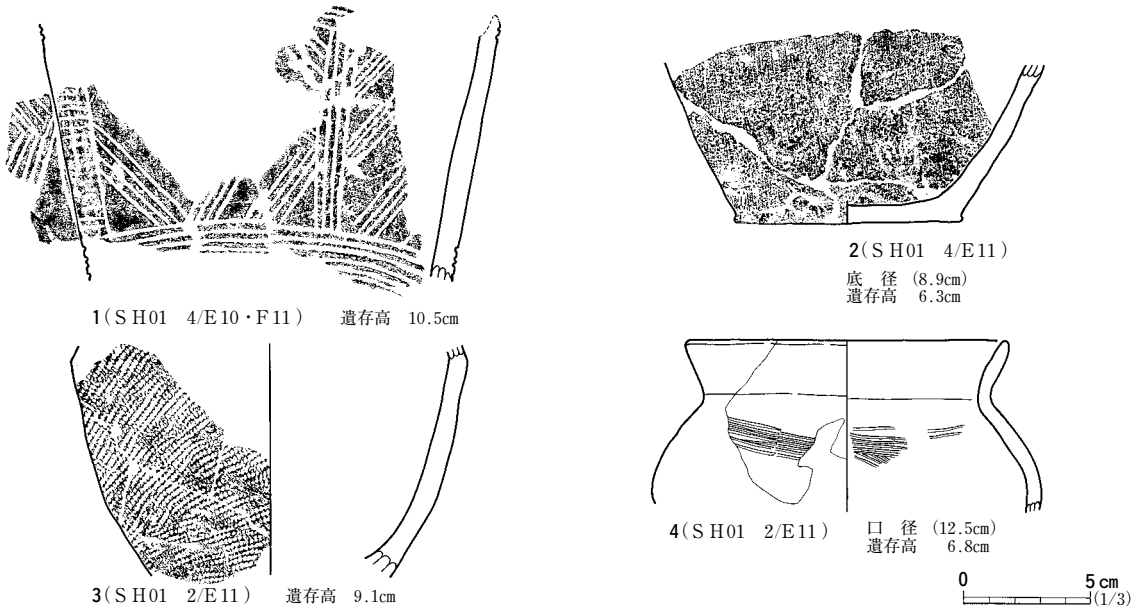


図５　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（１）

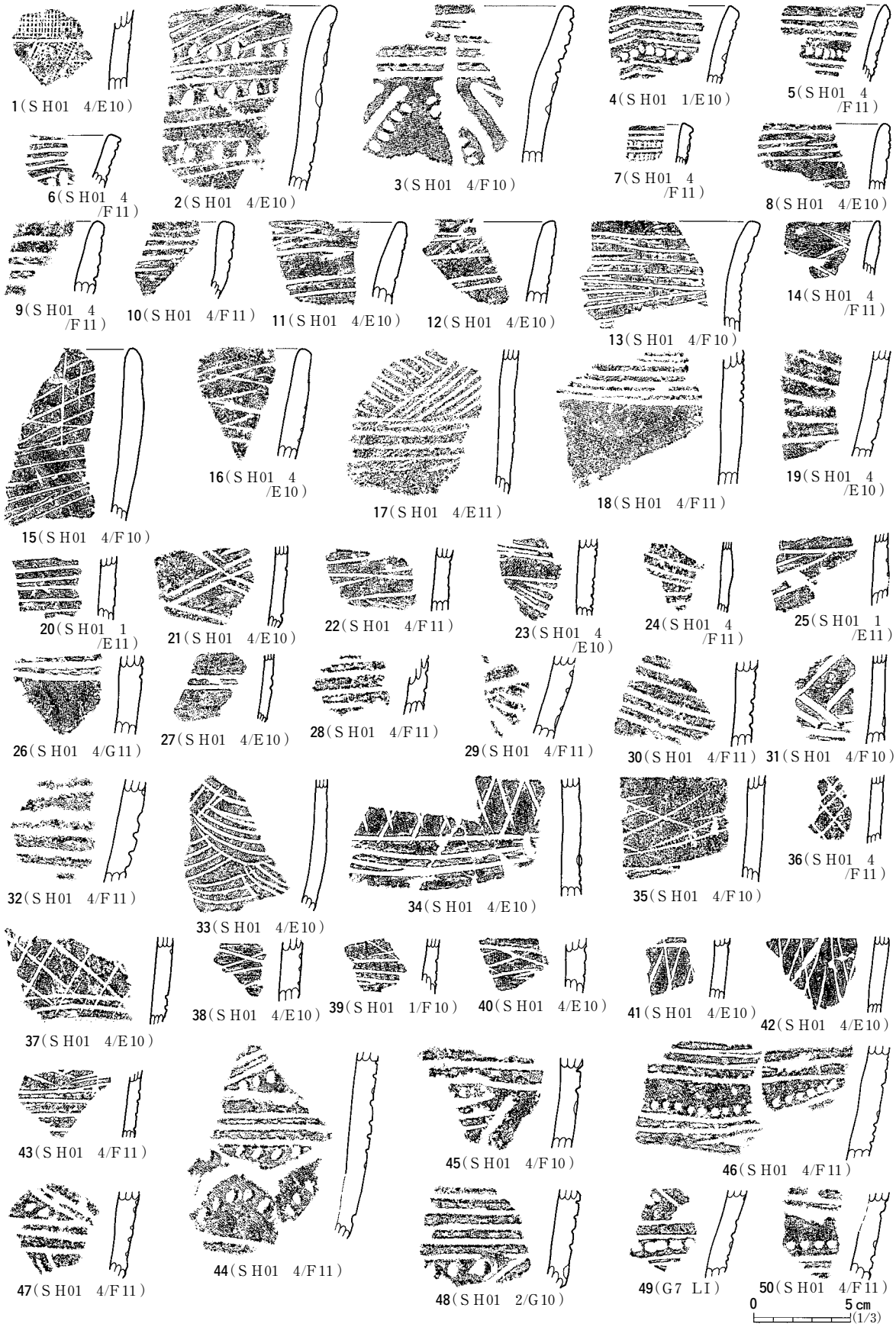


図６　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（２）

６図44～50，７図１～15・20は沈線文と連続刺突文を組み合わせて文様が描かれているものである。６図44～50，７図１～６・８は山形や曲線的な沈線文に沿って連続刺突文が施されているもので，全体的に器厚が厚い。６図44・45は同一個体である。７図７・９・12～15は横位の平行沈線文が数条施され，沈線間に連続刺突文が加えられている。同図10・20は平行沈線文に沿って連続刺突文が多段に施されている。同図11は波状の沈線文が数条施され，沈線間に連続刺突文が充填されている。

７図16は太い短沈線が斜位に施されている。同図17・18は横位と斜位の平行沈線文を組み合わせて文様が描かれている。17は沈線文下部に粘土粒の貼付が，18は沈線間に刺突を施した際の粘土の盛り上がりが認められる。同図19・21は同一個体の破片で，横位の平行沈線文下部に粘土粒が貼付されている。

７図22～29は押し引き状の連続刺突文が沈線文に沿って施されるものである。22・23・25は数条の横位平行沈線文に沿って連続刺突文が施されている。24は数条の横位沈線文上部に矢羽根状の文様が描かれ，その文様に沿って連続刺突文と斜位の短沈線が施されている。26は山形状の沈線文に沿って連続刺突文が施されている。27は口縁部が波状を呈し，口唇部の断面形は内削ぎ状である。口縁部上端に横位の平行沈線文が巡り，沈線文下部に山形状文とこれに沿う連続刺突文が施されている。28は縦位に垂下する沈線文と横位沈線文に沿って幅広の押引文と連続刺突文が施され，刺突文と縦位沈線文の交点には粘土粒が貼付されている。29は沈線間に幅広の連続刺突文がクランク状に施されている。クランク部には刺突文と半月形の粘土粒が施されている。

７図30～35は田戸上層式に相当する土器群である。いずれも小片のため器形の全容は不明であるが，口縁部が外反するものが見られる。30は横位と斜位の沈線文で文様が描かれ，貝殻腹縁文が充填されている。31～34は横位の平行沈線文間に波状もしくは山形状の文様が施されている。34は横位の平行沈線文に粘土粒が貼付されている。35はクランク状の沈線文とこれに沿う短沈線が施されている。

７図36～40は野島式に相当する土器群である。36は口縁部が波状を呈し，口縁部には刻み目の加えられた隆帯が貼付されている。内外面には条痕文が認められる。37～39は条痕文を地文とし，微隆起線により文様が描かれるもので，いずれも器厚が薄い。37は菱形状の文様が施され，内面には条痕文が施されている。38・39は横位と斜位の微隆起線が施されている。40は外面に縦位の集合平行沈線文が，内面に幅の広い条痕文が施されている。

７図41・42，８図１～15・19は胎土に繊維を含む土器群である。７図41，８図１・４は口縁部破片で，いずれも平坦口縁である。７図41は口唇部の内外面から交互に刻み目が加えられ，内面に条痕文が施されている。８図１は口唇部の断面形が内削ぎ状を呈し，口唇部に刻み目が加えられている。口縁部外面には幅広の刷毛状工具により斜位の沈線文が施されている。７図42は縦位と横位の隆帯が貼付され，隆帯には刺突が加えられている。横位の隆帯上部には山形状の文様が描かれ，内外面には条痕文が施されている。８図２は半截竹管による鋸歯状文が描かれている。同図５～７は

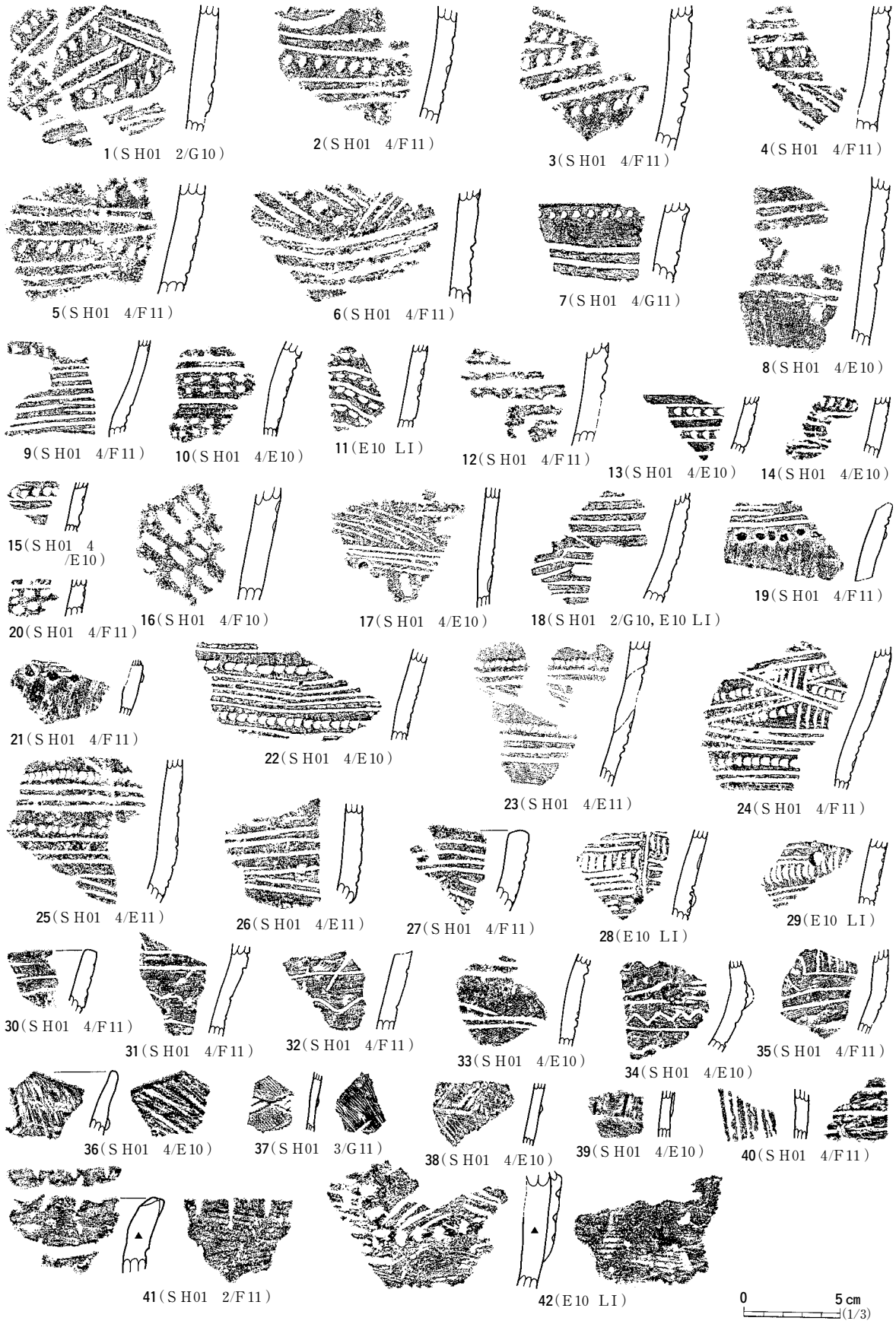


図７　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（３）

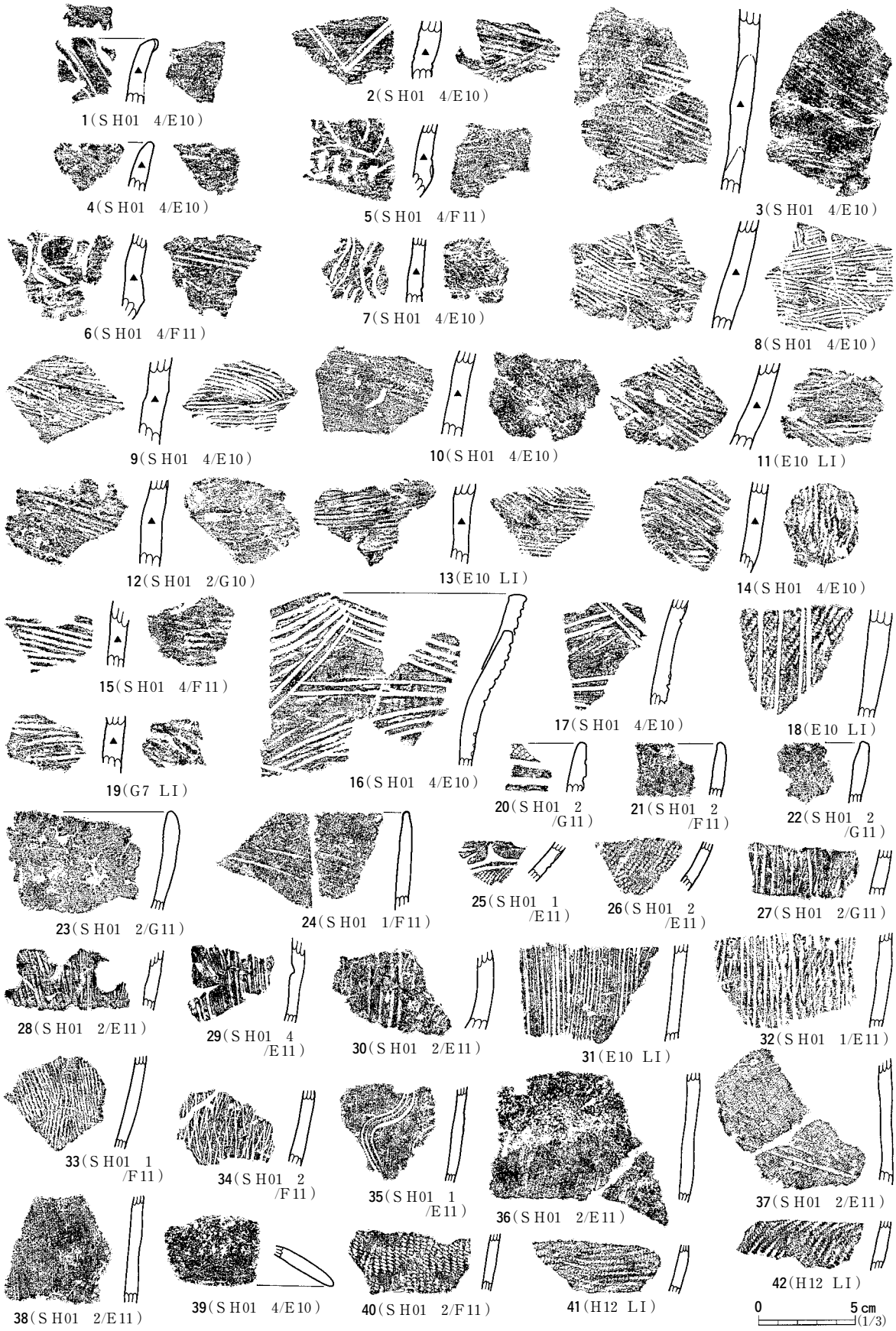


図８　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（４）

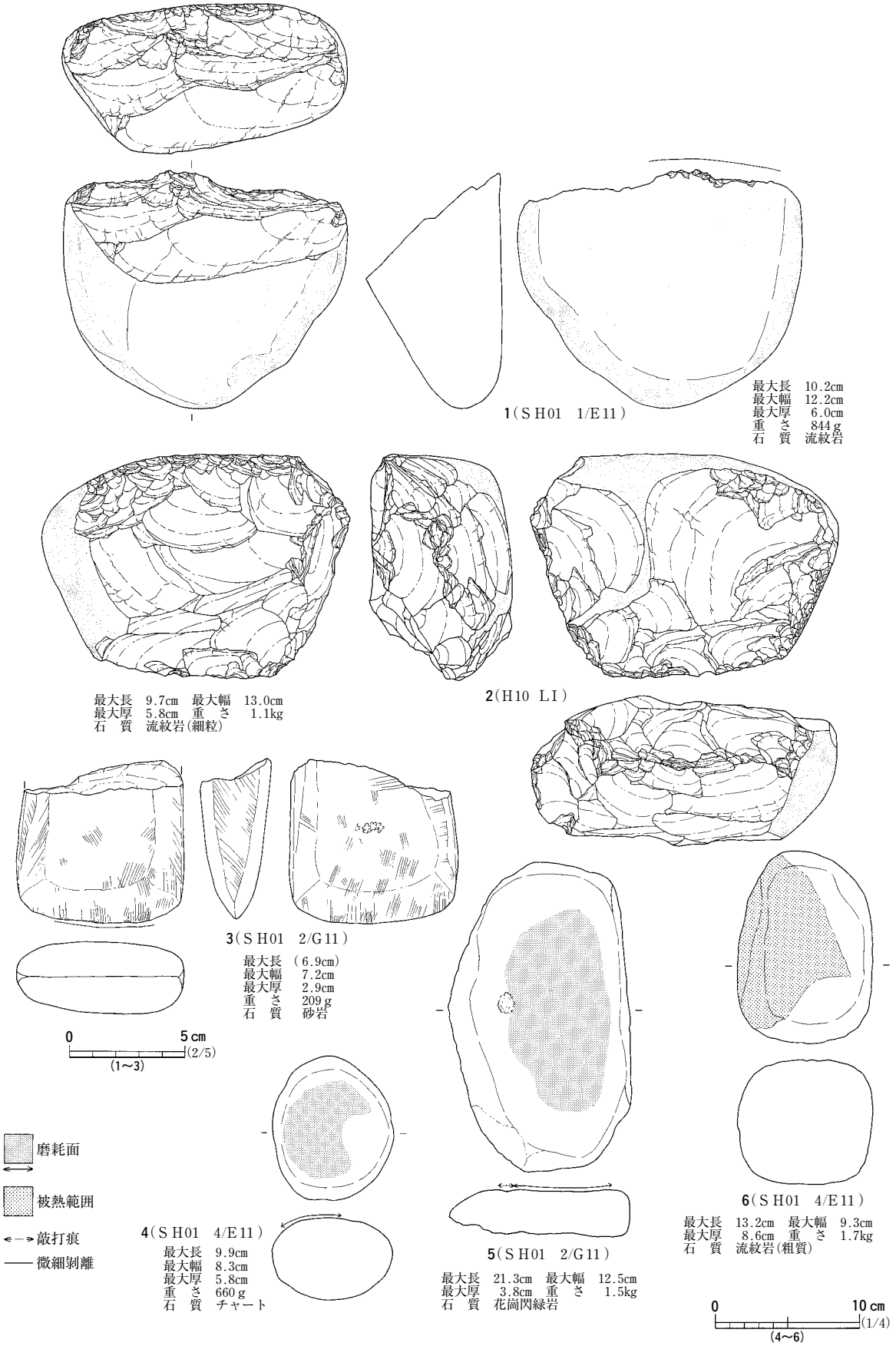


図９　第１遺物包含層・遺構外出土遺物（５）

沈線文により曲線的な文様が描かれている。同図５・６は頸部に隆帯が貼付され，隆帯には刺突が加えられている。同図３，８～15・19は内外面に条痕文が施されている。

８図16・17は同一個体で，浮島Ⅰ式期に比定されるものと推定される。口縁部が緩やかに外反する器形で，波状口縁を呈する。口縁に沿って数条の平行沈線文が巡り，その下部に横位と斜位の沈線文の組み合わせで文様が描かれている。

８図18はＬＲ撚りの原体で単節斜縄文が施され，縄文上に縦位の沈線文が描かれているもので，後期前葉の綱取Ⅱ式に比定される。

５図２～４，８図20～38は縄文時代晩期に比定される資料である。５図２は粗製深鉢の胴部下半から底部にかけての資料である。底部から胴部下半まで外傾しながら立ち上がる器形で，底部外縁が軽く外側に張り出している。外面には条痕が施されている。同図３は口縁部が強く内湾する粗製鉢と推測される。器面にはＬＲ撚りの原体で斜行縄文が施されている。同図４は胴部中位に最大径をもち，頸部でくびれて口縁部が外反する広口の壺である。内外面に条痕が施されている。８図20は口縁部上端にＬＲ撚りの原体で斜行縄文が施され，その下部に横位の平行沈線文が巡る。同図25・26は精製土器の破片で，25は三叉文が施されている。同図21～24・27～38は粗製深鉢の破片で，器形的には口縁部が緩やかに外傾するもの(21～23)と，ほぼ直立に近い立ち上がりのもの(24)が見られる。21～24，36～38は無文で，器面はナデ調整されている。27～32は条痕，33・34は撚糸文，35は櫛歯状文が施されている。28・29は同一個体と考えられる。

８図39は，縄文時代晩期終末～弥生時代初頭に比定される蓋である。無文で，内外面ともにナデ調整が施されている。

８図40～42は，弥生時代後期の天王山式に比定されるものと推定される。（坂　田）

石　器（図９，写真８）

９図１は礫器である。いわゆるチョッパーに分類される資料である。無斑晶質の流紋岩製で，石質は緻密で硬質である。円礫の一端に一方向から整形加工を施して，刃部を作出している。刃部の角度は約60度を測る。刃縁裏側には微細剥離が観察された。２は大形石核である。石質は緻密な安山岩製である。礫の周囲から剥片を剥離しているが，縁辺部は階段状剥離が連接している。このため最終段階では有効な剥片剥離が行われたとは考えにくい。下側縁も階段状剥離が両面に見られるが，これは使用による痕跡の可能性がある。このことから下側縁を刃部とみなすのであれば，本資料はチョッピング・ツールに分類されるであろう。３は安山岩製の定角式磨製石斧の破片である。刃縁には微細剥離が観察された。刃部の角度は約50度である。刃幅が大きいことから，かなり大形の磨製石斧の破片の一部と考えている。

４は磨石である。５は石皿である。それぞれ中央部には磨耗面が観察された。５の中央やや左寄りには１カ所の凹部が認められた。６は被熱礫である。器面の左半分に赤く変色した箇所が認められた。（門　脇）

第3章　ま　と　め

遺構について

２次調査で検出された遺構は土坑６基，遺物包含層１カ所である。ここでは土坑の分布と遺物包含層について，簡単にまとめておく。

１・２次調査で検出された土坑は合計38基である。１次調査で検出した土坑の大半が南側平坦面のＤ～Ｇ・６～８グリッドに集中しているのに対し，２次調査で検出した土坑は，Ｈ11～13グリッドその他に散発的に分布する。

２次調査で検出した土坑の平面形は，円形または楕円形のもの(33・34・35・37・38号土坑)と，長方形のもの(36号土坑)が認められる。前者には長径１ｍ前後のものと，長径1.5ｍ以上のものがあり，遺構の性格としては，ともに貯蔵穴と考えられる。後者は斜面上にあることから，落し穴状土坑と考えておきたい。

第１遺物包含層は調査区西側の斜面部に形成されている。遺物の出土数は少なく，縄文時代早期中葉～後葉，晩期の土器が主体を占める。１次調査で検出された遺構と時期的な差がないことから，遺物包含層もこの時期に形成されたと考えられる。　(宮　田)

遺物について

２次調査において本遺跡から出土した土器片総数は約497点で，そのほとんどは調査区北西側の開析谷斜面部に形成された遺物包含層から出土している。

本遺跡で最も古い土器は早期前葉の日計型押型文土器(４図１)で，細片のため詳細は不明である。次に古い時期のものは５図１・６図１で，５図１は集合沈線文により菱形状の文様が描かれている。６図１は細い沈線により帯状格子目文が施され，大熊町大平Ａ遺跡Ａ類土器(馬目編　1984)に類似するものである。これらの土器は早期中葉の三戸式に比定される。

次の時期に位置づけられる土器群は，今回の調査で出土点数が最も多かった田戸下層式である。口縁部は平坦口縁と緩やかな波状口縁があり，口唇部の断面形は外削ぎ状のものと，平坦なものが多い。細片のみの出土で全体的な器形のわかるものは少ないが，口縁部が緩やかに外反するもの(６図２・13)と，外傾するもの(６図３・15・16)が見られる。底部資料は１点のみ出土しており(４図４)，鋭角な尖底をなす。胎土には粗砂粒が混入され，器面はナデにより調整されている。口縁部には平行沈線文が巡るものが多く，主文様が平行沈線文で描かれるものと，沈線文とこれに沿う連続刺突文で構成されるものが認められる。前者には横位や斜位の平行沈線文が施されるものの他に，矢羽根状や菱形状の文様や，格子目文などが描かれているものが見られる。後者は本遺跡の田戸下層式の主体を占め，田戸下層式でも後半段階に相当するものである。これらの土器は，横位の平行沈線文による区画内に山形や菱形状の文様が描かれ，その沈線文に沿って連続刺突文が施され

ている。連続刺突文には列点状のものと押し引き状のものが認められ，施文工具はヘラ状工具や半截竹管，棒状工具で，右方向に連続して施される場合が多い。また，沈線文に沿って押し引き状の連続刺突文が施された７図22～29は，田戸下層式でも最も新しい段階に位置づけられると考えられる。

７図30～35は田戸上層式に比定される土器で，図示した６点のみ出土した。田戸下層式に比べると若干器厚が薄く，胎土もより精選されている。いずれも頸部にくびれをもつ器形の深鉢と思われ，沈線も前段階より細線化している。沈線間に貝殻腹縁文を充填するもの（30）と，沈線間に鋸歯状や波状の沈線文が描かれるもの（31～34）が認められ，田戸上層式でもより新しい段階のものと考えられる。

早期後葉の土器は野島式と茅山上層式が確認されたが，共に出土点数は少ない。野島式は微隆起線で文様が描かれたもの（７図37～39）と，集合沈線文が施されたもの（７図40）が見られる。

７図41・42，８図１～15・19は胎土に繊維を含む土器群である。７図42，８図５・６は口縁部文様帯が隆帯により区画され，区画内に山形文や曲線文が描かれたもので，茅山上層式に比定されると推測される。７図42，８図５の隆帯には連続刺突文が加えられている。８図３，８～15・19は内外面に条痕文が施されており，茅山下層式または茅山上層式に含まれるものと推定される。

８図16・17は浮島Ⅰ式，８図18は綱取Ⅱ式に比定されると考えられる。

晩期の土器は粗製深鉢の破片が大半を占め，器形には口縁部が緩く内湾するものと，ほぼ直立するものが認められる。ナデで調整された無文のものと，条痕が施されたものが多く，他に撚糸文や櫛歯状工具による文様が施されたものもある。三叉文が施された８図25は，大洞Ｂ式の新しい段階に比定される。

８図39は，縄文時代晩期終末～弥生時代初頭に比定されると考えられる無文の蓋である。８図40～42は，弥生時代後期の天王山式に比定されるものと推定される。（坂　田）

第２編　上平（うわだいら）Ａ遺跡

遺跡記号　ＯＫ－ＵＤ・Ａ
所在地　福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平
時代・種類　縄文時代・中世，集落跡
調査期間　平成14年７月29日～12月24日
調査員　山内　幹夫・門脇　秀典・坂田　由紀子

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

位　置　上平（うわだいら）Ａ遺跡は双葉郡大熊町大字大川原字南平1892～1894番地に所在し，北緯37°23′10″，東経140°58′0″（世界測地系に基づく）に位置する。大川原地区は大熊町の南端部にあり，富岡町と接している。遺跡はＪＲ大野駅から南西に約３㎞，県道いわき・浪江線から東へ１㎞の地点に位置する。建設中の常磐自動車道は，大熊町内では海岸線から約６㎞付近をほぼ南北方向に縦断するように計画されており，本遺跡もその予定路線上に所在する。常磐自動車道が完成すれば，本遺跡は富岡インターチェンジ（仮称）から真北へ1.6㎞の地点に位置することになる。

遺跡範囲　本遺跡は『福島県遺跡地図』や『大熊町史』に登録・記載された周知の遺跡である。さらに平成８年度に実施された表面調査により，遺跡の推定範囲が示された（㈶福島県文化センター編1997）。そこに示された遺跡推定範囲は，町道西57号線と町道67号線が交差する付近から北東側一帯の段丘面に及ぶ東西幅700ｍ，南北幅300ｍで，その遺跡範囲面積は132,200㎡を測る。

地　形　遺跡は熊川支流の大川原川右岸の中位Ⅱ段丘面上に位置し，標高は約74ｍである。遺跡から東へ約１㎞の地点には標高100ｍの等高線に沿うように双葉断層が南北に縦走し，それがちょうど阿武隈山地の山間部と河岸段丘地帯との境界をなしている。

上平Ａ遺跡の立地する中位Ⅱ段丘面はおおむね平坦で，同一の段丘面は大川原地区南平のほぼ全域に広がり，さらに南側は富岡町蛇谷須地区・上手岡地区・夜ノ森地区へと続く。前編に掲載した後作Ａ遺跡も同一段丘面上に存在する。学史上著名な大平遺跡も同一段丘面の東端部に位置する。

遺跡の北側を東へ流れる大川原川は，日隠山南麓に源を発し，手の倉から坂下ダムを経て，本遺跡から北東約700ｍの地点で野上川と合流し，熊川本流となって太平洋へ注いでいる。現在，遺跡付近での大川原川の川幅は約５ｍ，水深は50㎝程である。両岸に拡がる沖積面の幅を勘案すると，上流の坂下ダム建設以前の大川原川は川幅・水深ともに豊かであったと推察される。また，本遺跡北側での大川原川河床の標高は約50ｍで，遺跡との標高差は約25ｍである。

遺跡の北側は標高差15ｍの段丘崖を挟んで中位Ⅲ段丘面があり，上平Ｂ遺跡が立地する。さらにその面から８ｍ程下った面が沖積面であり，南平Ｂ遺跡が立地する。また，大川原川の対岸，低位Ⅰ段丘面から中位Ⅲ段丘面にかけての範囲に後編に掲載する道平遺跡が位置する。

上平Ａ遺跡の南側と東側は，標高差15ｍ以上のかなり急峻な開折谷が刻まれており，そこに頭森公園方面からの清流が流れている。この小川は遺跡の東側の段丘崖を刻んで，道平橋付近で大川原川と合流している。つまり本遺跡は，北・南・東の三方向を急峻な崖によって区切られた高台の末端部に位置し，大川原川と野上川の合流点，さらに遠くは太平洋まで展望することができる恵まれた環境に立地しているといえよう。

図１　上平Ａ遺跡調査区位置図

周辺遺跡　『大熊町史』（大熊町史編纂委員会編1984）によれば，本遺跡の周辺には縄文時代前期から晩期の遺跡が紹介されている。上平Ｂ遺跡は縄文時代後期の遺跡と推定され，綱取Ⅰ・Ⅱ式期の土器が表採されている。廻谷地遺跡は以前，縄文時代前期前葉の遺跡であったらしいが，現況では水田に改修され，遺物の採集は難しくなっている。蛇保遺跡は縄文時代前期から晩期の遺跡と推定され，大木４～９式，綱取Ⅰ・Ⅱ式，大洞Ｃ２式などの土器が表採されている。道平遺跡は，縄文時代後期から晩期の遺跡として知られ，1980年に発掘調査が行われている（渡辺ほか 1980）。さらに今年度，遺跡範囲の一部を常磐自動車道調査遺跡として発掘している（第３編参照）。

調査前の現況　以前，本遺跡付近は桑畑もしくは荒地であったが，昭和50年頃に水田に改修され，現在に至っている。水田改修の際に遺跡の一部は削平をされており，調査時にもその痕跡を確認することができた。逆に部分的ではあるが，改修の際の盛土によってその後の削平を免れた箇所もある。また今年度の調査区南側は，農道を挟んでスギやモミなどの針葉樹の林である。これらの木々のなかには樹齢が百年を超えるような大木があり，また今回の調査で多数の風倒木痕が発見されたことから，本遺跡周辺は開墾前には森林であった可能性がある。　（門　脇）

第２節　調査経過と調査方法

調査経過　上平Ａ遺跡は『福島県遺跡地図』や『大熊町史』に登録・記載された周知の遺跡である。平成８年度に実施された表面調査により，遺跡推定範囲が示され，その遺跡範囲面積は132,200㎡を測る（㈶福島県文化センター編1997）。さらに平成14年５月７日から県内遺跡分布調査事業により試掘調査が行われ，要保存面積3,300㎡が確定した（㈶福島県文化振興事業団編2003）。その結果を受けて６月19日・７月17日に福島県教育委員会と日本道路公団との間で保存協議がなされ，工区内の１期線部分について，要保存面積3,300㎡を発掘調査することが確認された。

その結果を受けて，福島県文化振興事業団では調査員３名を配置して，平成14年７月29日より現地調査を開始した。７月下旬から８月上旬にかけて，調査連絡所の設置，重機による表土剝ぎを行った後，８月７日より作業員を雇用し，人力による遺構精査を開始した。

８月から９月にかけては，晴天が続いたこともあって調査は順調に推移した。この頃になると，本遺跡が縄文時代前期の集落跡であることが確認された。10月に入ると住居跡などの遺構の精査が進捗し，縄文土器などの遺物も多数出土するようになった。また本遺跡では11月７日に空中写真撮影を実施し，縄文時代前期の集落の様相を記録した。

このように本遺跡では縄文時代前期の集落が良好な形で発見されたことから，11月21日には福島県教育委員会・大熊町教育委員会共催による現地見学会を開催した。現地見学会には地元の大熊町を中心として約130名の参加があった。その後，調査は順調に推移し，12月中旬には遺構の記録が終了し，平成14年12月24日に福島県教育委員会・福島県文化振興事業団から日本道路公団に現地を引き渡した。

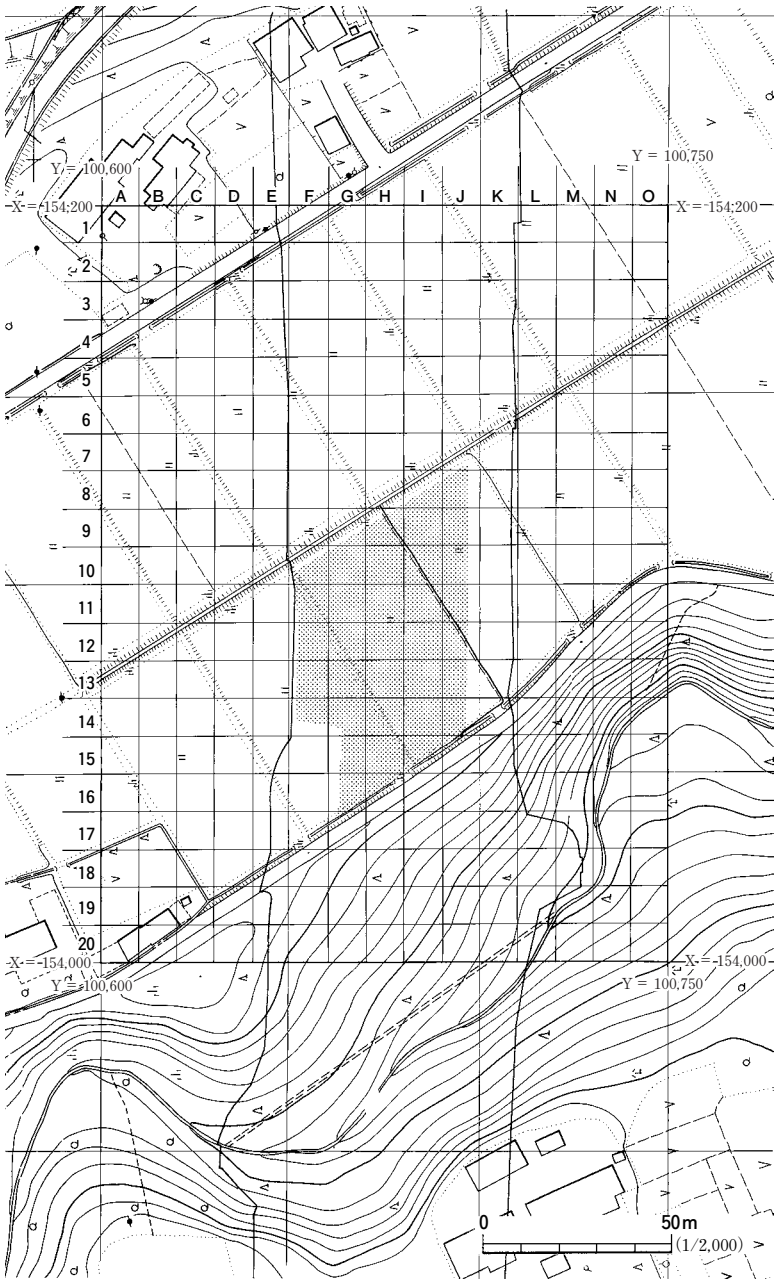


図２　調査区位置図とグリッド配置図

調査方法　本遺跡の調査は，基本的には序章で述べた方法に従っているので，共通項目は割愛する。なお，本遺跡の調査にのみ適用した項目は，３点である。

①グリッド（10×10ｍ）の基点については調査区外の北西側に定めた（図２）。その国土座標値は，Ｘ：154,200・Ｙ：100,600である。グリッドについては，基点の座標から東西方向に西から東にＡ・Ｂ・Ｃ・・・・と付したアルファベットと，南北方向に南から北に１・２・３・・・・と付した算用数字とを組み合わせたＡ１・Ｂ２グリッド等の呼称を用いた。つまり，Ａ１グリッドの北西杭が本遺跡のグリッドの基点となる。

②堆積土の表記　遺構内堆積土の状態を人為堆積土か自然流入土かを調査現場の段階で判断するよう努めた。しかしながら堆積の状態が悪く，判断できなかったものもある。人為堆積土か自然流入土かの判断基準と表記方法は次の通りである。

・人為堆積土複数の異なる色調の堆積土（例えば褐色土と黄褐色土など）が同一層に撹拌された状態で観察できたもの。また，基本土層には認められない色調や土質の堆積土が不規則に混じり合っているもの。堆積土の注記では「混土」という表現を用いている。

・自然流入土　単一の色調・土質の堆積土が均一的に同一層で認められたもので，かつ基本土層に認められる土が流入したことが，遺構内の堆積状態でわかるもの。

・表記方法　人為堆積土と判断したものにのみ「混土」という表現を用いている。

③空中撮影　遺跡の全体像や周辺の地形を把握するために，ラジオコントロール・ヘリコプターと高所作業車による写真撮影を行った。

（門　脇）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

遺構の分布（図３，写真１・４・５）

平成14年度の上平Ａ遺跡の調査において確認された遺構は，竪穴住居跡17軒，竪穴状遺構３基，土坑25基，集石遺構２基，焼土遺構１基，木炭窯跡１基，小穴26基である。また遺構ではないが，風倒木痕38カ所も確認された。この内，木炭窯跡を除く大部分の遺構は，縄文時代前期前葉を主体とする時期の範疇で捉えることができる。

図３に示したように調査区中央部には，あたかも広場であるかのような遺構の空白域（南北長約40ｍ・東西幅約20ｍ）がある。それを囲むように縄文時代前期前葉の遺構が，おおむね南北長約55ｍ・東西幅約52ｍの範囲に馬蹄形状に分布している。集落の全容は明らかではないが，中央に広場を備えた集落形態であったと推察できる。

縄文時代前期前葉の遺構を竪穴住居跡と土坑を中心に見れば，次の４カ所の分布域が認められる。

①６～11号住居跡を中心とした調査区南西隅の１群‥‥‥‥‥分布域①

②５・12～16号住居跡を中心とした調査区北側の１群‥‥‥‥分布域②

③３・４・17号住居跡を中心とした調査区南東隅の１群‥‥‥分布域③

④調査区北東隅の土坑群‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥分布域④

これら４群が同時併存したかどうかは不明であるが，段丘面上の土地利用において広場空間と住居空間，さらには土坑群といった「領域分け」が存在した可能性は高い。

次に遺構分布と地形との関係を考えてみる。遺跡は南西から北東に向かってなだらかに傾斜しているが，調査区中央部はその傾斜が最も緩く，かなり平坦な地形であることがわかる。

一方，南西隅の１群（分布域①）は，中央の平坦面より一段高い微高地に位置している。調査区内ではこの辺りが標高74.6ｍと最も高い。この微高地は，調査区外の西方向に延びることから，分布域が西へ拡大することは確実である。９～11号住居跡のように同一場所での重複関係が認められるなど，この領域の遺構密度は今回の調査区内では最も高いといえる。

北側の１群（分布域②）は，中央の平坦面より低い面に位置している。住居跡などに重複関係はなく，一定の間隔を保ちながら，分布している。調査区外の東方向に平坦面が延びることから，分布域が東へ拡大する可能性がある。

南東隅の１群（分布域③）は，北から南に緩やかに傾斜する面に位置する。３号住居跡の状況から分布域は調査区外の東側に拡がることは確実である。調査区南東隅から南側はさらに急傾斜になることが予想されることから，南側への分布域が大きく拡がる可能性は低い。

北東隅の土坑群（分布域④）は，調査区内では最も標高の低い場所に立地している。分布域②の外

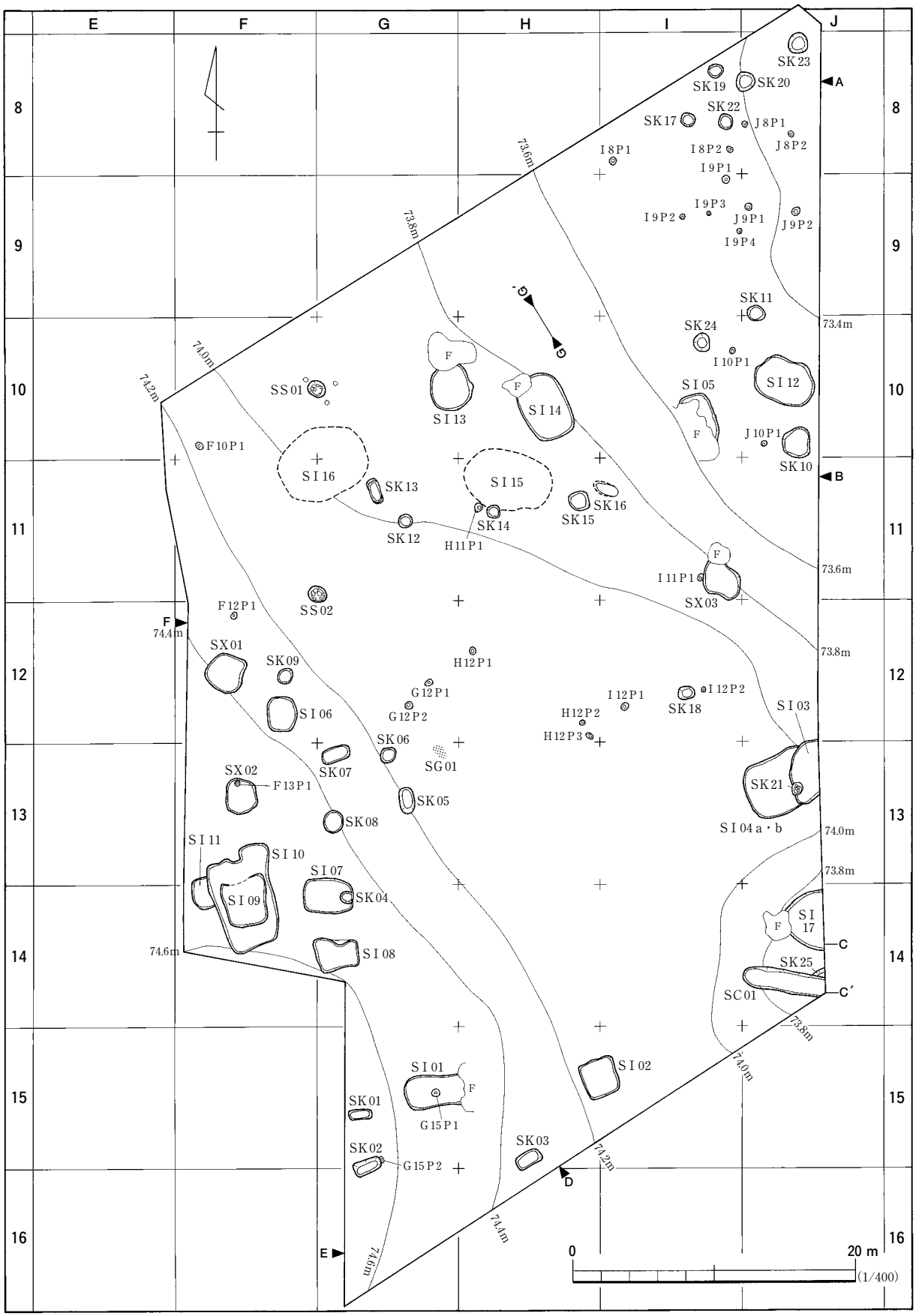


図３　遺構配置図・基本土層作成位置（Ａ～Ｇ）

縁部に位置し，北側への分布域の拡大が予想される。土坑のなかには23号土坑のように貯蔵穴である可能性が高いものも含まれている。

また土坑のなかには，落し穴状土坑と推察されるものも見つかっている。落し穴状土坑は，縄文時代前期の集落が営まれた時期に併存した可能性は低く，集落時期とは若干の時間差があると考えている。このことについては第４節で詳しく述べる。

竪穴住居跡（竪穴状遺構を含む）と土坑の他には，集石遺構と焼土遺構がある。集石遺構は２基確認されているが，その内，１号集石遺構は16号住居跡に隣接している。集石遺構を屋外炉として考えた場合，住居跡との関連性は高いかもしれない。

本遺跡では唯一，縄文時代よりも新しい時期の遺構として１号木炭窯跡がある。これは調査区南東隅の緩傾斜地で確認されたが，他に伴うような遺構はなく，単独で形成されたものと思われる。

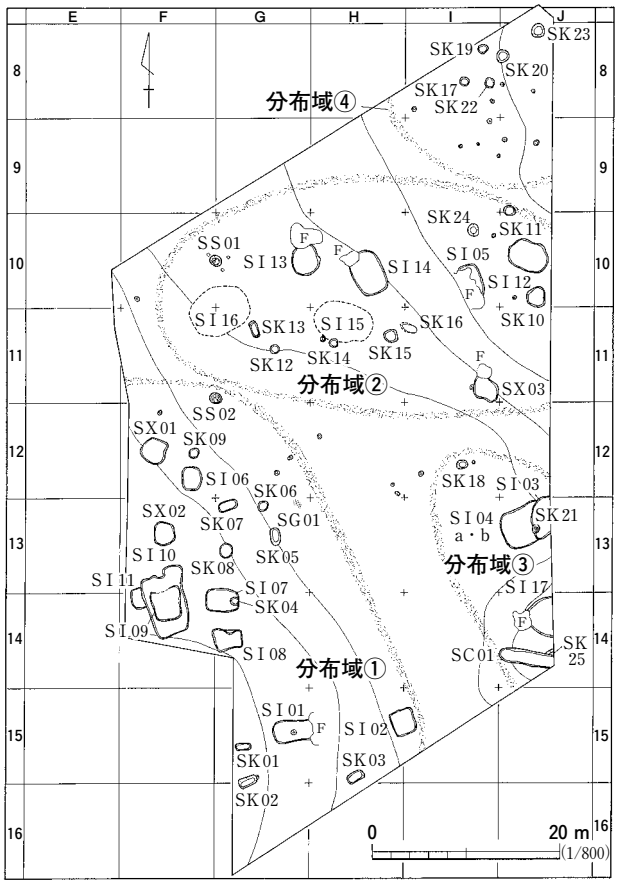


図４　遺構の配置と分布域

この他，本遺跡では風倒木痕が大小合わせて38カ所見つかっている。縄文時代の遺構と重複しているものも多いが，例外なく風倒木痕の方が新しいことがわかった。加えて深さが1.5m，直径が５mを超える巨大な風倒木痕も少なくない。また風倒木痕の堆積土を観察すると，後述する基本土層のＬⅡに起因する暗褐色土が流れ込んでいるものが多い。したがってＬⅡが表土として形成される時期，つまり縄文時代以降に，本遺跡一帯には森林が存在した可能性がある。　（門　脇）

基本土層（図５，写真６・７）

本遺跡の基本土層は，ＬＩ～ＬＶと大きく５つに分けた。さらにＬＩとＬⅣは，土質によって細分している。先にも述べたが，調査区周辺は昭和50年代に水田に改修されているため，基本層序が均一的に堆積している訳ではない。調査区内でも特にＬⅡとＬⅢは欠層している場合が多い。

ＬＩａは黒褐色土である。現況における水田耕作土で，調査区内の全域に認められる。層厚は，20～40cm程である。部分的には明らかに下位層を撹拌して，盛土とした箇所も認められた。調査に際しては，基本的に本層のみ重機掘削を行った。本層からは土器片や石器が出土している。

ＬＩｂは褐灰色土で，グライ化した粘質土である。現況における水田の床土に相当する。層厚は，５～10cm程である。調査区内のほぼ全域に認められた。本調査は，本層より下位については基本的に人力作業である。本層からも比較的多くの縄文土器片や石器が出土している。

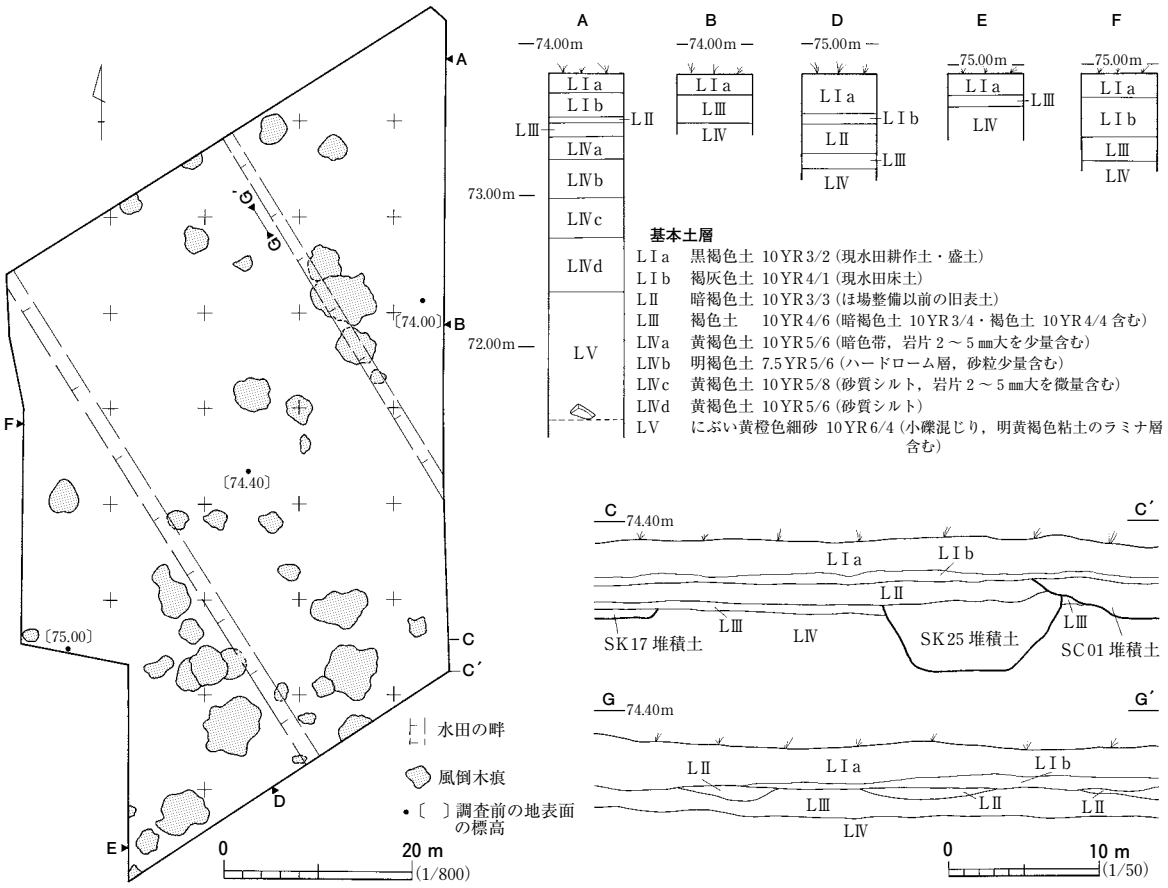


図５　風倒木痕分布図と基本土層

ＬⅡは暗褐色土である。水田改修前の旧表土層と考えられる。層厚は，５～20cm程である。水田耕作によって，調査区内ではほとんどが失われ，部分的にしか遺存していなかった。１号木炭窯跡は，本層上面から掘り込まれた可能性が高いものと考えている。出土遺物は，本層がほとんど残っていなかったため縄文土器片・石器ともに少ない。

ＬⅢは，褐色土を基調とし，暗褐色土を部分的に含んでいる。ＬⅡとの層理面が不明瞭であることから堆積後に土壌化作用を受けたものと考えている。層厚は，５～20cm程である。調査区の中央部ではほとんど失われていたが，調査区南東部（Ｉ・Ｊ14グリッド付近）や北部（Ｇ・Ｈ10グリッド付近）では確認できた。また３号住居跡は，ＬⅢ上面が遺構掘り込み面である可能性が高いことが判明した。おそらく本層が縄文時代の表土であり，当該期の遺構の多くは本層上面から掘り込まれたものと推察している。縄文土器片・石器が出土しているが，出土量は限られている。

ＬⅣは黄褐色土で，ＬⅤ上面までの層厚は0.7～１m程である。本層上面が遺跡の基底面（地山）を構成している。また前述のように縄文時代の遺構は，ＬⅢ上面が掘り込み面である可能性が高い。しかしながら実際の調査ではＬⅢの遺存が悪く，結果的に大部分の遺構はＬⅣ上面で検出されている。ただし17号住居跡のみはＬⅣ上面が掘り込み面であると考えられ，他よりは時期的に古い住居跡の可能性がある。

なおＬⅣは，色調や土質によって４つに細分することができるが，層序細分は漸移的な区分とし

て捉えている。ＬⅣａは黄褐色を呈するロームで，２～５㎜大の岩片を少量含んでいる。ＬⅣｂより若干色調が暗く，「暗色帯」に相当する層の可能性がある。ＬⅣｂは，ＬⅣａより明るい黄褐色を呈するハードローム層で，砂粒を少量含んでいる。ＬⅣｃは黄褐色を呈する砂質シルトで，岩片を微量含んでいる。ＬⅣｄも黄褐色砂質シルトでＬⅣｃより砂の割合が多い。

ＬⅤはにぶい黄橙色細砂層である。小礫が混じり，明黄褐色粘土のラミナ層を含む。２号土坑などは，ＬⅣを掘り抜いて本層上面まで掘削深度が達している。さらに下位には段丘礫層が存在するものと推察されるが，今回の調査で確認することはできなかった。

なお，ＬⅣ・ＬⅤの中から遺物は出土していない。（門　脇）

遺跡の年代と土器分類

本遺跡で出土した遺物は，縄文時代前期前葉に比定される時期の土器が主体を占め，他の時期の出土数は極端に少ない。出土土器はほとんどが破片の状態であり，分類は土器破片の表面の観察をもとにした。なお，挿図中には，Ⅲ群12類ａ種の土器ならば「Ⅲ12ａ」というように表記した。

Ⅰ群土器…縄文時代早期に比定される土器である。出土量は少ない。

１類…沈線文系の田戸下層式土器。

２類…条痕文系の土器。

Ⅱ群土器…縄文時代前期の土器で，口縁部から頸部にかけて文様帯が巡るもの。さらに14類に分類した。

１類…縄圧痕文を主文様とするもの。

２類…集合沈線で文様を描くもの。

３類…頸部に段を有するもの。

４類…連続する刺突文・爪形文で文様を描くもの。

５類…相互刺突文を施すもの。

６類…沈線文で文様を描くもの。文様に小瘤を貼付したものも本類とした。

７類…沈線文や連続刺突文で区画した重層ループ文を主文様とするもの。

８類…コンパス文を施すもの。

９類…地文上に連続刺突文が施されるもの。

10類…重層ループ文により文様を施すもの。または，地文間に無文部を残すもの。

11類…口唇部にのみ装飾を加えるもの。

12類…口縁部上端にのみの装飾を施すもの。

13類…平行沈線文を施すもの。

14類…１～13類以外の土器。比定される分類が不明なため，本類で一括した。

Ⅲ群土器…縄文時代前期の土器で，地文のみで構成される破片資料。胴部資料や底部資料の他，地文のみの平坦口縁の口縁部資料も含む。施文原体の種類により14類に分類した。

１類…１段撚りの原体で斜行縄文を施すもの。

２類…２段撚りの原体で斜行縄文を施すもの。

３類…非結束羽状縄文を施すもの。

４類…結束第１種原体で羽状縄文を施すもの。

５類…ループ文を施文するもの。

６類…複節斜縄文を施すもの。

７類…組紐文を施すもの。

８類…異節斜縄文を施すもの。

９類…異条縄文を施すもの。

10類…斜位や横位の撚糸文を施すもの。

11類…網目状撚糸文を施すもの。

12類…底部が少しでも確認できるものを一括した。底部に施された文様で細別した。

ａ種…斜縄文を施すもの。

ｂ種…ループ文を施すもの。

ｃ種…組紐文を施すもの。

ｄ種…半截竹管による刺突文を施すもの。

ｅ種…先端が平坦な工具による刺突をもつもの。

ｆ類…先端が棒状の工具による刺突をもつもの。

ｇ種…無文のもの。

ｈ種…残存率が悪く，比定される分類が不明なものを一括した。

13類…無文のもの。

14類…１～13類以外の土器。比定される分類が不明なものを本類で一括した。

Ⅳ群土器…縄文時代中期の土器である。

１類…大木８ａ～８ｂ式土器。

２類…大木９～10式土器。

３類…加曽利Ｅ式土器。

４類…中期土器と判断したが，粗製土器や地文だけの土器片で，詳細が不明なもの。

Ⅴ群土器…縄文時代後期の土器である。

１類…綱取Ⅰ式土器。

２類…後期土器と判断したが，粗製土器や地文だけの土器片で，詳細が不明なもの。　（坂　田）

第２節　竪穴住居跡

本遺跡で確認した竪穴住居跡は，１号住居跡から17号住居跡までの17軒である。前節で述べたように，これらはすべて縄文時代前期前葉を主体とする時期に比定される。

竪穴住居跡の分布には，前節で述べたように大まかに３つの分布域が認められた(図 4)。

分布域①　遺構は調査区南西隅の平坦面，Ｆ12～14，Ｇ13～15，Ｈ15グリッドにかけて，東西幅30ｍ，南北幅40ｍの範囲に分布する。この範囲に分布する竪穴住居跡は１・２・６～11号住居跡である。この中には９～11号住居跡のように重複関係が認められるものがあり，今回の調査で最も遺構が検出された範囲である。また分布域内には，これらの竪穴住居跡の他に１・２号竪穴状遺構と１～９号土坑，１号焼土遺構，２号集石遺構がある。

分布域②　遺構は調査区北側の平坦面，Ｆ～Ｊ10・11グリッドにかけて，東西幅38ｍ，南北幅20ｍの範囲に分布する。この範囲に分布する竪穴住居跡は５・12～16号住居跡である。これらの住居跡には重複関係は認められず，一定の間隔を保った配置である。また分布域内には，これらの竪穴住居跡の他に３号竪穴状遺構と10～16・24号土坑，１号集石遺構がある。特に１号集石遺構は16号住居跡の北側に隣接して位置することから，その関連が指摘されるところである。

分布域③　遺構は調査区南東隅のやや南向きに緩傾斜する面，Ｊ13・14グリッドにかけて，東西幅５ｍ，南北幅15ｍの範囲に分布する。この範囲に分布する竪穴住居跡は３・４・17号住居跡である。３号住居跡と４号住居跡には新旧関係があり，さらに４号住居跡には建て替えが認められた。また，３号住居跡はＬⅢ上面から掘り込んでいる遺構であるのに対し，17号住居跡はＬⅣ上面から掘り込んでいる可能性が高い。このことから分布域③の住居跡群は，同時期に併存したとは考えにくい。

今回の調査で基本層序と遺構掘り込み面との関係が判明したものは，前述の３・17号住居跡のみである。また８～11号住居跡についてはＬⅢ上面で検出した。他の住居跡についてはＬⅣ上面で検出したが，前節の基本土層の項で述べたように，17号住居跡を除いてＬⅢ上面が掘り込み面であったと推察している。

本遺跡で見つかった竪穴住居跡は，周壁の内側もしくは外側に壁柱穴が巡る構造であるものが多い。また，多くの竪穴住居跡では床面中央部に地床炉が認められる。住居構造に関しては，焼失住居である12号住居跡で貴重な所見が得られており，後に詳しく述べる。

竪穴住居跡の平面形は，隅丸長方形を呈するものが多く，方形を呈するものの軒数は少ない。円形を基調とするものは，17号住居跡のみである。また住居跡の主軸方位については規則性は認められない。本遺跡で見つかった住居跡は，中央の広場的空間を中心に一定の間隔で配置されているといえよう。

本遺跡の竪穴の掘り込みは総じて浅く，遺存壁高はほとんどが10㎝に満たない。最も壁高が高い

13号住居跡の例でも，遺存値で25cm程である。逆に15・16号住居跡のように，周壁は失われ，床面が露出した状況で検出された遺構もある。また，３号住居跡では掘り込み面(ＬⅢ上面)から床面までの深度は，36cm程である。このことから現況の竪穴深度で判断するのではなく，調査区内では基本土層のＬⅢがほとんど失われていることを考慮する必要があろう。

以下，遺構番号順に事実報告を行う。　（門　脇）

１号住居跡　ＳＩ01　（図６，写真８・９）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｇ15グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.5m（ＬⅣ上面）

重複　（新）Ｇ15Ｐ２，風倒木痕　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　隅丸長方形

規模　現状の壁上端で，東西長4.1m（遺存値）・南北長2.0m。　**床面積**（推定値）　8.11㎡

主軸方位　Ｎ81°Ｅ　**遺存壁高**　12～16cm　**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　東壁は風倒木痕によって壊されている。南北の壁はほぼ平行する。西壁は緩やかな円弧を描くように，西側に張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。多少の凹凸があるが，ほぼ平坦である。炉・踏み締まりは認められない。

堆積土　２層に分けられ，両層ともＬⅢに起因する褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

住居跡の構造

小穴　床面から検出された小穴，Ｐ１とＰ２を主柱穴と考えている。壁柱穴は確認していないが，竪穴の周囲に柱(垂木)が巡っていた可能性がある。２基の小穴の断面形はロート状を呈し，壁の上部が崩れている状況が認められた。また柱痕は確認できず，廃絶時に柱は抜き取られたものと推察される。柱穴深度は，Ｐ１で27cm，Ｐ２で36cmである。ともに上端の平面形は不整円形であるが，中端の平面形は円形を呈する。中端での直径はＰ１で25cm，Ｐ２で32cmである。これは他の住居跡の柱穴に比べて規模が大きいといえる。

遺　　物(図６，写真57)

出土状況　堆積土中(ℓ１)から，縄文土器片が23点出土した。

縄文土器　６図１は単節斜縄文，２・３は非結束の羽状縄文が施されている。２は同じ段内に２種類の原体が交互に回転され，縦位の羽状縄文が形成されている。４～７はループ文，８は組紐文が施されている。９は底部外縁と底部に半截竹管による刺突文が加えられている。

ま と め

分布域①の南にある竪穴住居跡で，平面形は東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。床面中央の長軸線上に２基の主柱穴が配置されている。この主柱だけでは構造上に支障をきたすので，おそらく竪穴の周囲には垂木を巡らして上屋を支えていたと推察している。垂木の柱穴は，すでに失

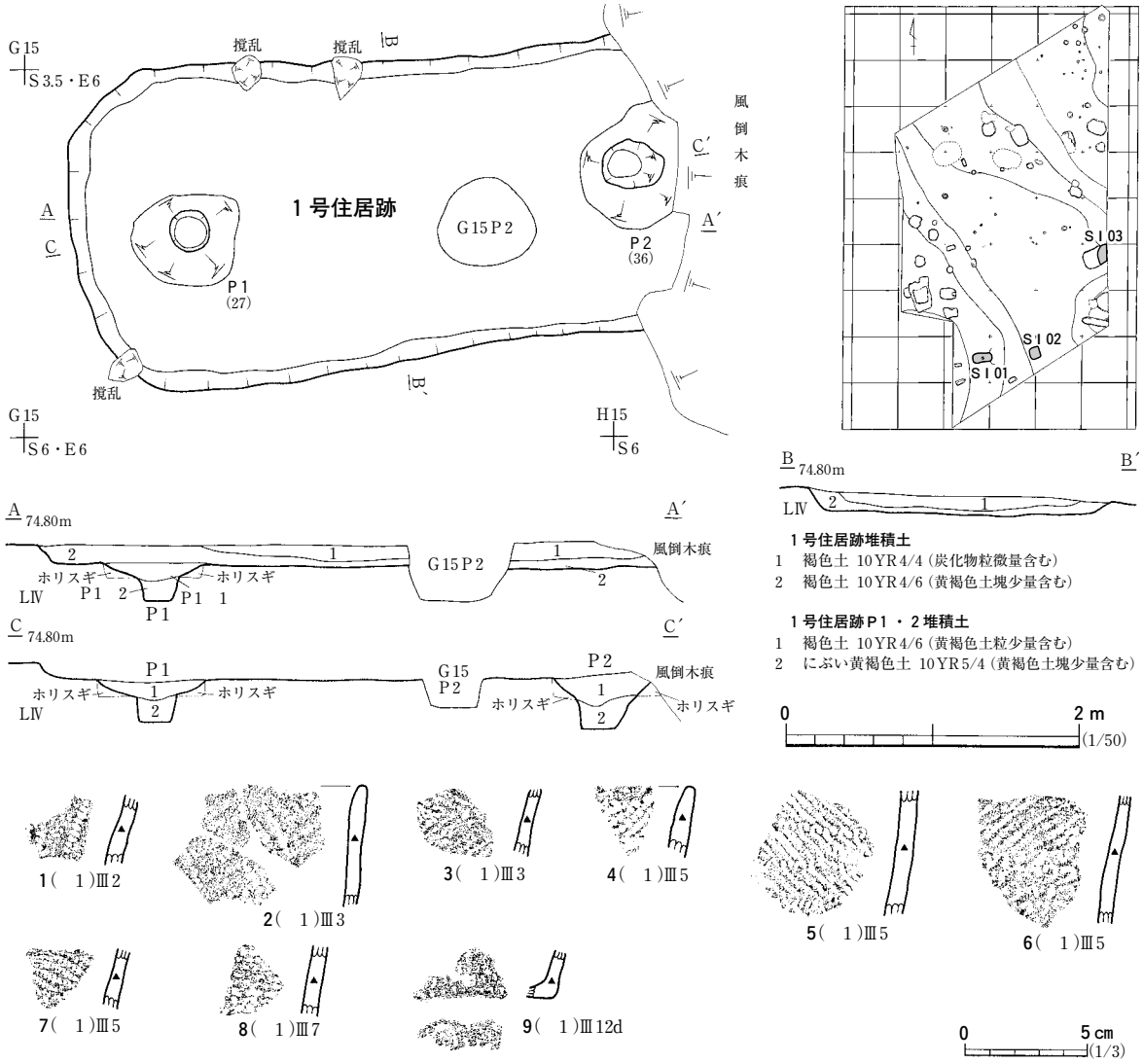


図６　１号住居跡と出土遺物

われているか，もしくは構築に際してＬⅣまで掘り込んでいなかったと考えられる。

本遺構の帰属時期は，出土遺物が少なく判然としないが，住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えている。

（門　脇）

２号住居跡　ＳＩ02　（図７，写真10・11）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｈ・Ｊ15グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.3m（ＬⅣ上面）

重複　なし　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　方形

規模　現状の壁上端で，東西長2.5m・南北長2.6mを測る。　**床面積**（遺存値）　5.04㎡

主軸方位　N20°W　**遺存壁高**　８～10cm　**周壁の立ち上がり**　50～70度

周壁　南北の壁はほぼ平行するが，北壁がやや東側に張り出している。よって東西の壁は平行せず，東壁が北東方向に膨らんでいる。

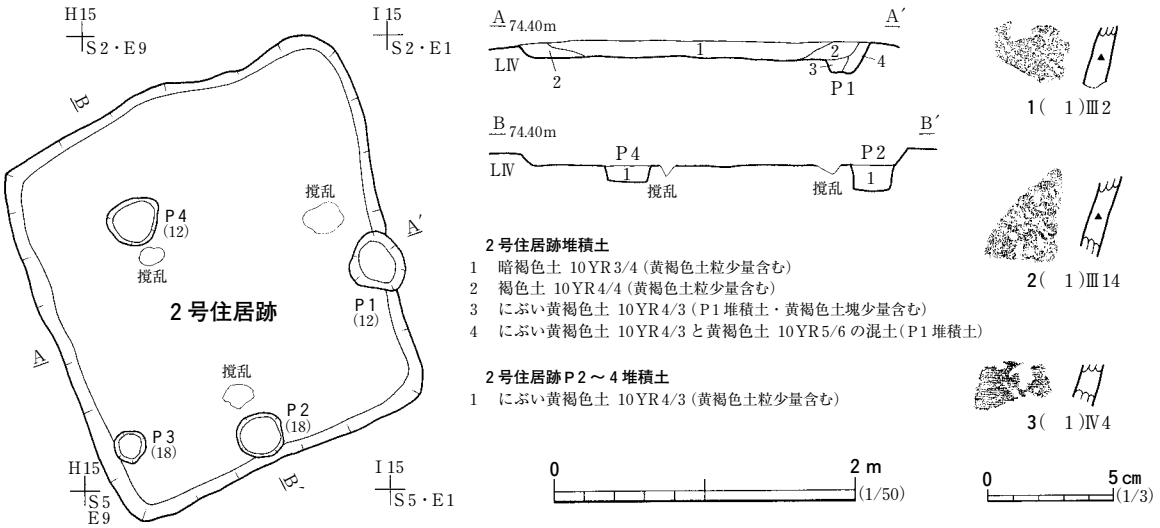


図７　２号住居跡と出土遺物

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。多少の凹凸があるが，ほぼ平坦である。炉・踏み締まりは認められない。

堆積土　２層に分けられ，両層ともＬⅢに起因する褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

住居跡の構造

小穴　床面から検出された小穴はＰ１～４の４基である。Ｐ１～３は柱穴とみているが，柱穴深度が浅く，小規模であるために，構造の復元は難しい。Ｐ４はさらに小規模であるため，機能については不明である。

遺　　物（図７）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から，縄文土器片が４点出土した。

縄文土器　７図１はＲＬ撚りの原体で単節斜縄文が施されている。２は器面の遺存状態が悪く，原体は特定できない。３は無文の胴部破片であるが，胎土と色調から中期の土器と推定される。

ま と め

分布域①の南端にある小型の竪穴住居跡で，平面形はほぼ方形を呈する。３基の柱穴が見つかっているが，住居がどのような上屋構造であるのかは推測できなかった。小型の住居跡であることから察すると，かなり簡易的な構造だった可能性がある。

本遺構の帰属時期は，出土遺物が少なく判然としないが，住居跡の構造や近接遺構から縄文時代前期前葉と考えている。

（門　脇）

３号住居跡　ＳＩ03　（図８・９，写真12・13）

遺構の概要

位置　分布域③，Ｊ13グリッド　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　74.1m（ＬⅢ上面）

重複　（新）21号土坑，風倒木痕　（古）４号住居跡　　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　東側が調査区外であるため不明。　　**規模**　現状の壁上端で，南北長4.2m。

主軸方位　不明　　**遺存壁高**　18～20cm　　**周壁の立ち上がり**　70～80度

掘込面　調査区東壁の断面精査において，ＬⅢ上面から掘り込んでいることがわかった。平面プランをＬⅢ上面の精査段階で認識できなかったのは，本遺構の堆積土の色調とＬⅢのそれとがほとんど同じであったためである。

周壁　北壁と西壁の立ち上がりは急峻であるが，南西隅では，50度程とやや緩やかな立ち上がりを見せる。西壁は，４号住居跡の堆積土を掘り込んで構築されているためか，形状が不整である。西壁の一部は21号土坑によって失われている。また北壁と南壁は平行しないことから，住居跡の平面形はやや歪んだ円形もしくは楕円形を呈すると推測される。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。床面は中央に向かって緩やかにくぼみ，床周辺部と中央との比高差は８cmである。また床面の一部は，21号土坑と風倒木痕により壊されていた。踏み締まりは認識できなかった。

堆積土　３層に分けられ，ＬⅢに起因する暗褐色・褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

住居跡の構造

炉跡　床面中央やや北寄りの地点に，不整円形の掘形を有する炉跡が見つかった。その規模は東西幅60cm，南北幅58cm，深さ40cmを測る。炉跡掘形の周壁は強く被熱しており，その範囲は床面にまで及んでいる。このため，本住居跡に伴う遺構として判断した。炉内からは，拳大から幼頭大の亜円礫が数10個出土している。これらの礫の多くが被熱していた。炉内堆積土は２層に分けられ，いずれも炭化物を多く含んでいる。さらにℓ２は褐灰色の粘性に富む土を含んでおり，機能時の残灰が土壌に変化したと推察される。これらのことから，炉内で火を使用した可能性は高く，同時に石を熱していたと推測している。

小穴　検出された小穴は８基で，この内Ｐ１は炉跡北側に位置する主柱穴，Ｐ２～８の７基は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。Ｐ１は床面で見つかった小穴の中では最も規模が大きく，長軸46cm，短軸40cm，深さ30cmを測る。西壁の上部は崩落していることから，廃絶時に柱は抜き取られたものと推察される。７基の壁柱穴は直径20cm程とどれも小規模で，深さも一定しない。

遺　　物(図８・９，写真57・59)

出土状況　炉跡の堆積土下部(炉ℓ２)から，縄文土器片が２点出土した。堆積土中(ℓ１)からは縄文土器片が68点，石器が９点出土している。

縄文土器　８図１は非結束の羽状縄文，２・３は単節斜縄文，４は結節縄文が施されている。５・６は小片であったり，器面が摩耗しているため判然としないが，非結束羽状縄文が施されているものと推定される。７は結束羽状縄文，８～12はループ文が施されている。９・10は２種類の原体で羽状縄文が形成されている。13～15は組紐文が施されている。16は沈線で区画された無文部と縄文

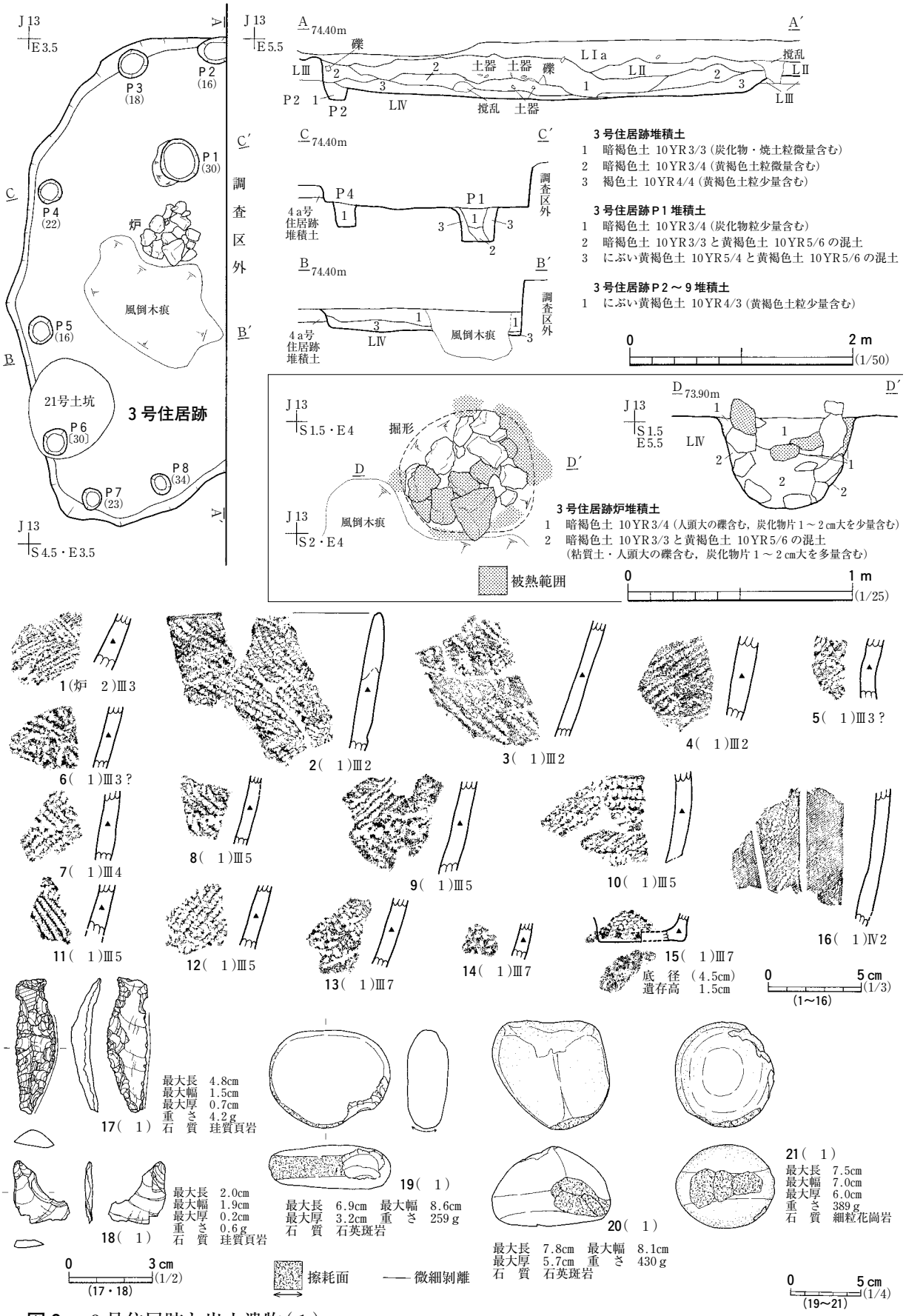


図８　３号住居跡と出土遺物（１）

部で文様が構成されている。

石器　８図17は小形の縦形石匙である。背面は両側縁からほぼ並行する調整剝離痕が観察されるが，腹面右側縁部は未加工のままである。抉り部はわずかに内湾する程度である。背面と腹面の右側縁には微細剝離が観察された。18は珪質頁岩製の剝片である。

同図19～21は下側面にザラザラとした擦耗面が観察された磨石類である。いずれの擦耗面も面的に潰れ，自然の礫面の丸みが失われている。

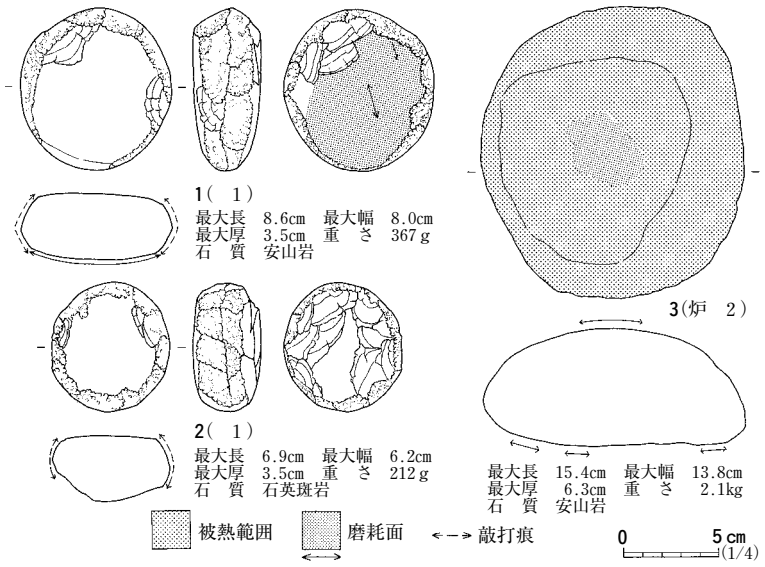


図９　３号住居跡出土遺物（２）

９図１・２は周囲に顕著な敲打痕が観察された磨石類である。縁辺が面的に潰れていることから，かなりの使用頻度が伺える資料である。１の中央には磨耗面も観察された。同図３は炉跡の堆積土から見つかった磨石類である。表面には部分的に磨耗面が観察された。全面は強く被熱していたことから，炉の使用に関連するものと考えられる。

ま と め

分布域③にある竪穴住居跡で，住居跡の東側は調査することができなかった。したがって平面形は不明であるが，おそらく炉跡を中心とした円形もしくは楕円形を呈するのではないかと考えている。現況では住居の柱配列は，１本の主柱穴（Ｐ１）を中心に壁柱穴が巡る構造であると考えているが，調査区外にＰ１以外の主柱穴が存在する可能性がある。炉跡の構造的特徴は，屋内か屋外かの差はあるが，本遺跡の集石遺構のそれと類似している。

本遺構の帰属時期は，年代を特定できるような資料に恵まれなかったが，住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えている。

（門　脇）

４ａ号住居跡　ＳＩ04ａ　（図10・11，写真14～16）

遺構の概要

位置　分布域③，Ｊ13グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.1m（ＬⅣ上面）

重複　（新）３号住居跡，21号土坑　（古）４ｂ号住居跡　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　東壁は失われているが，隅丸長方形を呈すると推察される。

規模　現状の壁上端で，南北長4.0m，東西長は5.6m（推定）。　**床面積**（推定値）　19.86㎡

主軸方位　N65°E　**遺存壁高**　10～15cm　**周壁の立ち上がり**　60～70度

周壁　立ち上がりは全体的にやや緩やかである。東壁は，３号住居跡・21号土坑によって失われて

いる。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。床面は多少の起伏はあるが，ほぼ平坦である。また床面の東側は，３号住居跡と21号土坑により壊されていた。３号住居跡床面との比高差は，８～10cmである。踏み締まりは認められなかった。

堆積土　２層に分けられ，ＬⅢに起因する暗褐色・褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

住居跡の構造

炉跡　床面中央の長軸線上に２カ所の地床炉が見つかった。西側をＡ炉とし，東側をＢ炉とする。Ａ炉の規模は長軸幅65cm，短軸幅30cmを測る。Ｂ炉は東側が３号住居跡に壊されている。Ａ・Ｂ炉ともに中央部は強く被熱しており，その被熱範囲は床面下４～５cmに及んでいる。被熱範囲の縁辺部は，中央部より硬化していた。

小穴　検出された小穴は28基で，この内Ｐ１～22は本遺構の床面で検出した。Ｐ23～28は３号住居跡床面で検出した小穴である。Ｐ21・22を除いて，26基の小穴は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ20～25cmであるが，一定ではない。なかにはＰ10のように58cmの深さのものもある。平面形や規模も当然ながら一定していないが，おおよそ直径20～25cmのものが多いといえる。これらの小穴の堆積土は，基本的には住居内堆積土ℓ２と同質の土であり，自然堆積と判断している。したがって壁柱穴に柱痕は認められなかった。

一方，本遺構の壁柱穴の内側には後述する４ｂ号住居跡の柱穴が巡っているが，これらの堆積土は基本的には人為堆積土と考えている。つまり新段階の４ａ号住居跡を構築する際に，古段階の４ｂ号住居跡の小穴は埋められたと推測している。

遺　　物(図10・11，写真58・59)

出土状況　堆積土中(ℓ１・２)から縄文土器片が116点，石器が６点出土した。この他，Ｐ14の堆積土(ℓ１)から縄文土器片が１点出土している。

縄文土器　10図１は非結束の羽状縄文，10図２～４と11図１・２は単節斜縄文，10図５・11図３は結節縄文が施されている。11図４・５は縄の圧痕が薄く判然としないが，４は結束羽状縄文，５はループ文が施されていると推定される。同図６はＲ撚りの原体でループ文が，７は複節斜縄文が，８は組紐文が施されている。同図９～12は器面の遺存状態が悪く，詳細は不明である。

石器　11図13は磨製石斧の未製品である。刃部側には部分的に礫面が遺存しており，これが完成品でないことを示している。表面側には粗い研磨痕が観察される。右側面の節理面周辺には，多くの敲打の痕跡が認められるが，有効な整形剥離に至っていない。同図14は周囲に顕著な敲打痕が観察された磨石類である。縁辺部は全周にわたって，面的に潰れている。表裏両面の中央部には，凹部が認められた。

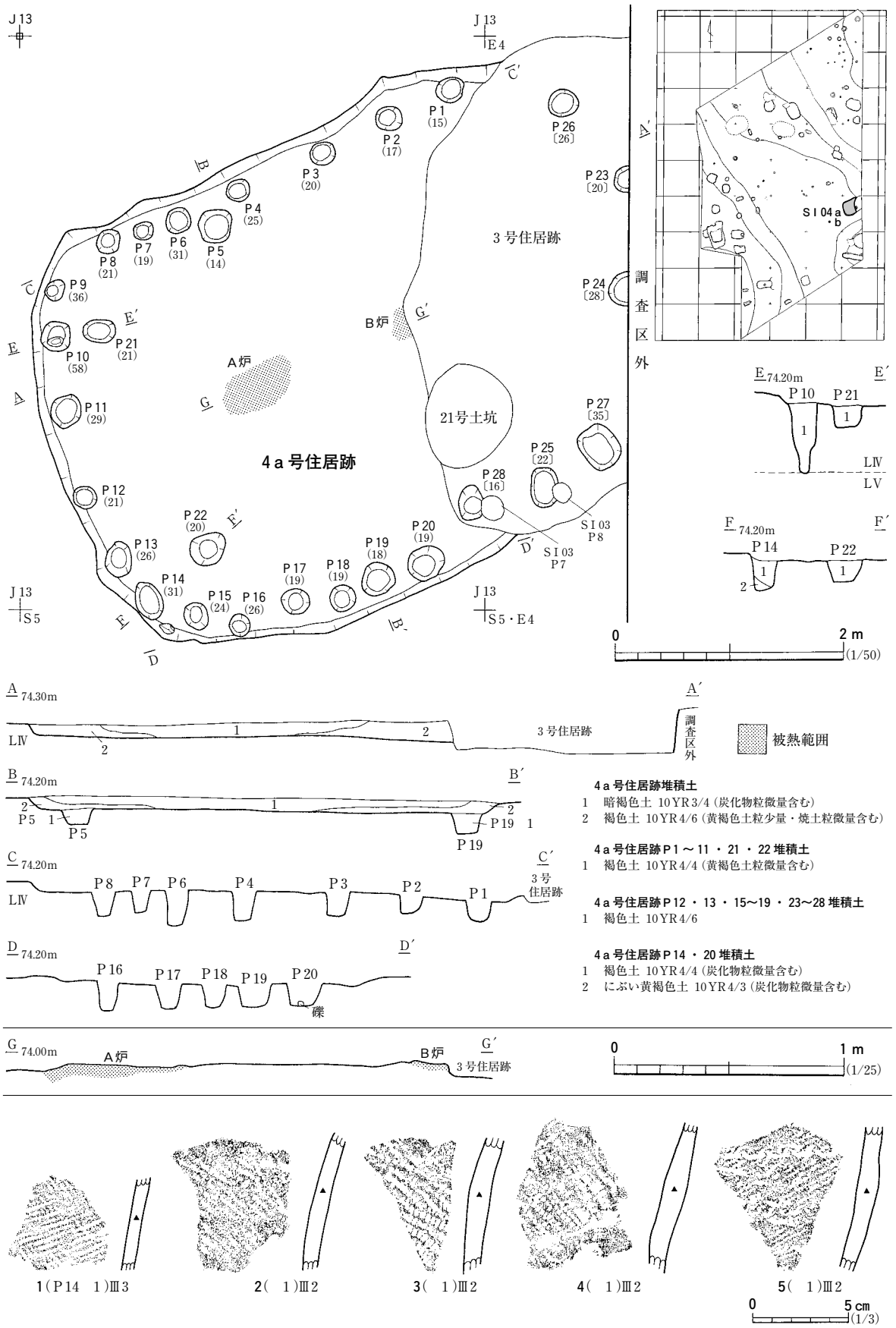


図10　４ａ号住居跡と出土遺物（１）

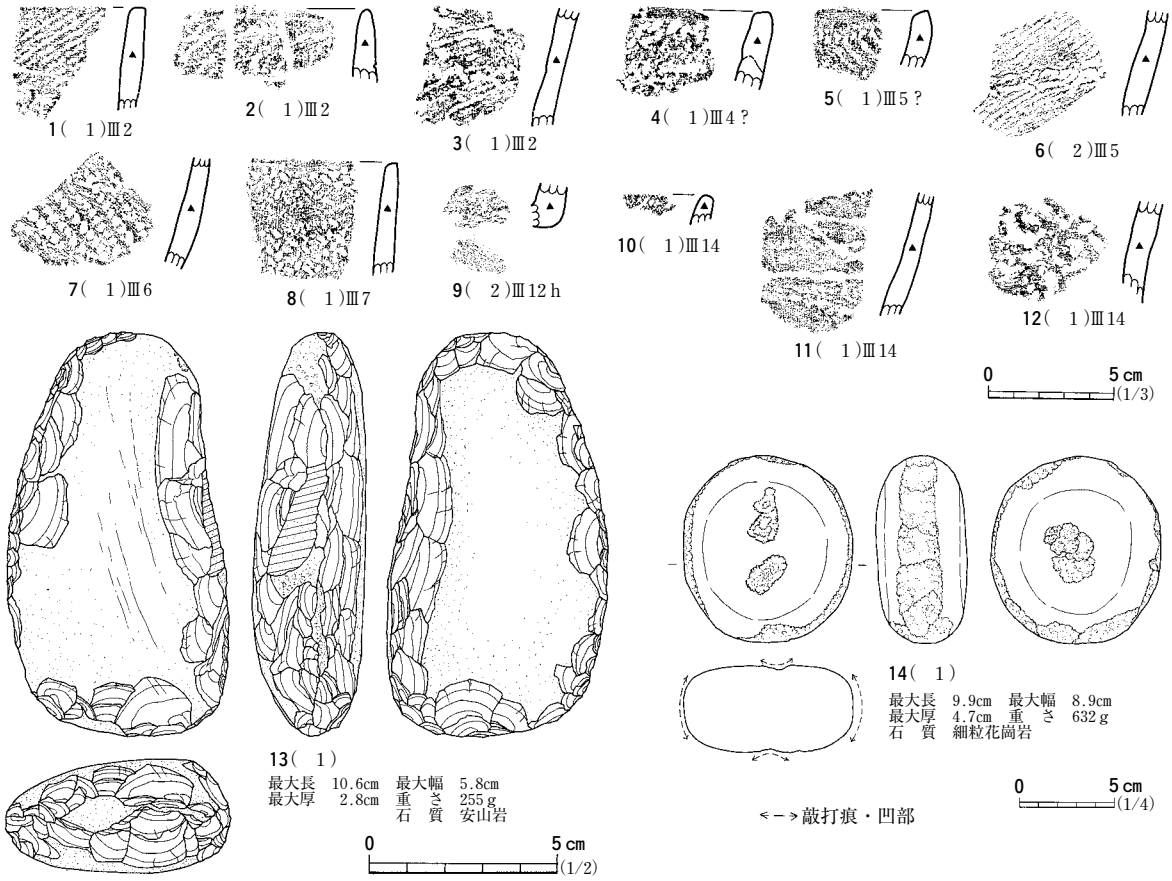


図11　４ａ号住居跡出土遺物（２）

ま と め

分布域③にある竪穴住居跡で，住居跡の東側は３号住居跡と21号土坑に壊されていた。住居の柱穴は周壁の全周を巡る壁柱穴のみで構成され，中央に柱穴は認められなかった。また本遺構の壁柱穴の堆積土は自然堆積であるのに対し，後述する４ｂ号住居跡の柱穴は人為堆積である。このような状況から，古段階の４ｂ号住居跡の柱穴を埋めて，新たに本遺構を構築したものと判断している。

本遺構の帰属時期は，年代を特定できるような資料に恵まれなかったが，住居跡の構造や重複関係から縄文時代前期前葉と考えている。　（門　脇）

４ｂ号住居跡　ＳＩ04ｂ　（図12，写真16・17）

遺構の概要

位置　分布域③，Ｊ13グリッド　　検出面　ＬⅣ上面　　**標　高**　74.1m（ＬⅣ上面）

重複　（新）３号住居跡，４ａ号住居跡，21号土坑　　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　周壁は失われているが，壁柱穴の配列から隅丸長方形を呈すると推察される。

規模・床面積・主軸方位　周壁が全く失われているので不明である。

床面　４ａ号住居跡の床面によって壊されているか，同一面を床面としていたかどちらかである。いずれにせよ本遺構の東側は３号住居跡と21号土坑に壊されている。

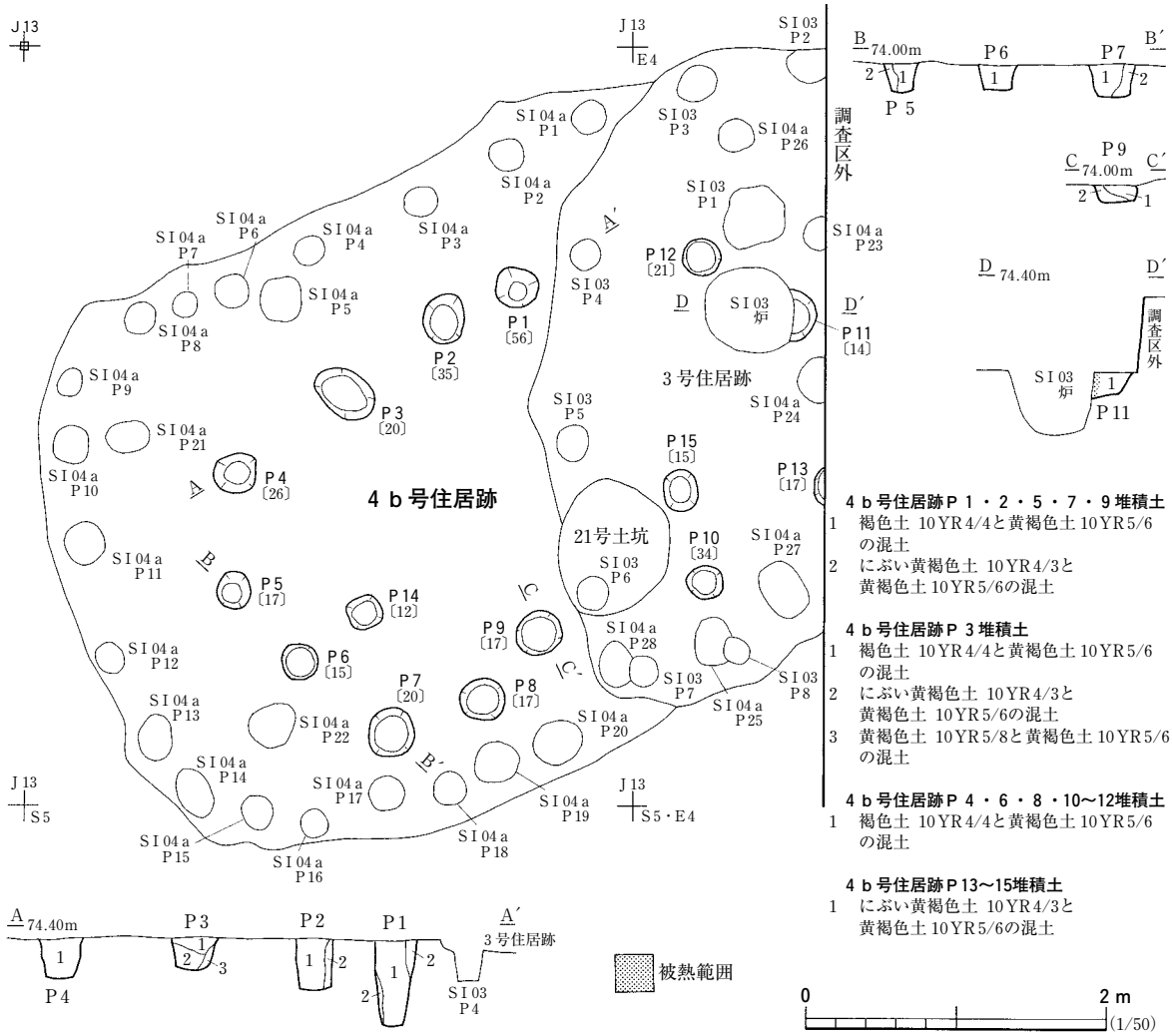


図12　４ｂ号住居跡

堆積土　本遺構の堆積土は，小穴の中にのみ遺存している。

住居跡の構造

小穴　本遺構に属する小穴は，計15基である。これらは柱配列から，壁柱穴と考えている。また前述の４ａ号住居跡の柱穴とは，人為堆積であるか，自然堆積であるかを判別の基準とした。本遺構の柱穴は，黄褐色土塊と褐色土粒・塊が混じり合った土が堆積している。これに対し，４ａ号住居跡の柱穴は，基本的には単一の土層からなる自然堆積である。このような状況から，本住居跡の柱穴を埋めて，新段階の４ａ号住居跡を構築したと推察している。

検出された小穴は15基で，この内Ｐ１～９・14は４ａ号住居跡の床面で検出した。Ｐ10～13・15は３号住居跡床面で検出した小穴である。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ15～20cmであるが，一定ではない。なかにはＰ１のように56cmの深さのものもある。平面形や規模も当然ながら一定していないが，おおよそ直径20～25cmのものが多いといえる。

遺　　物

出土状況　Ｐ３から縄文土器胴部の小破片が１点出土したが，図示しなかった。

ま と め

分布域③にある竪穴住居跡で，周壁・床面は失われていた。上屋構造は壁柱穴により支えられていたと判断している。柱穴の堆積土の違いから，４ｂ号住居跡は４ａ号住居跡に建て替えられたものと考えている。

本遺構の帰属時期は，年代を特定できるような資料に恵まれなかったが，住居跡の構造や重複関係から縄文時代前期前葉と考えている。（門　脇）

５号住居跡　ＳＩ05　（図13，写真18・19）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｉ10グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　73.6m（ＬⅣ上面）

重複　（新）風倒木痕　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　西側半分は失われているが，隅丸長方形を呈すると推察される。

規模　現状の壁上端で，東西長は4.5m（遺存値），南北長は不明。　**主軸方位**　Ｎ20°Ｗ

遺存壁高　10～13㎝　**周壁の立ち上がり**　60～70度

周壁　立ち上がりは全体的にやや急斜である。北壁はほぼ直線状に東西に延びるのに対し，東壁はＰ５を境に西側に曲がっている。さらにＰ３・５は，東壁より外側に張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。床面は多少の起伏はあるが，ほぼ平坦である。また床面の西側は，風倒木痕により壊されていた。踏み締まりは認められなかった。Ｐ１の東脇には焼土粒の集積範囲が確認されたが，被熱の痕跡はなく，炉跡ではないと判断した。

堆積土　２層に分けられ，両層とも黄褐色土塊が撹拌された状態で確認されたことから，人為堆積と判断した。特にℓ１は炭化物・焼土粒を多く含んでいたが，これは隣接する12号住居跡が焼失住居であることと関連があると推察している。

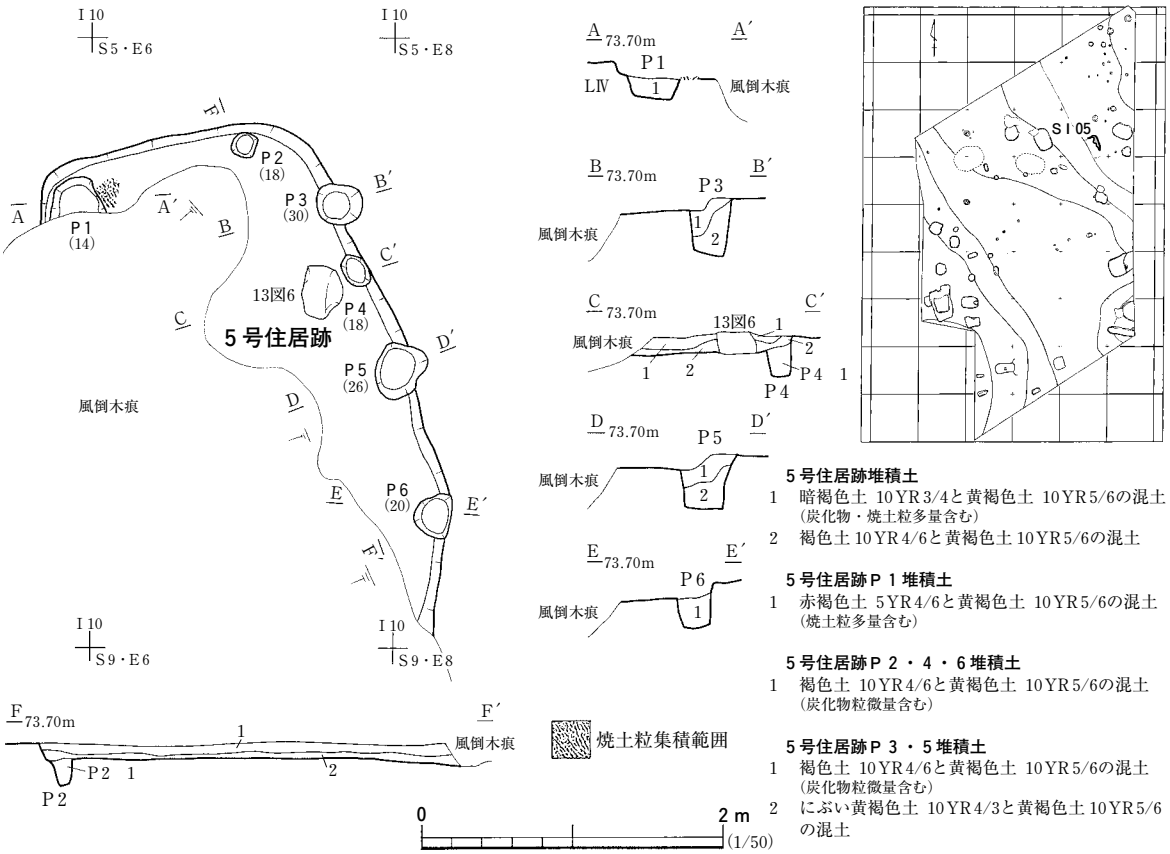
住居跡の構造

小穴　検出された小穴は６基で，周壁と接するように配置されていることから，壁柱穴と考えている。床面の中央は失われているので，主柱穴は確認できなかった。小穴はすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度は床面からおおよそ15～30㎝であるが，一定ではない。平面形や規模も当然ながら一定していないが，直径30㎝位のもの（Ｐ１・３・５）と直径20㎝位のもの（Ｐ２・４・６）に分かれる。これらの小穴の堆積土は，基本的には住居内堆積土ℓ２と同質の土であり，人為堆積と判断している。

遺　　物（図13，写真59）

出土状況　Ｐ４西脇からは床面に密着して，石皿（13図６）が見つかった。この他，石斧（13図４）も床面に密着して出土している。堆積土中（ℓ１）からは縄文土器片が７点，石器が２点出土した。

縄文土器　13図１は半截竹管による斜位の沈線文が施されている。２は単節の結節縄文が施されて



5号住居跡堆積土

1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物・焼土粒多量含む）

2　褐色土10YR4/6と黄褐色土10YR5/6の混土

5号住居跡Ｐ１堆積土

1　赤褐色土 5YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（焼土粒多量含む）

5号住居跡Ｐ２・４・６堆積土

1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）

5号住居跡Ｐ３・５堆積土

1　褐色土 10YR4/6と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物粒微量含む）

2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土10YR5/6の混土

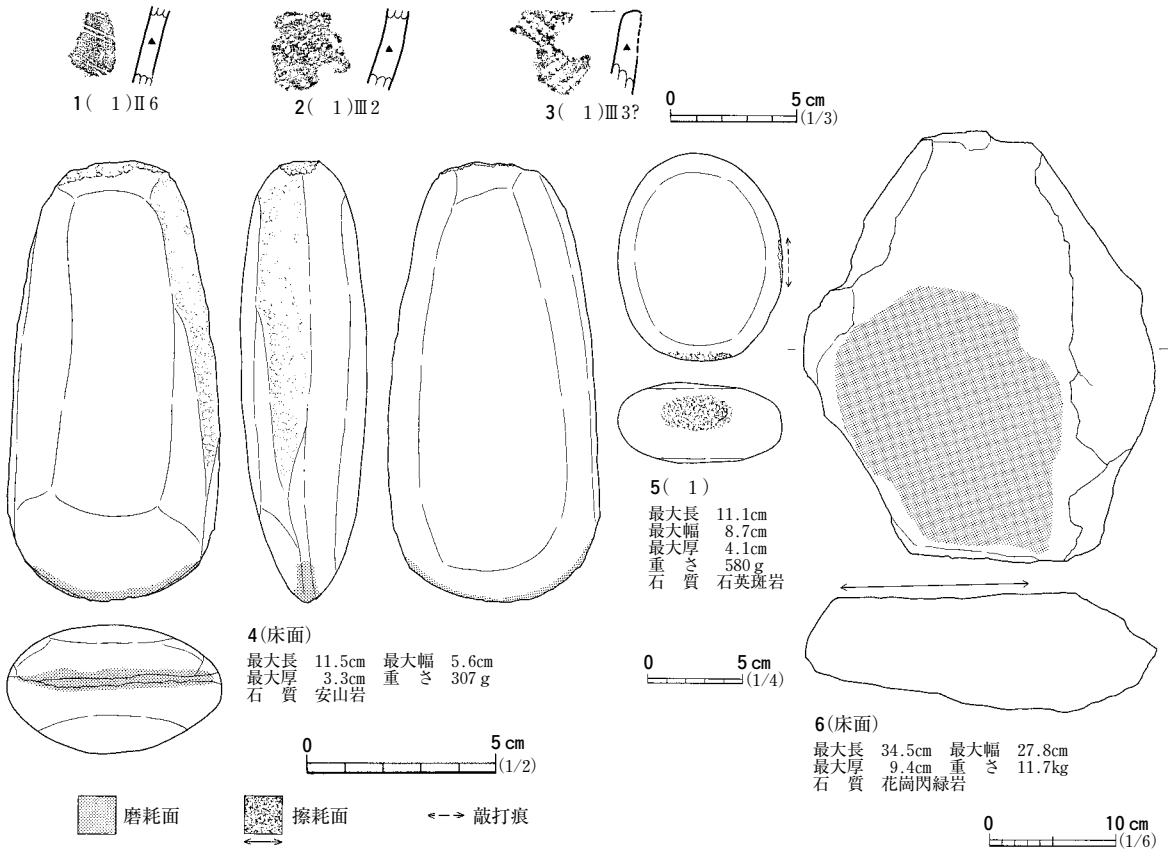


図13　５号住居跡と出土遺物

いる。３は小片のため判然としないが，非結束羽状縄文が施されていると推定される。

石器　13図４は磨製石斧である。扁平な礫を素材とし，敲打によって形状を整えている。刃縁は，磨耗によって鋭さが失われている。その磨耗痕は若干ではあるが光沢を有しており，使用状況を示唆しているといえる。同図５は下側面にザラザラとした擦耗面が観察された磨石類である。側面には敲打痕も観察された。同図６は床面に密着して検出された石皿である。表面の中央には広範囲にわたって，光沢を有する磨耗痕が観察できる。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡で，住居跡の西側は風倒木痕に壊されていた。住居の柱穴は壁柱穴のみで構成され，中央に柱穴は認められなかった。住居内堆積土には焼土粒や炭化物粒が多く含まれているが，火災住居である12号住居跡と何らかの関連があると考えている。

本遺構の帰属時期は，年代を特定できるような資料に恵まれなかったが，住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えている。

（門　脇）

６号住居跡　ＳＩ06　（図14，写真20・21）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ12グリッド　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　74.5m（ＬⅣ上面）

重複　なし　　**住居形態**　竪穴住居跡　　**平面形**　隅丸方形

規模　現状の壁上端で，南北長2.3m，東西長2.1mを測る。　　**床面積**　3.86㎡

主軸方位　Ｎ４°Ｅ　　**遺存壁高**　２～８cm　　**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　東・西・北壁はほぼ直線状で，東西の壁は平行する。南壁は弧を描くように南側にやや張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。炉・踏み締まり

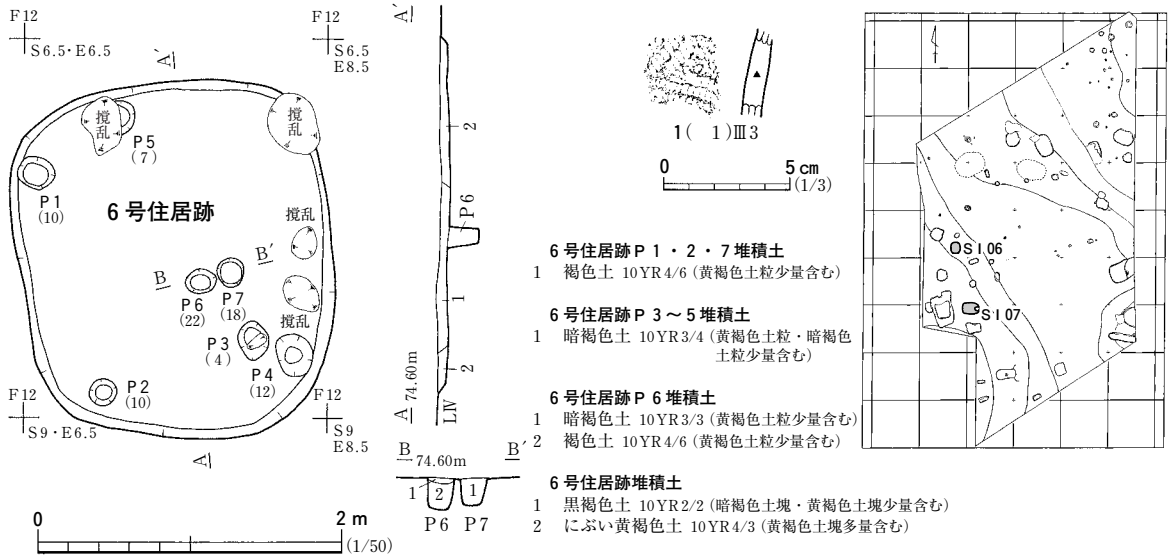


図14　６号住居跡と出土遺物

等は認められない。

堆積土　２層に分けられ，ℓ１は黒褐色土，ℓ２はＬⅢに類似したにぶい黄褐色土である。いずれも周壁からの流入が認められるので，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

小穴　床面中央にＰ６・７を確認した。平面形は円形で，直径18～20cm，床面からの深さは18～22cmを測り，その規模と位置から主柱穴と考えられる。壁際から，壁柱穴と考えられるＰ１・２・４・５を検出した。平面形は円形または楕円形で，長径19～29cm，床面からの深さは４～12cmを測る。いずれの小穴も断面形はＵ字形を呈し，床面に対してほぼ垂直に掘られている。小穴内堆積土はＰ１・７が褐色土，Ｐ２～５が暗褐色土で，いずれも柱痕は認められなかった。

遺　　物(図14，写真59)

出土状況　堆積土中(ℓ１)から縄文土器片４点が出土したが，遺存状態が悪く，図示できるものは１点のみである。

縄文土器　14図１は単節の非結束羽状縄文が施されている。

ま と め

分布域①の北にある竪穴住居跡で，平面形は不整な隅丸方形を呈する。南北長2.3mと非常に小型である。床面のほぼ中央に主柱穴が２基認められ，壁際には壁柱穴が巡る。

本住居跡の帰属時期は地文以外の文様をもつ土器がなく判然としないが，住居跡の構造と出土土器より縄文時代前期前葉と推測している。　（坂　田）

７号住居跡　ＳＩ07　(図15，写真22・23)

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ・Ｇ13・14グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.5m(ＬⅣ上面)

重複　(古)４号土坑　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　隅丸長方形

規模　現状の壁上端で，東西長3.5m，南北長2.5mを測る。　**床面積**　6.85㎡

主軸方位　N86°W　**遺存壁高**　３～８cm　**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　東壁が西壁より約70cm短い。東壁と南壁はほぼ直線状で，西壁と北壁は弧を描くようにそれぞれ西側と北側に緩やかに張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。炉・踏み締まりは認められない。

堆積土　２層に分けられる。いずれもＬⅢに類似する土で，周壁からの流れ込みが認められるため，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

小穴　床面中央にＰ１，北東隅にＰ２を検出した。Ｐ１は平面形が円形で，直径40cm，床面からの深さは30cmを測る。版築が認められ，廃棄時には柱が抜き取られている。Ｐ２は壁を掘り込んで形

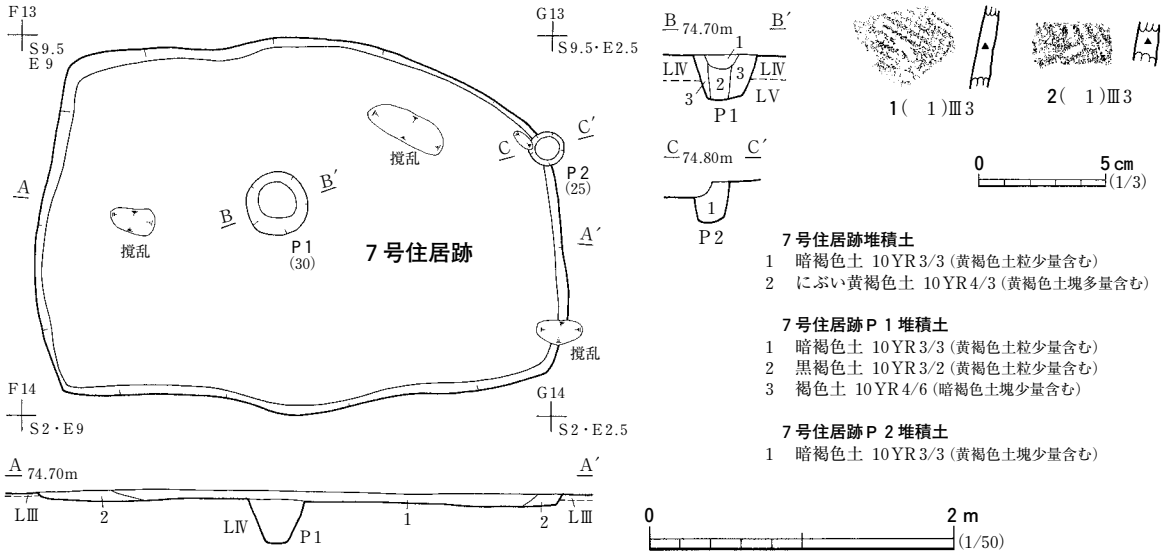


図15　７号住居跡と出土遺物

成されている。平面形は円形で，規模は直径12cm，壁上端からの深さは25cmを測る。いずれも断面形はＵ字形で，床面に対しほぼ垂直に掘られている。小穴は位置と規模から，Ｐ１は主柱穴，Ｐ２は壁柱穴と考えられる。

遺　　物（図15，写真59）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から，縄文土器片４点が出土した。

縄文土器　15図１・２は，単節の非結束羽状縄文が施されている。

ま と め

分布域①の中央部に位置する竪穴住居跡で，平面形は東西方向に長い不整な隅丸長方形を呈する。床面中央に１基の主柱穴をもつ構造で，北東壁際に１基の壁柱穴が認められる。

本住居跡の帰属時期は地文以外の文様をもつ土器がなく判然としないが，住居跡の構造と出土土器から縄文時代前期前葉と推測している。　（坂　田）

８号住居跡　ＳＩ08　（図16，写真24・25）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｇ14グリッド　　**検出面**　ＬⅢ上面　　**標　高**　74.5m（ＬⅣ上面）

重複　なし　　**住居形態**　竪穴住居跡　　**平面形**　隅丸長方形

規模　現状の壁上端で東西長3.5m，南北長2.6m。各壁の長さは，東壁が1.5m，西壁が2.5m，南壁が2.8m，北壁が3.1mを測る。　**床面積**　5.19㎡　　**主軸方位**　N88°E

遺存壁高　５～９cm　　**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　西壁は撹乱によって一部壊されている。北壁に比べ南壁がややすぼまるため，東西の壁は平行しない。東壁は直線状で，西壁は弧を描くように西側に緩やかに張り出している。南・北壁は西部がそれぞれ南側と北側に張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。多少の凹凸は認められるがほぼ平坦で，東に向かってわずかに傾斜する。炉・踏み締まりは認められない。

堆積土　２層に分けられる。いずれもＬⅢ起因の暗褐色土で，周壁からの流れ込みの状況が認められるため，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

小穴　南西壁際にＰ１を確認した。平面形は円形で，直径20cm，床面からの深さは10cmを測る。断面形はＵ字形で，柱痕は認められない。

出入り口　北壁中央に，ＬⅣを床面から５～８cm程掘り残した張り出しを確認した。不整な隅丸三角形を呈し，最大幅128cm，奥行き45cmを測り，出入り口と考えている。

遺　　物(図16，写真59・72)

出土状況　堆積土中(ℓ１)から，縄文土器片20点が出土した。

縄文土器　16図に示した。１は口縁部が緩やかに外傾する器形で，平坦口縁に小突起が付いている。

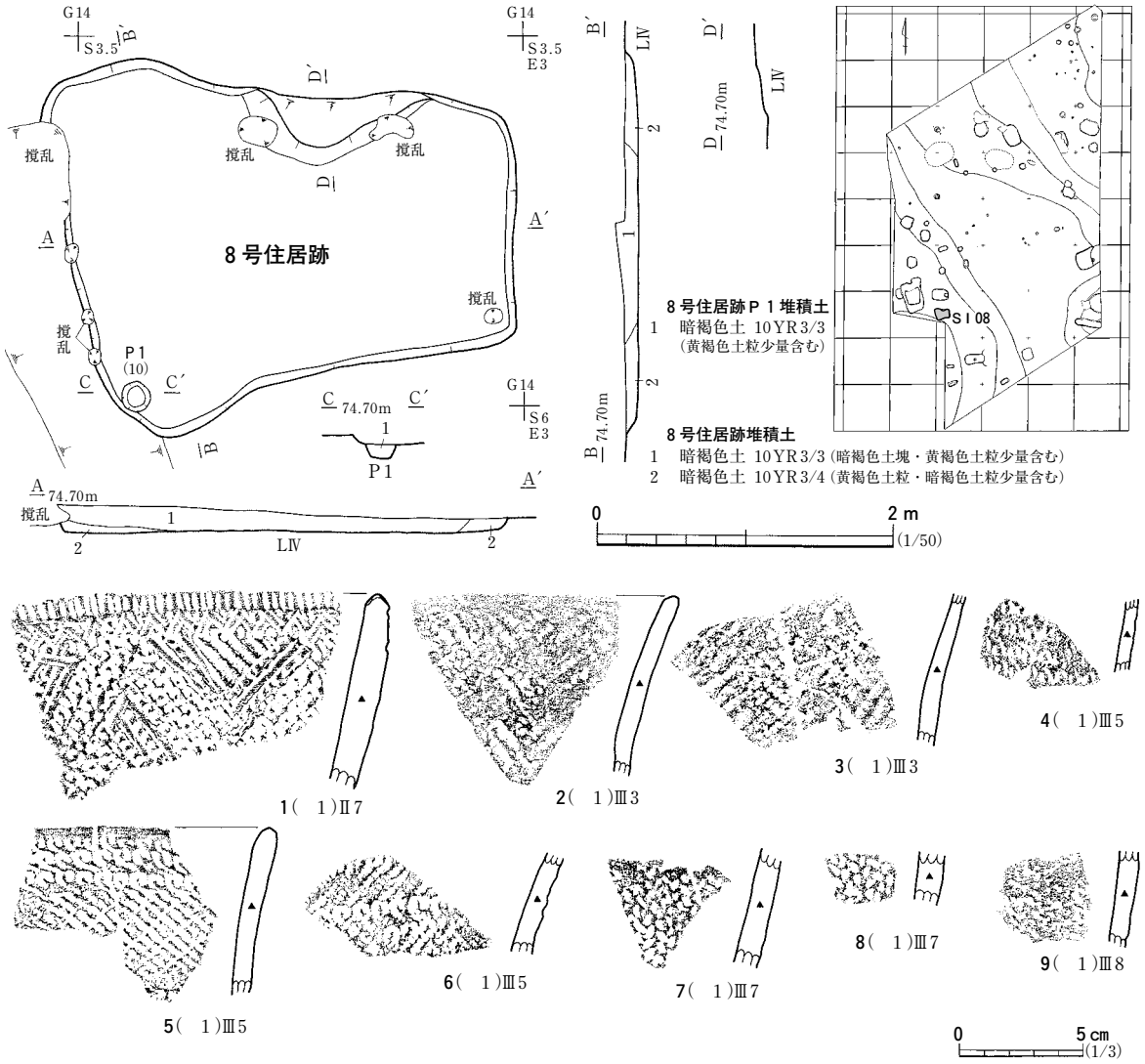


図16　８号住居跡と出土遺物

口縁上端部には内外面に縦長の刺突文が加えられ，刺突文下部には半截竹管により小さい山形文が施されている。主文様は，半截竹管による沈線文と押し引き状の刺突文で区画された山形の重層ループ文である。２・３は同じ段内に２種類の原体が交互に回転され，非結束の羽状縄文が形成されている。４～６の地文はループ文である。５は口縁部上端が若干肥厚し，原体には付加条縄文が用いられている。６は２種類の原体で羽状縄文が形成されている。７・８は組紐文，９は異節斜縄文が施されている。

ま と め

分布域①の中心部に位置する竪穴住居跡で，平面形は東西方向に長い不整な隅丸長方形を呈する。南西壁際に１基の壁柱穴を確認した。北壁中央部に出入り口と考えられる低い張り出しを有する。住居跡廃棄時には柱が抜き取られ，竪穴は自然埋没したと推測される。

本住居跡の帰属時期は，出土土器と住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えられる。（坂　田）

９号住居跡　ＳＩ09　（図17～22，写真26・27）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ13・Ｇ14グリッド　**検出面**　ＬⅢ上面　**標　高**　74.6m（検出面）

重複　（古）10・11号住居跡　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　不整な隅丸方形

規模　現状の壁上端で，南北長3.1m，東西長3.0mを測る。　**床面積**　8.81㎡

主軸方位　Ｎ20°Ｗ　**遺存壁高**　２～15㎝　**周壁の立ち上がり**　40～50度

検出状況　検出当初は１軒の住居跡として調査していたが，床面の精査中に隅丸方形の掘り込みを認め，断面で確認した結果，２軒の住居跡が重複していることが判明した。10号住居跡の床面を検出した段階で重複を確認したため，本遺構の北壁の一部を破壊してしまった。

周壁　北壁は検出時の不備により一部壊されている。南壁と西壁はほぼ直線状で，東壁北部は弧を描くように東側に緩やかに張り出している。

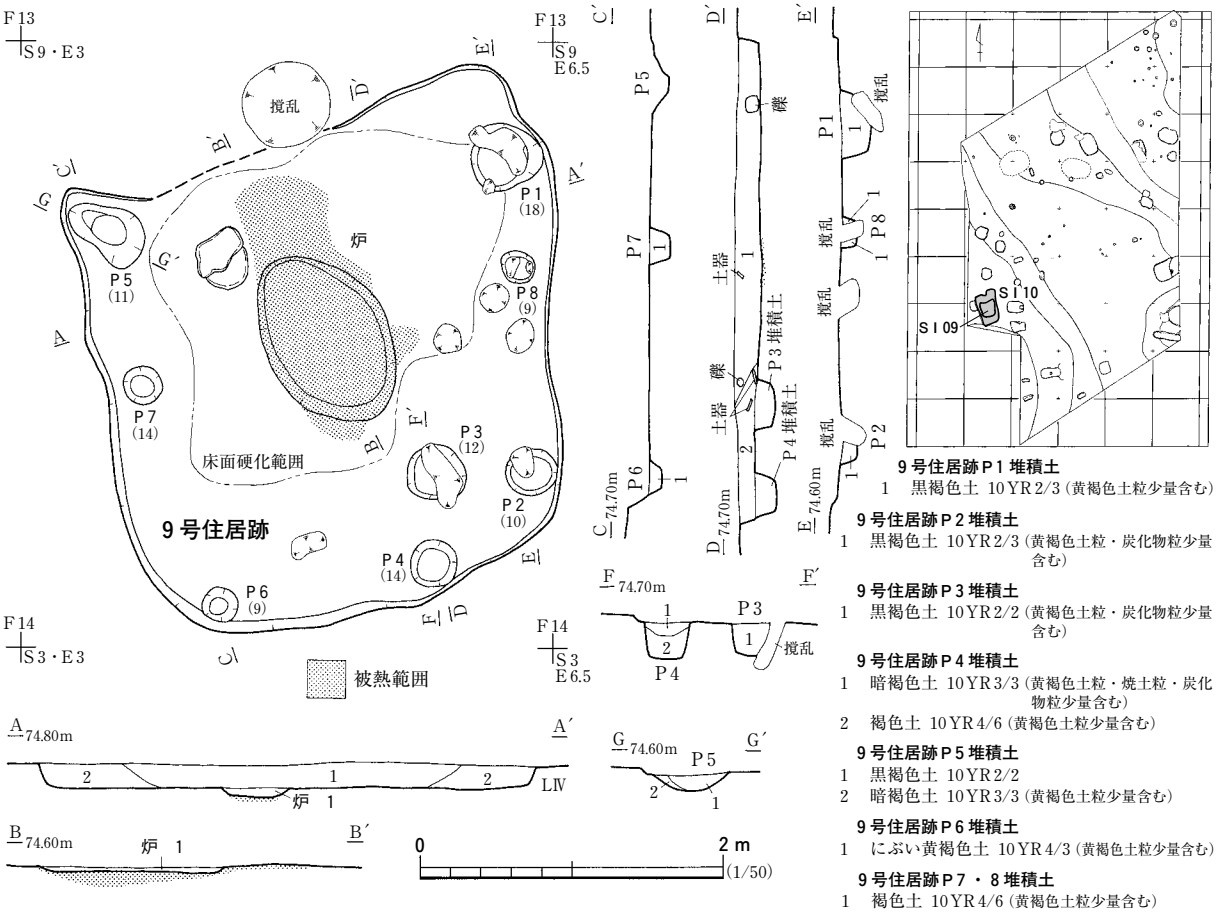
床面　多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。炉の周囲は硬く踏み締まっていた。

堆積土　２層に分けられる。ℓ１は黒褐色土で，ℓ２はＬⅢに類似する暗褐色土である。両層とも周壁からの流入が認められるため，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

炉跡　床面中央の北寄りに，長軸長120㎝，短軸長82㎝の楕円形の掘り込みをもつ地床炉を検出した。床面からの深さは最大４㎝で，焼土化は掘り込み底面から最大12㎝に及ぶ。また，掘り込みの北側は最大で54㎝，東側は18㎝，南側は13㎝の範囲が焼土化していた。炉内堆積土は住居内堆積土ℓ１に類似する黒褐色土で，自然堆積土と考えられる。

小穴　床面から小穴を８基検出した。壁際にはＰ１・２・４～８の７基が巡り，壁柱穴と考えられる。これらの小穴は住居跡の長軸線を挟み，Ｐ１とＰ５，Ｐ２とＰ６，Ｐ７とＰ８がほぼ左右対称に配置されている。平面形はＰ１・５が不整な楕円形で，長径は46～55㎝を測る。Ｐ２・６～８の



9号住居跡P1堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3（黄褐色土粒少量含む）

9号住居跡P2堆積土
1　黒褐色土 10YR2/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

9号住居跡P3堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

9号住居跡P4堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

9号住居跡P5堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

9号住居跡P6堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土粒少量含む）

9号住居跡P7・8堆積土
1　褐色土 10YR4/6（黄褐色土粒少量含む）

9号住居跡炉堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（焼土粒多量，炭化物粒少量含む）

9号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（暗褐色土粒・黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・黄褐色土塊少量含む）

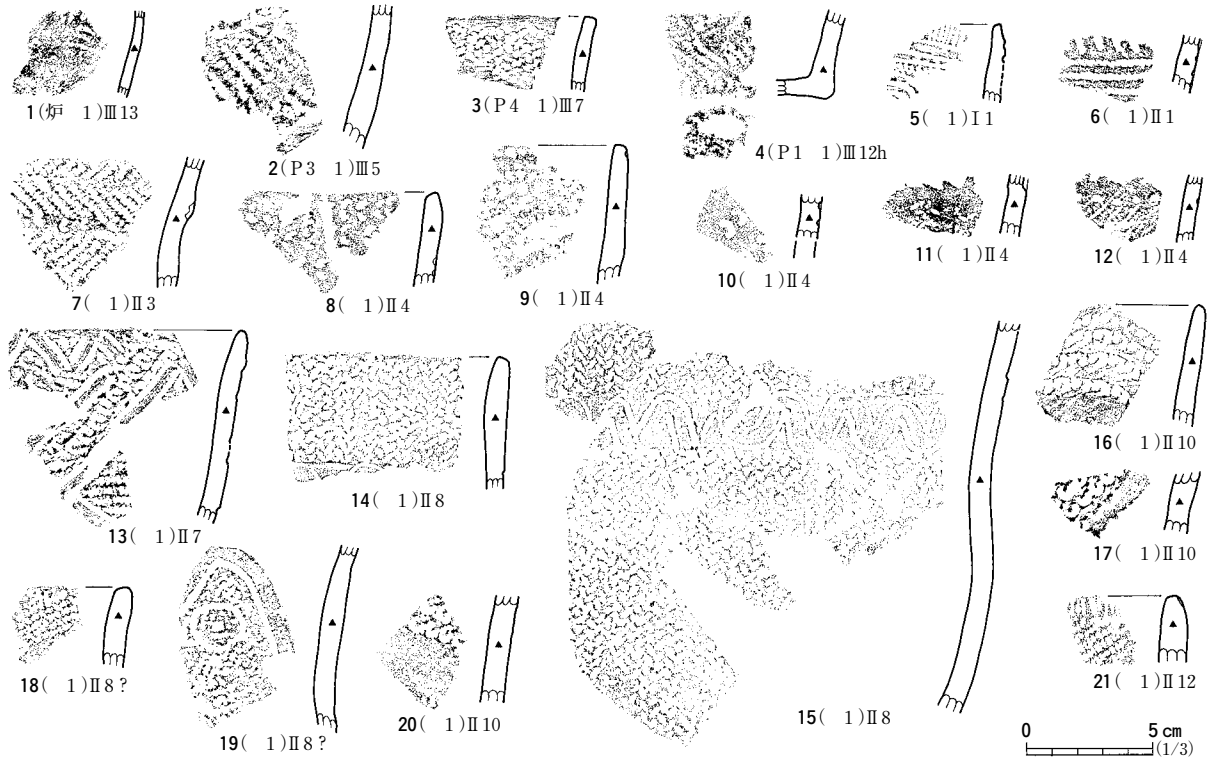


図17　９号住居跡と出土遺物（１）

平面形はほぼ円形を呈し，直径20～34cmを測る。床面からの深さは，Ｐ１が18cmと若干深いが，他は９～14cmと浅い。Ｐ３は床面南東部に位置する。平面形は楕円形で，長径40cm，床面からの深さは12cmを測り，柱穴と考えている。小穴の断面形は，Ｐ５が段状にくぼむ他は，Ｕ字形を呈する。平面形が不整で，柱痕が認められないことから，廃棄時に柱は抜き取られたものと考えられる。

遺　　物(図17～22，写真60～63)

出土状況　床面から石皿１点(22図１)，炉内堆積土(ℓ１)から縄文土器片２点，Ｐ１・４内堆積土(ℓ１)から縄文土器片が各１点，Ｐ３・８内堆積土(ℓ１)から縄文土器片２点，Ｐ５内堆積土(ℓ１)から縄文土器片８点が出土した。この他に，堆積土(ℓ１・２)中から縄文土器片481点，石器12点が出土したが，多くはℓ１上位からの出土である。

縄文土器　17図１はナデ調整された無文の胴部片で，器厚が３㎜と非常に薄い。同図２は結束されたループ文により羽状縄文が施されている。同図３は端を結節した組紐文が施されている。同図４は底部資料であるが，遺存状態が悪く詳細は不明である。同図５は波状口縁を呈し，沈線文と連続刺突文で文様が構成されている。同図６は横位の縄圧痕文と連続刺突文が施されている。同図７は頸部に段をもつ器形で，段には半截竹管状工具による連続刺突文が加えられている。地文は非結束の羽状縄文である。同図８～12は連続刺突文により文様が描かれるものである。８・９は口縁部が平坦口縁で，８は半截竹管，９は先端が棒状の工具による横位の連続刺突文が数段施されている。10は半截竹管による連続刺突文で，山形もしくは菱形状の文様が描かれている。11・12は横位の連続刺突文が数段施されている。同図13は口縁部が直線的に外傾する器形である。主文様は半截竹管の沈線文により区画された菱形状の重層ループ文で，口縁部上端にも同一工具による山形文が施されている。文様の施文手順は，地文の単節斜縄文，重層ループ文，山形文の順である。同図14・15は同一個体である。頸部で軽くくびれ，口縁部が外傾する器形で，平坦口縁を呈する。地文は組紐文で，頸部の地文を磨り消してコンパス文を描いている。同図18・19は同一個体である。地文上にコンパス状の文様が施され，沈線間は磨り消されている。文様の波頂部下位には円形の文様が描かれている。地文は組紐文である。同図16・17・20は重層ループ文により文様が描かれている。16は口縁部が波状を呈し，口縁に沿って重層ループ文が施されている。同図21は口縁部上端に半截竹管による縦長の刺突が加えられている。18図１は頸部でくびれ，口縁部が緩やかに内湾する器形で，頸部には地文を磨り消した無文部が形成されている。地文はループ文で，２種類の原体により羽状縄文が形成されている。同図２は地文上に斜位の沈線文が施されている。

18図３～７は単節斜縄文，同図８～12は非結束の羽状縄文，同図13～16・18は結束羽状縄文が施されている。施文原体は単節の直前段２条のものがほとんどであるが，直前段３条のもの(９・11)も見られる。９はＲ撚りとＬＲ撚りの原体を同じ段内で交互に回転させ，一部が菱形状になる羽状縄文が形成されている。同図17・19～35，19図１～12はループ文が施文されている。18図20は胴部中位でややくびれ，口縁部が内湾する器形である。19図１は底部から口縁部まで直線的に外傾しながら立ち上がる器形で，底部外縁が若干外側に張り出している。18図21～30・33・34は口縁部が外

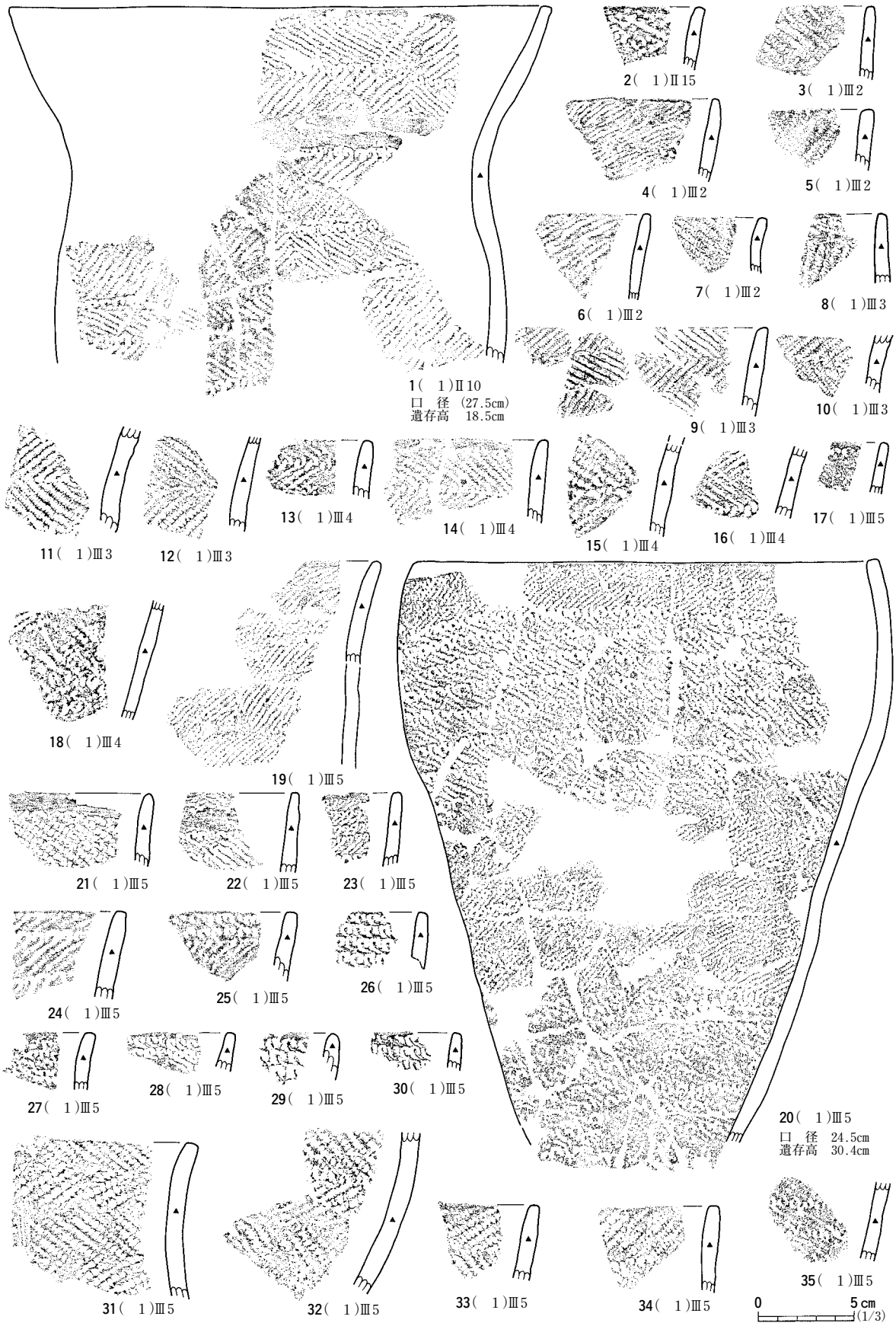


図18　９号住居跡出土遺物（２）

図19　９号住居跡出土遺物（３）

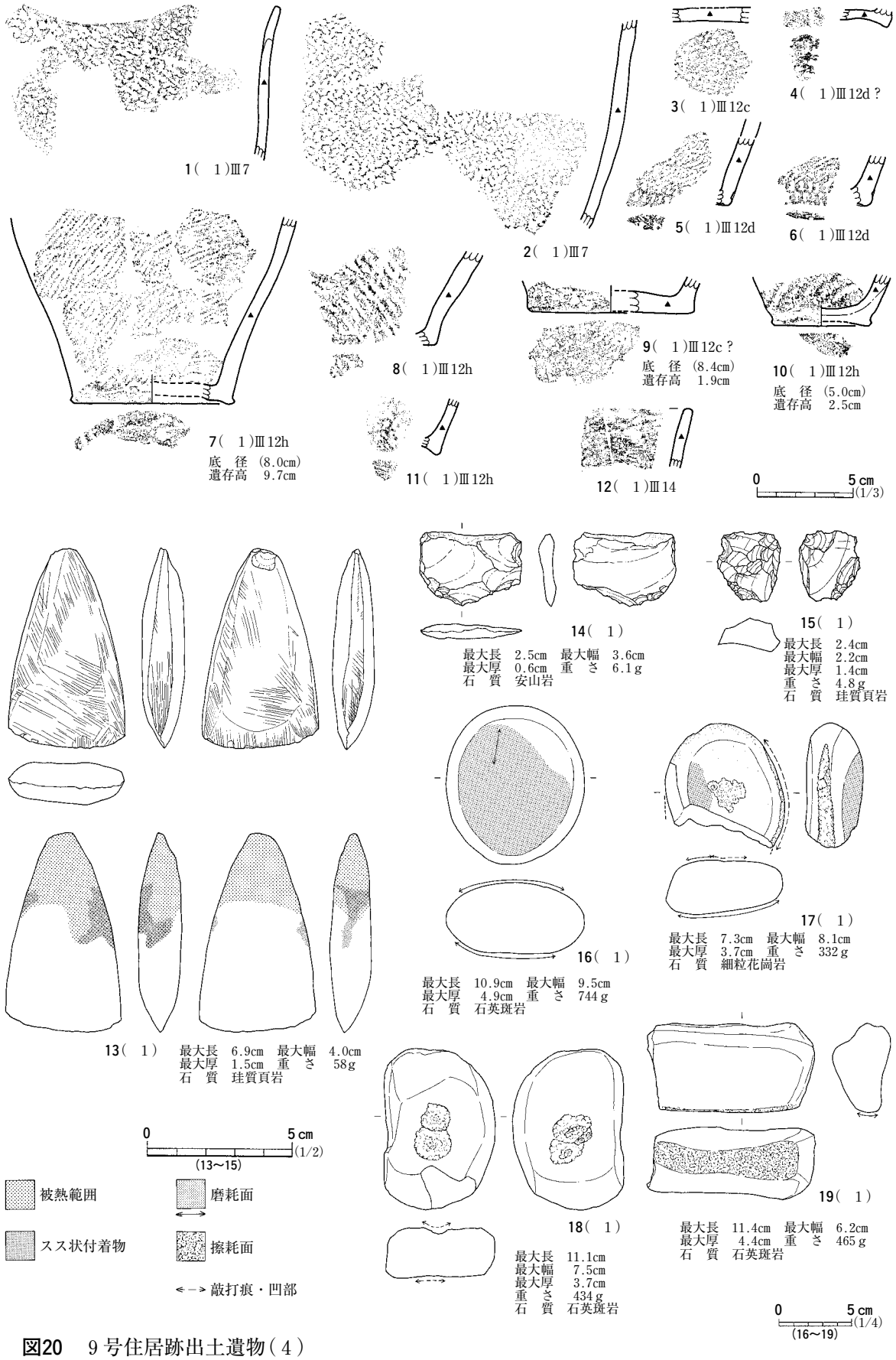


図20　９号住居跡出土遺物（４）

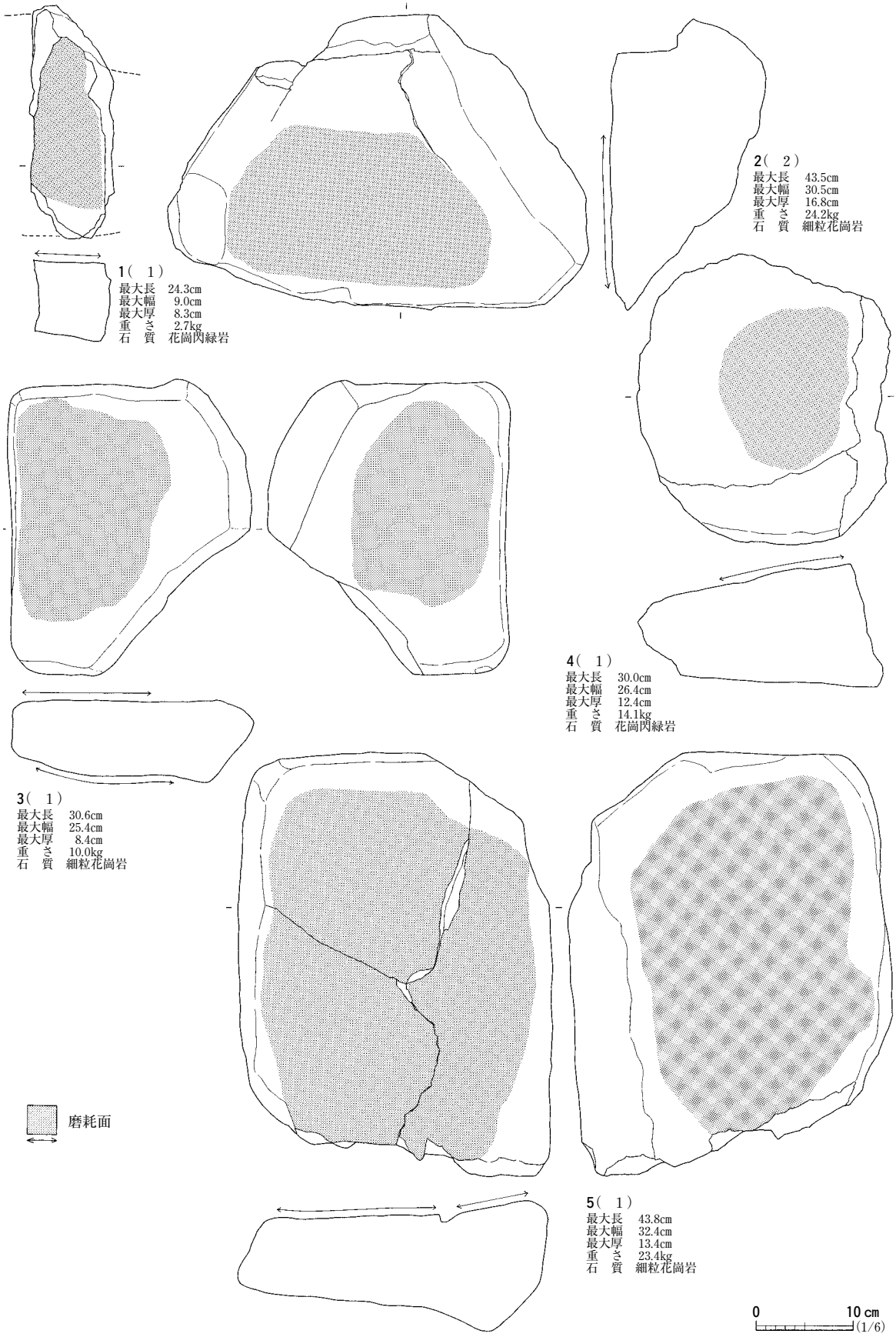


図21　９号住居跡出土遺物（５）

図22　９号住居跡出土遺物（６）

傾する器形で，18図19・31，19図２は口縁部が外反している。いずれも口縁部は平坦口縁を呈する。18図19・21・22～35は施文幅の広いループ文が，18図26～30，19図３・６・７は重層ループ文が，18図24・25はその両方が施されている。それ以外は２種類の原体で羽状縄文が形成されている。19図13～20，20図２は組紐文が施されている。19図13・15・16は口縁部が外傾する器形で，同図14は口縁部が強く内湾するものである。口縁部は19図13・20図１が波状口縁，19図14～16は平坦口縁を呈する。口唇部の形態は14・16が丸く，13・15・17が平坦である。施文原体は２条ＬＬ・２条ＲＲ，または２条ＬＬ・２条ＬＬのものが多い。

20図３～10は底部資料で，いずれも平底である。５・６・11は底部から胴部下半まで直線的に立ち上がるもので，７～９は緩やかに外反しながら立ち上がる。底部外縁が外側に張り出すものが多いが，直線的に立ち上がるものも見られる。３は底面に組紐文が施されている。４の胴部器面は摩耗して詳細は不明であるが，底部には半截竹管状工具による刺突文が加えられている。５・６は同一個体である。胴部に直前段３条の原体でループ文が施文され，胴部下端と底部に半截竹管による刺突文が施されている。７はＲＬ撚りの原体でループ文が施されている。遺存する底部はナデ調整されている。８は胴部下位に単節斜縄文が施され，底部にも同じ原体の縄文が施文されている。９は胴部下位と底部に組紐文が施されている。10・11は胴部下位にそれぞれ単節斜縄文と組紐文が施されているが，底部は残存率が悪く，詳細は不明である。同図12は縄の圧痕が薄く，分類の特定ができなかった。

石器　20図13は小形の磨製石斧である。器面全面にやや粗い研磨痕が認められる。この研磨痕の新旧の切り合い関係を検討したところ，左面の刃部が最終的に研ぎ出されていることが看取された。側面部は丁寧に面取りの加工が施され，全体的に丸みを帯びている。刃部はやや左面側に寄った偏

刃となり，これは先の左面の刃部の最終的な研ぎ出しと関連するものと考えている。基部側は熱を受けて黒色に変色しており，スス状の付着物も観察された。14は石斧を製作する際に生じた剝片と推察される。剝片の打面部には敲打痕が連接している。15は腹面右側縁に二次加工のある剝片である。16～19は磨石類である。16は磨耗面，17には磨耗面と敲打痕と凹部が，18には凹部のみが観察された。19の下側面にはザラザラとした擦耗面が認められた。

21図１～５・22図１は石皿である。21図３・５・22図１には両面に磨耗面が認められた。

ま と め

分布域①の中心部に位置する竪穴住居跡で，平面形は不整な隅丸方形を呈する。主柱穴をもたず，壁際に壁柱穴が一巡する構造で，柱穴は住居跡の長軸線を挟んでほぼ左右対称に配置されている。床面中央の北寄りに，浅い掘り込みをもつ地床炉が１基確認されている。炉の周囲の床面には踏み締まりが認められ，硬化状態から本住居跡が長期間にわたって使用されたことが推測される。

本住居跡の帰属時期は出土土器の特徴から，縄文時代前期前葉と考えられる。　（坂　田）

10号住居跡　ＳＩ10　（図23～25，写真27～29）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ13・Ｇ14グリッド　**検出面**　ＬⅢ上面　**標　高**　74.6m（ＬⅢ上面）

重複　（新）９号住居跡，（古）11号住居跡　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　不整な隅丸長方形

規模　現状の壁上端で，南北長6.2m，東西長4.4m。各壁の長さは，東壁が5.4m，西壁が5.7m，南壁が2.8m，北壁が4.0mを測る。

床面積　20.41㎡　**主軸方位**　Ｎ17°Ｗ　**遺存壁高**　３～15㎝　**周壁の立ち上がり**　40～60度

周壁　南壁が北壁に比べ，ややすぼまっている。いずれの壁もほぼ直線状であるが，北東隅は不整な円を描くように北東側に張り出している。

床面　中央部は重複する９号住居跡により壊されている。ＬⅣに形成され，多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。床面の硬化は認められない。

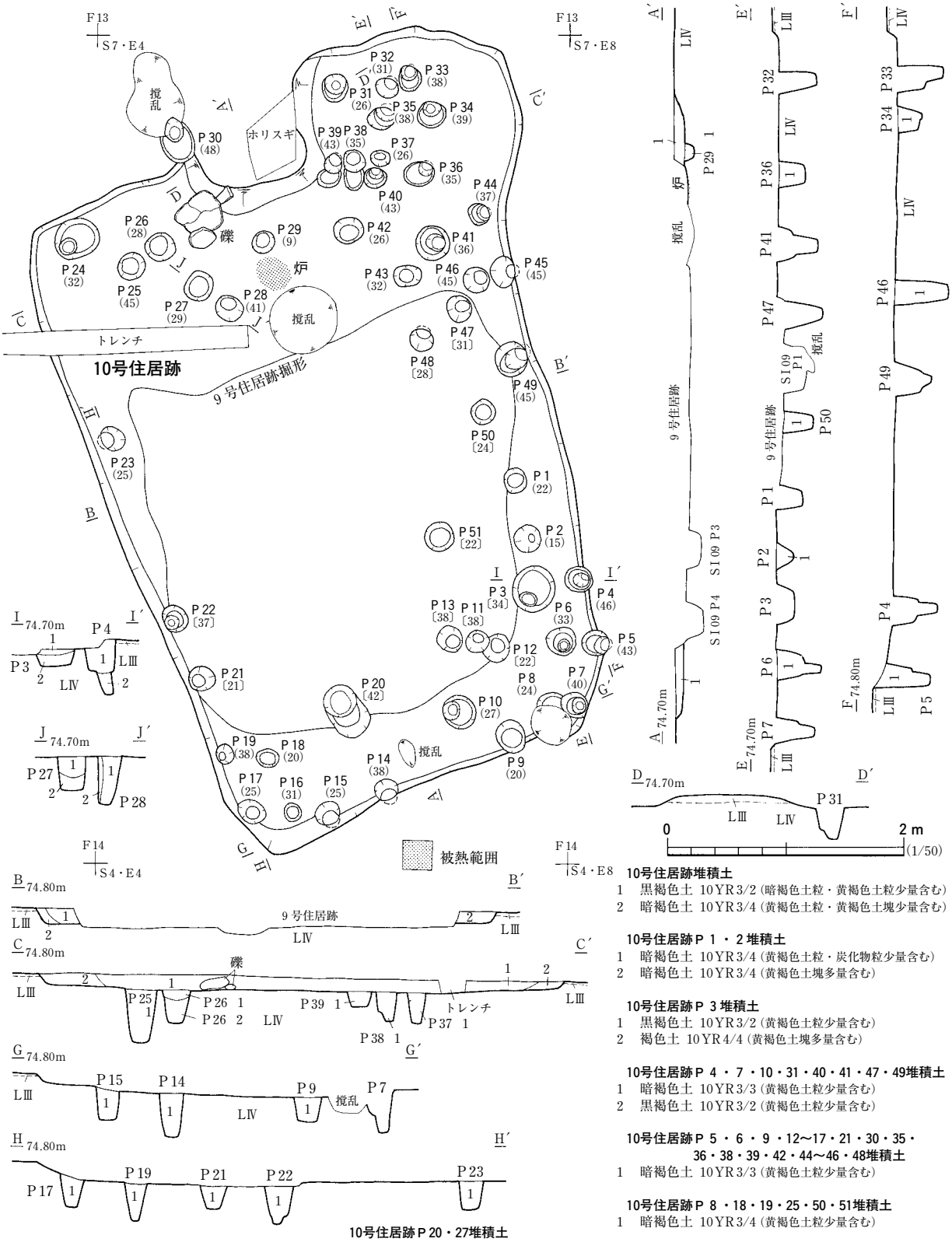
堆積土　２層に分けられる。ℓ１は黒褐色土で，ℓ２はＬⅢに類似する暗褐色土である。いずれも壁からの流入が認められ，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

炉跡　床面中央から北寄りで，長径30㎝程の楕円形の範囲が焼土化しているのを確認した。焼土化は検出面から深さ２㎝に及ぶ。

小穴　床面中央付近と壁際から小穴51基を検出した。これらの小穴は全て柱穴と考えられ，床面中央付近で西側部分を除いて２重に巡り，壁際で一巡する。

床面中央付近の内側を巡る小穴は，Ｐ13・20・27～29・42・43・48・51の９基である。床面もしくは検出面からの深さは，40㎝前後のもの（Ｐ13・20・28）と，20～30㎝前後のもの（Ｐ27・42・43・48・51）と，９㎝のもの（Ｐ29）がある。平面形は円形または楕円形で，Ｐ20が長径48㎝，他は長径



10号住居跡堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（暗褐色土粒・黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・黄褐色土塊少量含む）

10号住居跡Ｐ１・２堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊多量含む）

10号住居跡Ｐ３堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（黄褐色土粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土塊多量含む）

10号住居跡Ｐ４・７・10・31・40・41・47・49堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
2　黒褐色土 10YR3/2（黄褐色土粒少量含む）

10号住居跡Ｐ５・６・９・12～17・21・30・35・36・38・39・42・44～46・48堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

10号住居跡Ｐ８・18・19・25・50・51堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒少量含む）

10号住居跡Ｐ11・32・33・43堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土粒多量含む）

10号住居跡Ｐ29・34・37堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（褐色土粒少量含む）

10号住居跡Ｐ22・23堆積土
1　にぶい黄褐色土 10YR4/3（黄褐色土塊多量含む）

10号住居跡Ｐ24・26堆積土
1　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土 10YR4/4（黄褐色土粒・炭化物粒少量含む）

10号住居跡Ｐ20・27堆積土
1　黒褐色土 10YR3/2（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（黄褐色土粒少量含む）

10号住居跡Ｐ28堆積土
1　黒褐色土 10YR2/2（黄褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土 10YR3/4（黄褐色土塊多量含む）

図23　10号住居跡

20～25cmを測る。断面形はＵ字形で，Ｐ13・20・28・42・43・48は床面に対し斜めに掘り込まれている。

床面中央付近を巡る外側の方の柱穴は，Ｐ１～３・10～12・18・25・26・36～41・47・50の17基である。床面もしくは検出面からの深さは，40cm前後のもの(Ｐ11・25・36・38～41)と，20～30cm前後のもの(Ｐ１～３・10・12・18・26・37・47・50)がある。平面形は円形または楕円形で，長径は30～40cmのもの(Ｐ３・41)と，20～30cm前後のもの(Ｐ１・２・10～12・18・25・26・36～40・47・50)がある。Ｐ２・10・12・36～41・47は床面に対し斜めに掘り込まれていて，他はほぼ垂直に

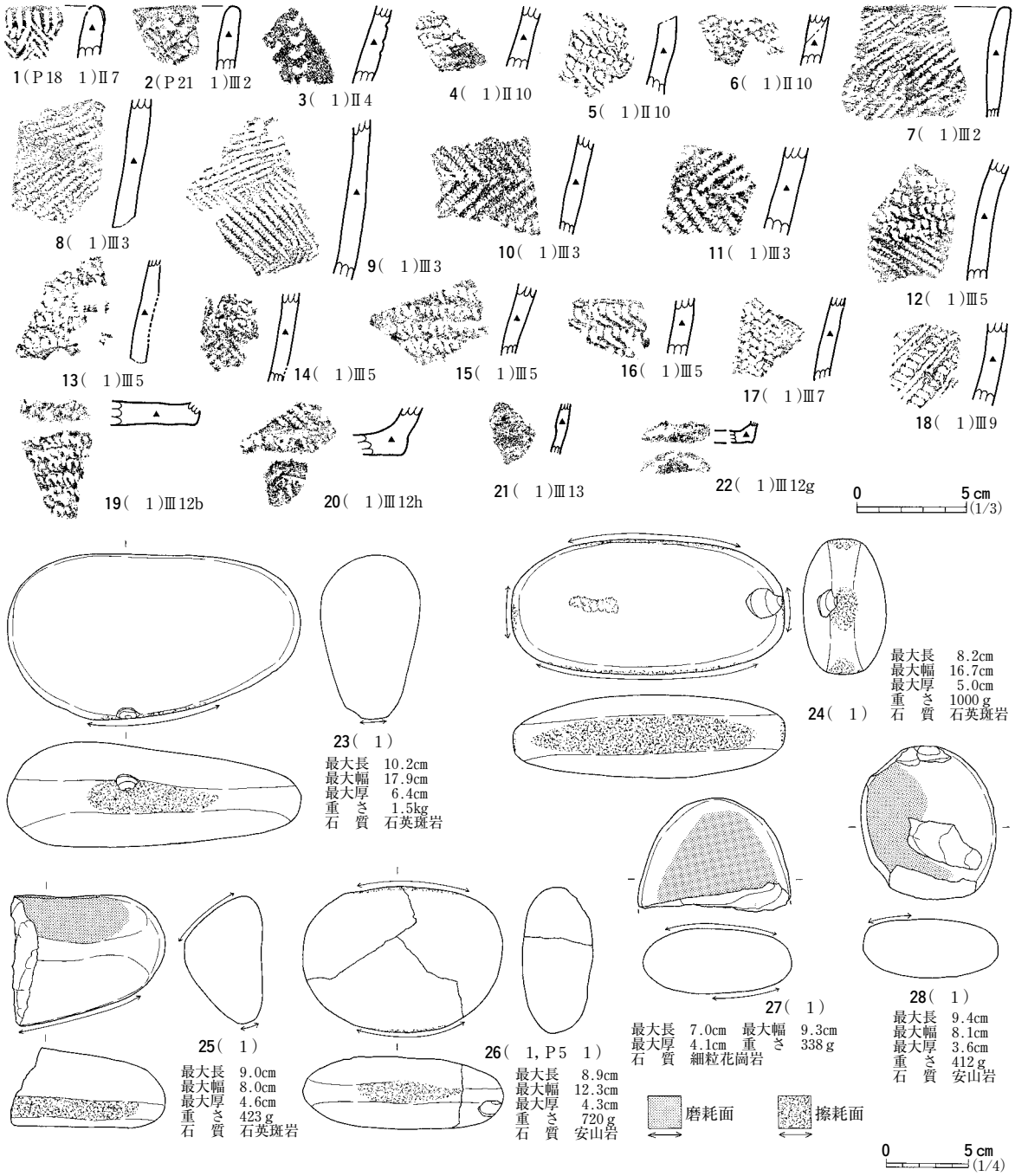


図24　10号住居跡出土遺物（１）

掘られている。

壁際にはＰ４～９・14～17・19・21～24・30～35・44～46・49の25基の柱穴が巡り，壁柱穴と考えられる。床面または検出面からの深さは，40～50cm前後のもの（Ｐ４～７・14・19・22・30・33～35・44～46・49）と，20～30cm前後のもの（Ｐ８・９・15～17・21・23・24・31・32）があり，東壁に沿う柱穴はすべて40cm前後と深い。平面形は円形または楕円形を呈し，規模はＰ24・30・49が直径30cm前後で，他は直径20cm前後である。これらの壁柱穴はすべて床面に対して斜めに掘り込まれている。

Ｐ１・28・40には版築が認められる。小穴内堆積土は大部分が住居内堆積土ℓ２に類似する暗褐色土で，自然堆積土と考えられる。

出入り口　北壁中央部に，ⅢL・Ⅳを床面から４～８cm程掘り残した張り出しを確認した。不整な隅丸台形を呈し，最大幅120cm，奥行き80cmを測る。両脇にはＰ30・31が配置され，出入り口と考えられる。

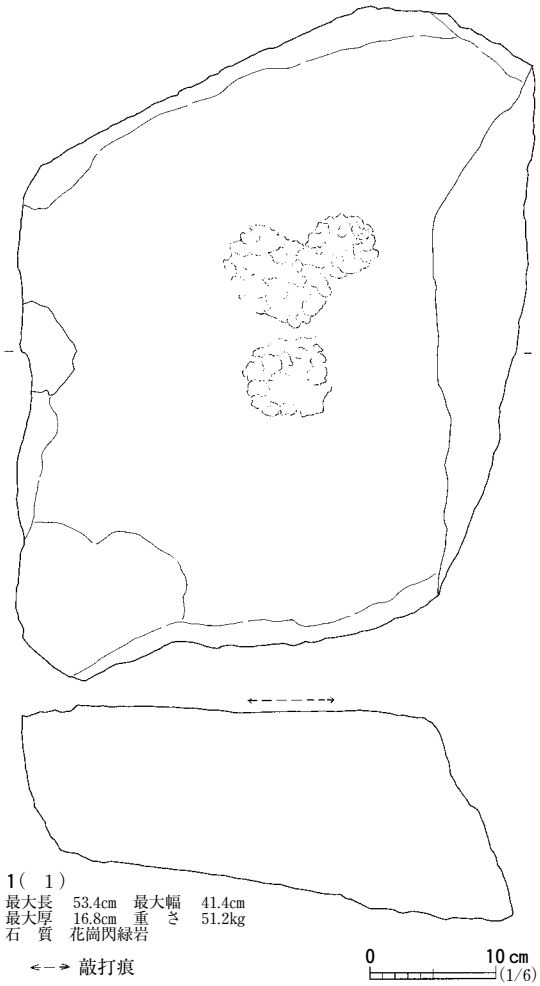


図25　10号住居跡出土遺物（２）

遺　　物（図24・25，写真63・64）

出土状況　Ｐ５内堆積土（ℓ１）から石器１点が出土した。Ｐ７・18・21内堆積土（ℓ１）から縄文土器片が各１点出土している。Ｐ25内堆積土（ℓ１）からは縄文土器片２点が出土した。この他に，堆積土中（ℓ１）から縄文土器片58点，石器７点が出土している。床面や炉跡から出土した遺物は，なかった。

縄文土器　24図１は口縁部上端に縦長の刺突文が加えられた後，半截竹管により山形文が施されている。２・７は単節斜縄文が施された口縁部片である。平坦口縁を呈し，口唇部は平坦に調整されている。７は口縁部上端が若干肥厚している。３は半截竹管による連続刺突文で文様が描かれている。４～６は重層ループ文で山形もしくは菱形状の文様が施されている。８～11は非結束の羽状縄文が施されている。原体は単節の直前段２条のものが多いが，直前段３条のもの（９）も見られる。12～16はループ文が施されている。12は重層ループ文と施文幅の広いループ文が施されている。14は２種類の原体で羽状縄文が形成されている。17は組紐文，18は異条縄文が施されている。

24図19・20・22は底部資料である。19は底面に重層ループ文が，20は胴部下端と底部に同じ原体の単節縄文が施されている。21と22は同一個体である。胴部下端と底部は無文で，ナデ調整されて

いる。器厚が５㎜と薄く，小型土器と考えられる。

石器　24図23～26は下側面もしくは上下両側面にザラザラとした擦耗面が認められた磨石類である。24は左右両側面にも擦耗面が認められた。25は上側面に光沢を有する磨耗面が観察された。27・28は磨耗面のみが観察された磨石類である。25図１は中央の凹部を有する石皿である。

ま と め

分布域①の中心部に位置する竪穴住居跡で，平面形は南北方向に長い不整な隅丸長方形を呈する。南北長6.2ｍを測り，本遺跡では大型の部類に含まれる。床面中央の北寄りに地床炉が検出された。壁際に壁柱穴が巡り，さらにその内側にも西側部分を除いて柱穴が二巡する。北壁中央部には低い張り出し状の出入り口が認められる。

本住居跡の帰属時期は住居跡の構造と出土土器から，縄文時代前期前葉と考えられる。　（坂　田）

11号住居跡　ＳＩ11　（図26，写真30・31）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ13・Ｇ14グリッド　**検出面**　ＬⅢ上面　**標　高**　74.6ｍ（ＬⅢ上面）

重複　（新）９・10号住居跡　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　隅丸長方形？

規模　現状の壁上端で，東西長170㎝（遺存値）・南北長2.1ｍを測る。

主軸方位　Ｎ87°Ｗ　**遺存壁高**　４～11㎝　**周壁の立ち上がり**　50～60度

周壁　重複する10号住居跡により東半部を壊されている。南壁と北壁はほぼ平行し，西壁は弧を描くように西側に張り出している。

床面　ＬⅣに形成されている。多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。炉・踏み締まりは認められない。

堆積土　２層に分けられる。いずれもＬⅢ起因の暗褐色土で，周壁からの流入が認められるため，自然堆積土と考えられる。

住居跡の構造

小穴　床面中央の長軸線上に，主柱穴と考えられるＰ１を検出した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径30㎝，床面からの深さは59㎝を測る。床面に対して垂直に掘り込まれ，南側は段状にくぼむ。黄褐色土塊を撹拌したように含むため，柱を抜き取った後に埋め戻したものと推定される。また，Ｐ１の北東側にＰ２を，竪穴の周囲にＰ３～６を確認した。平面形は円形または楕円形を呈し，規模は直径18～24㎝，検出面からの深さは12～17㎝を測る。いずれも柱痕は認められず，廃棄時に抜き取られたものと推測される。

遺　　物（図26，写真63・72）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から，縄文土器片８点が出土した。

縄文土器　26図１・２は同一個体である。頸部でくびれる器形で，口縁部に２個一対，もしくは３個一対の山形突起をもつ。口縁部文様帯は上下を半截竹管による押し引き状の刺突文で区画され，

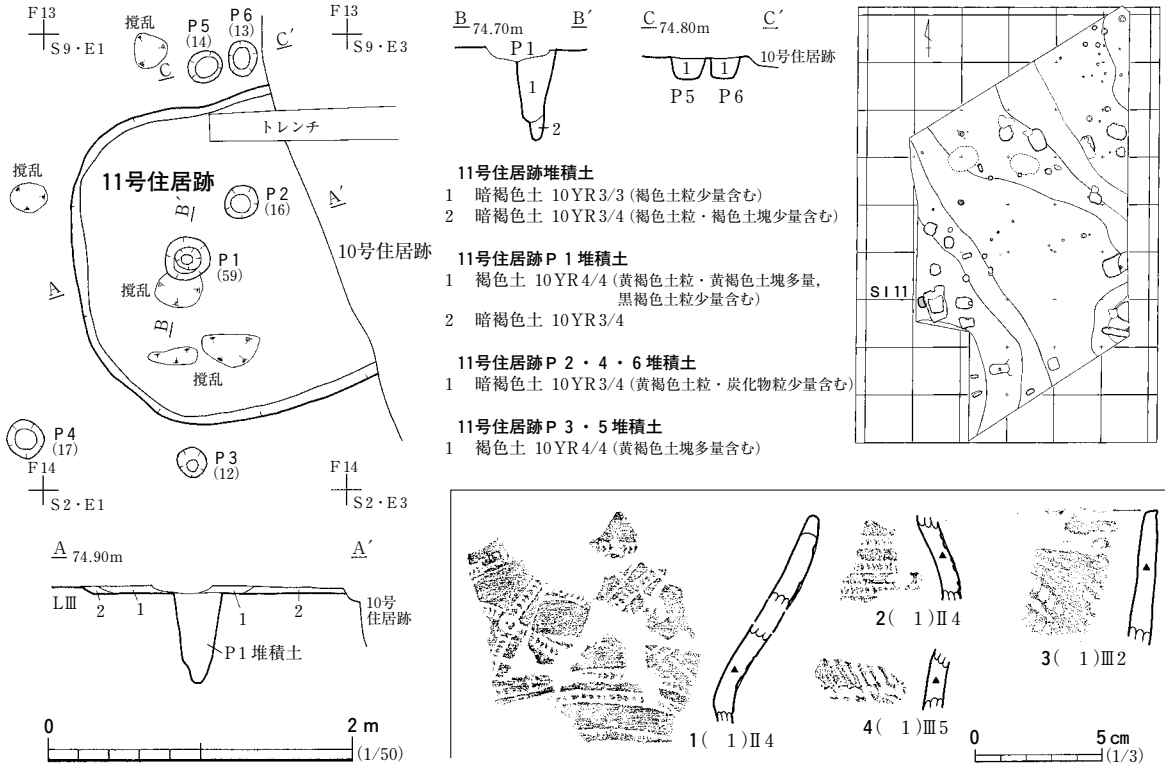


図26　11号住居跡と出土遺物

区画内に同一の刺突文で菱形状文が描かれ，文様の交差部には円形刺突文が加えられている。胴部上位には同一の刺突文が横位に数段施されている。３は単節斜縄文，４はループ文が施されている。

ま と め

分布域①の中央部に位置する竪穴住居跡である。東半部は重複する９・10号住居跡により壊されているが，遺存部から平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈すると推察される。床面中央の長軸線上に主柱穴をもち，竪穴の周囲に柱穴が巡る。

本住居跡の帰属時期は，出土土器と住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えられる。　（坂　田）

12号住居跡　ＳＩ12　（図27・28，写真32・33）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｊ10グリッド　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　73.4m（ＬⅣ上面）

重複　なし　　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　おおむね隅丸長方形を呈するとみているが，北壁は不整で，凹凸がある。

規模　現状の壁上端で，南北長3.2m，東西長は4.2mを測る。　　**床面積**（推定値）　9.79㎡

主軸方位　N70°W　　**遺存壁高**　８～10㎝　　**周壁の立ち上がり**　40～60度

周壁　立ち上がりは全体的にやや緩やかである。特に南東隅の周壁は，立ち上がりが40度足らずで緩やかである。北壁は部分的に凹凸があり，小穴が周壁に接している。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は

認められない。床面は多少の起伏はあるが，ほぼ平坦である。炉跡は中央より東に寄った箇所にあり，その周囲には踏み締まり範囲が認められた。また床面の南西隅には段状の高まりがあり，それに接するように踏み締まり範囲が確認された。

堆積土　本遺構は検出の段階から多量の炭化材・焼土塊が確認され，火災を受けた住居であることが予想された。そこで精査を進めるにあたって，炭化材の位置・焼土塊の集積範囲と出土層位との関係をできるだけ詳細に記録化することに努めた。その結果，次の所見を得ることができた。

(１)住居内堆積土は３層に細分される。ℓ１・２は暗褐色土と黄褐色土が撹拌したように混じり合っており，炭化材・焼土塊が包含されている。ℓ１・２は竪穴の中央部に堆積していた。床面直上のℓ３は褐色土と黄褐色土が混じった土で，炭化物粒や焼土粒を少量含む程度であった。ℓ３は周壁際から，床面直上にかけて薄く堆積していた。

(２)焼土塊は住居跡の中央部に帯状に分布していた。この焼土塊集積範囲の直下に建築部材と推察される炭化材が確認された。これらの一部は床面と接していなかった。

(３)炭化材の分布は，床面で検出された壁柱穴の位置と対応関係にあることが明らかになった。したがって炭化材が原位置を保っている可能性が高いといえる。

(４)炭化材が多く出土しているが，床面には炉跡を除いて被熱範囲は確認できなかった。火災で焼失しているにもかかわらず，床面からは遺物がほとんど出土していない。

(５)壁柱穴の堆積土には炭化物・焼土粒を少量含む程度で，柱穴の周囲の床面も被熱していなかった。また壁柱穴の断面観察では柱痕を確認することができなかった。

これらのことから本住居跡は火災を受けて焼失した可能性は極めて高く，焼失当時の状況をある程度とどめていると推察される。また炭化材の上位に焼土塊が形成されていることから，上屋の部材の上に土が載っていて，火災の際に焼土が形成されたと考えるのが合理的な解釈であろう。したがって本遺構は土葺き屋根の竪穴住居であった可能性が高い。

住居跡の構造

炭化材の分布　炭化材は住居の短軸方向に配列するもの(炭化材①～⑤)と住居の長軸方向中央に配列するもの(炭化材⑥)に分かれる。前者は床面で検出された壁柱穴の位置と対応関係にあることから，垂木材もしくは壁柱材の可能性があると考えている。後者は焼土塊の集積範囲と対応関係にあり，住居のほぼ中央に配置することから屋根の上部の梁材の一部であったと推察している。

炭化材①はＰ９と対応関係にあり，長さ70cm，幅15cm，厚さ５cmで，現況では板状を呈する。ただし風化や削平を考えると，丸木の可能性が高いであろう。出土層位はℓ１で，床面より２～５cm程上位で検出された。中央部では焼土塊を上に載せている。樹種同定の結果，材質はクリと推定された。

炭化材②はＰ８と対応関係にあり，長さ70cm，幅12cm，厚さ５cmの範囲に砕片化した炭化材が分布していた。同一の部材が，砕片化したものとみて支障はないであろう。出土層位はℓ１であるが，炭化材①と違って，床面より５mm程遊離しているにすぎなかった。樹種同定の結果，材質はクリと

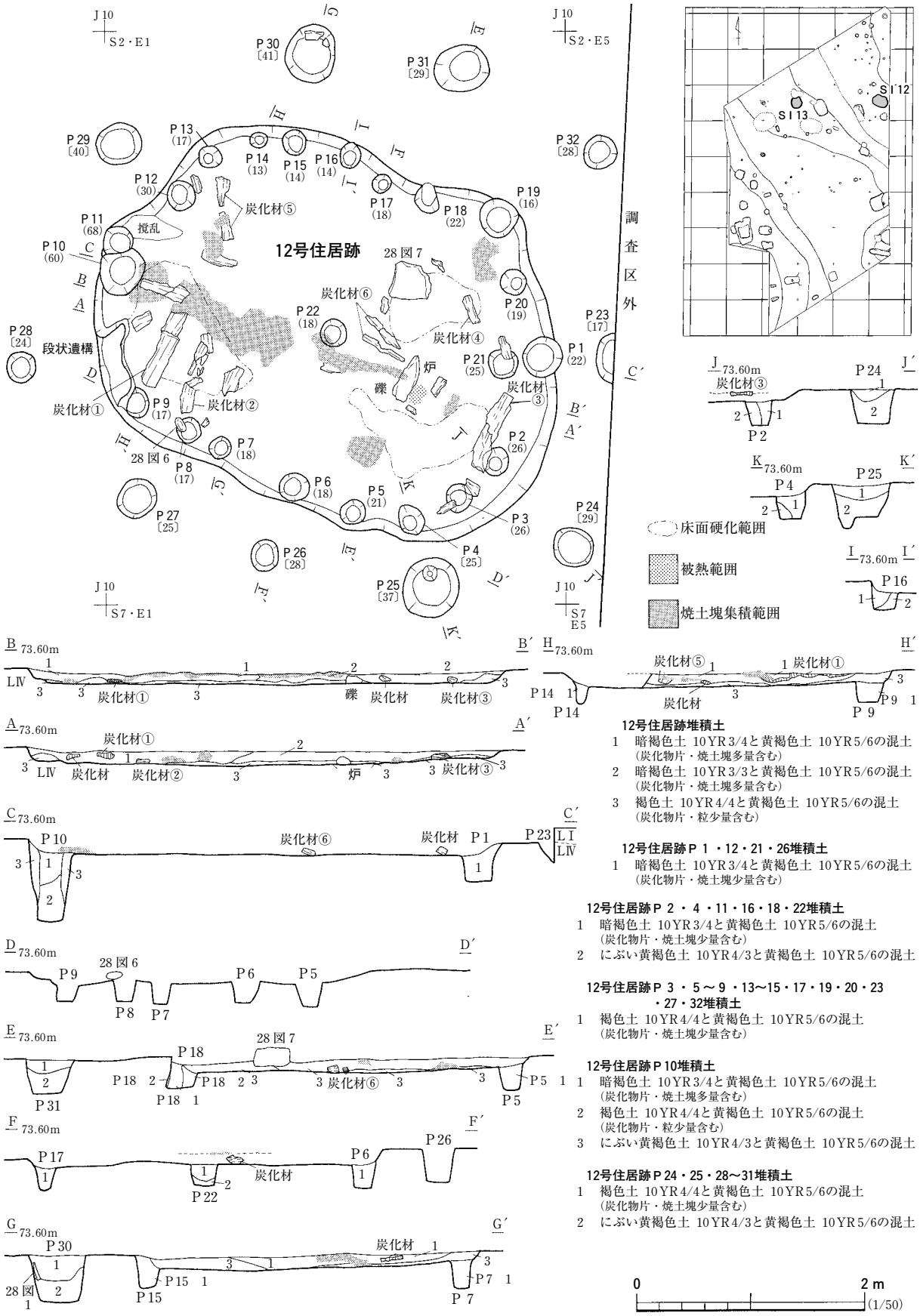

12号住居跡
調査区外
段状遺構
撹乱
炭化材①
炭化材②
炭化材③
炭化材④
炭化材⑤
炭化材⑥
炉
礫
28図6
28図7
P1 (22)
P2 (26)
P3 (26)
P4 [25]
P5 (21)
P6 (18)
P7 (18)
P8 (17)
P9 (17)
P10 (60)
P11 (68)
P12 (30)
P13 (17)
P14 (13)
P15 (14)
P16 (14)
P17 (18)
P18 (22)
P19 (16)
P20 (19)
P21 (25)
P22 (18)
P23 [17]
P24 [29]
P25 [37]
P26 [28]
P27 [25]
P28 [24]
P29 [40]
P30 [41]
P31 [29]
P32 [28]
SI12
SI13
床面硬化範囲
被熱範囲
焼土塊集積範囲
12号住居跡堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊多量含む）
2　暗褐色土 10YR3/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊多量含む）
3　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・粒少量含む）
12号住居跡Ｐ１・12・21・26堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊少量含む）
12号住居跡Ｐ２・４・11・16・18・22堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
12号住居跡Ｐ３・５～９・13～15・17・19・20・23・27・32堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊少量含む）
12号住居跡Ｐ10堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊多量含む）
2　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
12号住居跡Ｐ24・25・28～31堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
（炭化物片・焼土塊少量含む）
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土
0　2 m
(1/50)

図27　12号住居跡（１）

推定された。

炭化材③はＰ３もしくはＰ２と対応関係にあり，出土層位はℓ２である。床面との間に１cm程ℓ３が堆積している。長さ70cm，幅12cm，厚さ３cm程で，横断面形はやや歪んだ楕円形を呈する。風化していることを考慮すると，丸木であった可能性が高い。樹種同定の結果，材質はクリと推定された。

炭化材④はＰ20もしくはＰ21と対応関係にあり，出土層位はℓ１である。床面との間に１cm程ℓ３が堆積している。長さ25cm，直径６cm程で，丸木材である。樹種同定の結果，材質はカヤと推定された。

炭化材⑤はＰ13と対応関係にあり，長さ56cm，幅10cm，厚さ５cmの範囲に砕片化した炭化材が分布していた。上位に焼土塊を載せている。樹種同定の結果，材質はカヤと推定された。

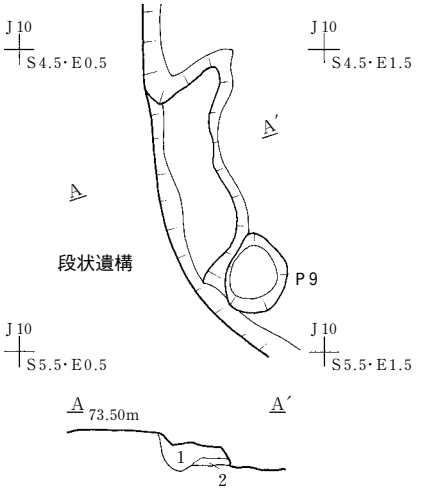
炭化材⑥は長さ42cm，幅８cm程で，かなり砕片化していたが丸木材と推察している。出土層位はℓ２であるが，床面より５mm程遊離しているにすぎなかった。樹種同定の結果，材質はコナラ属コナラ節と推定された。

炉跡　床面中央より東寄りの長軸線上に地床炉が見つかった。被熱範囲の規模は長軸幅18cm，短軸幅12cmを測る。被熱範囲の西側には長軸幅44cm，短軸幅15cm，厚さ12cmの花崗岩製の亜角礫が据え置かれていた。礫は人為的な埋め土で，床面に固定されていた。礫の内側はわずかに被熱していたことから，礫は炉に伴うものと判断している。

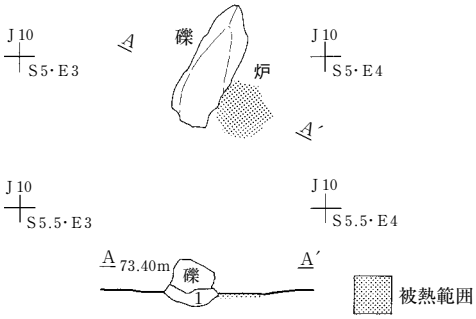
小穴　本遺構の床面と竪穴の周囲から検出された小穴は32基である。重複・近接する遺構がないことから，すべて本遺構に伴うものと考えている。この内Ｐ１～21は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらの多くは床面に対し垂直方向に掘り込まれていたが，Ｐ18のみ10度程，内側に傾いている。壁柱穴の深度はおおよそ20～35cmであり，巨視的に見れば，壁柱穴の深度はほぼ一定しているといえる。平面形や規模は当然ながら一定していないが，おおよそ直径20cmのものが多いといえる。ただし西壁中央に位置するＰ10のみは，直径40cm，深さ60cmを測り，柱穴の中で最も規模が大きい。これらの壁柱穴の堆積土は，暗褐色土塊や褐色土塊を主体とする混土からなり，炭化物片や焼土粒を少量含んでいる。基本的に土質は住居内堆積土のℓ２もしくはℓ３と同じであった。火災住居であることから，柱痕の存在を予想して調査したが，それにあたるものは確認できなかった。住居内堆積土が柱穴に流入していることから判断すると，火災の鎮火後に残った壁柱は抜き取られたと推察される。

Ｐ22は，床面中央に配された，いわゆるセンターピットである。規模は壁柱穴とほぼ同規模で，直径22cm，深さ18cmと小規模である。補助的なものだった可能性がある。

Ｐ23～32は竪穴の外側，周壁を巡るように検出された小穴である。その配置の規則性から，本遺構に伴う柱穴と判断した。これらはすべて検出面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度は20～30cmである。規模は直径30～40cmのものが多く，壁柱穴より一回り大きい。これらの柱穴の堆積土は，基本的に２層に分けられ，下部ににぶい黄褐色土を主体とする人為堆積土，上部に住居内

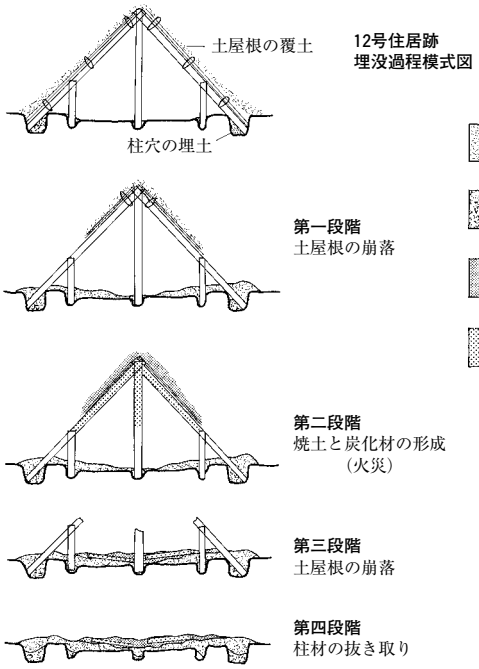


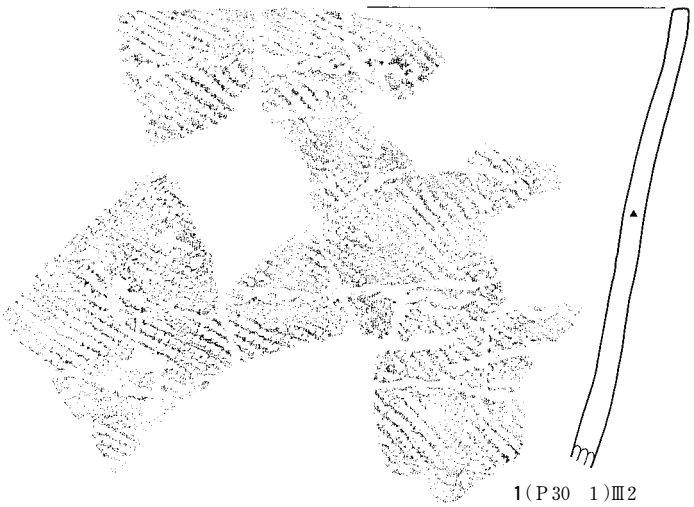
12号住居跡段状遺構堆積土
1　褐色土 10YR4/4と黄褐色土 10YR5/6の混土
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3と黄褐色土 10YR5/6の混土



12号住居跡炉堆積土
1　暗褐色土 10YR3/4と黄褐色土 10YR5/6の混土

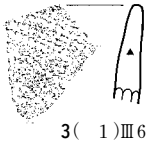
0　1 m
(1/25)





1(P30　1)Ⅲ2

2(　1)Ⅱ3

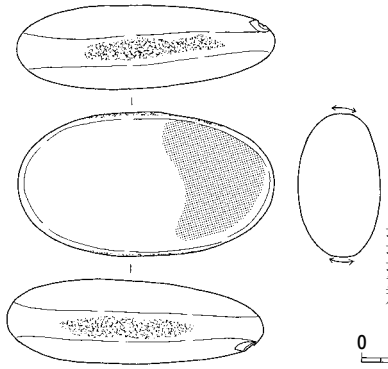


3(　1)Ⅲ6

4(　1)Ⅲ12h

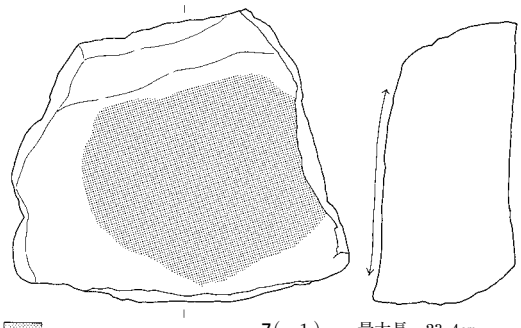
5(　1)Ⅲ12h

0　5 cm
(1/3)



6(　2)
最大長　7.6cm
最大幅　13.5cm
最大厚　4.5cm
重　さ　678ｇ
石　質　砂岩

0　5 cm
(1/4)



磨耗面
擦耗面

7(　1)
最大長　23.4cm
最大幅　27.0cm
最大厚　11.9cm
重　さ　8.1kg
石　質　花崗閃緑岩

0　10 cm
(1/6)

図28　12号住居跡(２)と出土遺物

堆積土のℓ３と同質の土からなる。つまり下部の堆積土は柱を固定するための掘形埋土，上部は土葺き屋根を構成する土が流入したと考えられる。これら竪穴周囲の柱穴は，垂木の末端を固定するために構築されたと推察している。

段状遺構　床面の南西隅には，長軸幅76cm，短軸幅30cm，床面からの高さ８cmの段状の高まりが認められた。断ち割りの結果，床面に人為的に土を盛り上げて，固めたものであると推察している。段の表面には踏み締まりは認められず，段差が低いことから，出入り口に関わるような階段状の遺構ではないと考えている。

遺　　物(図28，写真63・64・72)

出土状況　堆積土中(ℓ１～3)から縄文土器片が８点，石器が２点出土した。この他，炉跡の礫の下部の堆積土(炉ℓ1)から縄文土器片が１点，Ｐ30の堆積土(ℓ１)から縄文土器片が８点出土している。火災で焼失しているにもかかわらず，床面からは遺物がほとんど出土していない。

縄文土器　28図１は口縁部が外傾する器形で，単節の結節縄文が施されている。２は頸部でくびれる器形で，頸部には低い隆帯が貼付されている。半截竹管による山形文を交差させ，菱形状の文様を形成している。地文は組紐文で，上位の山形文には沈線間に同一工具による押し引き状の刺突文が加えられている。３は口縁部が波状を呈し，ＲＬＲ撚りの原体で複節斜縄文が施されている。４・５は底部資料で，４は器面が摩耗しているため詳細は不明である。５は底部に胴部下端と同じ原体で単節縄文が施されている。

石器　28図６は上下両側面にザラザラとした擦耗面が観察された磨石類である。表面には部分的に磨耗面も観察された。同図７は表面に光沢を有する磨耗面が観察された石皿である。磨耗面は片面のみに認められた。周囲は打割されて失われている。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡で，平面形は隅丸長方形を基調とするが，北壁は不整である。堆積土を検討した結果，本住居跡は火災住居であると判断した。周壁の全周を巡る壁柱穴と中央の柱穴，さらには竪穴の外側にも柱穴が巡ることから，住居の構造はかなり強固であったと推察される。

堆積土と炭化材・焼土塊の状況から判断すると，本遺構は土葺きの屋根であった可能性が高い。また堆積土の状況から，本遺構は次のような過程で埋没したものと考えている。

まず床面出土遺物がほとんどないことから，使用中であった住居を火災が原因で廃絶したとは考えにくく，住居の廃絶に際して，意図的に火を放った可能性がある。また焼土塊や炭化材が焼け落ちる前に，これらをほとんど含まない住居内堆積土ℓ３が床面の直上に堆積している。つまりℓ３の堆積段階では火災は発生していなかったと考えられる。火災発生前に土葺き屋根の裾部から土が自然崩落したか，意図的にこの部分を壊したかのいずれかであろう。

その後の火災で土葺き屋根の上部が焼け落ち，前述のℓ３の上に堆積したと推察される。この際，建築部材はある程度，平面的な位置を保ったまま崩落した可能性が高い。しかしながら炭化材の分布状況を見る限り，すべての部材が火災で焼失したとは考えにくい。壁柱や主柱などの鉛直方向の

部材は，ある程度燃え残ったと推察される。また多くの柱穴堆積土に柱痕が認められないことから，燃え残った部材を抜き取ったのではないかと考えている。

本遺構の帰属時期は，Ｐ30から出土した縄文土器の年代観や，住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えている。

（門　脇）

13号住居跡　ＳＩ13　（図29，写真34・35）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｇ・Ｈ10グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　73.85m（ＬⅣ上面）

重複　（新）風倒木痕　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　歪んだ円形

規模　現状の周壁上端で，東西長2.8m・南北長3.0m（遺存値）。　**床面積**（推定値）　6.20㎡

主軸方位　Ｎ10°Ｗ　**遺存壁高**　23～25cm　**周壁の立ち上がり**　60～70度

周壁　周壁は緩やかな円弧を描くように，外側に張り出している。東壁の中央はＰ９によって突出している。竪穴の掘り込みは，今回の調査で見つかった住居跡のなかで最も深い。周壁の立ち上がりも急斜である。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は

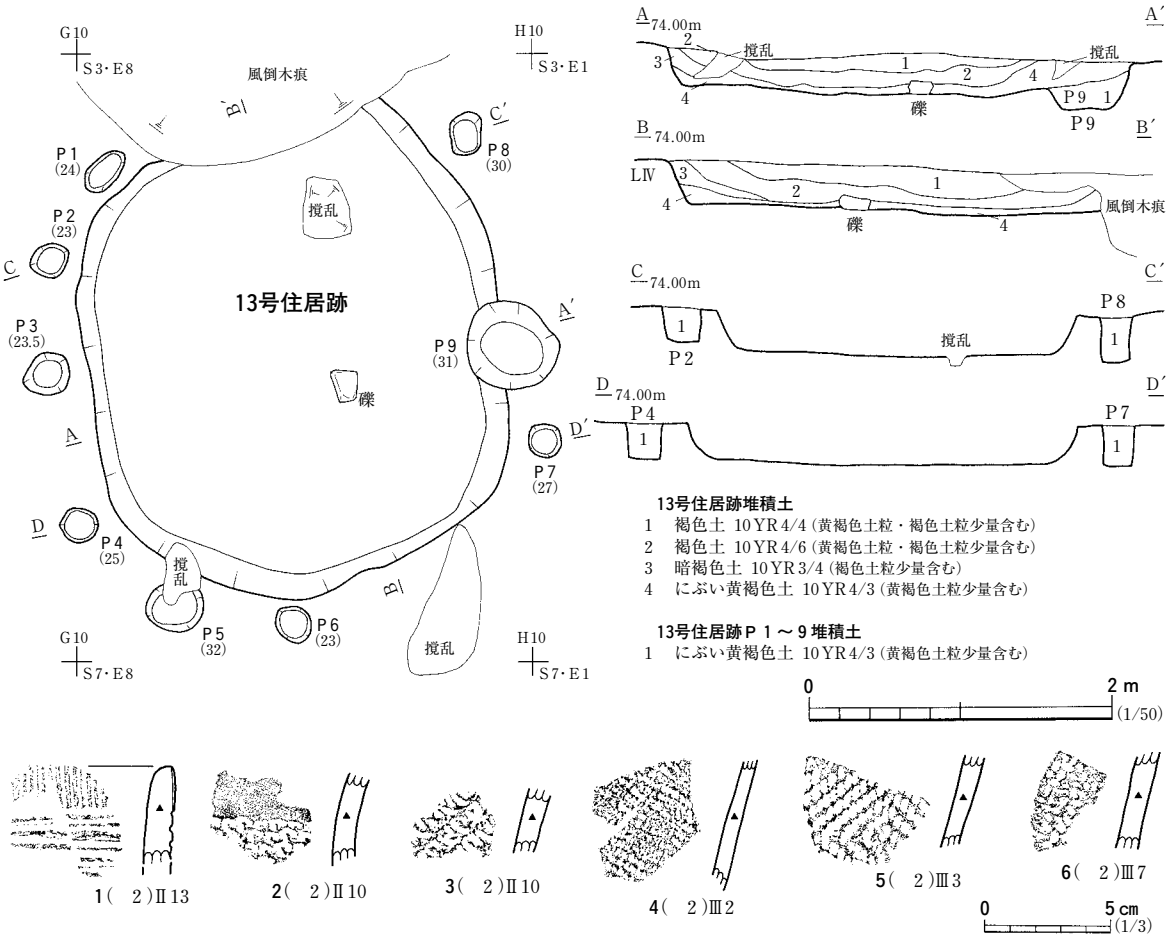


図29　13号住居跡と出土遺物

認められない。多少の凹凸があるが，ほぼ平坦である。炉・踏み締まりは認められないが，中央に10×20cm程の角礫が据え置かれていた。原位置を保っているならば，柱の基礎であった可能性も否定できないであろう。

堆積土　４層に分けられ，ＬⅢに起因する褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

住居跡の構造

小穴　竪穴の外側，周壁を巡るように小穴が９基見つかった。その配置の規則性から，本遺構に伴う柱穴と判断した。Ｐ１～８は周壁の外側を巡る直径25cm程の柱穴である。Ｐ９は直径56cmと比較的大きな小穴で，東壁に接している。これらはすべて検出面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ20～30cmである。これらの小穴の堆積土は，基本的には住居内堆積土ℓ４と同質の土であり，自然堆積と判断している。

遺　　物(図29，写真64)

出土状況　堆積土中(ℓ２)から，縄文土器片が21点出土した。

縄文土器　29図１は口縁部上端に縦長の刺突文が加えられた後，数条の横位平行沈線文が施されている。２・３は重層ループ文により文様が描かれている。４は単節斜縄文，５は非結束の羽状縄文，６は組紐文が施されている。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡で，平面形はやや歪んだ円形を呈する。柱穴は竪穴の外側に配され，床面には確認できなかった。本住居跡は他と比べて掘り込みが深く，床面に炉跡などの施設も確認されなかった。このように本住居跡の構造は，他の住居跡とは若干異なっている。

本遺構の帰属時期は，出土遺物が少なく判然としないが，住居跡の構造や近接遺構の年代観から縄文時代前期前葉と考えている。　（門　脇）

14号住居跡　ＳＩ14　(図30，写真36・37)

遺構の概要

位置　分布域②，H10グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　73.8m(ＬⅣ上面)

重複　(新)風倒木痕　**住居形態**　竪穴住居跡　**平面形**　隅丸長方形

規模　竪穴部分の上端で，東西長3.3m・南北長4.6mを測る。　**床面積**(推定値)　12.84㎡

主軸方位　N28°W　**遺存壁高**　５～７cm　**周壁の立ち上がり**　70度程

周壁　平面形は隅丸長方形を基調としているが，四方の周壁は全体的にやや丸みを帯びて外側に張り出している。北西隅は風倒木痕で壊されている。床面からの立ち上がり角度はすべての周壁で一定しており，崩落したような箇所は認識できなかった。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。多少の凹凸があるが，ほぼ平坦である。部分的に撹乱によって壊されている。踏み

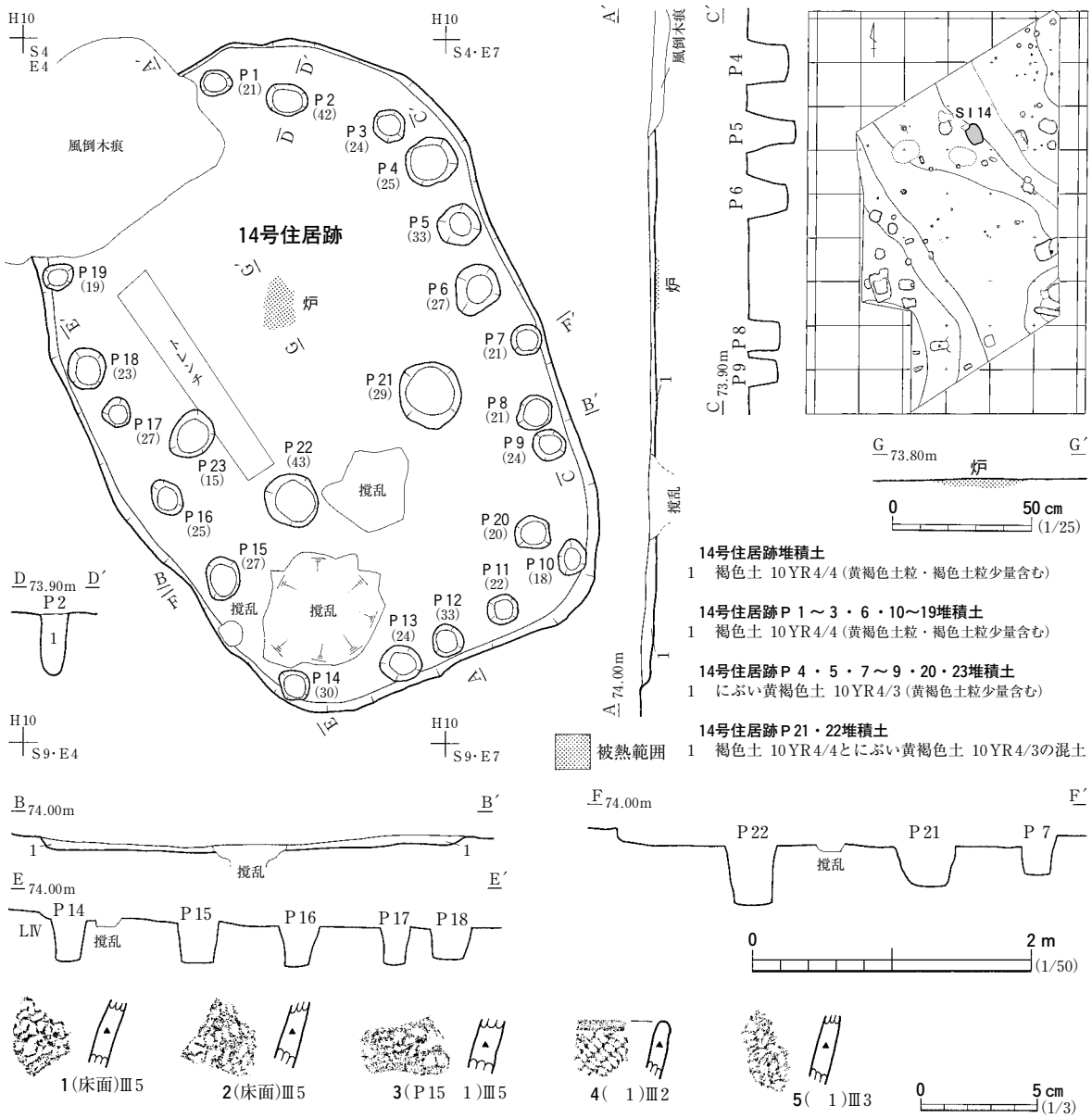


図30　14号住居跡と出土遺物

締まりは確認できなかった。

堆積土　本遺構は検出面から床面までの深さが極めて浅かったために，堆積土を分層することはできなかった。この堆積土は複数の土質が混じり合う状況ではないことから人為堆積の可能性は低いと考えている。

住居跡の構造

炉跡　床面中央の長軸線上に１カ所の地床炉が見つかった。その規模は長軸幅36cm，短軸幅30cmを測る。被熱範囲は床面下３cmに及んでいる。

小穴　床面で検出された小穴は23基で，この内Ｐ１～20・23は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ20～30cmであり，巨視的に見れば，壁柱穴の深度はほぼ一定しているといえる。なかにはＰ２のように42cmの深さのも

のもある。平面形や規模は当然ながら一定していないが，おおよそ直径20～25cmのものが多いといえる。これらの壁柱穴の堆積土は，住居内堆積土と基本的に同質であるか，もしくはにぶい黄褐色土である。

この他，床面の中央には壁柱穴よりやや規模の大きな小穴が２基（Ｐ21・22）ある。この２基の小穴は住居跡の中軸線に対し，ほぼ左右対称に配置され，床面からの深度はＰ21で29cm，Ｐ22で42cmを測る。この配置と深度から，２基の小穴は主柱穴と考えている。堆積土はともに褐色土とにぶい黄褐色土の混土で，人為堆積と考えている。主柱穴は住居の廃絶に際して人為的に埋めたと推察される。

遺　　物（図30，写真64）

出土状況　床面から縄文土器片２点が出土した。この他，Ｐ15の堆積土から縄文土器片１点，堆積土中（ℓ１）から縄文土器片５点，石器１点が出土している。

縄文土器　30図１～３はループ文，４は単節斜縄文，５は非結束の羽状縄文が施されている。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡で，平面形は隅丸長方形を呈する。住居の柱穴は周壁際を巡る壁柱穴と２基の主柱穴で構成される。床面中央には地床炉が確認された。

本遺構の帰属時期は，出土遺物が少なく判然としないが，住居跡の構造や近接遺構の年代観から縄文時代前期前葉と考えている。（門　脇）

15号住居跡　ＳＩ15　（図31・32，写真38・39）

遺構の概要

位置　分布域②，H11グリッド　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　73.9m（ＬⅣ上面）

重複　14号土坑があるが，本遺構に堆積土が遺存していないことから新旧関係は不明である。

平面形・規模・周壁　本遺構はＬＩを取り除いた段階（ＬⅣ上面を検出した段階）で，すでに炉跡・床面が露出した状況であった。周壁および堆積土は失われていた。床面を精査した結果，２基の炉跡を中心に24基の小穴が分布することが判明した。小穴の配列を検討したところ，床面の周囲に壁柱穴が巡る構造であると推定される。

平面形については，壁柱穴の配列に基づき推定した。これによると平面形は隅丸長方形を基調としながら，南西部が外側に張り出している可能性がある。規模についても正確にはわからないが，壁柱穴間の距離を見ると東西方向ではＰ８－Ｐ16間が6.0m，南北方向ではＰ４－Ｐ13間が4.0mを測る。このことから本遺跡では比較的大型の住居跡の部類に属すると推察している。長軸方位はＰ８－Ｐ16を結ぶ線を長軸線とすると，Ｎ75°Ｗを示す。

床面　検出時にはすでに床面・炉跡が露出した状態であった。したがって住居機能時の床面は失われている可能性はある。しかしながら炉跡の遺存状態が良好なこと，ＬⅣ上面が平坦なことから判断すると，床面はそれ程削平されていないと推察される。踏み締まりは確認できなかった。

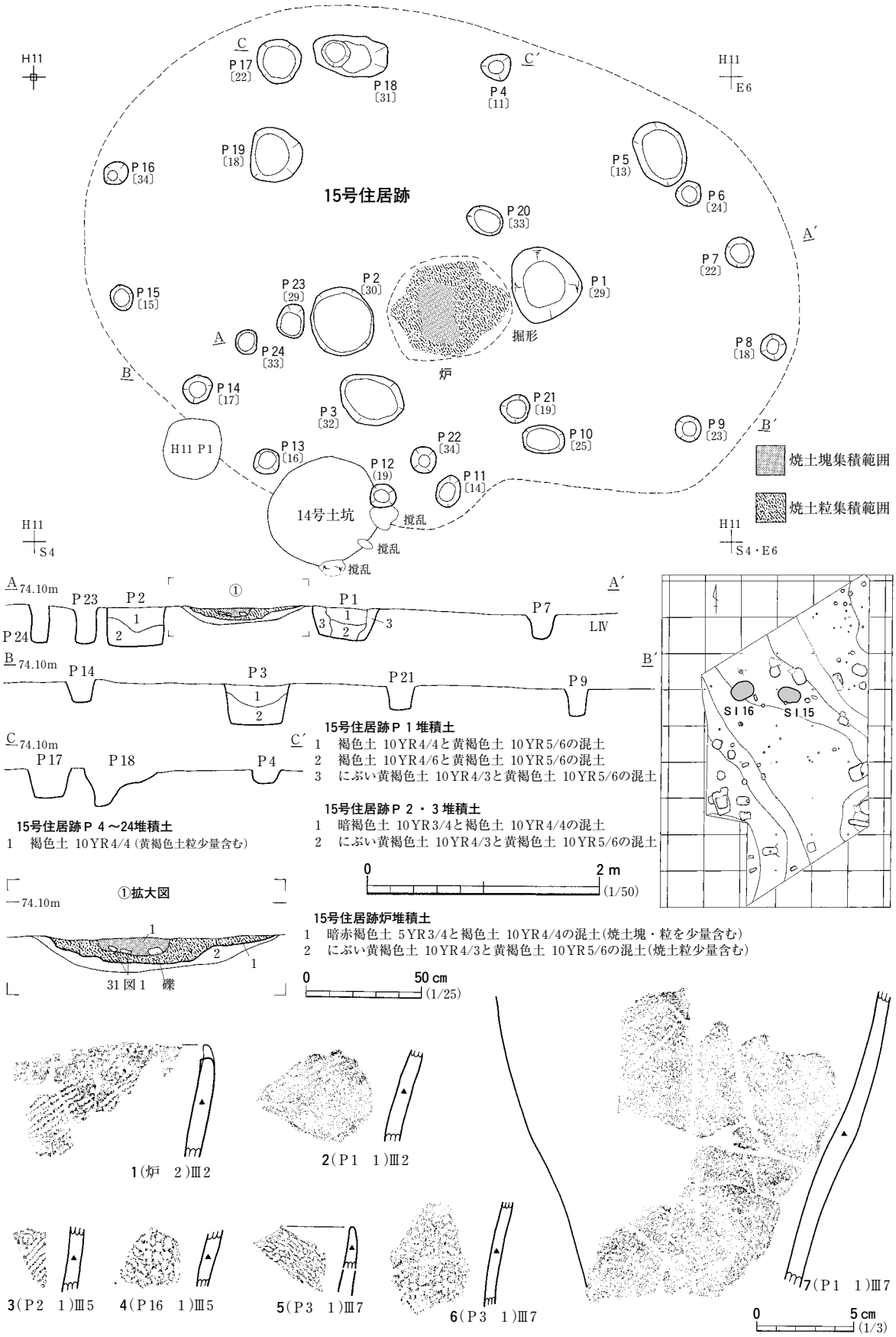


図31　15号住居跡と出土遺物（１）

住居跡の構造

炉跡　床面中央の長軸線上よりやや南に寄った箇所に１カ所の地床炉が見つかった。炉跡は長軸幅102cm，短軸幅80cm，深さ16cmの隅丸方形の掘形をもち，その最上部に焼土塊と焼土粒が堆積していた。焼土塊と焼土粒の境は明瞭で，焼土粒と掘形埋土(ℓ 2)の層境はさらに明瞭に区分された。掘形の壁は擂り鉢状になだらかな傾斜で底面に至るが，その傾斜は一定ではなく凸凹であった。底面も同様に，掘形の形状を丁寧に整えてはいないと推察している。また削平を受けていたためか，被熱硬化範囲は確認できなかった。

小穴　堆積土の状態や柱配置から，本遺構に伴う小穴としたものは計24基である。この内，Ｐ１・２は，その規模と配置から主柱穴と考えている。これらは炉跡の両脇に配置され，規模も他の小穴より大きく，直径50cm，深さは20cmを超える。堆積土の観察から，住居廃絶の際に，柱は抜き取られたと推察される。

Ｐ４～18は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ20～25cmであり，巨視的に見れば，壁柱穴の深度はほぼ一定しているといえる。なかにはＰ18のように壁が崩れているものもあり，主柱穴と同じように抜き取りの痕跡である可能性が高い。この他，Ｐ３・19～24については，柱穴であるかの判断ができなかった。

遺　　物(図31・32，写真64)

出土状況　遺物が出土した小穴は，Ｐ１・２・３・６の４基で，計15点の縄文土器片が出土した。この他，炉跡の堆積土から２点の縄文土器片が出土している。

縄文土器　31図１は口縁部が緩やかに外傾する器形で，波状口縁を呈する。口唇部の形態は平坦であるが，波頂部のみ丸く調整され，器厚も薄い。地文は単節斜縄文である。同図２は結節縄文，３・４はループ文，５～７は組紐文が施されている。５は口縁部がわずかに内湾する器形で，波状口縁を呈する。口唇部は丸く調整され，器厚は約５㎜と薄い。32図１・２は底部資料であるが，器面

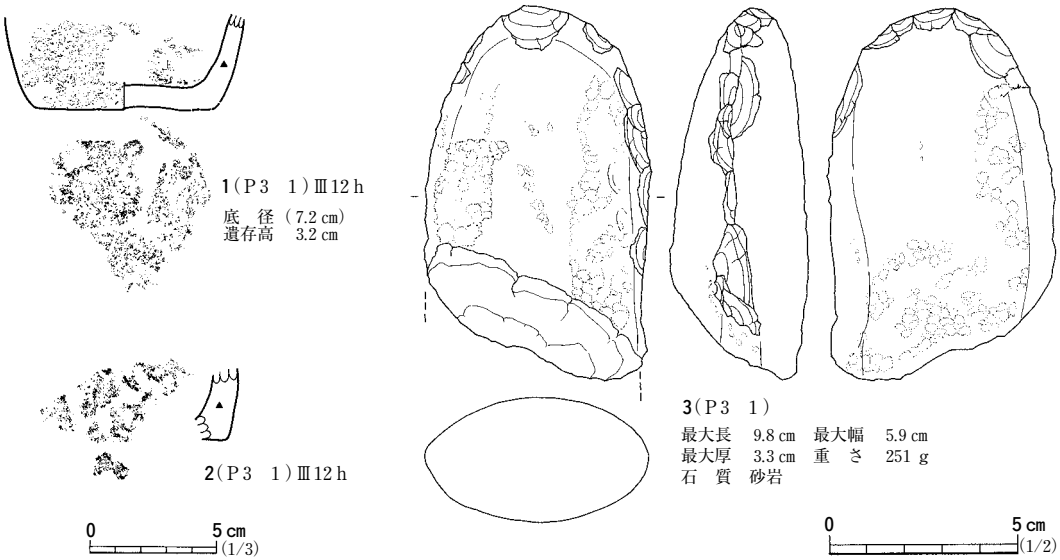


図32　15号住居跡出土遺物(２)

の摩耗が著しいため詳細は不明である。

石器　32図３は，器面の全面に敲打整形痕が観察された，磨製石斧の基部の破片である。研磨痕は観察されていないので，未製品の可能性が高い。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡であるが，遺存状態が悪く，検出時にはすでに床面が露出した状態であった。平面形は隅丸長方形を呈するものと推察している。住居の柱穴は周壁際を巡る壁柱穴と２基の主柱穴で構成される。床面中央には地床炉が確認された。本遺構の帰属時期は，出土遺物の年代観や住居跡の構造から縄文時代前期前葉と考えている。　（門　脇）

16号住居跡　ＳＩ16　（図33，写真40・41）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｇ11グリッド杭付近　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　74.0ｍ（ＬⅣ上面）

重複　床面は部分的に撹乱により壊されているが，重複する遺構はない。近接して１号集石遺構が確認されており，その関連性が指摘できる。

平面形・規模・周壁　本遺構はＬＩを取り除いた段階（ＬⅣ上面を検出した段階）で，すでに炉跡・床面が露出した状況で，周壁および堆積土は失われていた。床面を精査した結果，２基の炉跡を中心に27基の小穴が分布することが判明した。小穴の配列を検討したところ，床面の周囲に壁柱穴が巡る構造であると推察された。

平面形については，壁柱穴の配列に基づき推定した。これによると平面形は隅丸長方形を基調としながら，北側が外側に張り出している可能性がある。規模についても正確にはわからないが，壁柱穴間の距離を見ると東西方向ではＰ５－Ｐ15間が4.6ｍ，南北方向ではＰ１－Ｐ９間が3.5ｍを測る。このことから本遺跡では比較的大型の住居跡の部類に属すると推察している。長軸方位はＰ５－Ｐ15を結ぶ線を長軸線とすると，Ｎ68°Ｅを示す。

床面　検出時にはすでに床面・炉跡が露出した状態であった。したがって住居機能時の床面は失われている可能性はある。しかしながら炉跡の遺存状態が良好なこと，ＬⅣ上面が平坦なことから判断すると，床面はそれ程削平されていないと推察される。踏み締まりは確認できなかった。

住居跡の構造

炉跡　床面中央の長軸線上に２カ所の地床炉が見つかった。西側をＡ炉とし，東側をＢ炉とする。Ａ炉の規模は長軸幅66cm，短軸幅58cmを測る。中央部には熱が弱く及んでおり，床面下２～４cmにわたって被熱の痕跡が認められた。Ｂ炉は，被熱範囲の下に掘形を伴うことが確認された。被熱範囲は長軸幅50cm，短軸幅40cmを測り，床面下５cm程に熱が及んでいる。掘形は，被熱範囲の外側で確認され，平面形は不整な方形を呈する。その規模は長軸幅76cm，短軸幅64cmを測る。中央に向かって緩やかにくぼんでおり，その深度は24cmを測る。

小穴　堆積土の状態や柱配置から，本遺構に伴う小穴としたものは計27基である。本遺構の周囲に

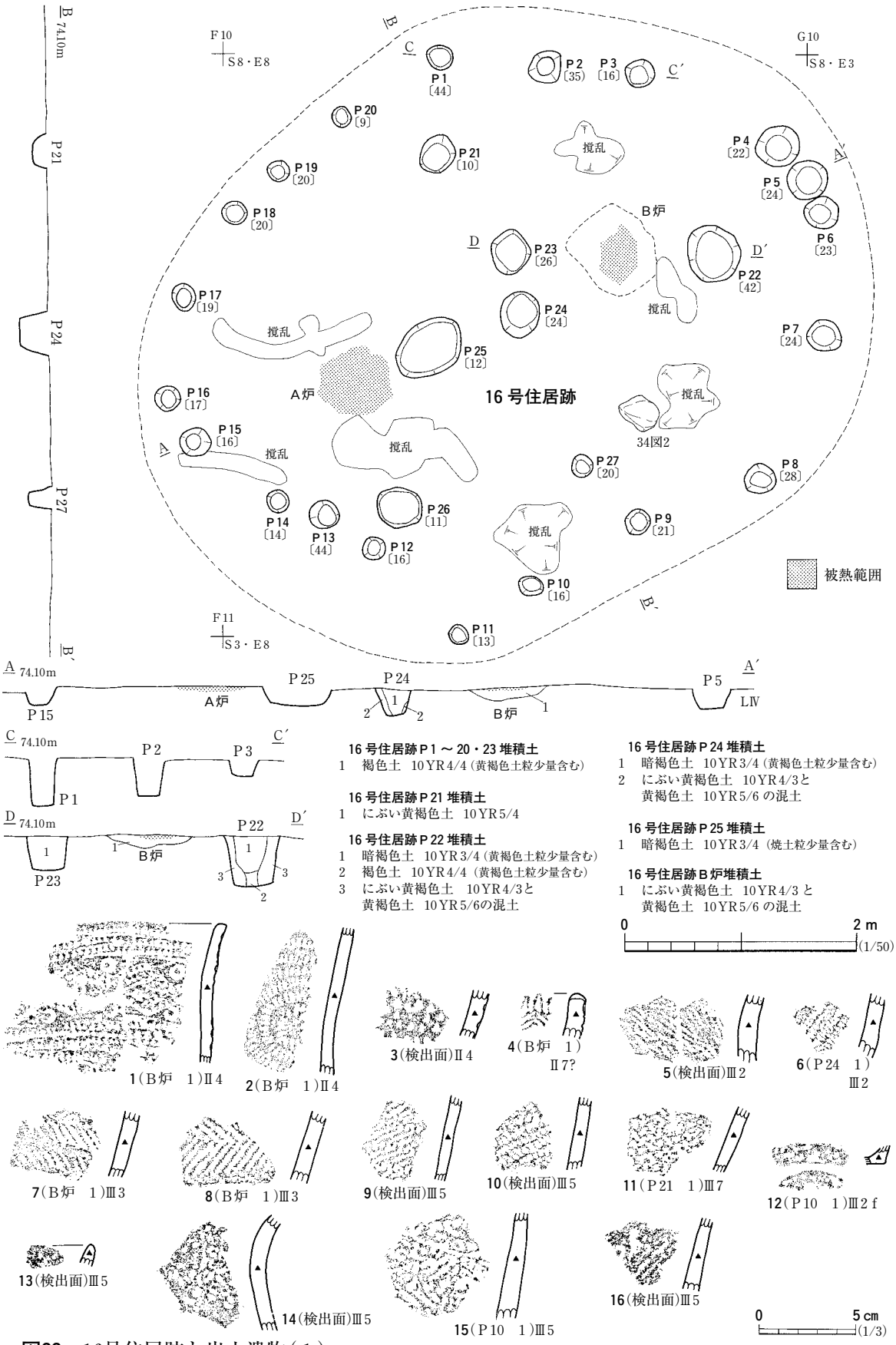


図33　16号住居跡と出土遺物（１）

は，柱穴と推察される小穴が確認されていないので，ここで報告する小穴は本遺構に伴うものと考えている。

Ｐ１～20は，周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ15～25cmであり，巨視的に見れば，壁柱穴の深度はほぼ一定しているといえる。なかにはＰ１・13のように床面からの深度が44cmに達するものもある。平面形や規模は当然ながら一定していないが，おおよそ直径15～20cmのものが多いといえる。これらの壁柱穴の堆積土は，褐色土もしくはにぶい黄褐色土である。

Ｐ22～24は，その規模と配置から主柱穴と考えている。Ｐ24は床面の中央に配置される，いわゆるセンターピットと見ている。Ｐ22・23はＢ炉の両脇に配置され，規模も他の小穴より若干大きい。Ｐ22の中央部下位には暗褐色を呈する軟質土が堆積していた（Ｐ22ℓ２）。これは柱痕である可能性が高く，同ℓ３は掘形の埋土であろう。

Ｐ24のセンターピットを中心に柱穴の配列を見ると，Ｐ21・24・27は南北方向，Ｐ６・22・24・15は東西方向に対し，直線的に並んでいる。これらは規模・深度ともに一定ではないが，主柱穴である可能性は高い。

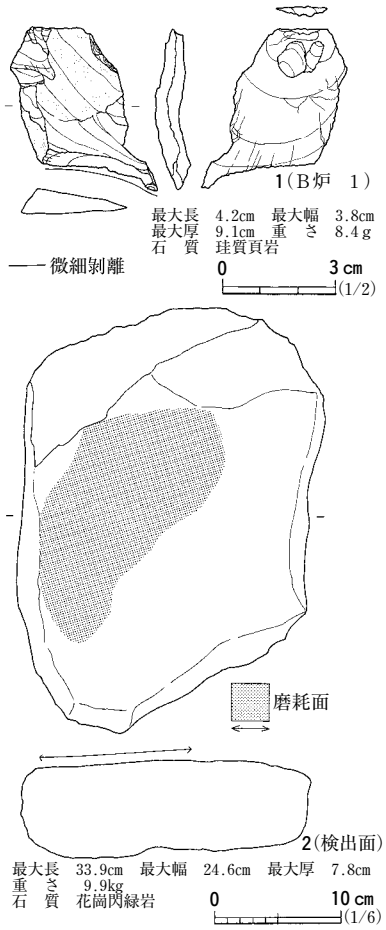


図34　16号住居跡出土遺物（２）

遺　　物（図33・34，写真64・72）

出土状況　遺物が出土した小穴は，Ｐ10・21・22・24・25の５基で，計８点の縄文土器片が出土した。この他，Ｂ炉の堆積土から31点の縄文土器片と１点の剥片が出土している。またＢ炉の南側には，石皿（34図２）が見つかっている。

縄文土器　33図１は口縁部が緩やかに外反する器形で，口縁部文様帯の上下が半截竹管による押し引き状の刺突文で区画されている。区画内には同様の刺突文で菱形状の文様が描かれ，無文部に竹管による円形刺突文が加えられている。２は半截竹管による押し引き状の刺突文で蕨状文が施されている。３は棒状工具による連続刺突文が数段施されている。４は口唇部に刺突が加えられ，口縁部が小波状を呈する。口縁部上端に縦長の刺突文，その下部に半截竹管による山形文が施されている。５は結節縄文，６は単節斜縄文，７・８は非結束の羽状縄文が施されている。原体の多くは単節の直前段２条であるが，直前段３条のもの（８）も見られる。９・10・13～16はループ文が施されている。13～16は同一個体で，２種類の原体により羽状縄文が形成されている。11は組紐文が施されている。12は底部資料で，底部外縁と底面に棒状工具による刺突文が加えられている。

石器　34図１は背面下側縁に微細剥離痕が観察された剥片である。石質は茶褐色を呈する良質の珪

質頁岩である。２は中央部に磨耗面が観察された石皿である。

ま と め

分布域②にある竪穴住居跡であるが，遺存状態が悪く，検出時にはすでに床面が露出した状態であった。平面形は隅丸長方形を呈するものと推察している。柱穴は周壁際を巡る壁柱穴と東西・南北二列の主柱列からなる。床面中央には２基の地床炉が確認された。本遺構の帰属時期は，出土遺物の年代観や住居跡の構造から判断すると縄文時代前期前葉と考えている。（門　脇）

17号住居跡　ＳＩ17　（図35，写真42・43）

遺構の概要

位置　分布域③，Ｊ14グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　73.8m（ＬⅣ上面）

重複　（新）風倒木痕　**住居形態**　竪穴住居跡

平面形　東側が調査区外であるため不明　**規模**　現状の竪穴の周壁上端で，南北長4.0mを測る。

主軸方位　不明　**遺存壁高**　８～12㎝　**周壁の立ち上がり**　70～80度

掘込面　調査区東壁の断面精査において，ＬⅣ上面から掘り込んでいることがわかった。

周壁　西壁は一部が風倒木痕で失われているものの，緩やかな円弧を描いている。北壁と南壁は平行しないことから，住居跡の平面形はやや歪んだ円形もしくは長楕円形を呈すると推測される。

床面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，床面・周壁には礫が露出したような箇所は認められず，ほぼ平坦である。炉跡・踏み締まりは確認できなかった。

堆積土　４層に分けられ，ℓ４は人為堆積土，ℓ１～３は自然堆積土と判断した。ℓ４は調査区東壁の断面精査において確認した層で，平面的には捉えられなかった。周壁の外側に積まれている状況から，周堤の可能性を考えている。ℓ３はその周堤の土が流入し，堆積したと考えられる。ℓ２はＬⅣの黄褐色土の流入堆積，ℓ１はＬⅢが形成される段階に遺構内に堆積したものと考えている。

住居跡の構造

小穴　本遺構の床面と竪穴の周囲から検出された小穴は20基である。重複・近接する遺構がないことから，すべて本遺構に伴うものと考えている。この内Ｐ１～10は周壁際を巡る壁柱穴と考えている。これらはすべて床面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度はおおよそ20～35㎝であり，巨視的に見れば，壁柱穴の深度はほぼ一定しているといえる。平面形や規模は当然ながら一定していないが，直径20㎝程のものが多い。これらの壁柱穴の堆積土は，にぶい黄褐色土で，自然堆積が主体である。

Ｐ11～14は床面の中央部で検出された小穴で，壁柱穴より規模が大きいことが特徴である。住居跡の東半分が不明であるが，壁柱穴の内側を巡る柱穴と考えている。これらの堆積状況は，掘形の埋土と考えられる黄褐色土塊と褐色土が撹拌した状態で混じり合っていることから，住居廃絶時に柱を抜き取り，柱穴を埋めたと推察している。

Ｐ15～20は竪穴の外側，周壁を巡るように検出された小穴である。その配置の規則性から，本遺

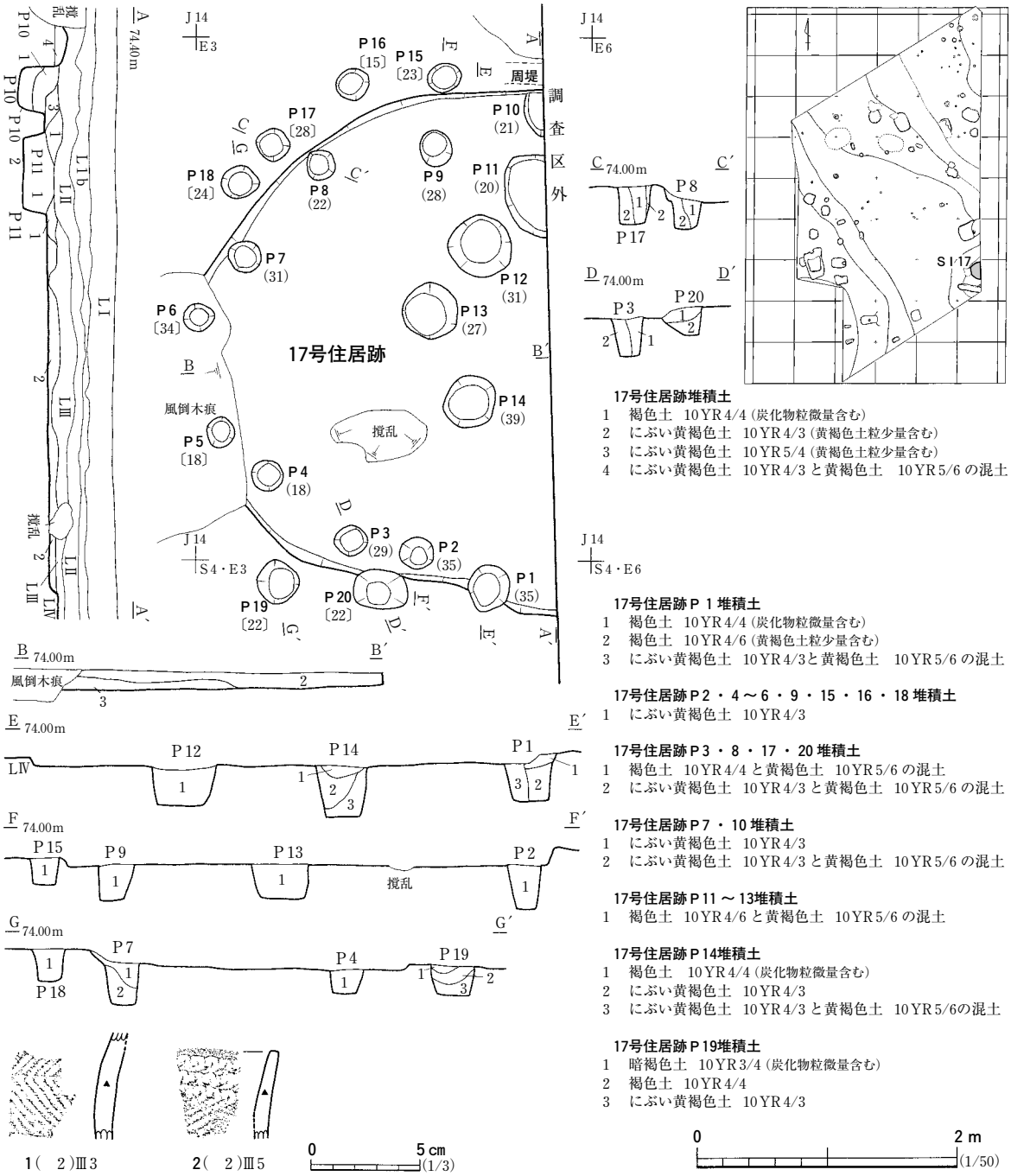


図35　17号住居跡と出土遺物

構に伴う柱穴と判断した。これらはすべて検出面に対し垂直方向に掘り込まれている。その深度は15～22cmである。規模は直径20cm程のものが多く，壁柱穴とほぼ同規模である。これらの柱穴の堆積土は，にぶい黄褐色土である。

遺　　物（図35，写真64）

出土状況　堆積土中（ℓ２）から，縄文土器片が11点出土した。

縄文土器　35図１は直前段３条の原体で非結束羽状縄文が施されている。２は口唇部が平坦に調整され，ループ文が施されている。

ま と め

分布域③にある竪穴住居跡で，住居跡の東側は調査することができなかった。したがって平面形は不明であるが，おそらく円形もしくは楕円形を呈するのではないかと考えている。現況では住居の柱配列は，床面の中央を巡るもの，周壁の際の壁柱穴，竪穴の外側を巡るものの３重の構造であると推察している。

本遺構の帰属時期は掘込面がＬⅣ上面であることを考慮すると，他の住居跡より古い段階に位置づけられる。しかしながら出土遺物からは時期差を見いだせないこと，住居の構造的特徴が他と変わりがないことから，縄文時代前期前葉の時期幅で捉えることができると考えている。　（門　脇）

第３節　竪穴状遺構

本遺跡では，竪穴住居跡と同等の竪穴規模を有するものの，底面（床面）上に柱穴・炉跡などの付属の施設が検出されなかった遺構を，竪穴状遺構に分類した。

１号竪穴状遺構　ＳＸ01　（図36，写真44・47）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ12グリッド　　**検出面**　ＬⅣ上面　　**標　高**　74.4m（ＬⅣ上面）

重複　なし　　**平面形**　不整な隅丸台形

規模　現状の壁上端で，南北長2.7m，東西長2.7mを測る。　　**遺存壁高**　13cm

周壁の立ち上がり　40～50度

周壁　南北の壁はほぼ平行しているが，全体的にややいびつな台形を呈する。南東隅はやや張り出している。

底面　ＬⅣに形成され，西に向かってわずかに傾斜する。

堆積土　３層に分けられ，いずれもＬⅢに類似する土である。両層ともに周壁からの流れ込みの状況を呈しているため，自然堆積土と考えられる。

遺　　物（図36，写真65）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から縄文土器片が33点出土した。

縄文土器　36図に示した。１はＬ撚りの無節斜縄文が施されている。３・４は同一個体で，２～４は非結束羽状縄文が施されている。施文原体は２が直前段３条，３・４は１段撚りである。５～８は結束羽状縄文が施されている。５はほぼ平坦に調整された口唇部に単節斜縄文が施されている。９はＲＬＲ撚りの異条縄文，10・11は撚糸文が施されている。

ま と め

本遺構は柱穴や炉をもたないため，住居跡かどうかは不明である。本遺構の帰属時期は地文以外の文様をもつ土器が少なく明瞭ではないが，縄文時代前期前葉と推測される。　（坂　田）

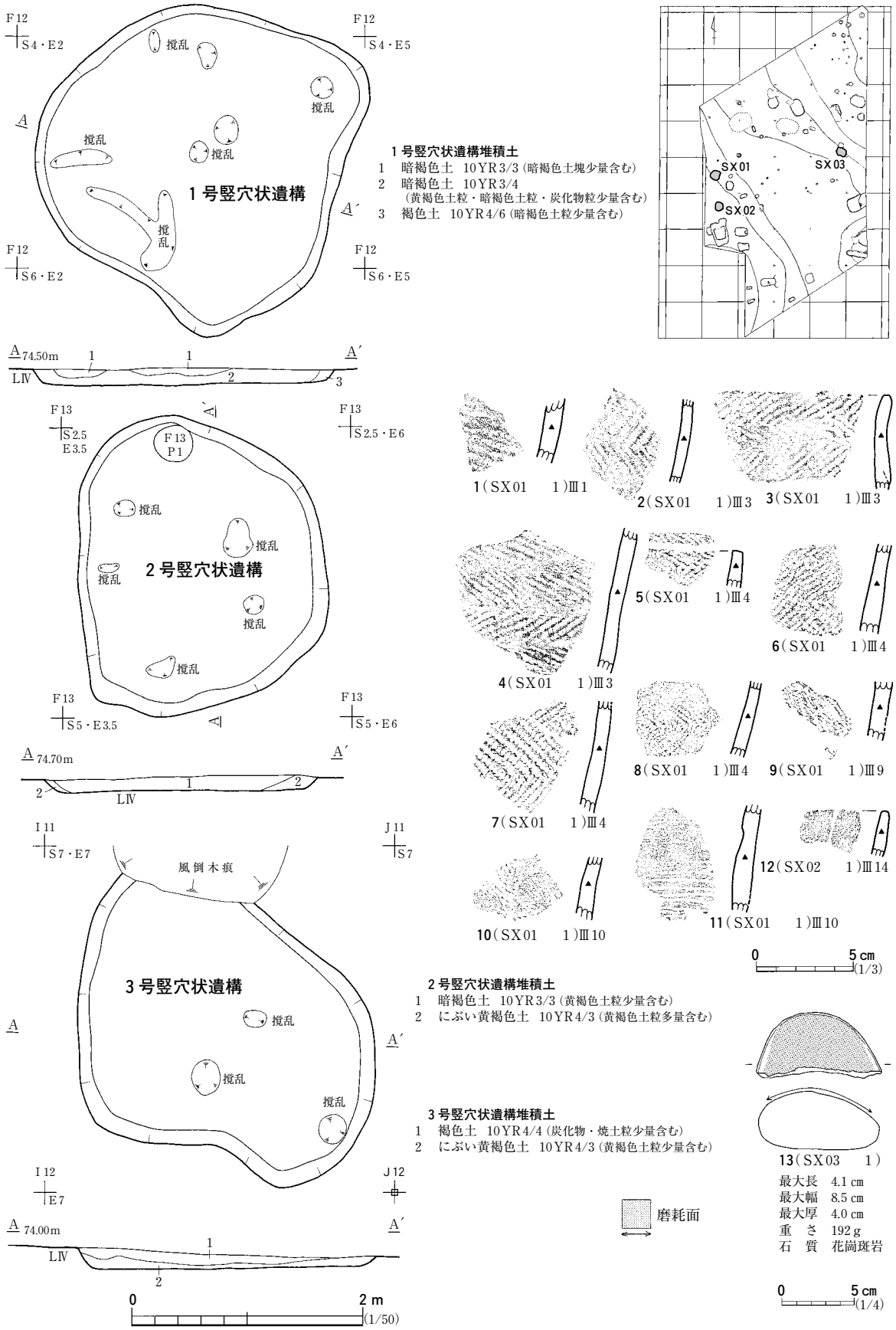


図36　１～３号竪穴状遺構と出土遺物

２号竪穴状遺構　ＳＸ02　（図36，写真45・47）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ13グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.4m（ＬⅣ上面）

重複　なし　**平面形**　隅丸台形

規模　現状の壁上端で，南北長2.6m，東西長2.1mを測る。　**遺存壁高**　９～13㎝

周壁の立ち上がり　40～50度

周壁　東西の壁は平行する。南北の壁はやや外側に張り出している。周壁の立ち上がりは，全体的に緩やかである。

底面　ＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。

堆積土　２層に分けられ，いずれもＬⅢに類似する土である。２層ともに周壁からの流れ込みの状況を呈しているため，自然堆積土と考えられる。

遺　　物（図36）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から縄文土器片が２点出土した。

縄文土器　36図12は口唇部が平坦に調整された口縁部片であるが，器面の摩耗が著しく詳細は不明である。

ま と め

本遺構は柱穴や炉が検出されなかったため，住居跡かどうかは不明である。本住居跡の帰属時期は地文以外の文様をもつ土器がなく判然としないが，縄文時代前期前葉と推測される。　（坂　田）

３号竪穴状遺構　ＳＸ03　（図36，写真46・47）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｉ11グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　73.9m（ＬⅣ上面）

重複　（新）風倒木痕，（古）Ｉ11Ｐ１　**平面形**　不整楕円形　**遺存壁高**　10～18㎝

規模　現状の壁上端で，東西長2.6m・南北長2.3m（遺存値）を測る。**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　北壁は風倒木痕によって壊されている。南壁には凹凸があるが，他の壁は緩やかな円弧を描くように張り出している。

底面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，底面・周壁共に礫が露出したような箇所はない。多少の凹凸があるが，ほぼ平坦である。

堆積土　２層に分けられ，両層ともＬⅢに起因する褐色系の土が壁際から流れ込んでいる状況が認められた。自然堆積と考えられる。

遺　　物（図36）

出土状況　堆積土中（ℓ１）から，縄文土器片１点・石器が１点出土した。

石器　36図13は器面に磨耗面が認められた磨石類の破片である。磨耗面は光沢を有する。

ま と め

分布域②の東にある竪穴状遺構で，平面形は東西方向に長軸をもつ不整楕円形を呈する。本遺構の帰属時期は，出土遺物が少なく判然としないが，近接遺構の年代観から判断すると縄文時代前期前葉と考えている。　（門　脇）

第４節　土　　坑

分　類　本遺跡では25基の土坑が検出された。土坑は平面形・規模・周壁の立ち上がり・堆積土を基に，以下の４種に分類した。

１類…平面形が直径１～1.5m程の円形を呈し，周壁の立ち上がりが垂直もしくは垂直に近い土坑である。

２類…平面形が円形を基調とし，周壁が外傾する土坑である。遺構内堆積土はＬⅢに起因する褐色土や暗褐色土である。直径が１ｍ前後のものを２ａ類土坑とし，直径が２ｍを超すものを２ｂ類土坑とする。

３類…平面形が隅丸長方形を呈する落し穴状土坑である。底面に小穴があるものを３ａ類土坑とし，小穴のないものを３ｂ類土坑とした。

４類…１～３類に該当しない土坑である。

１類土坑

遺構の概要（図37・39，写真49・53）

該当遺構　８・23号土坑の２基が本類に含まれる。

平面形　直径１～1.5m程の整った円形を呈する。

周壁　８号土坑は南東側が直立し，それ以外はほぼ垂直に近い立ち上がりを呈する。23号土坑は壁上端部は崩れて傾斜が緩くなるが，中位以下はほぼ直立している。

底面　ＬⅣに形成されている。若干の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。

堆積土　８号土坑のℓ１と23号土坑堆積土はＬⅢに起因する褐色土と暗褐色土で，８号土坑のℓ２はＬⅣに近似する黄褐色土である。いずれも堆積状況から自然堆積と考えられる。

遺　　物（図40，写真65）

出土状況　共に堆積土中（ℓ１）から縄文土器片が出土した。

縄文土器　40図16は８号土坑から出土した土器片で，結節縄文が施されている。同図25は23号土坑から出土した土器片で，横位の撚糸文が施されている。

ま と め

本類は直径１～1.5mの円筒形の土坑で，形態から貯蔵穴の可能性が高いと推測される。所属時期は出土土器と堆積土の状況から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

表１　土坑一覧表

自：自然堆積　人：人為堆積　〈　〉：推定値　＊：遺存値

遺構番号	遺構挿図番号	位置		検出面	重複	分類	平面形	規模(cm)			堆積状況	出土遺物	遺物挿図番号	写真番号		備考
		分布域	グリッド		(古→新)			検出面	底面	深さ	(古→新)			遺構	遺物	
1	37	①	G15	LⅣ		3b	隅丸長方形	153× 55	145× 45	35	自３→人２・１	縄文土器12，石器１	40	48	65	
2	37	①	G15	LⅣ		3a	隅丸長方形	188× 93	152× 48	99	自５・４→人３→自２・１	縄文土器４，石器２	40	48		
3	37	①	H15･16	LⅣ		3b	隅丸長方形	173×100	150× 90	60	自５→人４・３→自２・１	縄文土器14	40	48	65	
4	37	①	G14	ＳＩ７床面	SK4→SI7	2a	円形	93× 93	85× 83	10	不明１			48		
5	37	①	G13	LⅣ		4	楕円形	173×108	125× 75	28	自３～１	縄文土器５	40	49	65	
6	37	①	G13	LⅣ		2a	円形	120×103	98× 85	45	自２・１			49		
7	37	①	G13	LⅣ		3b	隅丸長方形	195× 98	180× 78	40	自２・１			49		
8	37	①	G13	LⅣ		1	円形	143×133	135×125	40	自２・１	縄文土器１	40	49	65	
9	37	①	F12	LⅣ		2a	円形	108×100	90× 85	45	自２・１			50		
10	38	②	J10	LⅣ		2b	円形	213×200	195×180	15	人１	縄文土器１	40	50	65	
11	38	②	J９	LⅣ		2a	円形	127×110	95× 90	33	人２→自１	縄文土器２	40	50		
12	38	②	G11	LⅣ		2a	円形	95× 83	93× 68	15	不明１			50		
13	38	②	G11	LⅣ		3b	隅丸長方形	178× 78	145× 52	75	自５～１	縄文土器１		51		
14	38	②	H11	LⅣ		2a	円形	98× 90	83× 68	28	自２・１	縄文土器１		51		
15	38	②	H11	LⅣ		4	隅丸方形	125×125	110×105	20	自２・１			51		
16	38	②	I11	LⅣ		4	隅丸長方形	155× 78	183× 60	90	人５→自４～１			51		底面から礫出土
17	38	④	I８	LⅣ		2a	円形	100× 98	78× 85	23	人１			52		
18	38	②	I12	LⅣ		2a	円形	105×100	68× 78	28	自２・１	縄文土器６	40	52	65	
19	38	④	I８	LⅣ		2a	円形	(103)× 90	80× 73	33	人１	縄文土器１		52		
20	39	④	J８	LⅣ		2a	円形	135×128	90× 90	30	不明１			52		
21	39	③	J13	LⅣ	SI4a・b→SI3→SK21	2a	円形	90× 73	70× 55	45	人２・１	縄文土器５	40	53	65	ℓ１から礫出土
22	39	④	I８	LⅣ		2a	円形	90× 85	95× 78	8	不明１			53		
23	39	④	J８	LⅣ		1	円形	123×115	93× 90	108	自６～１	縄文土器２	40	53	65	
24	39	②	I10	LⅣ		2a	円形	123×108	63× 88	35	自２・１			53		
25	39	③	J14	LⅢ	SK25→SC1	2a	円形？	＊88×115	＊58× 58	45	人３→自２・１			54		

２ａ類土坑

遺構の概要（図37～39，写真48～54）

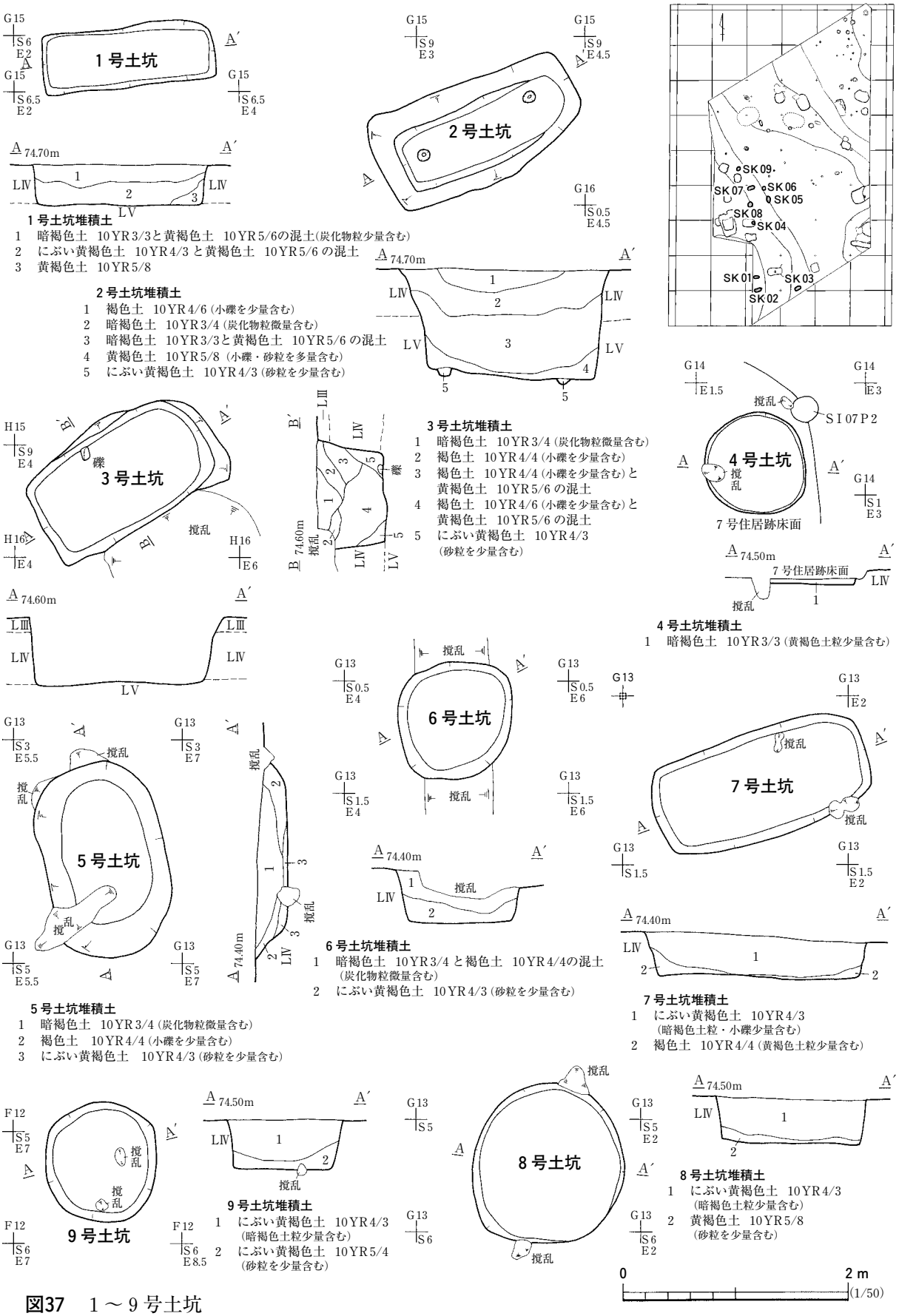
該当遺構　４・６・９・11・12・14・17・18・19・20・21・22・24・25号土坑の計14基が本類に該当する。

平面形　４・９・22号土坑は比較的整った円形を呈する。それ以外は不整な円形または楕円形に近い円形をなす。

周壁　４・６・９・12・14・17・19・21・22号土坑は70～80度の急な角度で立ち上がる。11・18・20・24・25号土坑は立ち上がりが50～60度と比較的緩やかである。

底面　いずれもＬⅣに形成されている。ほぼ平坦であるが，11号土坑は南東側に，18・19号土坑は南西側に若干傾斜している。

堆積土　基本的にはＬⅢに起因する褐色土や暗褐色土が自然堆積している。６・11・17・19・21・25号土坑堆積土には色調の異なる土を多量含む層が認められ，人為堆積と考えられる。



1号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3と黄褐色土　10YR5/6の混土(炭化物粒少量含む)
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3と黄褐色土　10YR5/6の混土
3　黄褐色土　10YR5/8

2号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/6(小礫を少量含む)
2　暗褐色土　10YR3/4(炭化物粒微量含む)
3　暗褐色土　10YR3/3と黄褐色土　10YR5/6の混土
4　黄褐色土　10YR5/8(小礫・砂粒を多量含む)
5　にぶい黄褐色土　10YR4/3(砂粒を少量含む)

3号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4(炭化物粒微量含む)
2　褐色土　10YR4/4(小礫を少量含む)
3　褐色土　10YR4/4(小礫を少量含む)と黄褐色土　10YR5/6の混土
4　褐色土　10YR4/6(小礫を少量含む)と黄褐色土　10YR5/6の混土
5　にぶい黄褐色土　10YR4/3(砂粒を少量含む)

4号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3(黄褐色土粒少量含む)

5号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4(炭化物粒微量含む)
2　褐色土　10YR4/4(小礫を少量含む)
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3(砂粒を少量含む)

6号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4と褐色土　10YR4/4の混土(炭化物粒微量含む)
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3(砂粒を少量含む)

7号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3(暗褐色土粒・小礫少量含む)
2　褐色土　10YR4/4(黄褐色土粒少量含む)

8号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3(暗褐色土粒少量含む)
2　黄褐色土　10YR5/8(砂粒を少量含む)

9号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3(暗褐色土粒少量含む)
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4(砂粒を少量含む)

図37　1～9号土坑

遺　　物(図40，写真65)

出土状況　11・14・18・19・21号土坑の堆積土中(ℓ１)から縄文土器片が出土した。ほとんどが小片で，器面が摩耗しているため，11・18・21号土坑から出土した７点のみ図示した。

縄文土器　40図18～24に示した。18・19は11号土坑から，20～23は18号土坑から出土した土器片である。18～21は単節斜縄文，22はループ文，23は組紐文が施されている。24は21号土坑出土の土器片で，単節斜縄文が施されている。

ま と め

本類は直径１ｍ前後の円形を基調とする土坑である。周壁が70～80度の角度で立ち上がる４・６・９・12・14・17・19・21・22号土坑には，壁面の崩落で円筒形の土坑が崩れたものも含まれると考えられ，貯蔵穴の可能性も推測される。それ以外の土坑の性格は不明である。11・14・18・19・21号土坑の時期は，出土土器と堆積土の状況から縄文時代前期前葉頃と考えられる。遺物が出土していない土坑についても，遺構内堆積土がＬⅢに起因することから同時期のものと推測され，４号土坑は縄文時代前期前葉の７号住居跡より古い。

２ｂ類土坑

遺構の概要(図38，写真50)

該当遺構　10号土坑が該当する。

平面形　南東側が外側に張り出すため，不整な円形を呈する。

周壁　全周が50～60度の角度で立ち上がる。

底面　ＬⅣに形成されている。若干の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。

堆積土　黄褐色土が多量含まれ，人為堆積と考えられる。

遺　　物(図40，写真65)

出土状況　堆積土中(ℓ１)から縄文土器片が１点出土した。

縄文土器　40図17は口縁部片で，口縁部上端の内外面には縦長の刺突文が加えられている。主文様は半截竹管の沈線文で区画された幾何学的な文様で，口縁部上端の刺突文下位には同一工具で山形文が施されている。

ま と め

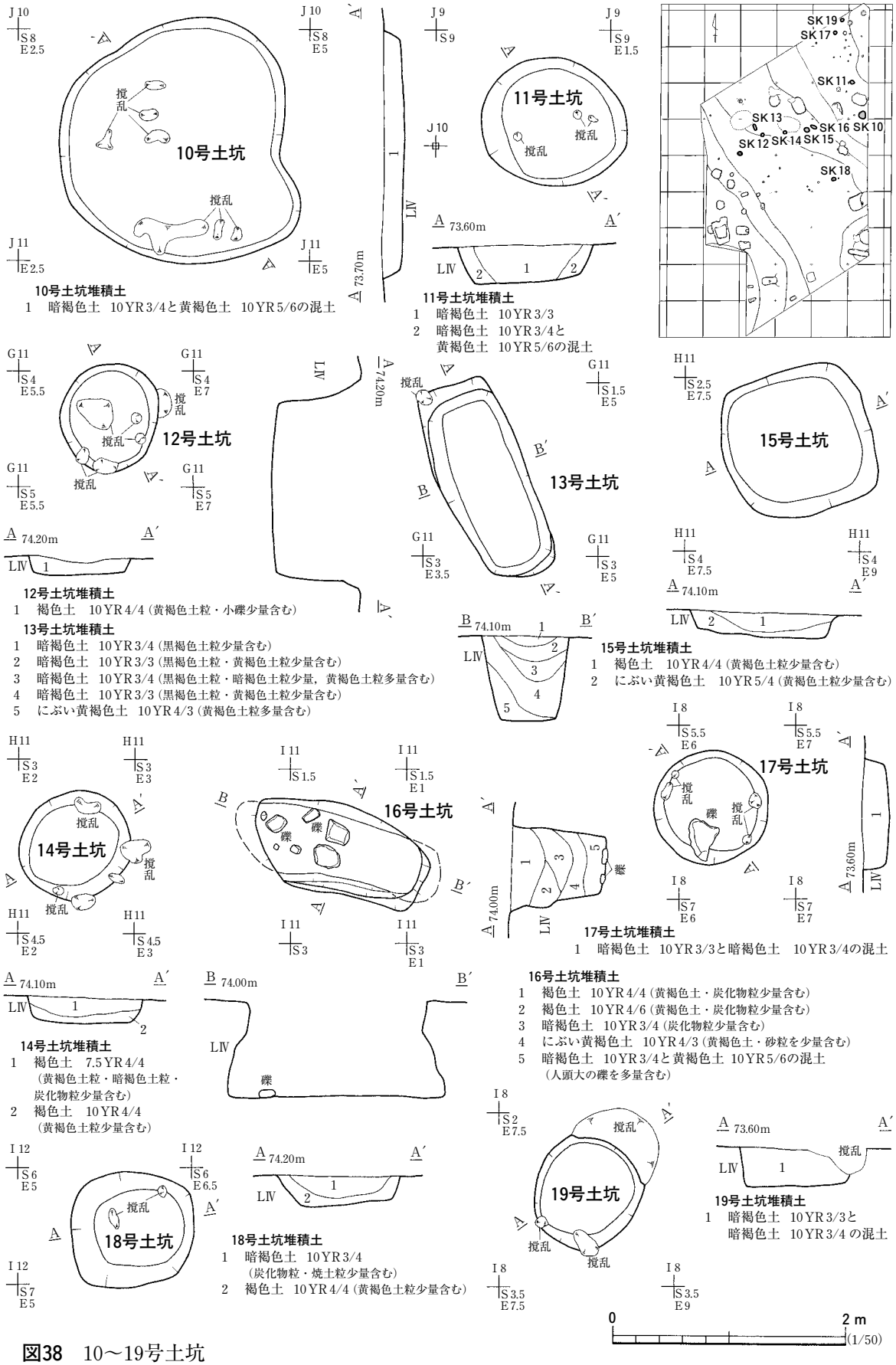
直径約２ｍの不整な円形を呈する土坑である。出土土器と堆積土の状況から，縄文時代前期前葉頃に埋められたと推定される。遺構の性格は不明である。

３ａ類土坑

遺構の概要(図37，写真48)

該当遺構　２号土坑が本類に該当する。

平面形　西半部の壁が崩落し，不整な隅丸長方形を呈する。



10号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4と黄褐色土　10YR5/6の混土

11号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
2　暗褐色土　10YR3/4と
　黄褐色土　10YR5/6の混土

12号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（黄褐色土粒・小礫少量含む）

13号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（黒褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土粒・黄褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（黒褐色土粒・暗褐色土粒少量，黄褐色土粒多量含む）
4　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土粒・黄褐色土粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黄褐色土粒多量含む）

15号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4（黄褐色土粒少量含む）

14号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/4
　（黄褐色土粒・暗褐色土粒・
　炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10YR4/4
　（黄褐色土粒少量含む）

17号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3と暗褐色土　10YR3/4の混土

16号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（黄褐色土・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10YR4/6（黄褐色土・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黄褐色土・砂粒を少量含む）
5　暗褐色土　10YR3/4と黄褐色土　10YR5/6の混土
　（人頭大の礫を多量含む）

18号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
　（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2　褐色土　10YR4/4（黄褐色土粒少量含む）

19号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3と
　暗褐色土　10YR3/4の混土

図38　10～19号土坑

長軸方位　Ｎ67°Ｅで，周囲の等高線とほぼ直交している。

周壁　壁上端部は崩れて傾斜が緩くなるが，中位以下はほぼ直立している。

底面　ＬＶに形成されている。多少の凹凸は認められるもののほぼ平坦である。底面のほぼ長軸線上に小穴２基を確認した。

小穴　平面形は円形を呈し，規模は直径10cm前後，底面からの深さ５～８cmを測る。杭を設置するために掘り込まれた小穴と推察されるが，設置するには規模が小さい。

堆積土　ℓ１・２はＬⅢに，ℓ４はＬⅣに，ℓ５はＬＶにそれぞれ起因する土で，堆積状況から自然堆積と考えられる。ℓ３は黄褐色土塊を多量に含むことから人為堆積と判断している。

遺　　物(図40)

出土状況　堆積土中(ℓ３)から縄文土器片４点，石器２点が出土した。

縄文土器　40図５はループ文が施されている。同図６は縄の圧痕が薄く，分類が特定できない。

石器　40図27・28に示した。27は剝片で，打面と末端部を欠損している。28は礫器である。亜角礫の一端に急斜な加工を加えて，右側縁から上側縁にかけて刃部を作出している。裏面の上側縁には，使用痕跡と推察される磨耗痕が認められた。

ま と め

土坑の形態と底面の小穴から落し穴状土坑と考えられる。ただ，検出された小穴は浅く，杭の設置は困難である。時期は出土土器と堆積土の状況から縄文時代前期前葉頃と考えられるが，周辺に隣接する同時期の竪穴住居跡とは併存しないものと推察される。

３ｂ類土坑

遺構の概要(図37・38，写真48・49・51)

該当遺構　１・３・７・13号土坑が本類に該当する。

平面形　長軸長1.5～２ｍ程の隅丸長方形を呈する。

長軸方位　１号土坑はＮ83°Ｅ，３号土坑はＮ57°Ｅ，７号土坑はＮ71°Ｅ，13号土坑はＮ32°Ｗで，１・３・７号土坑は周辺の等高線とほぼ直交している。

周壁　１号土坑は全周がほぼ垂直に近い立ち上がりを呈する。３・13号土坑の壁上端部は崩れて傾斜が緩くなるが，中位以下はほぼ直立している。７号土坑は全周が70～80度の角度で立ち上がる。

底面　１号土坑はＬＶに，３・７・13号土坑はＬⅣに形成されている。多少の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。

堆積土　１・３号土坑内堆積土には黄褐色土塊を多量に含む層が認められ，一部が人為的に埋められたと考えられる。７・13号土坑の堆積土はいずれもＬⅢに類似する土で，堆積状況から自然堆積と判断した。

遺　　物(図40，写真65)

出土状況　１号土坑の堆積土中(ℓ１・２)から縄文土器片と石器が，３・13号土坑の堆積土中(ℓ１)

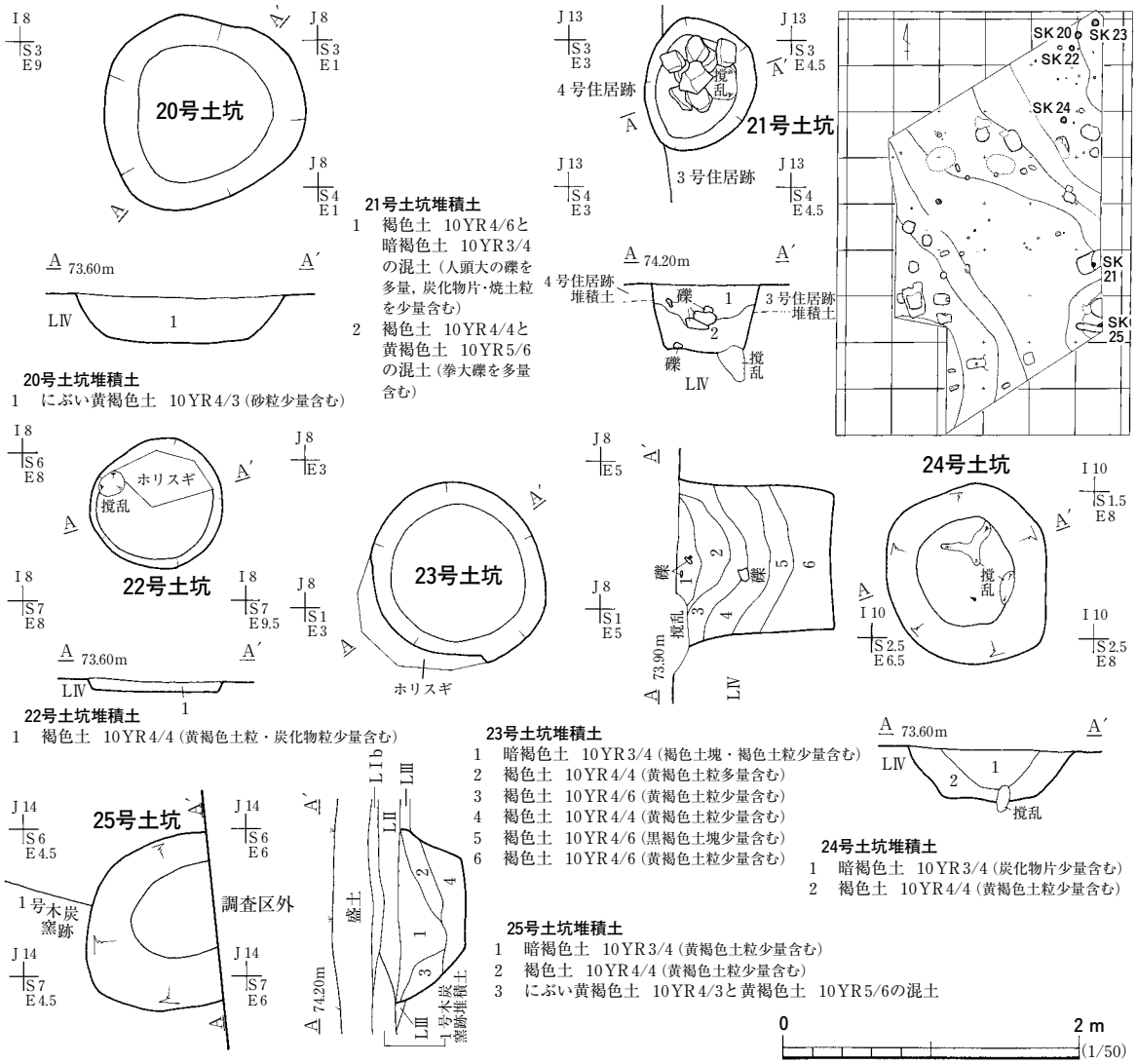


図39　20～25号土坑

から縄文土器片が出土した。

縄文土器　40図１～４は１号土坑から出土した土器片である。１は地文の単節斜縄文に連続刺突文が加えられている。２は口唇部が丸く調整された口縁部片である。無文で，ナデ調整されている。３は単節斜縄文が，４は直前段３条の原体でループ文が施されている。同図７～13は３号土坑から出土した土器片である。７～９は単節斜縄文，11は側面環付縄文が施されている。12・13は底部資料であるが，小片で器面が摩耗しているため詳細は不明である。

石器　40図26は１号土坑から出土した多剝離面打面を有する剝片である。

ま と め

本類は１・３・７号土坑の遺存壁高が35～60cmと浅いが，土坑の形態や長軸方位が２号土坑とほぼ共通することから同時期の落し穴の可能性が高いものと推測される。また，13号土坑も形態と規模から落し穴状土坑と考えられる。時期は出土土器と堆積土の状況から縄文時代前期前葉頃と推定されるが，周囲に検出された同時期の竪穴住居跡とは若干の時間差があると考えられる。

４類土坑

５号土坑(図38，写真49)

遺構の概要

平面形　長軸方位がＮ13°Ｗの楕円形を呈する。

周壁　40～50度の角度で立ち上がる。東側より西側の方が立ち上がりが緩やかである。

底面　ＬⅣに形成されている。若干の凹凸は認められるものの，ほぼ平坦である。

堆積土　いずれもＬⅢに近似する土で，堆積状況から自然堆積と考えている。

遺　　物(図40，写真65)

出土状況　堆積土(ℓ１)から縄文土器片が５点出土した。

縄文土器　40図14・15に示した。14は重層ループ文により文様が描かれている。15は結節縄文が施されている。

ま と め

平面形が南北に長い楕円形を呈し，周壁が外傾する土坑である。出土土器と堆積土の状況から縄文時代前期前葉頃と推定される。性格は不明である。

15号土坑(図38，写真51)

遺構の概要

平面形　一辺125㎝を測る隅丸方形を呈する。

周壁　西壁が円弧を描くように若干外側に張り出すが，それ以外はほぼ直線的である。北西側は70度前後の角度で立ち上がるが，南東側は60度前後と若干緩やかな立ち上がりを呈する。

底面　ＬⅣに形成されている。ほぼ平坦であるが，北東側に若干傾斜している。

堆積土　２層に分けられ，いずれもＬⅢに起因する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

遺　　物　遺物は出土していない。

ま と め

平面形が隅丸方形を呈し，周壁が外傾する土坑である。出土遺物はなく明確な時期の特定はできないが，堆積土がＬⅢ起因の土であることから縄文時代と考えられる。性格は不明である。

16号土坑(図38，写真51)

遺構の概要

平面形　西壁が東壁よりすぼまる不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ71°Ｗである。

周壁　東西壁は内傾して立ち上がる。南北壁は上端部が崩れて傾斜が緩くなるが，中位以下はほぼ垂直に近い立ち上がりを呈する。

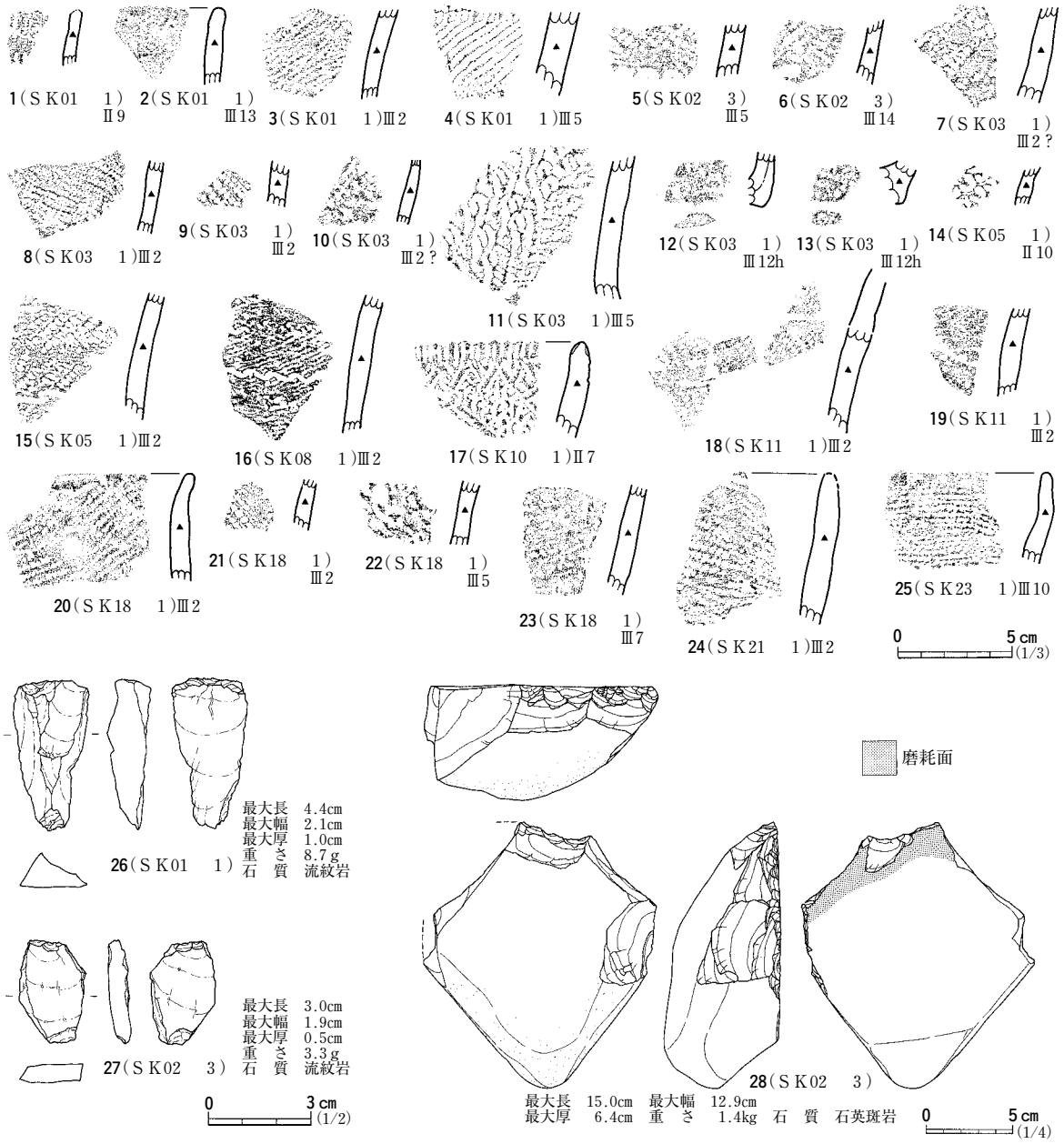


図40　土坑出土遺物

底面　ＬⅣに形成されている。多少の凹凸はあるものの，ほぼ平坦である。

堆積土　５層に分けられる。ℓ１～４はいずれもＬⅢに相当する土で，堆積状況から自然堆積と判断している。ℓ５は黄褐色土塊を多量に含むことから，人為堆積と考えられる。

遺　　物

出土状況　出土遺物は無いが，底面より拳大から人頭大の礫が多く出土した。

ま と め

本遺構は土坑の形態から落し穴状土坑と推測されるが，長軸方向の断面形がフラスコ状を呈するため，貯蔵穴の可能性も考えられる。出土遺物がなく時期の特定はできないが，遺構内堆積土がＬⅢに起因することから縄文時代と考えられる。　（坂　田）

第５節　その他の遺構

１号集石遺構　ＳＳ01　（図41，写真54）

遺構の概要

位置　分布域②，Ｆ・Ｇ10グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.0m（ＬⅣ上面）

掘形の平面形　不整な楕円形　**掘形の規模**　現状の壁上端で，東西長1.2m・南北長1.1m

掘形の遺存壁高　９～21cm　**掘形周壁の立ち上がり**　45～80度

掘形の周壁　北側が急に立ち上がる以外は，比較的緩やかな立ち上がりである。北側の壁上端は被熱により焼土化している。

掘形の底面　ＬⅣに形成されている。北側が段状にくぼみ，南側が深く掘り込まれている。

堆積土　３層に分かれる。ℓ１は礫の上部に堆積していた土で，ＬⅢに類似する暗褐色土である。ℓ２・３は炭化物粒と炭化物片を多量に含む層で，使用時に堆積した土と考えられる。

集石　礫は集中度が薄く，意図的な配置も認められないことから，掘形内に投げ入れられたものと考えられる。礫の大きさは径４～10cm前後の小礫から長径約30cmを測るものまで大小さまざまであるが，径10～20cm前後の礫が主体である。礫の大半に被熱痕跡が認められ，もろくなっているものが多い。掘形の壁上端が焼土化していたことからも，掘形内に礫を投入して火を使用した可能性が高い。また，ℓ２上面にも焼土化範囲が認められることから，この面でも火が使用されたと考えられる。焼土化範囲の厚さは最大で１cmを測る。

小穴　集石の周囲に小穴３基を検出した。集石の周囲に同心円状に巡ることから，本遺構に伴う可能性が高いと考えられる。平面形は円形で，規模は直径28～40cm，検出面からの深さは19～20cmを測る。堆積土はいずれもＬⅢに類似する褐色土で，柱痕は認められない。

分析　掘形内堆積土ℓ１～３に含まれる種実遺体について同定を行った。ℓ２からアメリカセンダングサ近似種（果実）１点，ℓ３からキイチゴ属（核）・ヒサカキ（種子）・ナデシコ科（種子）各１点が検出された（第３章第１節参照）が，いずれも後世に自然混入した可能性が高いと考えられる。

遺　　物（図41）

出土状況　掘形内堆積土（ℓ２・３）から，石器３点が出土した。

石器　41図２～４は表面の中央部に磨耗面が認められた石皿である。特に２の中央部は磨耗によって皿状にくぼんでいる。

ま と め

本遺構は不整な楕円形の掘形に礫が投入された集石遺構である。周壁や底面の一部が焼土化し，礫の大半に被熱痕跡が認められることから，掘形内で礫を加熱した可能性が高い。またℓ２上面に焼土化範囲が認められることから，この面でも火が使用されたと考えられる。周囲からは本遺構と関連する可能性が高い小穴が検出された。出土土器はなく，帰属時期を特定できないが，南側に16

号住居跡が隣接することから縄文時代前期前葉の屋外炉と推測される。　（坂　田）

２号集石遺構　ＳＳ02　（図41，写真54）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｆ・Ｇ11・12グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.0m（ＬⅣ上面）

掘形の平面形　不整な楕円形　**掘形の規模**　現状の壁上端で，東西長60cm・南北長55cm

掘形の遺存壁高　20cm　**掘形周壁の立ち上がり**　40～60度

掘形の周壁　北側と南側の一部が比較的急に立ち上がる以外は，緩やかな立ち上がりである。南西側の壁上端は一部焼土化している。

掘形の底面　ＬⅣに形成され，ほぼ平坦である。

集石　礫は全て亜角礫で，大きさは径５cm前後の小礫と，径10cm前後の拳大の礫と，径20～30cm前後の大型礫から構成される。掘形底面に径20～30cm前後，厚さ15～20cm前後の大型の礫が置かれ，その上に拳大の礫や小礫が積み重ねられている。大半の礫に被熱痕跡が認められ，もろくなっているものが多い。壁上端に焼土化が認められることからも，掘形内に礫を積み上げて火を使用した可能性が高いと考えられる。

堆積土　２層に分けられる。ℓ１は礫上部に堆積していた暗褐色土で，ＬⅢに類似する土である。ℓ２は炭化物粒を多量に含む黒褐色土で，遺構の機能時に堆積した土と考えられる。

遺　　物

出土状況　遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は掘形の底面に大型の礫が置かれ，その上に拳大の礫や小礫が積み上げられた集石遺構である。大半の礫に被熱痕跡が認められ，周壁の一部も焼土化していることから，本遺構で火が使用されたものと考えられる。本遺構の周囲からは小穴は検出されていない。

本遺構の性格は独立した屋外炉の可能性が高いと考えられる。時期は出土遺物がなく不明であるが，周囲の遺構から縄文時代前期前葉と推測される。　（坂　田）

１号焼土遺構　ＳＧ01　（図41，写真54）

遺構の概要

位置　分布域①，Ｇ12・13グリッド　**検出面**　ＬⅣ上面　**標　高**　74.1m（ＬⅣ上面）

重複　なし　**被熱範囲の平面形**　不整な楕円形

被熱範囲の規模　検出面で，南北長73cm・東西長38cmを測る。

被熱範囲の厚さ　最大で12cm　**掘形の平面形**　不整な楕円形

掘形の規模　現状の壁上端で，南北長143cm・東西長75cm

掘形の遺存壁高　23～28cm　**掘形周壁の立ち上がり**　30～60度

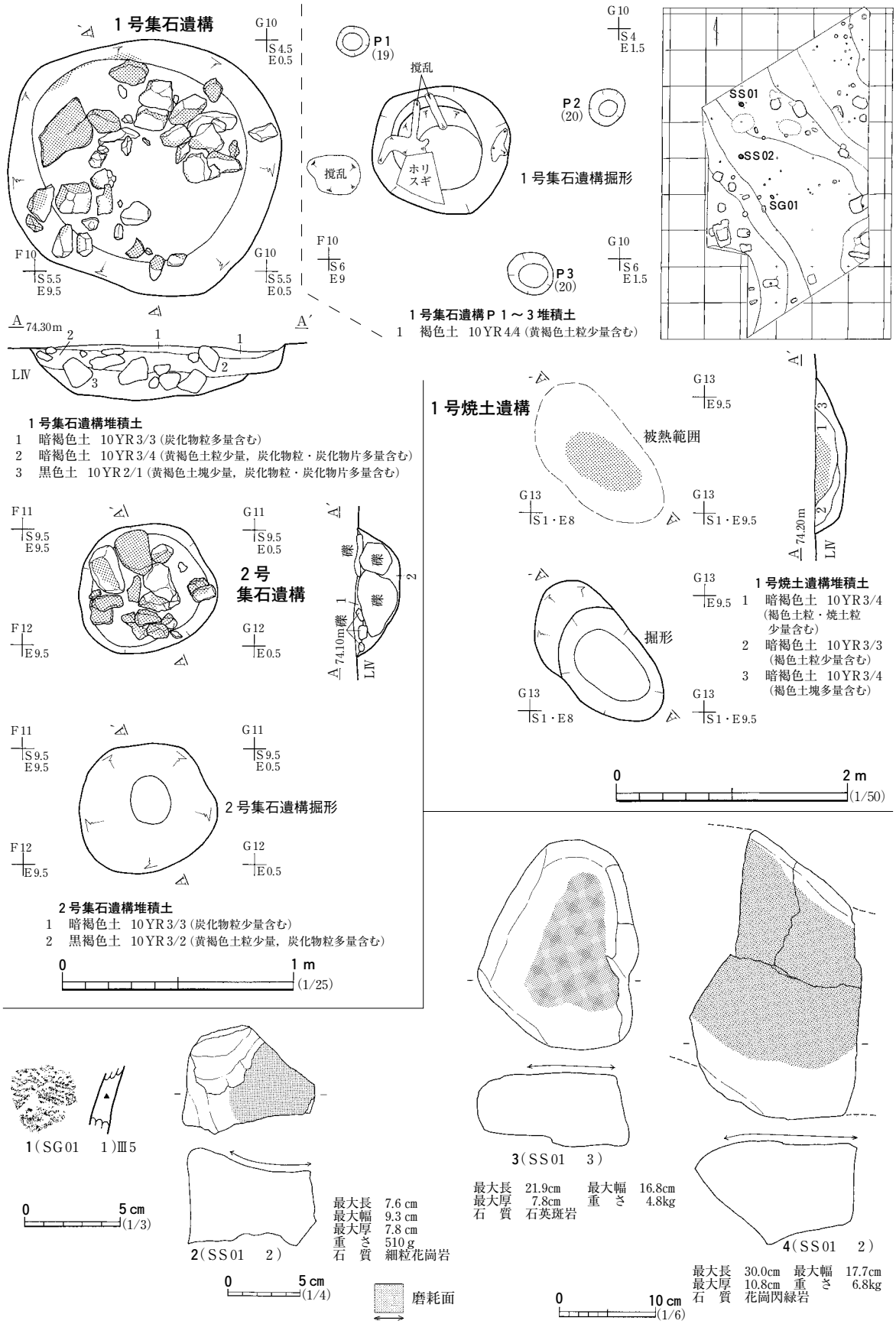


図41　１・２号集石遺構，１号焼土遺構と出土遺物

掘形の周壁　北西側は緩やかな段状の立ち上がりを呈し，それ以外は比較的急に立ち上がる。

掘形の底面　ＬⅣに形成されている。ほぼ平坦であるが，南西側に若干傾斜する。

遺　　物(図41)

出土状況　掘形内堆積土(ℓ１・３)から，縄文土器片が５点出土した。

縄文土器　41図１は側面環付縄文が施されている。

ま と め

本遺構は掘形をもつ焼土遺構である。遺構の性格は周囲に関連するピットが検出されていないことから，独立した屋外炉の可能性が高い。帰属時期は出土土器と周囲の遺構から縄文時代前期前葉と推測される。

(坂　田)

１号木炭窯跡　ＳＣ01　(図42，写真55・56)

遺構の概要

位置　分布域③，Ｊ14グリッド　**掘込面**　ＬⅡ上面　**検出面**　ＬⅢ上面

標高　74.0ｍ(検出面)

重複　(古)25号土坑　**平面形**　長大な隅丸長方形

規模　現状の壁上端で，東西長5.9ｍ以上・南北長1.6ｍを測る。　**主軸方位**　N78°W

遺存壁高　10～22㎝　**周壁の立ち上がり**　40～50度

周壁　遺構の東側は，今回の発掘では調査することができなかった。したがって，遺構の全長については把握できなかった。西壁は円弧を描くように外側に張り出し，北・南壁はほぼ並行している。

底面　ＬⅣに形成されている。土質はシルト質であり，底面・周壁には礫が露出したような箇所は認められない。中央部に幅30㎝，底面から深さ６㎝程の溝が，検出された。またその溝に連結するように底面西端部は擂鉢状にくぼんでおり，最深部は検出面から22㎝を測る。

底面および周壁には広範囲にわたって，被熱範囲が認められた。特に西端部の周壁際と中央の溝沿いは，強く被熱していた。これら底面に認められたくぼみと溝は，木炭焼成時の調湿に関連するものと考えている。

堆積土　５層に分けられ，ℓ２・３に１～５㎝大の炭化物片が多量に充填されていた。このことから，本遺構は木炭窯跡と判断し，これら炭化物(木炭)が遺構内で焼成されたものと考えている。

しかしながら検出された炭化物片は砕片化が進んでおり，長さ５㎝を超えるものはなかった。したがって炭化物片は焼成段階を保ったまま検出されたとは考えにくく，焼成後に廃棄されたものと考えている。

またℓ４・５には，炭化物とともに焼土塊・粒も包含されていることから，これらも木炭焼成に関わる堆積物と考えられる。この他，ℓ１にはＬⅢに起因する暗褐色土が自然堆積しているが，これは木炭窯機能時に関わるものではないと推察している。

分　析　ℓ２で検出された炭化材２点について樹種同定を行ったところ，いずれもコナラ属クヌギ

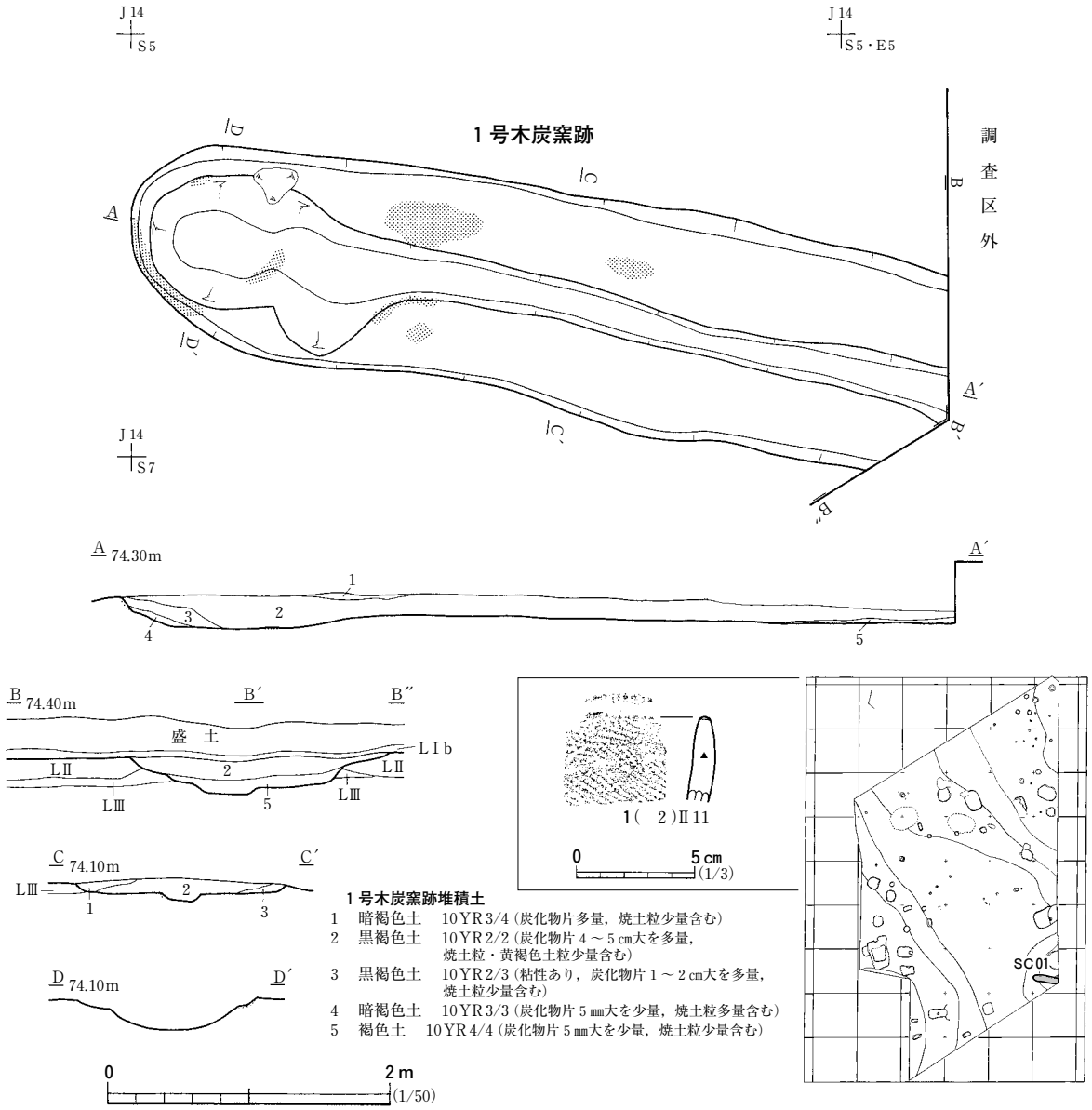


図42　１号木炭窯跡と出土遺物

節であるという結果を得た（第３章第２節参照）。

同じく，ℓ２で検出された炭化材の炭素年代測定（液体シンチレーション法）を実施したところ，補正^{14}Ｃ年代値710±50（年BP），暦年代AD1290年という結果が得られた（第３章第３節参照）。

遺　　物（図42，写真65）

出土状況　縄文土器片３点が堆積土中（ℓ２）から出土したが，遺構の年代観を定めるものではないと考えている。

縄文土器　42図１は口唇部に刻み目が加えられている口縁部片で，単節斜縄文が施されている。

ま と め

本遺構は，長大な隅丸長方形を呈する木炭窯跡である。遺構の規模・平面形状などから判断すると木炭の焼成方法は，伏焼法であった可能性が高い。中央部が焼成部，西側が焚口部であったと考

えられる。伏焼法とは特別に天井構造を設けない開放窯タイプの木炭窯跡で，一般的にはまず薪材を敷き並べて，その上に枝や葉などの可燃物を重ねて，さらにオガ屑などを混ぜた土で覆って外気を遮断したものと推察される。

本遺構の年代については出土遺物だけでは判然としないが，掘込面がＬⅡ上面であることや炭素年代測定の年代値などを参考にすると中世以降に構築された遺構であると考えている。　（門　脇）

小　穴　群　ＧＰ　（図３，表２）

本遺跡では，計26基の小穴が確認されている。これらの平面形は円形・楕円形を呈している。平面規模・深さは計測値に幅があり，統一的ではない。分布状況も調査区内に一様に分布していることから，特徴を抽出できるものではない。特に住居跡群の周囲に多くが分布している訳ではないので，住居関連施設ともいいがたい。またこれら小穴群には出土遺物もなく，時期を判断する材料に乏しい。ただ堆積土がＬⅢに起因する褐色系の土質であることから，小穴群の帰属年代は縄文時代前期頃と考えている。　（門　脇）

表２　小穴一覧表

単位：cm

区	No.	長径	短径	深さ	層	堆　積　土		
F10	1	38	36	30	単層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土粒含む
F12	1	44	41	35	単層	暗褐色土	10YR3/3	褐色土粒含む
F13	1	36	32	34	単層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒少量含む
G12	1	46	34	28	単層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒少量含む
G12	2	52	40	15	単層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒少量含む
G15	1	40	38	40	単層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土粒含む
G15	2	38	34	25	単層	暗褐色土	10YR3/3	褐色土粒含む
H11	1	42	38	22	単層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土粒含む
H12	1	44	40	29	単層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土粒含む
H12	2	24	22	25	単層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土粒含む
H12	3	52	32	20	単層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土粒含む
Ｉ８	1	55	51	35	単層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土粒含む
Ｉ８	2	42	40	25	単層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土粒含む
Ｉ９	1	46	38	35	単層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物粒少量含む
Ｉ９	2	38	34	25	単層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土粒含む
Ｉ９	3	30	26	24	単層	褐色土	10YR4/4	黄褐色土粒含む
Ｉ９	4	30	28	30	単層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土粒含む
Ｉ10	1	33	30	20	単層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
Ｉ11	1	40	38	35	単層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土粒含む
Ｉ12	1	29	26	25	単層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土粒含む
Ｉ12	2	28	24	15	単層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土粒含む
Ｊ８	1	38	34	20	単層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
Ｊ８	2	38	33	34	単層	暗褐色土	10YR3/4	
Ｊ９	1	48	40	40	単層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土粒含む
Ｊ９	2	56	46	20	単層	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒含む
Ｊ10	1	22	20	25	単層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	

第６節　遺構外出土遺物

概　要（表３）

本遺跡においては基本土層ＬⅠ～ＬⅢと風倒木痕から，縄文土器片1615点，土製品１点，石器67点が出土している。なお，ＬⅣ・ＬⅤから遺物は出土していない。

縄文土器の出土量を層位別ごとに見ると，ＬⅠａが53点，ＬⅠｂが1190点，ＬⅡが18点，ＬⅢが145点である。第２章第１節で述べた通り，ＬⅠｂは調査区のほぼ全域に堆積しており，遺物の出土量が最も多い。基本土層から出土した縄文土器は，前期前葉に比定されるものが大半を占め，他に早期や中期，後期の土器片があるが，出土数はいずれも数点のみである。そのため，表３は縄文時代前期前葉に比定される土器片の分布状況と見て差し支えはない。この時期の土器片は調査区南西側のＦ13・14，Ｇ14～16，Ｈ15グリッドから多く出土しており，この区域は最も多くの遺構が検出された分布域①に相当する。また，第２章第１節で示した土器分類別ごとの分布傾向は特に認められない。

縄文土器（図43～48・写真66～70・72）

Ⅰ群土器　縄文時代早期に比定される土器群で，出土数は極めて少ない。43図１～３に示した。１は浅い沈線で格子目文が施されている。２は内外面に条痕文が施されている。３は条痕文は施されていないが，胎土と色調から条痕文系土器と考えられる。

Ⅱ群土器　縄文時代前期の土器で，口縁部から頸部にかけて文様帯が巡るものである。43図４～64，44図１～12に示した。

１類　縄圧痕文により主文様が施されるものである。43図４は口縁部が緩やかに外傾する器形で，平坦口縁である。１段撚りの縄圧痕文が横位に数段施され，口縁部上端には刻み目が認められる。

２類　集合沈線で文様が描かれるもので，43図５・６に示した。５は矢羽根状の文様が施され，口縁部上端に刻み目が加えられている。６は口唇部に刺突が施され，口縁部が小波状を呈する。山形状の文様が描かれ，文様頂部に垂下する沈線文が施されている。

３類　頸部に段を有するもので，43図７・８に示した。７は頸部が肥厚し，８には低い隆帯が貼付されている。地文はいずれも結束羽状縄文である。

４類　連続する刺突文により文様が描かれるもので，43図９～19に示した。９・10は口縁部が直線的に外傾する器形である。９は横位の平行沈線文下部に，ヘラ状工具による連続刺突文で山形状の文様が描かれている。11は山形状の文様が半截竹管による連続刺突文で描かれ，文様下端は同一工具による横位沈線文により区画されている。13は無文部と地文部が半截竹管による横位沈線文で区画され，これに沿う刺突文と垂下する沈線文が同一工具で施されている。10・14～19は小片のため文様構成は不明だが，10・12～15は半截竹管，16・19はヘラ状工具，17は棒状工具による連続刺突文でそれぞれ文様が描かれている。19は半截竹管による押し引き状の刺突文が横位に数段施され

ている。

５類　相互刺突文が施される土器で，43図20～24に示した。22は口縁部が外反する器形で，23は口縁部が直線的に外傾している。いずれも半截竹管により，横位の平行沈線文と相互刺突文が施されている。刺突文は20・24が列点状を呈し，それ以外は爪形状である。20・21は口縁部上端に縦長の刺突文が施されている。22は相互刺突文に小瘤が貼付されている。地文は22・23がループ文，24が組紐文である。

６類　沈線文により文様が描かれるもので，43図25～33に示した。25・26は口縁部片である。半截竹管による山形文が描かれ，25は口縁部上端と沈線間に刺突が施されている。27～29は半截竹管により幾何学的な文様が描かれている。30は沈線文により斜格子状の文様が施されている。31～33は文様に小瘤が貼付されているもので，31は鋸歯状文，32は蕨状文が施されている。また，31は沈線文の上部に，32は沈線間に，33は沈線文下部にそれぞれ刺突が加えられている。

表３　遺構外出土遺物グリッド別点数

	F	G	H	I	J
8				土器：0 石器：0	土器：0 石器：0
9			土器：22 石器：0	土器：10 石器：0	土器：5 石器：1
10	土器：0 石器：0	土器：46 石器：1	土器：67 石器：6	土器：14 石器：2	土器：39 石器：1
11	土器：25 石器：2	土器：15 石器：0	土器：16 石器：0	土器：90 石器：1	土器：0 石器：0
12	土器：73 石器：0	土器：11 石器：2	土器：50 石器：3	土器：49 石器：1	土器：48 石器：0
13	土器：305 石器：8	土器：6 石器：0	土器：28 石器：3	土器：41 石器：2	土器：59 石器：0
14	土器：154 石器：4	土器：77 石器：16	土器：71 石器：0	土器：7 石器：0	土器：12 石器：1
15		土器：69 石器：1	土器：91 石器：7	土器：13 石器：4	
16		土器：90 石器：0	土器：13 石器：1	**遺構外出土遺物　総数** 土器（縄文土器）：1616点 石器（剥片，石核含む）：67点	

９類　地文上に刺突文が施されるもので，43図34・35に示した。34は円形の刺突文が，35は半截竹管による沈線文に連続刺突文が施されている。地文は34が異条縄文，35に単節斜縄文である。

10類　重層ループ文により山形や菱形状の文様が描かれるもので，43図36～60に示した。36と41，42と43はそれぞれ同一個体である。器形は口縁部が外傾するものと，緩やかに外反するものがある。36は口縁部が平坦口縁で，口縁上端部が肥厚する。37は口縁部に山形状の小突起が付いている。38・41は文様の中心部に竹管による円形刺突文が施されている。42・57～60は沈線文により重層ループ文が区画されているもので，出土数は少ない。

11類　口唇部にのみ装飾が加えられているもので，43図61～63に示した。61・63は口縁部が直線的に外傾する器形で，62は口縁部上端が若干外反する。口唇部の形態は，61がやや外削ぎ状を呈し，62・63は丸みをもつ。地文はいずれも撚糸文で，62・63は口唇部にも同一原体を押しつけた刻み目風の装飾が施されている。61は内面にも撚糸文が認められる。

12類　口縁部上端のみ装飾が施される土器である。いずれも口縁部が緩やかに外傾する器形で，口縁部は43図63・44図１が平坦口縁，44図２が波状口縁を呈し，44図３は口唇部に刺突が施されることで小突起が形成されている。口唇部の形態は43図64・44図３が内削ぎ状を呈し，44図１・２が丸みをもつ。口縁部上端には縦長の刺突文(43図64，44図３)や，縦位の短沈線(44図１・２)が施されている。地文を特定できたものは43図64・44図１で，いずれもループ文が施されている。

13類　平行沈線文が施されるもので，44図４～10に示した。７・８は同一個体である。４～６は口縁部が外傾する器形で，７は口縁部が緩やかに内湾している。口縁部は４・５・７が平坦口縁である。６は２個一対の山形突起をもち，突起内面は肥厚している。５・６・９は半截竹管による沈線文である。

14類　比定される分類が不明なもので，44図11・12に示した。いずれも地文上に斜位の沈線文が施されている。

Ⅲ群土器　縄文時代前期の土器で，地文のみで構成されるものである。44図13～59，45～47図，48図１～18に示した。

１類　１段撚りの斜縄文が施される土器である。44図13～15は口縁部が直線的に外傾する器形で，口縁部は平坦口縁である。口唇部は13・14が丸く，15は平坦に調整されている。いずれもＬ撚りの施文原体で斜縄文が施されている。13には内面に作成途中の補修孔が認められる。

２類　２段撚りの斜縄文が施されるもので，44図16～55に示した。54・55は同一個体である。口縁部が直線的に外傾するものが多いが，緩やかに外反するもの(44図28)も見られる。口縁部は平坦口縁のものが主体であるが，山形の小突起が付くもの(44図32)もある。施文原体は直前段２条のものが多く認められる。27・42・49～55は結節縄文が施されている。

３類　非結束の羽状縄文が施される土器である。44図56～59，45図１～12に示した。44図56～59，45図１は口縁部が外傾する器形で，口唇部の形状は平坦なもの(44図56)と，丸いもの(44図57・58，45図１)，外削ぎ状のもの(44図59)がある。44図56・57，45図３・５・９は同じ段内に２種類の原体を交互に回転させているもので，44図56，45図３は縦位の羽状縄文が形成されている。施文原体は単節の直前段２条のものが多いが，直前段３条のもの(44図57)や，３段撚りのもの(44図59)も見られる。

４類　結束羽状縄文が施されているもので，45図13～16に示した。13は菱形状の羽状縄文が構成されている。16は結束部が施されている。

５類　ループ文が施される土器で，45図17～59，46図１～42に示した。45図30と31，同図48と49，同図52と53はそれぞれ同一個体である。口縁部が直線的に外傾する器形のものが多いが，口縁部が

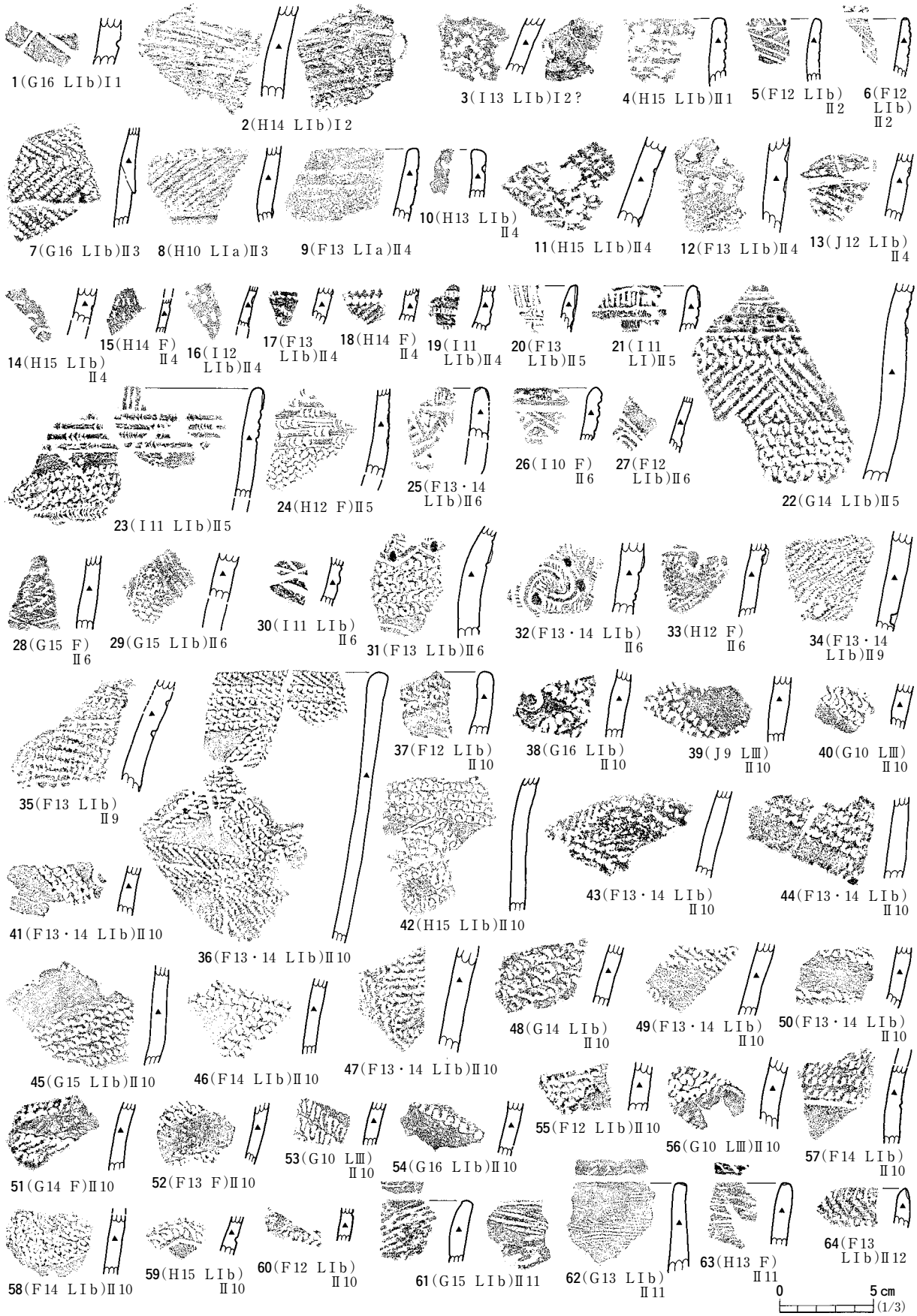


図43　遺構外出土遺物（１）

図44　遺構外出土遺物（２）

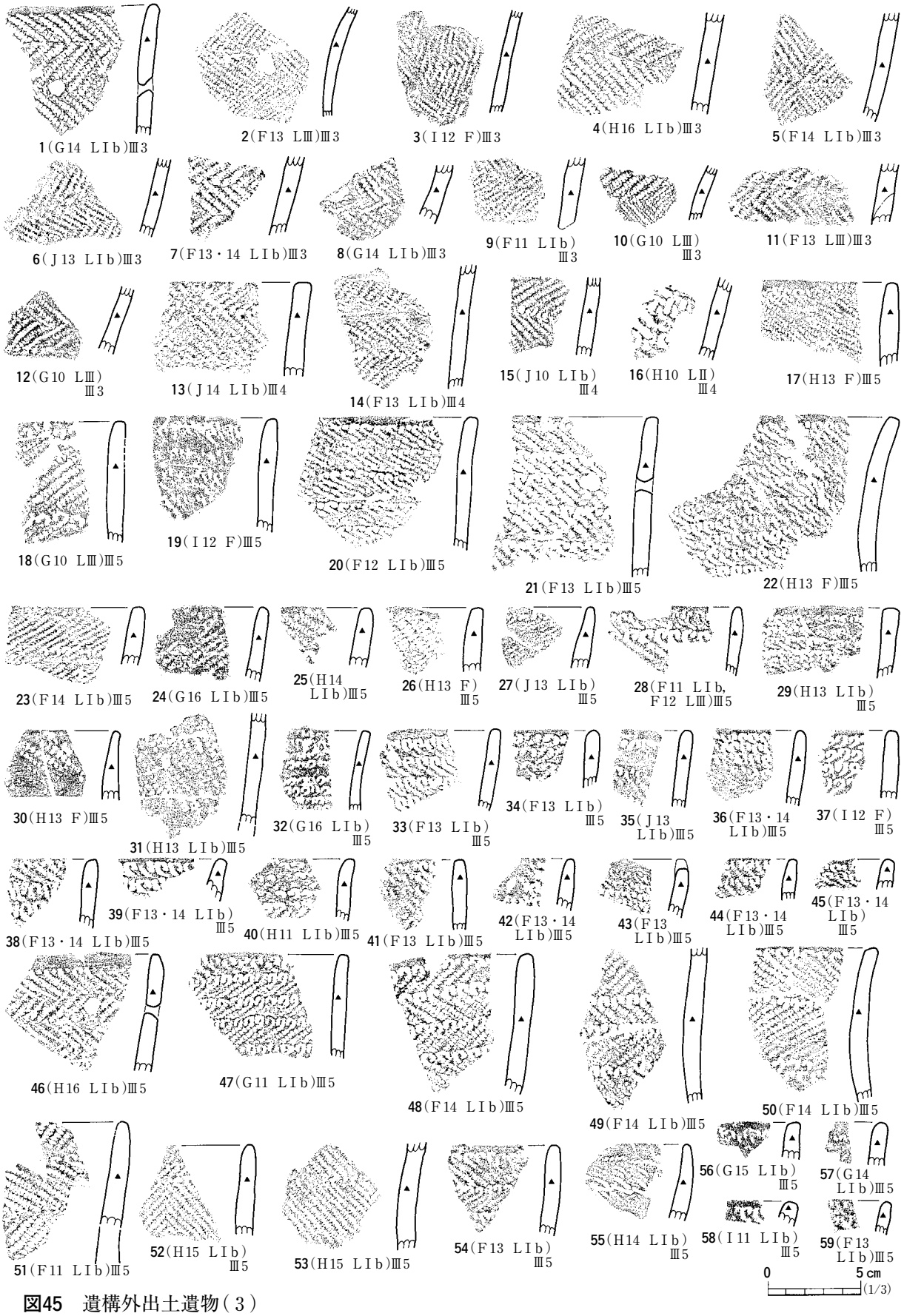


図45　遺構外出土遺物（３）

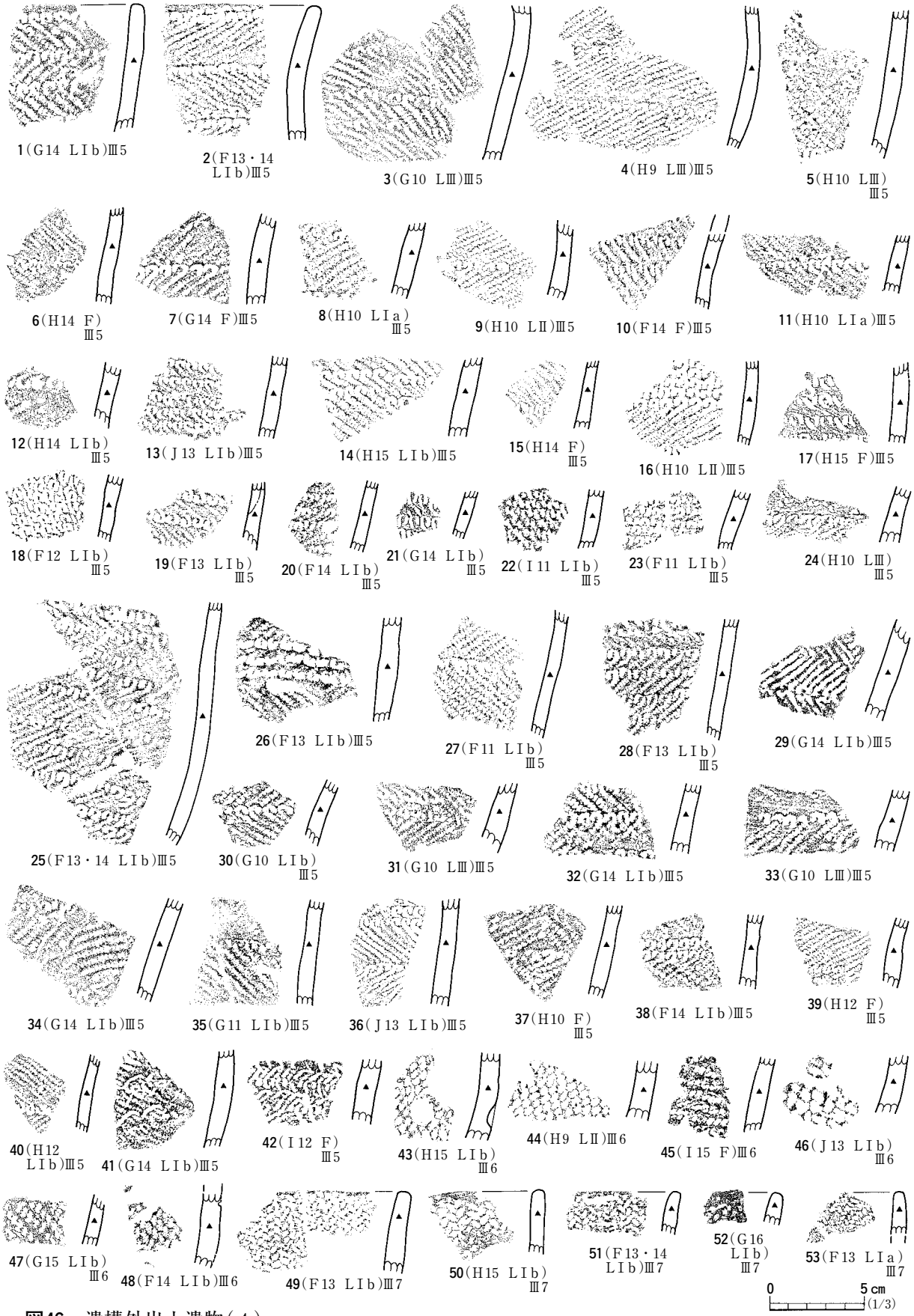


図46　遺構外出土遺物（４）

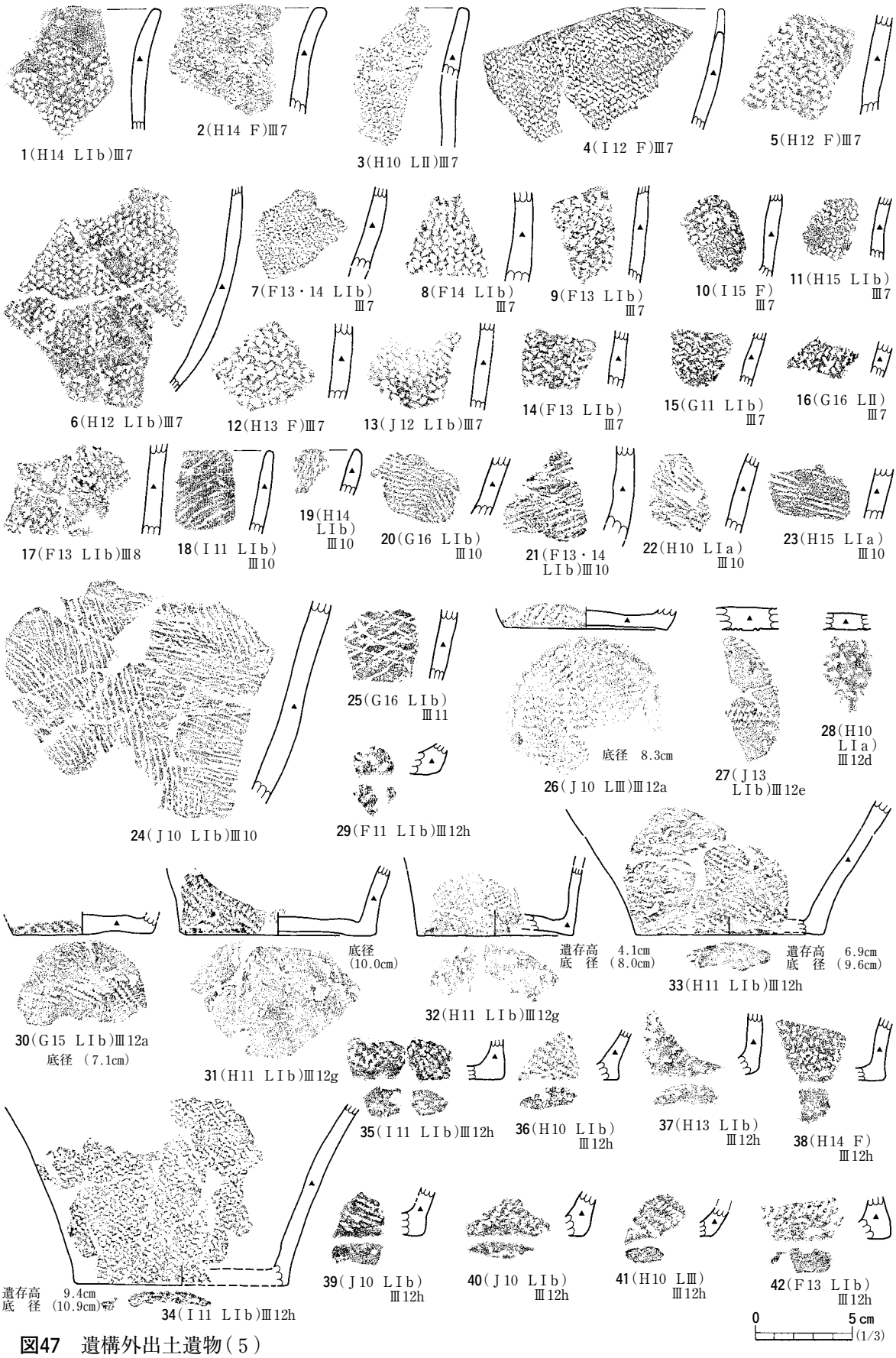


図47　遺構外出土遺物（５）

外反するもの(45図22・32・50・51，46図２)もある。口縁部は平坦口縁のものが多いが，波状口縁を呈するもの(45図26・43)も見られる。45図17～21・23～27・30・31，46図３～12・15は施文幅の広いループ文が，45図22・29・32～45，46図13・17～23は重層ループ文が，45図28，46図14・16は両方が施されている。それ以外は２種類の原体で羽状縄文が形成されているものである。45図55，46図42は側面環付縄文が施されている。46図41は原体が結節されている。

６類　３段撚りの原体が施される土器で，46図43～48に示した。施文原体は43・44・47・48がＲＬＲ撚りで，45・46がＬＲＬ撚りである。

７類　組紐文が施されているもので，46図49～53，47図１～16に示した。46図49～53，47図４は口縁部が外傾する器形で，47図１～３は口縁部が緩やかに外反している。口縁部は47図４が山形波状を呈し，それ以外は平坦口縁である。施文原体は２条ＬＬ・２条ＲＲと２条ＬＬ・２条ＬＬのものが多い。

８類　異節斜縄文が施されているもので，本遺跡では47図17に示した１点のみの出土である。

10類　撚糸文が施されている土器で，47図18～24に示した。18・19は口縁部が直線的に外傾する器形である。口唇部の断面形は18が丸みをもち，19は外削ぎ状を呈する。撚糸文は18・20～23は斜位に，19は縦位に，24は羽状に施されている。

11類　網目状撚糸文が施されるもので，本遺跡では47図25に示した１点のみ出土している。

12類　底部資料を47図26～42，48図１～４に示した。47図26～42，48図１・２は平底である。47図31～34・36・38は底部から胴部が外反しながら立ち上がる器形で，47図37，48図１は外傾しながら立ち上がるものである。それ以外は胴部の遺存率が悪く判断できなかった。47図26・30は底面に胴部下部と同じ原体で単節斜縄文が施されている。47図27はヘラ状工具，同図28は半截竹管による刺突が底面に施されている。47図31・32は底面が無文である。48図３・４は無文の尖底土器で，早期末葉から前期前葉にかけての資料と推定される。

Ⅳ群土器　縄文時代中期の土器群である。48図19～23・25に示した。19は渦状の沈線文が，20は隆線による文様がそれぞれ施されている。21～23は沈線で区画された無文部と縄文部で文様が構成されている。25は横位の隆帯が貼付されているもので，胎土から加曽利Ｅ式土器と考えられる。48図27は縄文時代中期末葉から後期初頭の資料と考えられる。

Ⅴ群土器　縄文時代後期の土器群で，48図24・26・28～33に示した。26は波状口縁の波長部に施されるＳ字形の貼付文で，円形刺突文が加えられている。24は小瘤が，27は曲線的な隆帯が貼付されている。28～33は櫛歯状工具による条線文が施されている。

土 製 品(図48，写真70)

遺構外からは土偶が１点出土している。48図34は板状土偶の胴部破片である。手は胴部から若干突出させて表現している。一面に爪で文様が施されている他は，特に文様は認められない。表面は，ケズリとナデにより成形されている。時期は縄文時代前期前葉頃と考えられる。　(坂　田)

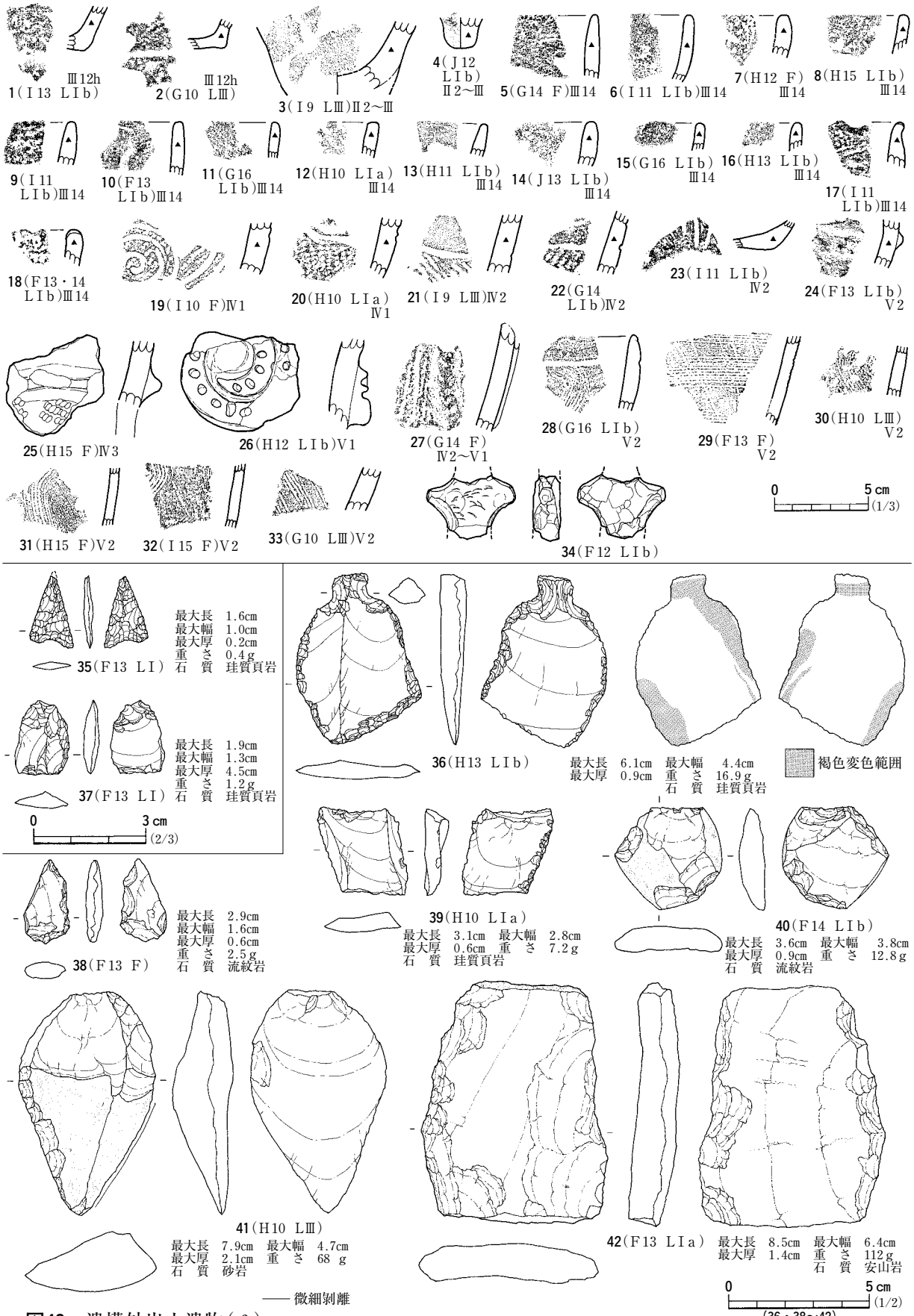


図48　遺構外出土遺物（６）

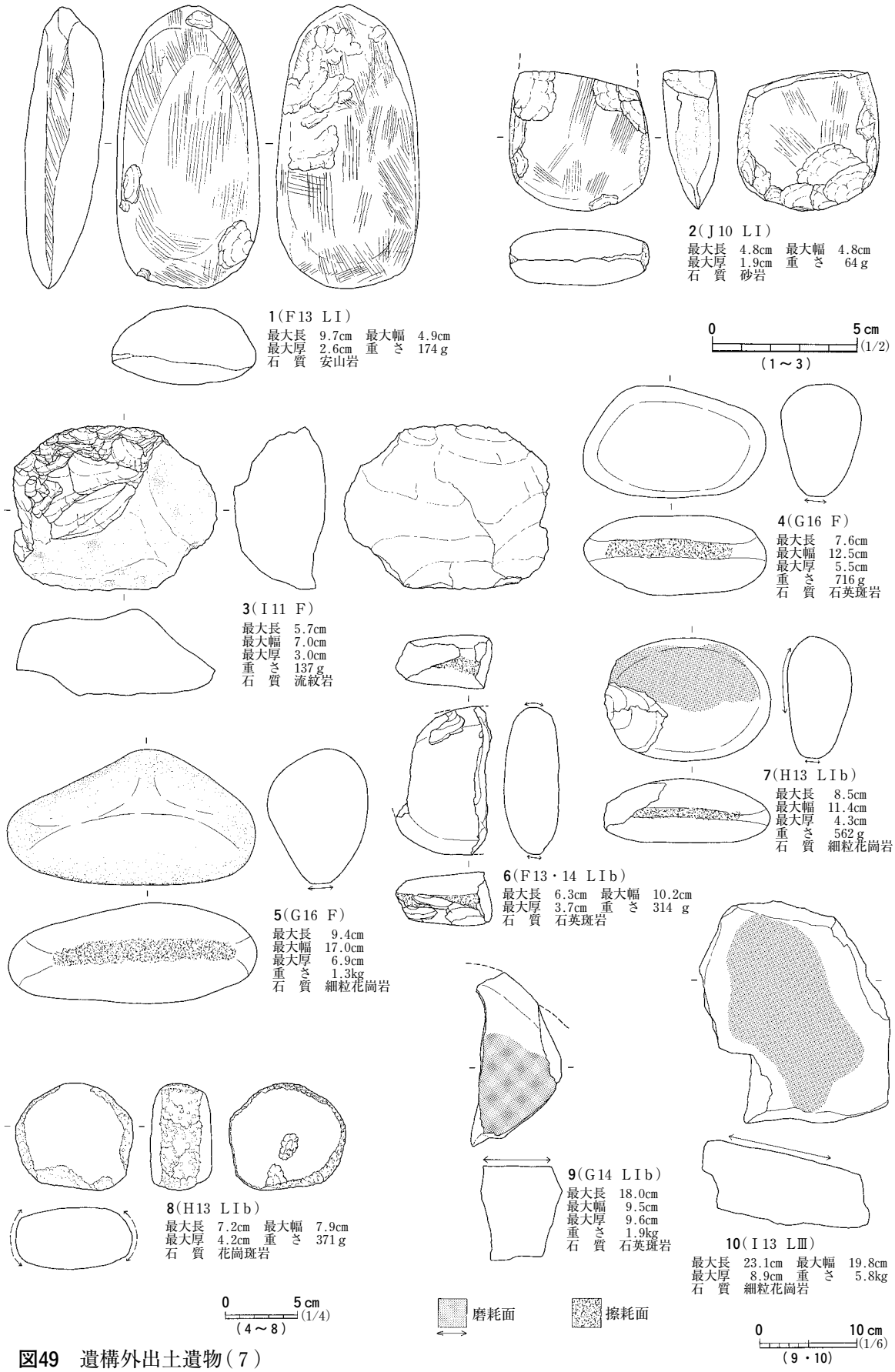


図49　遺構外出土遺物（７）

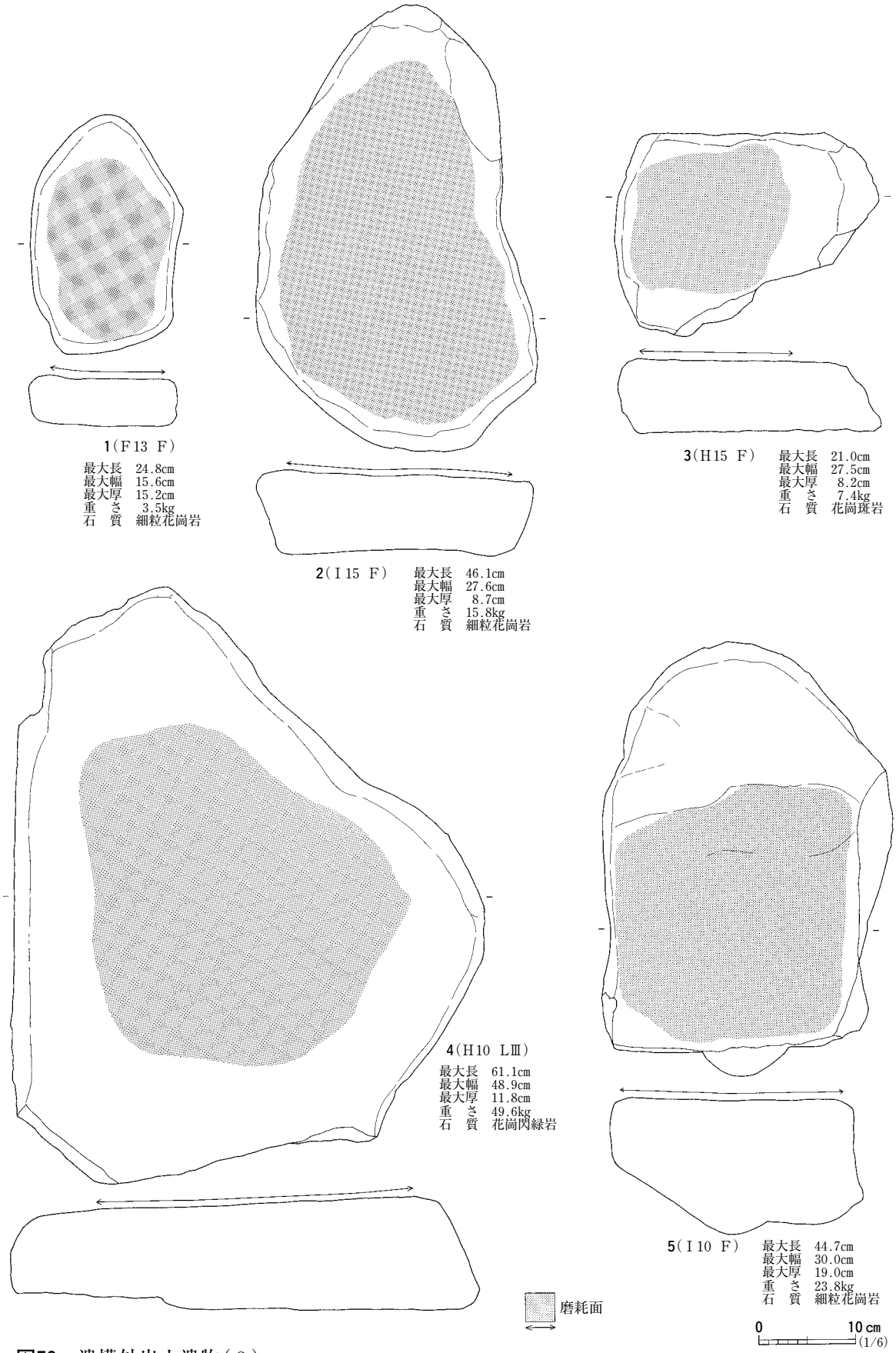


図50　遺構外出土遺物（８）

石　器(図48～50，写真71)

遺構外から出土した石器の総数は，67点である。石器別の内訳は，石鏃１点，石匙１点，打製石斧１点，磨製石斧２点，削器３点，二次加工のある剥片３点，剥片22点，磨石類27点，石皿類７点となる。

48図35は本遺跡で唯一発見された凹基式石鏃である。先端部と基部の一部を欠いている。同図の36は，やや幅広の縦形石匙である。灰白色の凝灰質頁岩製で他の茶褐色を呈する珪質頁岩とは材質が異なる。背面にはほぼ全側縁に整形加工が施されていたが，腹面側の下側縁は未加工のまま残されていた。図に示したように，器面には褐色に変色した範囲が認められた。これは蛍光Ｘ線分析の結果，変色の原因が鉄分に由来することが指摘されている(第３章第４節)。このことから変色の原因は，少なくともタールや漆などの有機質成分に起因するものではないことが明らかになった。また刃縁部には磨耗などの使用痕跡は認められなかった。

同図37・38は，二次加工のある剥片である。ともに加工痕は押圧剥離によるものと推察されることから，石鏃など小形剥片石器の未製品と考えられる。同図39・41は削器である。39では腹面右側縁，41では背面左側縁に調整剥離が観察された。同図40は楔形石器である。背腹両面に階段状剥離痕が連接し，縦断面形が凸レンズ状を呈している。

同図42は，板状を呈する打製石斧の基部側の破片である。器面の風化が著しく，リングや稜線などは不明瞭である。

49図１・２は磨製石斧である。１は扁平な礫を素材に若干の整形加工を施して，石斧に仕上げている。刃部に偏りがあるのは，おそらく自然礫の形状に左右されたためと考えられる。器面には粗い研磨痕が観察される。２は磨製石斧刃部の破片資料である。側面部に敲打整形痕が看取される。１と同様，器面には粗い研磨痕が観察される。

同図３は流紋岩製の大形剥片である。背面上端部は階段状剥離痕が連接していることから，石核の調整に伴う剥片の可能性がある。

同図４～７は，扁平な礫の下側面に，ザラザラとした擦耗面が観察される資料である。観察された擦耗面は，いずれも面的に潰れ，自然の礫面の丸みが失われている。４・５のように断面が三角形を呈するものもある。

同図８は周囲に顕著な敲打痕が観察された磨石類である。縁辺が面的に潰れていることから，かなりの使用頻度が伺える資料である。中央には凹部も観察された。

49図９・10，50図１～５は石皿である。これらは扁平な礫を素材とし，未加工のまま石皿として利用している。いずれの石皿も機能面は１面であり，両面が利用された痕跡は確認できなかった。機能面中央には平滑な磨耗面を有しているが，特に49図９・50図５は，磨耗の度合いが顕著で，光沢を帯びている。

(門　脇)

第３章　自然科学分析

第１節　上平Ａ遺跡の種実遺体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

上平Ａ遺跡は，福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平に位置する。本報告では，縄文時代前期の竪穴住居跡の炉跡および集石遺構内の堆積土に含まれる種実遺体の分析を行い，当時の植物利用に関する資料を得る。

２　試　　料

試料は，竪穴住居跡の炉跡および集石遺構内から採取された土壌５点(試料番号１～５)である。各試料とも炭化物を多く含んだ状態である。各試料の詳細は，分析結果と共に表４に記す。

３　方　　法

土壌試料各200cc程度を水に一晩液浸し，試料の泥化を促す。0.5㎜のフルイを通して水洗し残渣を集め，双眼実体顕微鏡下で観察し，同定可能な植物遺体とくに種実遺体を抽出する。抽出した種実遺体の形態的特徴から種類を同定し，計数を行う。炭化した試料については，48時間80℃で乾燥後，乾燥重量を求める。分析後の植物遺体等は，種類ごとにビン詰めを行い，炭化した試料は乾燥剤を入れ保存する。水湿を帯びた種実遺体は，50％程度のエタノール溶液にて液浸保存を施す。

表４　種実遺体分析結果

試料番号	遺構番号	出土位置	出土層位	分析量(cc)	種類名	個数	乾燥重量(g)
№1	３号住居跡	炉内堆積土	ℓ２	200	炭化材	破片	8.51
					不明炭化物	破片	0.04
					菌核	89	
№2	１号集石遺構	掘形内堆積土	ℓ１	200	炭化材	破片	13.37
					菌核	16	
№3	１号集石遺構	掘形内堆積土	ℓ２	200	アメリカセンダングサ近似種(果実)	1	37.08
					炭化材	破片	
					菌核	8	
№4	１号集石遺構	掘形内堆積土	ℓ３	200	キイチゴ属(核)	1	29.72
					ヒサカキ(種子)	1	
					ナデシコ科(種子)	2	
					炭化材	破片	
					菌核	16	
№5	２号集石遺構	掘形内堆積土	ℓ２	200	炭化材	破片	1.71
					菌核	1	

4　結　　果

種実遺体分析結果を表４に示す。篩別後の残渣からは，木本２種類(ヒサカキ，キイチゴ属)，草本２種類(ナデシコ科，アメリカセンダングサ近似種)の種実が検出された。炭化材は，２～10㎜角程度の破片が多量検出された。不明炭化物は，木材組織が認められない，部位・種類不明の炭化物を示す。菌類の菌核は，おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる。以下に，同定された種実遺体の形態的特徴を，木本，草本の順に記す。

＜木本＞

・ヒサカキ(*Eurya japonica* Thunberg)　　ツバキ科ヒサカキ属

種子が検出された。黒褐色，不規則な多角形でやや偏平，径１㎜程度。一端に臍があり，臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。脆くなっており，炭化していると思われる。

・キイチゴ属(*Rubus*)　　バラ科

非炭化の核(内果皮)が検出された。黒褐色，半円形～三日月形でやや偏平。長さ２㎜，幅１㎜程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

＜草本＞

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

非炭化の種子が検出された。茶褐色，腎臓状円形でやや偏平。径１㎜程度。一端が凹み，臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には，臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・アメリカセンダングサ近似種(Bidens cf. frondosa L.)　　キク科センダングサ属

非炭化の果実が検出された。茶褐色，倒皮針形で偏平。長さ６㎜，幅2.5㎜程度。先端の両肩に１個ずつ芒があり，逆刺が散生する。芒の長さ２㎜程度。果実正中線上には細い縦隆条がある。果皮表面には伏毛が密布する。

5　考　　察

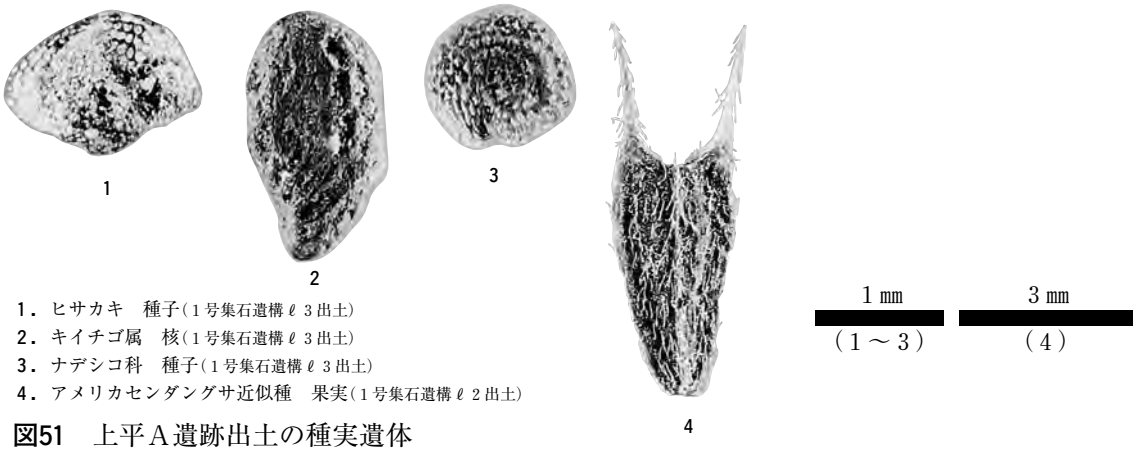
種実遺体分析の結果，縄文時代前期の竪穴住居跡の炉跡および集石遺構内の堆積土からは，多量の炭化材が確認された。これらは燃料材などの一部が残存したものと考えられる。また，炭化物は微量で炭化が著しく保存が悪いことから，その形態から由来を知ることは難しい。検出された種実遺体は，種類数・個体数ともに少ない。検出された種類をみると，ヒサカキ，キイチゴ属は暖地の林下に極めて普通にみられる中・低木類で，キイチゴ属は果実が食用可能である。ナデシコ科は，開けた草地に生育する，いわゆる「人里植物」であることから，集落周辺の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると思われる。アメリカセンダングサは，山野のやや湿った場所に普通にみられる，北米原産の帰化植物である。なお，低湿地遺跡など特別な場合を除けば，炭化していない限り種子は残らないといってよく，解析に関しては炭化種子以外を除外して考えた方が妥当だと

いう意見もある(吉崎 1992)。今回検出された，保存状態が良好な種実遺体(ナデシコ科，アメリカセンダングサ近似種など)は，いずれも遺跡周辺に生育していたと思われるが，遺構が埋没する過程で混入した後代のものであると考えられる。

今後は，今回得られた炭化材の樹種同定を行うことによって，当該期の周辺植生や植物利用等についての資料を得たいと考えている。

引用文献

吉崎昌一　1992 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』№355，ｐ.2－14.ニューサイエンス社.



1．ヒサカキ　種子(1号集石遺構ℓ3出土)
2．キイチゴ属　核(1号集石遺構ℓ3出土)
3．ナデシコ科　種子(1号集石遺構ℓ3出土)
4．アメリカセンダングサ近似種　果実(1号集石遺構ℓ2出土)

図51　上平Ａ遺跡出土の種実遺体

第２節　上平Ａ遺跡出土の炭化材樹種同定

株式会社　古環境研究所

1　はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため，解剖学的におおむね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく，堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2　試　　料

試料は，縄文時代前期の焼失住居である12号住居跡より出土した炭化材６点と，中世以降に比定される１号木炭窯跡出土の炭化材２点の計８点である。

3　方　　法

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面，放射断面，接線断面)を作製し，落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4　結　　果

同定結果を表５に，主要な分類群の顕微鏡写真を図52・53に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表５　上平Ａ遺跡における樹種同定結果

試料	遺構番号	時期	出土層位	採上No.	結果（和名／学名）	
No.1	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材①	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.2	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材②	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.3	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材③	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.4	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材④	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
No.5	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材⑤	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
No.6	12号住居跡	縄文前期	ℓ１	炭化材⑥	コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
No.7	１号木炭窯跡	中　世？	ℓ２	－	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
No.8	１号木炭窯跡	中　世？	ℓ２	－	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*

カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科（図52）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は緩やかで，晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には，らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で，仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州，四国，九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m，径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬，弾性が強く水湿にも耐え，保存性が高い。弓などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科（図52）

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が，数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が，火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20m，径40cmぐらいであるが，大きいものは高さ30m，径２mに達する。耐朽性が強く，水湿によく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築，家具，器具，土木，船舶，彫刻，薪炭，椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect.* Prinus　ブナ科(図52)

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が，１～２列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が，散在ないし火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ，コナラ，ナラガシワ，ミズナラがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，高さ15m，径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み，建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科(図53)

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が，１～２列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が，単独でまばらに散在ないし放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

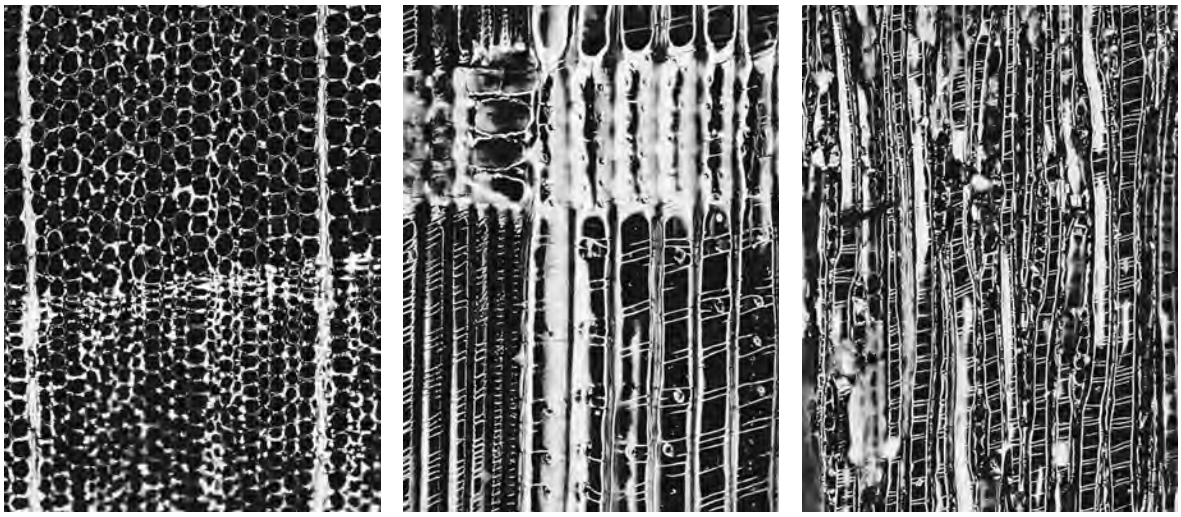
以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ，アベマキなどがあり，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，高さ15m，径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み，器具，農具などに用いられる。

5　所　　見

同定の結果，上平Ａ遺跡出土の炭化材は，縄文時代前期の焼失家屋である12号住居跡ではカヤ２点，クリ３点，コナラ属コナラ節１点，１号木炭窯跡ではコナラ属クヌギ節２点であった。12号住居跡の用材にはカヤ，クリ，コナラ属コナラ節が用いられていたとみられる。いずれも温帯に生育する樹木で当時は遺跡の周辺に生育していたと推定される。１号木炭窯跡で出土したコナラ属クヌギ節は二次林性であり，12号住居跡の樹種とは性格が異なる。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩　1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 p.20－48. p.49－100.文永堂出版.

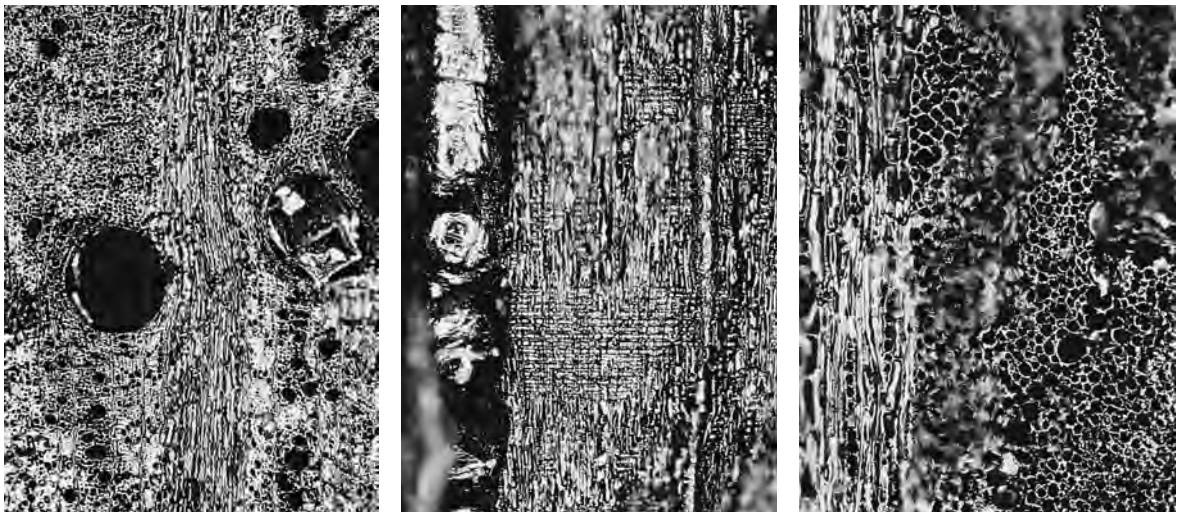


横断面 ：0.2mm　放射断面：0.1mm　接続断面：0.2mm

１．№5　カヤ（12号住居跡出土，炭化材⑤）

横断面 ：0.4mm　放射断面：0.2mm　接続断面：0.2mm

２．№1　クリ（12号住居跡出土，炭化材①）



横断面 ：0.4mm　放射断面：0.4mm　接続断面：0.2mm

１．№6　コナラ属コナラ節（１号木炭窯跡出土）

図52　上平Ａ遺跡の炭化材（１）

横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.4mm　接続断面 ：0.2mm

４．№７　コナラ属クヌギ節（１号木炭窯跡出土）

図53　上平Ａ遺跡の炭化材（２）

第３節　上平Ａ遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１　試料と方法

表６　試料と方法

試料	遺構番号	層位	種　類	前　処　理	測　定　法
№１	12号住居跡	ℓ１	火災住居炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄	加速器質量分析（ＡＭＳ）法
№２	１号木炭窯跡	ℓ２	木　炭	酸－アルカリ－酸洗浄	β線計数（液体シンチレーション法）
№３	９号住居跡	ℓ１	土器（18図２） 内面付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析（ＡＭＳ）法
№４	15号住居跡Ｐ３	ℓ１	土器（32図１） 内面付着炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	加速器質量分析（ＡＭＳ）法

２　測定結果

（１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から，単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は，国際慣例に従って5,568年を用いた。

（２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出し

表７　測定結果

試料	^{14}C年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年 BP）	暦年代（西暦）	測定№（Beta－）
№1	5620±40	－26.0	5600±40	交点：BC4450 1σ：BC4460～4360 2σ：BC4500～4350	175224
№2	760±50	－27.9	710±50	交点：AD1290 1σ：AD1270～1300 2σ：AD1240～1320 AD1350～1390	175226
№3	5770±40	－24.7	5770±40	交点：BC4600 1σ：BC4690～4550 2σ：BC4710～4510	175822
№4	5620±40	－25.9	5610±40	交点：BC4450 1σ：BC4470～4370 2σ：BC4510～4350	175225

た年代。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値，およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により，約19,000年 BP までの換算が可能となっている。ただし，10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり，今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）・２σ（95％確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

第４節　上平Ａ遺跡出土石器の蛍光Ｘ線分析

奥山　誠義（福島県文化振興事業団）

１　分析対象資料

上平Ａ遺跡の遺構外（Ｈ13グリッドＬＩｂ）出土の縦形石匙１点について，蛍光Ｘ線分析を実施した。石匙は，灰白色を呈する凝灰質頁岩（珪質頁岩の一種）を用いて製作された資料である。石匙の法量は，最大長6.1cm，最大幅4.4cm，最大厚0.9cm，重量16.9ｇを測る。なお実測図については第２章第６節の48図36に，写真については写真71に示している。

２　分析方法

分析は当事業団遺跡調査部のＸ線分析顕微鏡（堀場製作所製ＸＧＴ－2700）を使用した。本機は微少

領域（直径10μｍ）からスキャニング（元素マッピング）を行えば20㎝四方にわたる広範な領域の分析が可能なエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である。

蛍光Ｘ線分析は文化財の分析のなかでも，比較的容易に材質調査が行えるため広く利用されている。この方法は，資料にＸ線を照射し，含有する各元素から発せられる二次Ｘ線（特性Ｘ線）を半導体検出器で捉えて，Ｘ線のエネルギーとその強度をピークとして表すものである。

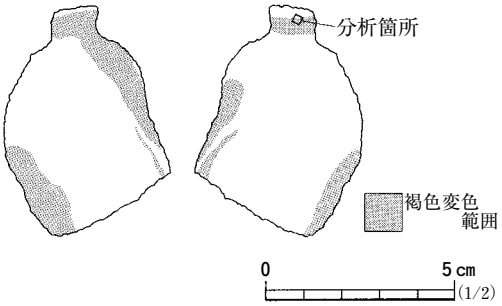


図54　上平Ａ遺跡出土石匙の
褐色変色範囲と分析箇所

3　分析箇所

分析領域は光学像の四角枠内の範囲（２㎜四方）である。

石匙頸部において石材のオリジナルな色を呈している部分と褐色に変化している部分との境界を分析領域の中心になるよう設定した。変色境界を中心線として左右１㎜の範囲を分析領域とした。

4　分析条件

分析装置：Ｘ線分析顕微鏡（堀場製作所製ＸＧＴ－2700）／　Ｘ線管球の対陰極：ロジウム（Rh）／　検出器：半導体検出器／　測定雰囲気：大気／　管電圧：50kV／　管電流：１mA／　元素マッピング走査時間：4000秒（石匙頸部）／

5　分析結果

分析の結果，変色境界線近辺を境にその右側（褐色変色部分）ではFe（鉄）が多く分布しており，左側ではFeの分布があまり見られないことがわかった。

Feの偏在が石材本来のものであったのか，外的要因によるものなのかは不明である。

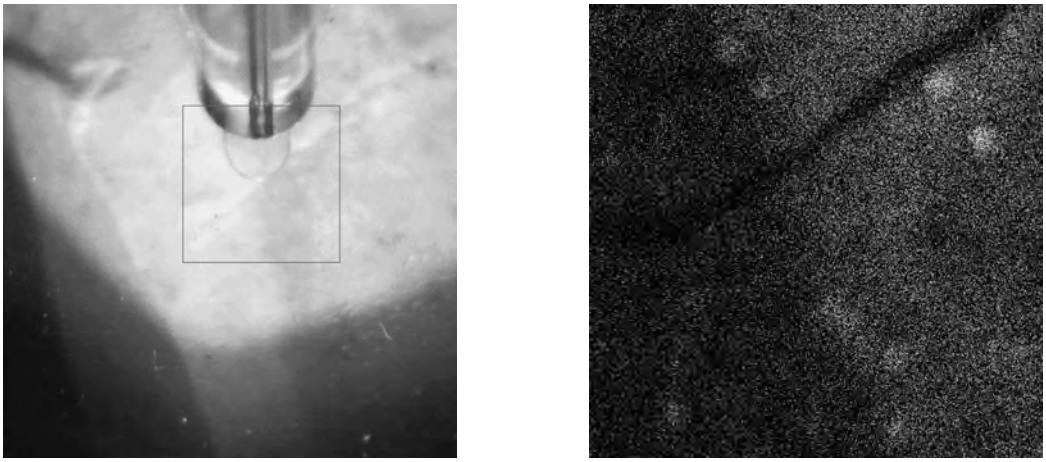


図55　蛍光Ｘ線分析顕微鏡写真

第４章　ま　と　め

第１節　遺物について

本遺跡から出土した遺物は，縄文土器2,642点，土製品１点，石器120点である。この内，遺構内から縄文土器1,027点，石器53点が，遺構外から縄文土器1,615点，土製品１点，石器67点が出土している。

縄文土器

本遺跡から出土した縄文土器片の総点数は２,642点である。以下に概要を述べる。

Ⅰ群土器　縄文時代早期に比定される土器で，出土点数は非常に少ない。17図５，43図１は田戸下層式に比定され，17図５は沈線文と連続刺突文が，43図１は格子目文が施されている。43図２・３は茅山下層式または茅山上層式に含まれる資料であろう。

Ⅱ群土器(図56)　縄文時代前期の土器で，口縁部から頸部にかけて文様が施されるものである。

Ⅱ１・２類は花積下層式に比定される資料で，出土点数は非常に少ない。56図１・２はⅡ１類で，横位の縄圧痕文が施されている。56図３・４はⅡ２類で，３は矢羽根状の文様が，４は重山形状文が描かれている。

Ⅱ３類は頸部に段をもつもので，花積下層式から宮田貝塚出土第Ⅲ群土器(竹島　1975)（以下では宮田第Ⅲ群土器と略す）に相当する時期にかけての資料である。出土点数は非常に少ない。頸部の段は器面を若干肥厚させたり(43図７)，低い隆帯を貼付して(43図８，56図５・６)形成している。隆帯に刺突が施される56図５は花積下層式に比定され，半截竹管の沈線文と連続刺突文により菱形状文が施される56図６は宮田第Ⅲ群土器に相当する。

Ⅱ４～12類は縄文時代前期前葉に比定される土器である。いずれも出土点数は非常に少ないが，Ⅱ４・10類はⅡ群土器のなかでは比較的多く出土している。

Ⅱ４類は連続刺突文により文様が施されるもので，宮田第Ⅲ群土器に相当する。器形には，頸部でくびれ口縁部が緩やかに内湾するもの(56図７)や，口縁部が緩やかに外反するもの(56図８・９)，口縁部が外傾するもの(17図８・９)が認められる。連続刺突文には列点状のものと押し引き状のものが認められ，半截竹管によるものが多い。大半は小片のため文様の全容がわかるものは少ないが，菱形状の文様(56図７・８)や蕨状の文様(56図９)などが施されている。文様の交差部やその上下に円形刺突文が施されるものも認められる(56図７・８)。

Ⅱ５類は相互刺突文が施されるもので，関山Ⅱ式に併行する土器である。器形には頸部で軽くくびれるもの(56図11)と，口縁部がほぼ直線的に外傾するもの(56図10)が見られる。施文工具はいずれも半截竹管で，列点状のもの(43図20，56図12)と爪形状のもの(43図21，56図10・11)が認められる。43図20・21・23は口縁部上端に縦長の刺突文が施されている。

Ⅱ６類は沈線文により文様が施されるものである。沈線文は半截竹管によるものが多く，山形文（56図13・14・15）や，蕨状文（56図16）などが施されている。56図15・16，43図33は文様に小瘤が貼付され，関山Ⅰ式に併行する資料である。

Ⅱ７類は沈線文や連続刺突文で区画された重層ループ文により主文様が施されるもので，関山Ⅱ式に近似する資料である。主文様は山形もしくは菱形状の文様で，地文，重層ループ文，半截竹管の沈線文・連続刺突文の順に施されている（40図17，56図17）。口縁部上端に縦長の刺突文，その下部に半截竹管の沈線文で小さい山形文が施されるものが多い。

Ⅱ８類はコンパス文が施されるもので，その特徴から大木２ａ式までは下らないものと考えられる。17図14，56図19は頸部の地文を磨り消してコンパス文を施している。17図18・19は地文上にコンパス状の文様が施され，沈線間は磨り消されている。文様下部には沈線文で円文が施されている。

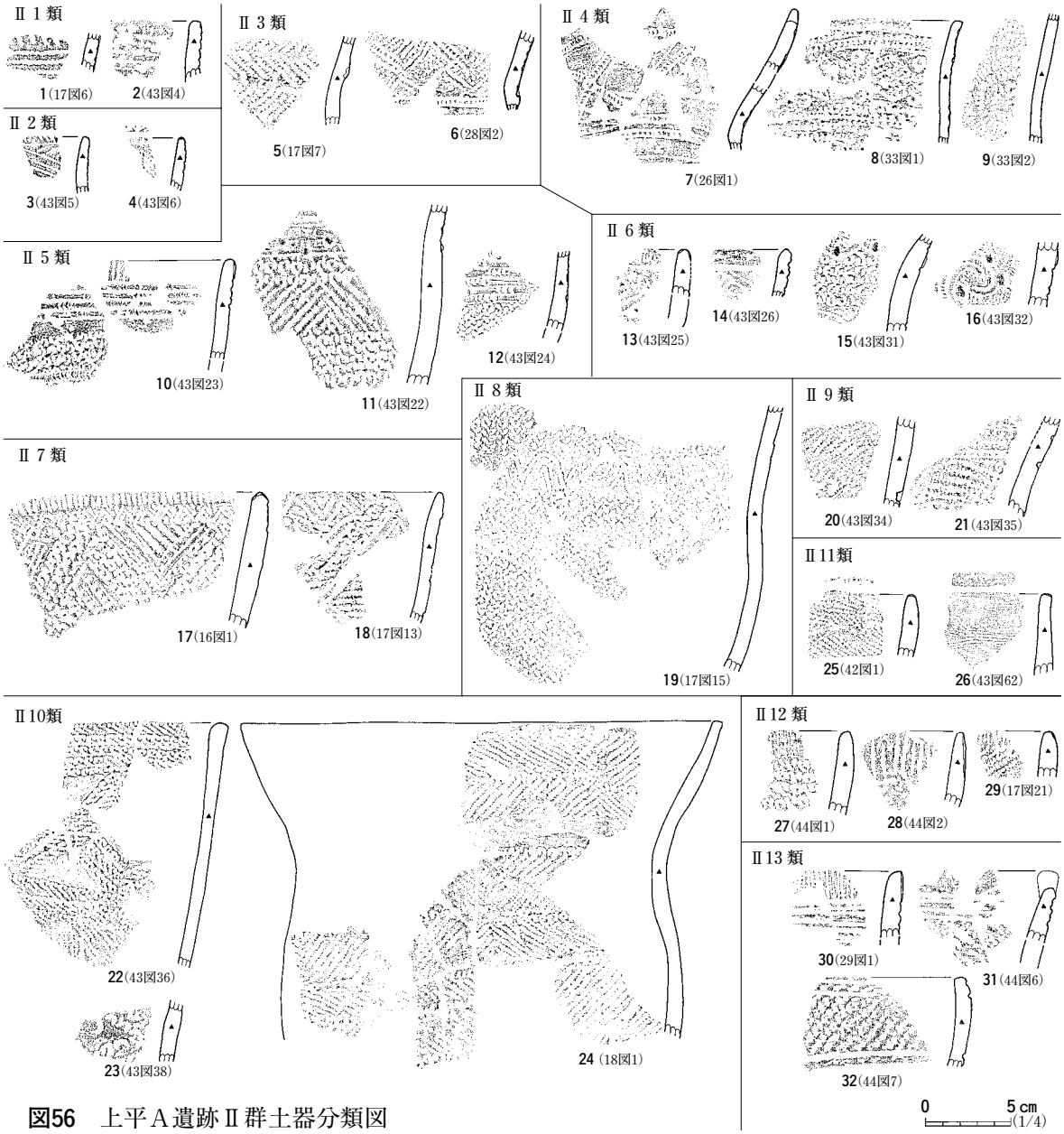


図56　上平Ａ遺跡Ⅱ群土器分類図

Ⅱ９類は地文上に連続刺突文が施されるもので，56図20は円形刺突文が，56図21は連続刺突文が数段施されている。

Ⅱ10類は無文部と重層ループ文により文様が構成されるもので，宮田第Ⅲ群土器に相当する。器形には胴部上半が緩やかに内湾しながら立ち上がり，頸部でくびれて口縁部が緩やかに内湾するもの(56図24)や，口縁部が外傾するもの(56図22)，口縁部が緩やかに外反するもの(43図42)が見られる。口縁部は平坦口縁のものが多いが，波状を呈するもの(17図16)や，山形状の突起をもつもの(43図37)も認められる。重層ループ文により菱形文や山形文が施され，重層ループ文が沈線で区画されるものや(43図42・57～60)，文様中心部に円形刺突文が施されるもの(43図41，56図23)もある。また，地文間に無文部を形成する資料(56図24)もわずかに認められる。

Ⅱ11類は口唇部にのみ装飾が施されるもので，口唇部の形態は丸みをもつものが多い。56図25は口唇部に刻み目が施され，43図61・63，56図26は地文と同じ原体が押しつけられている。Ⅱ12類は口縁部上端にのみ装飾が施されるもので，縦長の刺突文(43図64，44図３，56図29)や短沈線(56図27・28)が施されている。Ⅱ13類は平行沈線文が施される資料で，半截竹管によるものが多い(56図30～32)。

Ⅲ群土器　縄文時代前期に比定され，地文のみで構成される土器で，本遺跡から最も多く出土している。花積下層式から大木２ａ式までの土器が含まれると考えられるが，判別は難しい。破片資料が多く，全体的な器形を伺えるものは少ないが，いずれも深鉢である。底部から口縁部まで外傾しながらほぼ直線的に立ち上がるものが多く，他に口縁部が外反するものや内湾するもの等が見られる。底部は平底で，底部外縁が外側に張り出す器形のものが多い。口縁部は平坦口縁のものが主体を占めるが，波状を呈するものや，山形状の小突起が付くものも見られる。地文はループ文と単節斜縄文が主体を占め，非結束羽状縄文と組紐文も比較的多い。その他に無節縄文，結節羽状縄文，複節縄文，異条縄文，異節縄文，撚糸文，網目状撚糸文が若干量出土している。底部には斜縄文(47図26・30)やループ文(24図19)，組紐文(20図３)など地文が施されるものや，刺突文が同心円状(33図12)や帯状(47図27)に施されているものがある。20図５・６は底部と胴部下端に半截竹管による連続刺突文が施されている。

Ⅳ群土器　縄文時代中期の土器である。48図19・20は大木８ａ～８ｂ式，８図16，48図21～23は大木９～10式に比定され，48図25は加曽利Ｅ式系の土器である。

Ⅴ群土器　縄文時代後期の土器である。48図26は綱取Ⅰ式に比定され，同図24・28～33は後期の粗製土器と考えられる。

(坂　田)

石　　器

本遺跡から出土した石器(石製遺物)の総点数は，120点(自然礫は除く)である。この内，竪穴住居跡からは計44点，それ以外の遺構から計９点，遺構外から計67点の石器が出土した。

出土した石器(計120点)の石器組成は，石鏃１点，石匙２点，削器１点，楔形石器１点，打製石斧１点，磨製石斧６点，礫器１点，磨石24点，敲石６点，石皿20点，剥片57点である。

この石器組成で特筆される点は，粉砕具と推察される磨石・敲石・石皿の組成率が全体の約42%と高いことである。また，加工具と推察される磨製石斧も６点と比較的多く出土した。一方，狩猟具と推定できる石鏃は１点(48図35)のみが出土したにすぎず，石器組成が粉砕具・加工具に極めて偏っていることが看取できる。

出土点数が最も多かった磨石は，機能面の状態や部位により，素材礫の側面部が機能面であるものと素材礫の表面もしくは裏面が機能面であるものとに大別できる。

素材礫の側面部が機能面である可能性の高い磨石は，14点出土した(８図19～21・13図５・20図19・24図23～26・28図６・49図４～７)。これらの機能面は，石(磨石)と石(石皿)とが擦れ合って潰れたようなザラザラとした面で構成される。本報告ではこのような面に対し，「擦耗面」と呼称し，一般に光沢を有する平滑な磨耗面とは区別した。素材礫の側面部に擦耗面が認められた磨石14点の内，11点が長楕円形の扁平礫を素材としている。擦耗面は，その側面の長辺側である場合がほとんどである。またこれらには，表面もしくは裏面に凹部を有するものや縁辺部に敲打痕が認められるものがない。よって擦耗面を有する磨石は，機能が限定されたものであったと推察できる。

一方，素材礫の表面もしくは裏面に磨耗面のみが認められる磨石は，10点出土した(９図３・20図16・24図27・24図28・36図13，他５点)。これらは円形もしくは楕円形の扁平礫を素材としている。磨耗面の範囲は部分的である磨石が多く，全面が磨耗面で覆われるものはない。磨耗の度合いも油脂光沢を有する磨耗ではなく，部分的に自然面とは異なる平滑面が認められる程度である。

また，素材礫の縁辺部に敲打痕が観察された敲石は，６点出土した(９図１・９図２・11図14・20図17・49図８，他１点)。本遺跡出土の敲石の特徴は，縁辺部がみな面的に潰れていることである。円礫を素材にしているにもかかわらず，形態は多面体状を呈し，縁辺部は角張っている。これは敲石の使用頻度の高さを示していると考えている。また縁辺部の敲打痕だけではなく，表・裏面に磨耗面や凹部が認められるものがある。このことから，敲石を用いて敲く・磨る・割るといった作業を複合的に行っていた可能性が高い。

一方，板状の亜角礫を素材とする石皿は20点出土した(13図６・21図１～５・22図１・25図１・28図７・34図２・41図２～４・49図９・49図10・50図１～５)。これらの石皿は片面にのみ磨耗面が観察されたものに限られ，両面を使用したものはない。また，使用する面に加工を施した痕跡は認められず，すべて平滑な自然面をそのまま利用している。

石皿の素材には主に花崗閃緑岩が用いられている。この石材は遺跡の立地する段丘面上には認められず，北側を流れる熊川の河床礫を採取した可能性が高い。しかしながら出土した石皿のなかには重量が40kgを超えるものもあり，かなりの労力を費やして遺跡に搬入したと推察している。

磨製石斧は６点出土している。これらは，細粒の石材を素材とする小形の磨製石斧(20図13)と粗粒の石材を素材とする大形の磨製石斧(11図13・13図４・32図３・49図１・49図2)に大別できる。前者の石斧は珪質頁岩を素材としている。これは浜通り地方では採取できない石材であることから，遠隔地よりもたらされたものと考えられる。後者の石斧は未製品もしくは欠損品である場合が多く，

完形品はない。これらは砂岩・安山岩を利用しているが，浜通り地方の河川では一般的な石材である。このように小形と大形の磨製石斧では，搬入形態・経路が異なる可能性が高い。　（門　脇）

第２節　遺構について

平成14年度の上平Ａ遺跡の調査において確認された遺構は，竪穴住居跡17軒，竪穴状遺構３基，土坑25基，集石遺構２基，焼土遺構１基，木炭窯跡１基，小穴26基である。この内，木炭窯跡を除く大部分の遺構は，縄文時代前期前葉を主体とする時期の範疇で捉えることができる。

本遺跡で最も古い人類痕跡となるのは，縄文時代早期である。該期に比定できる遺構はないが，遺構外出土遺物の中に田戸下層式・茅山下層式に比定される土器が少量ある。

本遺跡で主体を占める縄文時代前期前葉の遺構は，おおむね調査区内を馬蹄形状に分布している(図３)。逆に調査区中央部には，あたかも広場であるかのような遺構の空白域があり，それを囲むように遺構が分布していることがわかる。集落の全容は明らかではないが，中央に広場を備えた集落形態であったと推定している。

本遺跡で見つかった遺構の分布は，おおむね４カ所の分布域(①～④)として把握することが可能である(図４)。分布域①は調査区南西隅の平坦面にあり，今回の調査で最も遺構が検出された範囲である。１・２・６～11号住居跡，１・２号竪穴状遺構，１～９号土坑，１号焼土遺構，２号集石遺構が帰属する。この中には９～11号住居跡のように重複関係が認められるものもある。分布域②は調査区北側の平坦面にあり，５・12～16号住居跡，３号竪穴状遺構，10～16・24号土坑，１号集石遺構が帰属する。分布域③は調査区南東隅のやや南向きの緩傾斜面にあり，３・４・17号住居跡，18・21・25号土坑が帰属する。分布域④は調査区北東隅の土坑群で，17・19・20・22・23号土坑が帰属する。これらは形態的特徴により貯蔵穴と推察している。

以上の４群が同時併存したかどうかは不明であるが，段丘面上の土地利用において広場空間と住居空間，さらには貯蔵穴群といった「領域分け」が存在した可能性は高い。

個々の遺構は重複関係が少なく，出土遺物で遺構の時期を決定できるものはほとんどなかったため，遺構の時期細分ができなかった。しかしながら遺構内から出土した縄文土器の大半が，縄文時代前期前葉を主体とする資料であることから，おおむね遺構は当該期に比定されると考えている。

17軒の住居跡で竪穴の平面形を把握できたものは，３・11・17号住居跡を除く，14軒である。このなかで最も多くみられた平面形態は隅丸長方形で，１・４・５・７・８・10・12・14・15・16号住居跡の計10軒である。次に方形を基調とするものは２・６・９号住居跡の計３軒で，円形を基調とするものには13号住居跡がある。

今回の調査で見つかった竪穴住居跡のなかで床面積が10㎡を超える大型のものは，４ａ・10・14号住居跡がある。この他，周壁は失われているが15・16号住居跡も同等の規模を有するものと推察される。これらの大型住居跡に次いで，床面積が7.5㎡以上10㎡未満の中型の竪穴住居跡は，１・

９・12号住居跡である。床面積が7.5㎡に満たない小型の住居跡は，２・６・７・８・13号住居跡である。この他，床面積が計測できなかったものに３・５・11・17号住居跡がある。

大型住居跡の平面形はいずれも隅丸長方形を呈し，柱穴配置は共通して周壁際に壁柱穴が巡る構造である。これら住居跡では壁柱穴がほぼ同じ間隔で配置され，柱穴が床面からかなりの深度で掘り込まれているものも少なくない。このことから，かなり頑丈な上屋構造が想定される。また床面には地床炉が複数配置されていることから，恒常的な居住空間であったと推察している。

大型住居跡は分布域①に10号住居跡が，分布域②に14～16号住居跡が，分布域③に４ａ号住居跡が分布する。これは中央の広場空間を取り囲むような配置といえる。

小・中型住居跡では，平面形が隅丸長方形を呈する１・７・８・12号住居跡と方形を基調とする２・６・９号住居跡と円形を基調とする13号住居跡に大別される。平面形による分類では，分布的な特徴は認められない。

小・中型住居跡の柱穴配置は，以下に列挙するように極めて多様である。

①　１基の主柱穴のみが床面のほぼ中央に配置される住居跡・・７号住居跡
②　２基の主柱穴が床面に配置される住居跡・・・・・・・・・・１号住居跡
③　床面の周壁際に壁柱穴のみが巡る住居跡・・・・・・・・・・９号住居跡
④　竪穴の外側に柱穴が巡る住居跡・・・・・・・・・・・・・・13号住居跡
⑤　①＋③の柱穴配置を有する住居跡・・・・・・・・・・・・・６号住居跡
⑥　①＋③＋④の柱穴配置を有する住居跡・・・・・・・・・・・12号住居跡
⑦　①～⑥のような規則的な柱穴配置が認められない住居跡・・２・８号住居跡

以上のような柱穴配置の特徴が，時期差であるのか，住居の性格に起因するのか明確な回答はもち合わせていない。しかしながら，焼失住居であると推定された12号住居跡の検討において，上屋が土屋根であった可能性が指摘され，かなり頑丈な構造であったと考えている。したがって必ずしも大型住居跡に比べ，小・中型住居跡が簡素な造りであったとは言い難い側面もある。しかし，相対的にみれば住居跡の竪穴規模が小型化するほど柱穴数は少なくなり，構造の簡素化が認められる。

４ａ・９・10・12・14～16号住居跡の床面においては，地床炉が認められた。地床炉は床面の中央もしくは住居の長軸線上に配置される傾向が強い。また，炉の被熱範囲の下部に掘り込みを伴う例（９・15・16号住居跡）も認められた。逆に小型住居跡である１・２・６～８・13号住居跡では，床面から炉跡が検出されなかった。したがって小型住居跡が冬季居住に適応したとは考えにくい。前述したように大型住居跡が対称的なあり方を示すことから，季節的な「住み分け」が集落内でなされていた可能性がある。

竪穴住居跡から見つかった地床炉以外に火の使用に関連する遺構としては，１・２号集石遺構と１号焼土遺構がある。１・２号集石遺構の周囲には被熱痕跡が認められ，充填された礫も熱変化していたことから，遺構内部で火を使用したことは明白である。集石遺構は「ボイルストーン」もしくは「石蒸し」といった調理法を示唆する遺構と考えている。また，１号集石遺構の周りを囲むよ

うに小穴が３基認められた。おそらく上屋が構築されていたものと考えられる。加えて１号集石遺構の南に隣接して16号住居跡が確認されていることから，両遺構の関連性は強いと考えている。この他，２号集石遺構・１号焼土遺構にも上屋が構築されていたかは不明であるが，屋外炉であると考えている。

３号住居跡では集石遺構の特徴を備えた炉跡が見つかっている。床面にも被熱範囲が及んでいることから，炉として機能した可能性が高い。屋外で石を焼いて住居内に搬入した可能性もある。いずれにしろ集石を伴う炉跡が屋外ではなく屋内から見つかった例は，本県のなかでも報告例が少ないといえる。

本遺跡で見つかった25基の土坑は平面形・規模・周壁の立ち上がり等により，１～４類に分けた。この内，１類土坑（８・23号土坑）と２類土坑の一部（４・６・９・12・14・17・19・21・22号土坑）の計11基については，貯蔵穴の可能性が指摘できる。平面分布では調査区北東部の分布域④に４基が集中する傾向があるが，他は散在している。

落し穴状土坑の可能性がある３類土坑は，１～３・７・13・16号土坑の計６基である。この内，長軸方位がほぼ共通する１～３・７号土坑は同時期である可能性が高い。また本遺跡の集落の機能時期に落し穴状土坑が併存したかどうかは，現時点では疑問が残る。しかしながら出土遺物や堆積土の状態は，他の竪穴住居跡などの遺構と比べて違いがないことから，落し穴状土坑も縄文時代前期頃に形成されたと考えている。平面分布では調査区南西部の分布域①に３基が集中する傾向があるが，他は散在している。

以上が縄文時代前期前葉の遺構についてである。特徴としては，遺構の分布密度が密ではないことや重複関係が少ないことがあげられる。また，遺構から出土した遺物の量が比較的少ないことや出土した縄文土器の大半が大木１式期に比定されることなどがあげられる。これらのことを勘案すると本遺跡が集落として機能した期間は，縄文時代前期前葉のなかでも限定されたものであった可能性が高い。

この時期以降，本遺跡からは縄文時代中期・後期の土器片がわずかに出土しているが，当該期の遺構は今回の調査では見つかっていない。この時期の遺物が表採されている調査区の西方で，該期の遺構が見つかる可能性はある。

縄文時代以降，本遺跡で人間の活動痕跡が確認できるのは１号木炭窯跡に限られる。１号木炭窯跡の帰属年代については，遺物が出土した訳ではないが，遺構が縄文時代のものより上位のＬⅡ上面で確認されたこと，木炭の炭素年代の補正値がAD1290年（第３章第３節）であることを参考にすると，中世以降に比定できる。

１号木炭窯跡から出土した木炭の樹種同定を実施したところ，供試サンプル２点はいずれもコナラ属クヌギ節であるという結果が得られた（第３章第２節）。また，調査区内では旧表土と考えられるＬⅡに起因する土が堆積している風倒木痕が多数見つかっている。このことから中世以降の本遺跡周辺の環境は，クヌギなどの二次性林が発達していた可能性がある。（門　脇）

第3編　道平（どうだいら）遺跡

遺跡記号　ＯＫ－ＤＤＲ
所　在　地　福島県双葉郡大熊町大字大川原字西平
時代・種類　縄文・弥生・平安時代，集落跡
調査期間　平成14年９月２日～12月４日
調　査　員　山内　幹夫・宮田　安志

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

位　置　道平（どうだいら）遺跡は，福島県双葉郡大熊町大字大川原字西平地内に所在する。大熊町は浜通り地方のほぼ中央にあって東西に細長く，東側は太平洋に面している。同じ双葉郡内の双葉町が北に，富岡町が南に，西は田村郡都路村に接する。本遺跡のある大川原地区は大熊町の南端付近にあり，富岡町との境にも程近い。遺跡はＪＲ常磐線大野駅から南西へ約2.5㎞のところに位置し，大熊町の海岸線からは約６㎞内陸部にある。本遺跡の700ｍ西側を県道いわき・浪江線，すぐ北側を県道大野停車場・大川原線が通っている。

遺跡範囲　本遺跡は，昭和35(1960)年に渡部晴雄氏，昭和46(1971)年に吉田農夫雄氏等により踏査され，縄文時代晩期・弥生時代の遺物散布地として知られていた。昭和55(1980)年には，団体営圃場整備事業に伴う予備調査，発掘調査が大熊町教育委員会により実施され，縄文時代後～晩期および弥生時代の遺物が多数出土している。この調査成果は『道平遺跡』,『道平遺跡の研究』の２冊の報告書にまとめられている(渡辺・大竹1980・1983)。

現在推定される遺跡範囲は大川原川と県道大野停車場・大川原線に囲まれる140,500㎡で，今回

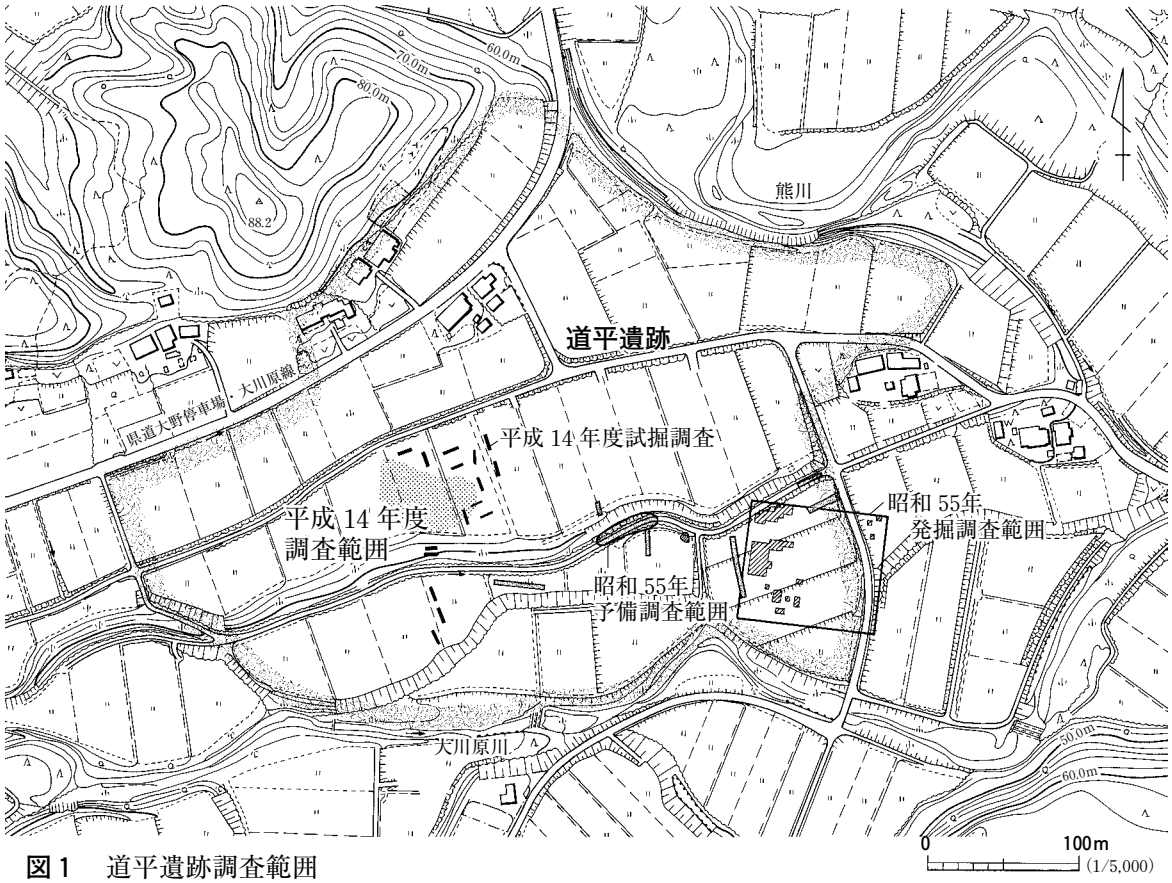


図１　道平遺跡調査範囲

調査したのは中央からやや西寄り部分である。

地　形　大熊町の地形は，町域の西半分を阿武隈高地とそこから東へ派生する丘陵地が占め，双葉断層付近から東半分は，熊川水系が形成した段丘地形が続く。さらに国道６号から東の海岸寄りでは低地が主となる。本遺跡は，熊川とその南を流れる支流の大川原川の合流点に近い大川原川左岸の低位Ⅰ面から中位Ⅲ面にかけての段丘面上に立地する。遺跡の標高は50～70ｍにわたる。団体営圃場整備事業に伴う昭和55年の調査範囲は，遺跡南東部の低位Ⅰ面の部分にあたる(図１)。今回の調査は，それより北西の遺跡中央部にあたる中位Ⅲ面上の2,400㎡について行った。周辺の標高は約62ｍを測る。

周辺遺跡　本遺跡の近辺には，縄文時代各期の遺跡がまとまって存在するが，多くが熊川南岸の段丘上にある。本遺跡の大川原川対岸には本書第２編に掲載した縄文時代前期の集落遺跡である上平Ａ遺跡をはじめとして，本遺跡同様，縄文時代後・晩期の遺物が採取されている上平Ｂ遺跡，廻谷地遺跡，蛇保遺跡などがある。また，本遺跡の北側丘陵を隔てた熊川南岸には，後期旧石器時代や縄文時代前期の遺物が出土した上総屋敷遺跡，本遺跡より1.5㎞下流には縄文時代早期の大平式土器の標識遺跡となった大平Ａ・Ｂ遺跡が所在する。

調査前の現況　調査区付近は水田および大豆畑として利用されていた。昭和50年代の圃場整備によって盛土，削平を受けており，現在の地形は遺跡の原地形から大きく改変されている。しかし，今回の調査区付近は盛土で対応されたらしく，原地形が比較的遺存していた。調査区の東部には，大川原川に向かう埋積谷が入り込んでいることが調査から確認できている。　（宮　田）

第２節　調査経過と調査方法

調査経過　道平遺跡は，『福島県遺跡地図・浜通り地方』（福島県教育委員会編1996）に記載された周知の遺跡である。平成14年５月，県内遺跡分布調査事業により常磐自動車道建設予定地の7,800㎡について試掘調査が実施され，工区内の2,400㎡について，平成14年度に発掘調査を行うこととなった(㈶福島県文化振興事業団編2003)。これについて，福島県教育委員会の委託を受けた財団法人福島県文化振興事業団が調査員２名を配して対応した。

調査は平成14年９月２日より12月４日まで，延べ49日間実施した。今回の調査は，９月上旬に発掘作業員４名を雇用し，その後，作業員を９月中旬に８名，10月上旬に７名，10月中旬に10名と，作業の進捗に併せて増員を図り，最終的に作業員30名前後の体制で円滑な調査を行うことができた。

以下に本調査の主な経過を記す。

８月下～９月上旬　調査開始に先立つ準備作業として，調査範囲の確認と縄張りを行う。その後，駐車場用地とトイレ設営用地の整地をして，駐車場用地周辺の区画，調査連絡所と仮設トイレの設営を行った。重機を導入して表土剝ぎを行う。

９月中～下旬　17日には調査員１名，作業員４名の体制で発掘作業を開始した。当初の作業として，

図２　道平遺跡調査区位置図

駐車場周辺の整備，調査区と周辺の安全対策を行った。その後，調査区東端から遺構検出作業を開始した。県内遺跡分布調査事業の終了に伴い，作業員８名が加わり，10名前後でＬⅡａ上面での遺構検出作業が続く。この間，基本土層の確認を行う。遺物包含層はＬⅡａとＬⅡｂに分けた。ＬⅡａからは土師器と縄文土器が出土した。本遺跡で今回初めて確認された土師器は，調査区中央Ｐ31～33グリッドにかけての範囲から出土した。

10月上旬　遺構検出作業を継続して行った。測量杭の打設，標高点の確認，移動を行う。作業員募集のため，９日には第２回目の雇用説明会を行った。

10月中～下旬　17日には重機を使用してＬⅢｂの下を約３ｍ掘り下げ，同層下に段丘礫層が続くことを確認した。ＬⅡａ上面で遺構が検出されなかったことから，同層の範囲を記録し，同層の掘り込みを開始する。この間，富岡町から作業員８名を動員し，30名程度の登録人数となる。作業員を増員したことにより，調査区内のほぼ全面で作業展開して，ＬⅡａの掘り込みが終了した。

11月上～中旬　ＬⅡｂ上面で検出作業を行った。調査区西側主体に検出作業を展開した。西南部調査区壁際で１号土坑を検出し，精査した。ＬⅡｂに含まれる礫をバックホーにて除去した。

11月下旬　18～22日にかけてＬⅡｂを掘り下げた。ＬⅢａ上面にて２～４号土坑を検出し，精査した。24～28日にかけて遺跡基底面までの掘り下げを終了した。調査区全景の写真を撮影し，地形測量を行い，道平遺跡の調査を終了した。

12月上旬　若干の残務整理と器材の撤収を行い，平成14年12月４日に福島県教育委員会・福島県文化振興事業団から日本道路公団に調査範囲を引き渡した。引き渡しに際しては，道路工事着工までに時間があることから危険防止のため，調査区の埋め戻しを行った。

調査方法　本調査は，基本的には序章第４節で述べた方法に従っているので，共通項目は割愛する。なお，本遺跡の調査にのみ適用した項目は，次の２点である。

①グリッド（10×10ｍ）の基点は，調査区北西の国土座標Ｘ：154,900，Ｙ：100,500に定めた（日本測地系公共座標第Ⅸ系に基づく）。10ｍごとに区分けされた各方眼は，基点の座標から西から東へ付したアルファベットＡ・Ｂ・Ｃ・・・と，北から南へ付した算用数字１・２・３・・・を組み合わせてＡ１，Ｂ２グリッド等と呼称した。

②本編の掲載遺物については，本調査での出土遺物が判別不能な細片が多いため，平成14年度試掘調査出土遺物も併せて掲載している。本調査出土遺物については，グリッドでおおまかな出土位置を示した。試掘調査出土遺物に関しては，トレンチ番号とトレンチ略号Ｔを組み合わせた呼称で出土位置を示している。出土層位については，本調査と試掘調査の分層基準が異なるため，それぞれの調査時の土層を記している。例えば，Ｐ33ＬⅡａとは本調査Ｐ33グリッドのⅡａ層出土の遺物であり，14ＴＬⅣとは試掘調査の14トレンチⅣ層出土の遺物であることを示す。（宮　田）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

遺構の分布（図３，写真２）

今回の調査で検出した遺構は，土坑４基である。出土遺物の総数は試掘調査で出土したものも含めて土器片653点（縄文土器566点，弥生土器９点，土師器78点），土製品２点，石器類９点である。遺物はすべて遺構外出土の資料で，その年代は縄文時代後期・晩期を主体とする。

土坑は，調査区の南東側と南西側に見られる谷頭周辺に分布する。遺物は調査区南東側から多く

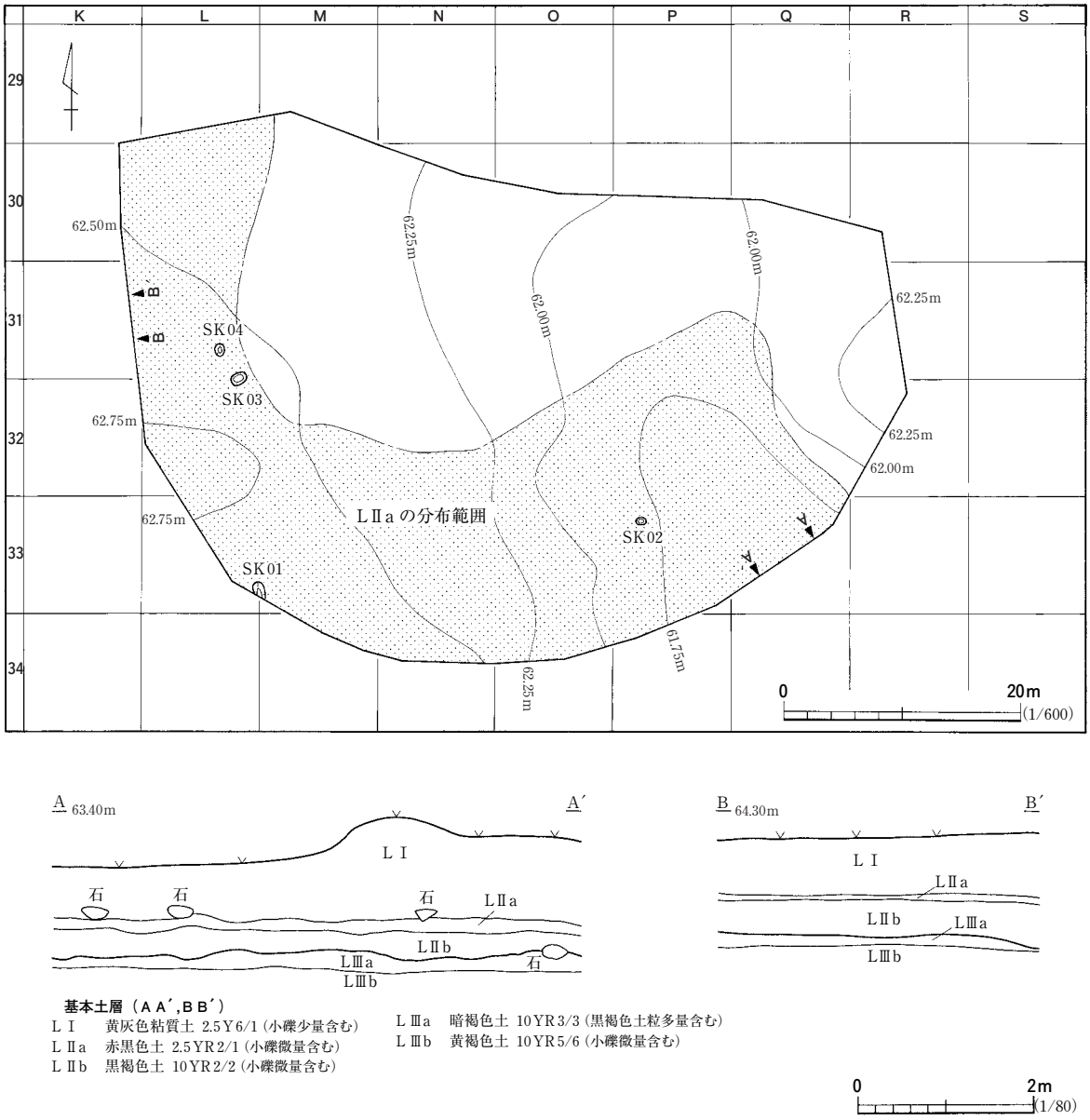


図３　遺構配置図と基本土層

出土していることから，この周辺の東側にあたる調査区外には，縄文時代後・晩期および平安時代の集落が存在した可能性がある。

基本土層（図３，写真３）

今回の調査区は，圃場整備による地形改変を受けていたが，その大半は盛土であったことから，旧地形は良好に遺存していた。また，試掘調査で区分された層位と今回の調査で区分した層位では，若干異なっている。そのため土色や含有物に基づいて両者の層位を対比した。以下に各層の特徴を記す。

ＬⅠ　耕作土および盛土で調査区全体に堆積している。表面は現在の畑の耕作土だが，水田の床土層もみられた。試掘調査のＬⅠ～Ⅲに相当する。

ＬⅡａ　層厚10～30cmを測り，調査区の北側を除くほぼ全面を覆っていた。縄文時代後・晩期，弥生時代，平安時代の遺物を包含している。ＬⅠに関連する鉄分の沈殿が見られる。試掘調査のＬⅣ上部に相当する。

ＬⅡｂ　層厚20～40cmを測る。調査区の全体を覆っていたが，南寄りほど堆積が厚くなる。縄文時代後期・晩期，弥生時代の遺物を包含している。試掘調査のＬⅣ下部に相当する。

ＬⅢａ　調査区のほぼ全体を覆う。黒褐色土と黄褐色土の混じった漸移層である。本層以下は無遺物層である。試掘調査のＬⅤ上部に相当する。

ＬⅢｂ　本遺跡の基盤層である。黄褐色土層で段丘礫を含む。試掘調査のＬⅤ下部に相当する。

土器分類

今回出土した土器の分類については，器形および文様の特徴から下記のように分類した。

Ⅰ群土器…縄文時代中期に比定される土器である。

Ⅱ群土器…縄文時代後期・晩期に比定される土器を一括した。

Ⅲ群土器…弥生時代に比定される土器を一括した。

Ⅳ群土器…平安時代に比定される土器を一括した。　（宮　田）

第２節　土　　坑

１号土坑　ＳＫ01　（図４，写真４）

本土坑は，調査区南西部のＬ33・M33グリッドに位置する。平面形を確認したのはＬⅢｂ上面であるが，調査区境の断面観察からＬⅡｂ上面から掘り込まれていることがわかった。遺構の南側が調査区外に伸びるため，全体の規模は不明である。

遺構内堆積土は２層に分けられ，堆積状況から自然堆積と判断した。平面形は長楕円形と推測され，規模は南北約100cm，東西約40cmを測る。掘込面からの深さは約60cmである。底面はＬⅢｂの自然礫によりやや凹凸がある。

出土遺物は無いが，弥生時代後期の土器を含むＬⅡｂを掘り込んでいることから，その時期以降

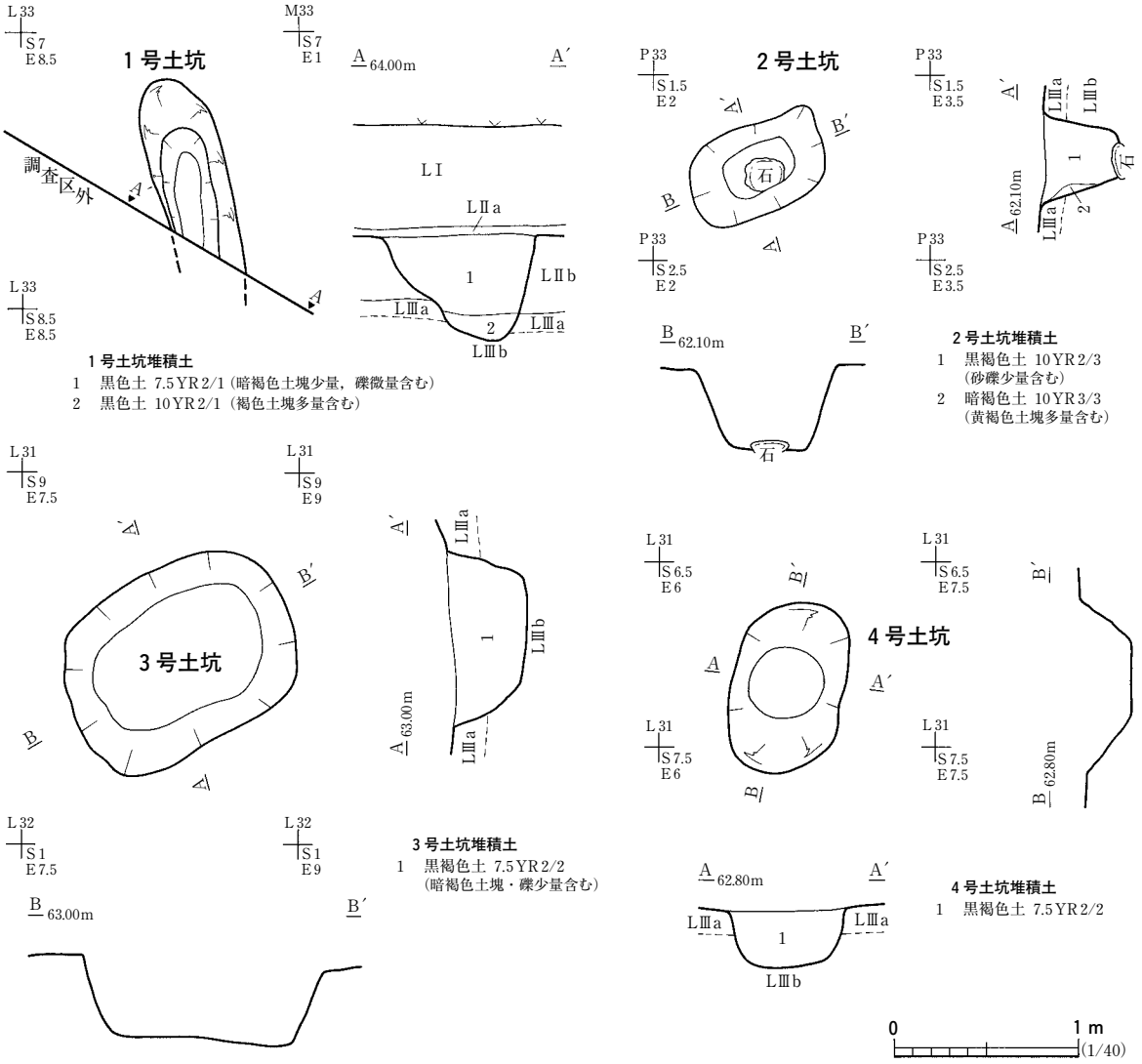


図４　１～４号土坑

の土坑と考えられる。性格は不明である。　（宮　田）

２号土坑　ＳＫ02　（図４，写真４）

本土坑は調査区中央部からやや東寄りのＰ33グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面である。堆積土は２層に分けられる。ℓ１はＬⅡｂを基調とする流入土で，ℓ２はＬⅢａの崩落土と考えられる。平面形は東西75cm，南北48cmを測る不整な隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは約40cmを測る。周壁は約70°の角度で立ち上がり，底面は自然礫が見られるものの平坦である。

出土遺物が無く，年代・性格とも不明である。　（宮　田）

３号土坑　ＳＫ03　（図４，写真４）

本土坑は，調査区西寄りのＬ31・32グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面で，暗褐色土の広がりとして検出した。北西側約２ｍには４号土坑が位置する。堆積土はＬⅡｂを基調とする黒褐色

土の単一層で，ＬⅡｂが自然流入したものと判断した。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は南北約130cm，東西約90cmを測る。検出面からの深さは32cmである。周壁は角度は70°前後で立ち上がる。底面は中央部がやや高くなるが，おおむね平坦である。

出土遺物が無いので，性格・年代とも不明である。（宮　田）

４号土坑　ＳＫ04　（図４，写真４）

本遺構は調査区西側のＬ31グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面である。他遺構との重複はなく，約２ｍ南東に３号土坑が存在する。遺構内堆積土は，ＬⅡｂを基質とする黒褐色土である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径93cm，短径60cmを測る。検出面からの深さは30cmである。底面はＬⅢｂに達し，やや丸みを帯びる。周壁の立ち上がりは70～80°と急角度である。

出土遺物は無く，性格・年代とも不明である。（宮　田）

第３節　遺構外出土遺物

本節では，今回の発掘調査で遺構外から出土した遺物以外に，平成14年度の試掘調査で出土した遺物も合わせて掲載した。遺物掲載方法については，第１章第２節で述べたとおりである。

発掘調査と試掘調査の層位は，各調査でとらえ方に違いがあり，対応しない。試掘調査の詳細は『福島県内遺跡分布調査報告９』（㈶福島県文化振興事業団編2003）を参照していただきたい。

今回調査した遺構以外からは，縄文土器片368点，弥生土器片３点，土師器片71点，土製品２点，石器類８点が出土し，試掘調査からは縄文土器片198点，弥生土器片６点，土師器片７点，石器類１点が出土した。このうち，発掘調査と試掘調査の地点別における点数を図５に示した。調査区東側や南東側のＯ33，Ｐ31～33，Ｑ32・33グリッドから土器が多く出土し，谷地形となる低い部分に土器の分布が集中している。遺物はＬⅡａとＬⅡｂから出土しているが，ＬⅡａでは縄文土器と土

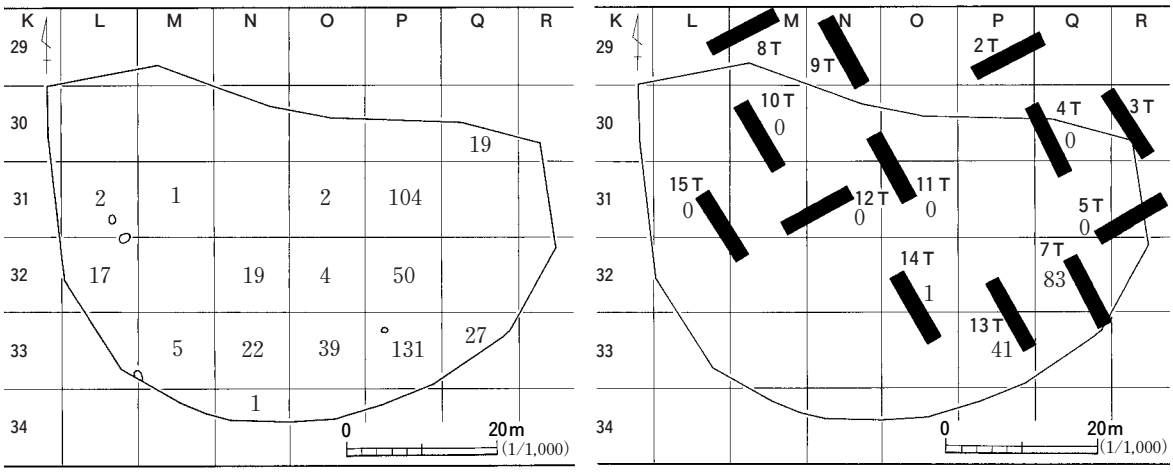


図５　グリッド，トレンチ別土器出土点数

師器とが混在している。これらの点は，試掘調査の成果とほぼ一致している。　（宮　田）

土　器（図６～８，写真５・６）

Ⅰ群土器　縄文時代中期の土器を本群とする。

６図１～４は中期末葉の土器と考えられる。１は浅鉢の口縁部に隆沈線で区画された楕円文が認められる。２～４は沈線により縄文部の主文様を沈線で取り囲んでいる。

Ⅱ群土器　縄文時代後・晩期の土器を本群とする。本群が最も多く出土している。

１類　綱取Ⅰ・Ⅱ式に相当するもので，６図５～21が該当する。５～12は綱取Ⅰ式およびⅡ式の古い段階の資料と考えられる。５～７は口縁部に盲孔が認められ，６には刻み状の隆帯，５には「Ｃ」字状の隆帯が施されている。８には横位隆帯，９には胴部に垂下する蛇行沈線が施されている。10～12は縄文地文上に蕨手文と考えられる沈線区画が描かれている。13～16は綱取Ⅱ式の新しい段階の資料と考えられる。いずれも，集合沈線文が施され，13には「Ｂ」字状の盲孔が見られる。17～21は本類の中で新旧の判断ができなかったもので，口縁部あるいは口縁部付近に横位沈線文が施されている。

２類　堀之内２式に相当するもので，６図22～31が該当する。22・23は口縁部内面に沈線が施される。23～28は横位・斜位沈線間に縄文を施したものである。29・30は同一個体と考えられる壺形土器で，器形はソロバン玉状を呈する。文様は沈線区画内に磨消縄文手法による無文帯を形成し，垂下する蛇行沈線を施している。内面の調整は雑である。31は注口土器で，器表面は丁寧に磨かれ，注口の両側に平行沈線による文様が描かれている。沈線の端部には瘤状の粘土貼り付けが認められる。

３類　縄文時代後期中～末葉と考えられるもので，６図32・33が該当する。32は口縁部が肥厚し，磨消縄文手法による中葉の加曽利Ｂ式期，33は入組文が描かれている末葉のものと考えられる。

４類　縄文時代晩期の土器で，６図34～45が該当する。34は小波状の口縁を呈する壺形土器で，頸部に無文帯を形成し，口縁部と胴部には単節縄文が施されている。内外面に炭化物の付着が認められる。35・36は口縁部が「く」字状に外傾し，無文部の口縁部と縄文地文の胴部からなる。37・38は同一個体で，文様が沈線により直線的に描かれることから大洞Ａ式と考えられる。39～41は口縁部に横位沈線が施されている。このうち，39は口縁部内面に沈線が見られることから大洞Ａ式と考えられる。42は壺形土器の頸部片で，無文の頸部下に２条の沈線が施されている。また，器表面は丁寧に磨かれている。43は入組三叉文から大洞Ｂ式，44は雲形文から大洞Ｃ１式と考えられる。45は綾繰文が施されることから晩期前半のものと考えられる。

５類　縄文時代後・晩期の地文・無文の口縁部・胴部資料と底部資料を一括した。６図46～48，７図１～53が該当する。６図46～48，７図１～42は地文が施されたもので，この中には，粗製土器以外に精製・半粗製土器の資料が含まれるものと考えられる。６図46～48，７図１～５は条線文の施されたものである。６図47・48の条線文は口縁部で横位方向，胴部で蛇行状に施され，７図１～５は横・縦位方向や弧状に施されている。６図46，７図５の条線は半截竹管の半截側で描かれてい

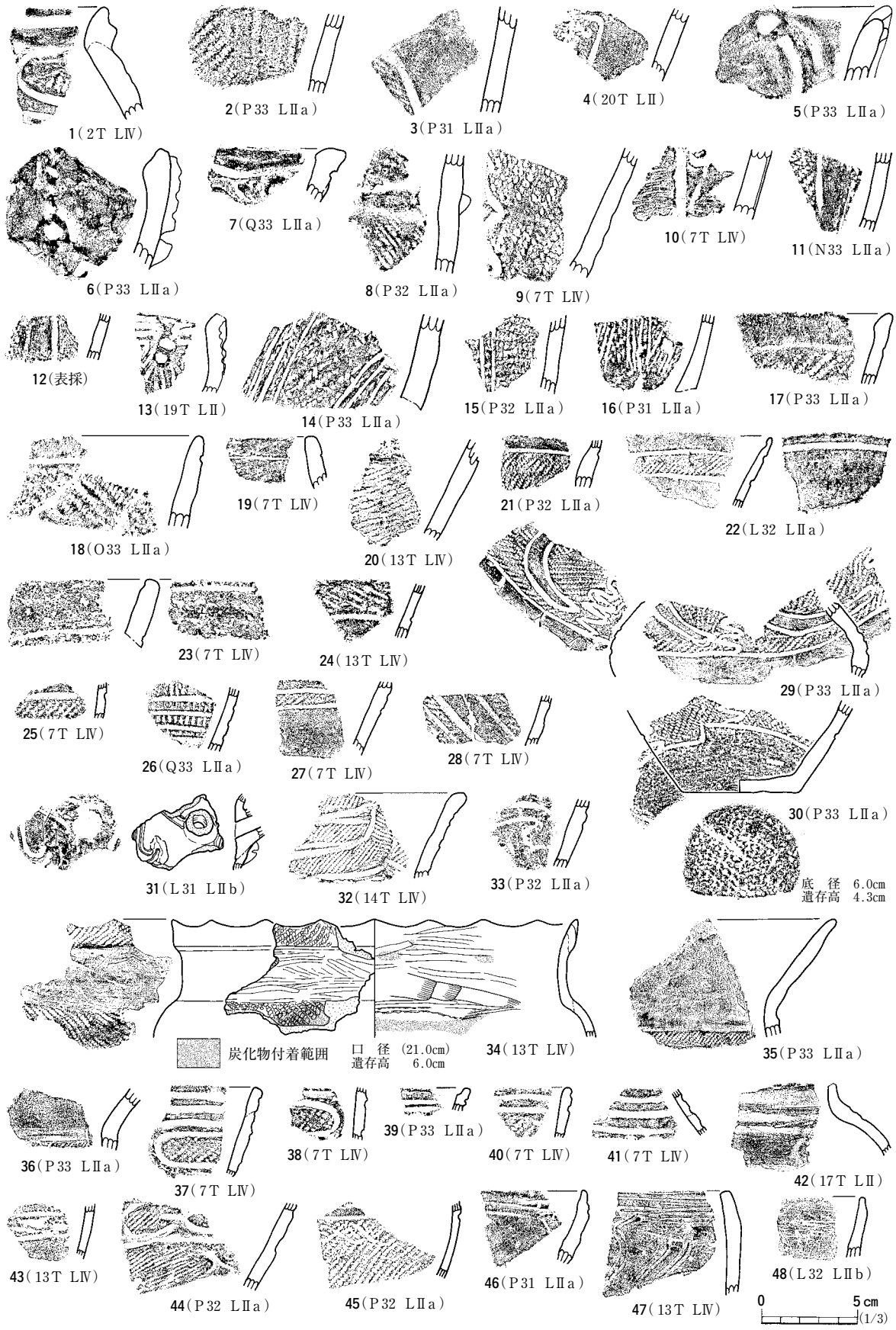

1（2T LⅣ）
2（P33 LⅡa）
3（P31 LⅡa）
4（20T LⅡ）
5（P33 LⅡa）
6（P33 LⅡa）
7（Q33 LⅡa）
8（P32 LⅡa）
9（7T LⅣ）
10（7T LⅣ）
11（N33 LⅡa）
12（表採）
13（19T LⅡ）
14（P33 LⅡa）
15（P32 LⅡa）
16（P31 LⅡa）
17（P33 LⅡa）
18（O33 LⅡa）
19（7T LⅣ）
20（13T LⅣ）
21（P32 LⅡa）
22（L32 LⅡa）
23（7T LⅣ）
24（13T LⅣ）
25（7T LⅣ）
26（Q33 LⅡa）
27（7T LⅣ）
28（7T LⅣ）
29（P33 LⅡa）
30（P33 LⅡa）
31（L31 LⅡb）
32（14T LⅣ）
33（P32 LⅡa）
底　径　6.0cm
遺存高　4.3cm
炭化物付着範囲
口　径　(21.0cm)
遺存高　6.0cm
34（13T LⅣ）
35（P33 LⅡa）
36（P33 LⅡa）
37（7T LⅣ）
38（7T LⅣ）
39（P33 LⅡa）
40（7T LⅣ）
41（7T LⅣ）
42（17T LⅡ）
43（13T LⅣ）
44（P32 LⅡa）
45（P32 LⅡa）
46（P31 LⅡa）
47（13T LⅣ）
48（L32 LⅡb）
0　5cm
(1/3)

図６　遺構外出土遺物（１）

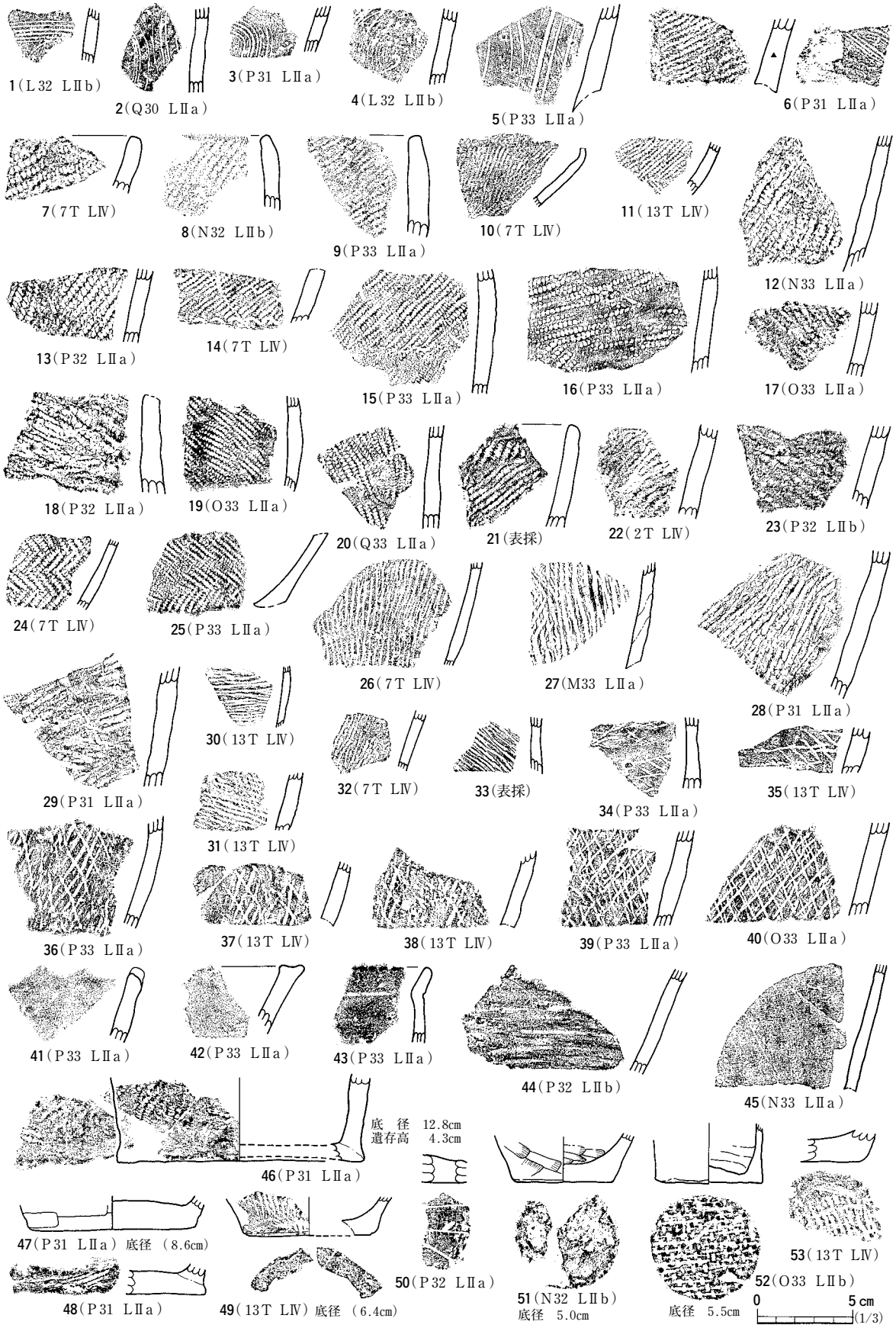

1（L32 LⅡb）
2（Q30 LⅡa）
3（P31 LⅡa）
4（L32 LⅡb）
5（P33 LⅡa）
6（P31 LⅡa）
7（7T LⅣ）
8（N32 LⅡb）
9（P33 LⅡa）
10（7T LⅣ）
11（13T LⅣ）
12（N33 LⅡa）
13（P32 LⅡa）
14（7T LⅣ）
15（P33 LⅡa）
16（P33 LⅡa）
17（O33 LⅡa）
18（P32 LⅡa）
19（O33 LⅡa）
20（Q33 LⅡa）
21（表採）
22（2T LⅣ）
23（P32 LⅡb）
24（7T LⅣ）
25（P33 LⅡa）
26（7T LⅣ）
27（M33 LⅡa）
28（P31 LⅡa）
29（P31 LⅡa）
30（13T LⅣ）
31（13T LⅣ）
32（7T LⅣ）
33（表採）
34（P33 LⅡa）
35（13T LⅣ）
36（P33 LⅡa）
37（13T LⅣ）
38（13T LⅣ）
39（P33 LⅡa）
40（O33 LⅡa）
41（P33 LⅡa）
42（P33 LⅡa）
43（P33 LⅡa）
44（P32 LⅡb）
45（N33 LⅡa）
底　径　12.8cm
遺存高　4.3cm
46（P31 LⅡa）
47（P31 LⅡa）底径（8.6cm）
48（P31 LⅡa）
49（13T LⅣ）底径（6.4cm）
50（P32 LⅡa）
51（N32 LⅡb）
底径　5.0cm
52（O33 LⅡb）
底径　5.5cm
53（13T LⅣ）
0
5cm
(1/3)

図７　遺構外出土遺物（２）

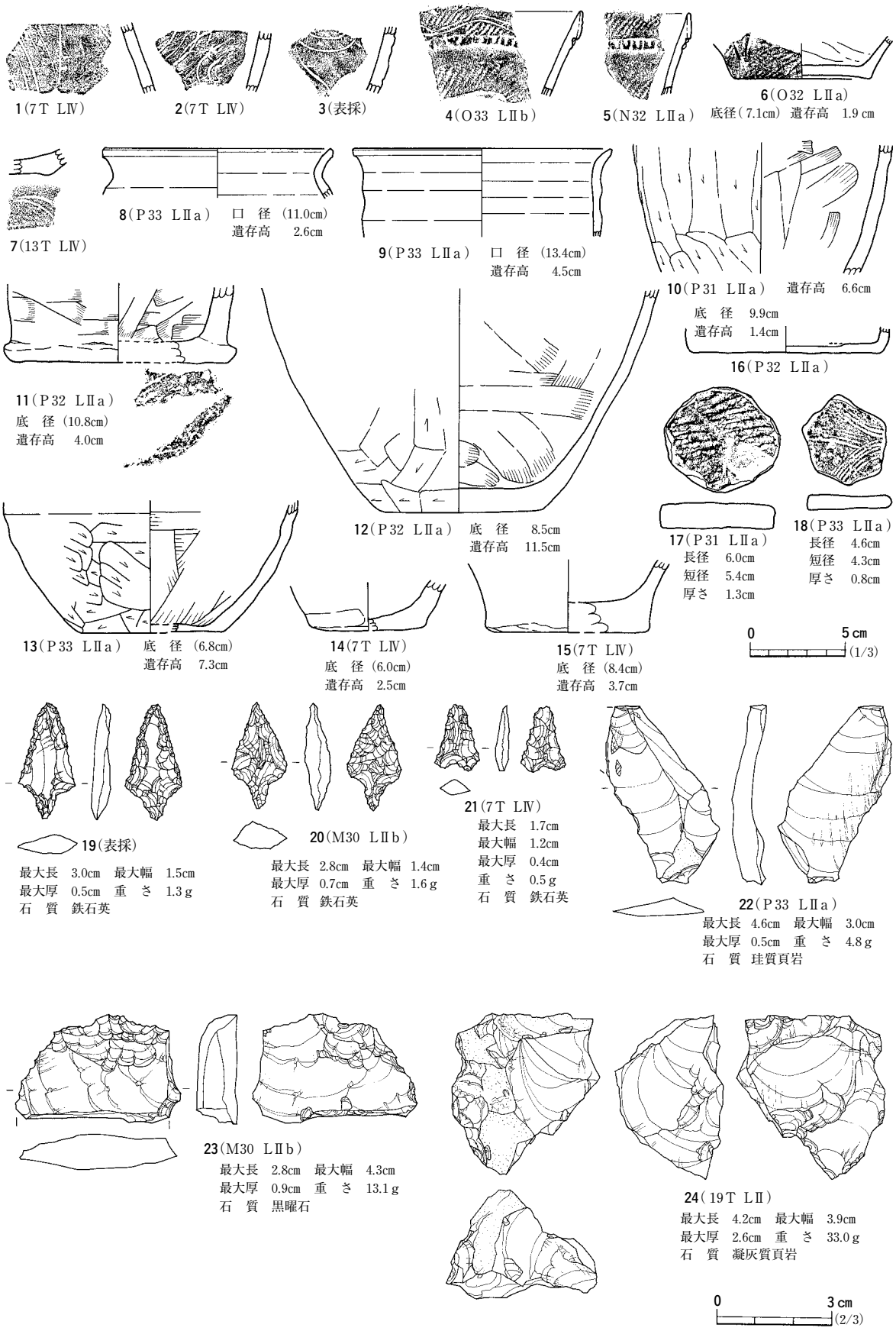

1(7T LⅣ)
2(7T LⅣ)
3(表採)
4(O33 LⅡb)
5(N32 LⅡa)
6(O32 LⅡa)
底径(7.1cm) 遺存高 1.9cm
7(13T LⅣ)
8(P33 LⅡa) 口 径 (11.0cm)
遺存高 2.6cm
9(P33 LⅡa) 口 径 (13.4cm)
遺存高 4.5cm
10(P31 LⅡa) 遺存高 6.6cm
底 径 9.9cm
遺存高 1.4cm
16(P32 LⅡa)
11(P32 LⅡa)
底 径 (10.8cm)
遺存高 4.0cm
12(P32 LⅡa) 底 径 8.5cm
遺存高 11.5cm
17(P31 LⅡa)
長径 6.0cm
短径 5.4cm
厚さ 1.3cm
18(P33 LⅡa)
長径 4.6cm
短径 4.3cm
厚さ 0.8cm
13(P33 LⅡa) 底 径 (6.8cm)
遺存高 7.3cm
14(7T LⅣ)
底 径 (6.0cm)
遺存高 2.5cm
15(7T LⅣ)
底 径 (8.4cm)
遺存高 3.7cm
0 5cm
(1/3)
19(表採)
最大長 3.0cm 最大幅 1.5cm
最大厚 0.5cm 重 さ 1.3g
石 質 鉄石英
20(M30 LⅡb)
最大長 2.8cm 最大幅 1.4cm
最大厚 0.7cm 重 さ 1.6g
石 質 鉄石英
21(7T LⅣ)
最大長 1.7cm
最大幅 1.2cm
最大厚 0.4cm
重 さ 0.5g
石 質 鉄石英
22(P33 LⅡa)
最大長 4.6cm 最大幅 3.0cm
最大厚 0.5cm 重 さ 4.8g
石 質 珪質頁岩
23(M30 LⅡb)
最大長 2.8cm 最大幅 4.3cm
最大厚 0.9cm 重 さ 13.1g
石 質 黒曜石
24(19T LⅡ)
最大長 4.2cm 最大幅 3.9cm
最大厚 2.6cm 重 さ 33.0g
石 質 凝灰質頁岩
0 3cm
(2/3)

図８　遺構外出土遺物（３）

る。

７図６～44は縄文が施されたものである。６～25は斜行縄文が施され，使用原体には単節と無節のものがある。その種類には，単節縄文ＬＲ(６～16)，単節縄文ＲＬ(17～20)，無節縄文Ｌ(21・22)，無節縄文Ｒ(23)がある。このうち，22は浅鉢と考えられる。６は外面に縄文，内面に条痕状の調整が施されており，胎土には植物繊維が微量混和されるため，縄文時代早期末葉の可能性がある。24・25は異原体による羽状縄文が施されている。26～33は撚糸文が施されるものである。34～40は網目状撚糸文が施されるもので，縄文原体の施文が横方向のもの(34・35)と縦方向のもの(36～40)がある。41～45は無文のもので，41は小波状口縁を呈し，42は内面に粘土を貼付して，口縁部を肥厚させている。43には口縁部と胴部の境に沈線が施されている。44にはナデ状の器面調整が観察できる。45には丁寧な器面調整，46～53は底部資料である。49・50には木葉痕が，52・53には網代痕が認められる。

Ⅲ群土器　弥生時代の土器を本群とする。大きく２時期に分けられる。

１類　弥生時代中期後葉の土器で，８図１～３が該当する。２本同時施文の渦文が描かれている。

２類　弥生時代後期の天王山式で，８図４～６が該当する。４～６は同一個体である。口縁部は，折り返し口縁で，その下位には交互刺突文が施され，底部は上底風を呈する。

Ⅳ群土器　平安時代の土器を本群とする。いずれも土師器で，器種には杯・甕・筒形土器がある。８図７は土師器杯の底部である。底部には回転糸切り痕が観察されるが，内面の調整は確認できなかった。８～15は土師器甕である。８・９はロクロ整形による口縁部資料である。器形は，８が胴部から口縁部に向かってすぼまり，口縁部が「く」字状に外傾するもの，９は胴部から直立に立ち上がり口縁部で外反するものである。10は外面にケズリ，内面にナデ調整が施される胴部資料で，整形方法は不明である。11～15は非ロクロ整形の胴下半部から底部にかけての資料で，内外面にナデやケズリが施されている。このうち，11の底部には木葉痕が認められる。16は筒形土器の底部である。器壁が薄く，内面の周縁には炭化物が付着している。

土製品(図８，写真６)

８図17・18は土器片製円盤である。いずれも打ち欠いて整形したもので，18は打ち欠いただけであるが，17は周縁部が部分的に研磨されている。

石　器(図８，写真６)

８図19～21は石鏃である。石鏃には19・20の有茎石鏃と21のような無茎凹基石鏃がある。器表面の一部に素材剥離面を残す19と，器面全体に調整剥離が及ぶ20・21がある。特に，19・20の先端部および基部の作り出しには，入念な調整が加えられている。８図22・23は剥片である。22は単剥離面と打面を有する縦長剥片である。23は上側縁の両面に調整加工が施されている。８図24は石核である。表面に自然面が残るもので，打面と作業面を転移しながら剥片剥離を行っている。打面調整は行われていない。

（宮　田・国　井）

第3章　ま　と　め

今回の道平遺跡の調査では，土坑が4基確認され，遺物では縄文土器片，弥生土器片，土師器片，土製品，石器類が出土した。検出された土坑は，いずれも明確な時期を確定することができなかった。このため本章では，出土した土器を中心に遺跡の変遷を述べることとする。

今回の調査で発見された最古の資料は，縄文時代中期後葉に位置づけられる大木9式期の土器であるが，その出土量は少ない。また，昭和55年の調査(渡辺・大竹1980)でも該期の土器がわずかに出土しているが，これまでに該期に比定される遺構は道平遺跡では確認されていない。

続いて，縄文時代後期から晩期にかけての資料が確認されている。これらの土器の多くは，調査区南東部の狭い範囲から出土している。該期の土器は，出土土器全体の8割以上を占め，調査区内で主体となるものである。縄文時代後期前葉では，綱取Ⅰ式～堀之内2式土器が見られ，該期のなかで土器の出土量が最も多い。後期中葉(加曽利Ｂ式期)～後葉の土器は，出土量が極端に少ない。

縄文時代晩期では，大洞Ｂ・Ｃ１・Ａ式に比定される精製・半粗製土器と，晩期中～後葉と考えられる網目状撚糸文や撚糸文の粗製土器が確認されている。よって晩期では，前～後葉の各期を通じての土器が見つかったことになる。

中位段丘面上に位置する今回の調査区では，縄文時代後～晩期の遺構は確認できなかった。しかしながら昭和55年の発掘調査(渡辺・大竹1983)では，埋設土器群や住居跡の存在が明らかにされていることから，該期の集落域は大川原川に近い低位段丘面上を主体としていたと推察される。

縄文時代以降では，弥生時代中～後期の土器が少量出土しているに過ぎない。弥生時代中期後葉に比定される土器では二本同時施文を有するものがあり，その特徴から天神原式期の資料と判断した。後期の土器では交互刺突文を施すものがあり，天王山式期の資料と考えられる。

弥生時代以降，本遺跡内における生活痕跡は平安時代まで途絶える。該期の土師器の多くは調査区南東部から出土している。器種は，杯・甕・筒形土器を組成する。甕には，ロクロ成形と非ロクロ成形のものがあるが，その詳細な時期については不明である。

今回，調査を行った区域では住居跡や埋設土器群が確認できなかったことから，縄文・弥生・平安時代を通じて集落の居住空間や墓域ではなかったと考えられる。先述したように縄文時代後～晩期の集落は，今回の調査区より一段低い段丘面に営まれていたと推察される。しかし今回の調査区でも希薄ながら当該期の遺物が確認されたことから，道平集落の生活領域の一部であったことは間違いないであろう。

また，弥生時代中～後期と平安時代の遺物が出土したことで，道平遺跡の年代が少なくとも該期まで下る可能性が出てきた。今後，道平遺跡で予定される常磐自動車道遺跡関連の調査において，遺跡の全容が解明されることに期待したい。

(宮　田・国　井)

引用・参考文献

序　章

（発行年順）

大熊町史編纂委員会編　1984　『大熊町史　第二巻　史料　原始　古代　中世』 大熊町

富岡町史編纂委員会編　1987　『富岡町史　第一巻　通史編』 富岡町

富岡町史編纂委員会編　1987　『富岡町史　第三巻　考古・民俗編』 富岡町

鈴木敬治ほか　1991　『浪江・磐城富岡』福島県国土調査・土地分類基本調査　福島県農地林務部農地計画課

根本　守　　1991　「地質」『楢葉町史』第一巻　福島県楢葉町

久保和也ほか　1994　『浪江及び磐城富岡地域の地質』地域地質研究報告　地質調査所　通商産業省工業技術院

福島県教育委員会編　1996　『福島県遺跡地図・浜通り地方』福島県文化財調査報告書第321集　福島県教育委員会

㈶福島県文化センター編　　1997　『福島県内遺跡分布調査報告３』福島県文化財調査報告書第334集　福島県教育委員会

㈶福島県文化センター編　　1998　『福島県内遺跡分布調査報告４』福島県文化財調査報告書第342集　福島県教育委員会

㈶福島県文化振興事業団編　2002　『福島県内遺跡分布調査報告８』福島県文化財調査報告書第385集　福島県教育委員会

㈶福島県文化振興事業団編　2003　『福島県内遺跡分布調査報告９』福島県文化財調査報告書第397集　福島県教育委員会

第１編　後作Ａ遺跡（２次調査）

馬目順一ほか　1982　『竹之内遺跡－縄文時代早期の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第８冊　いわき市教育委員会

大熊町史編纂委員会編　1984　「第３章　第11節　大平Ａ遺蹟」『大熊町史　第二巻』 大熊町

鈴鹿良一ほか　1984　「松ヶ平Ａ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県文化財調査報告書第129集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　日本道路公団

大平好一ほか　1991　「前原Ａ遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告８』福島県文化財調査報告書第249集　福島県教育委員会
㈶福島県文化センター

本間　宏ほか　1993　「馬場平Ｂ遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告20』福島県文化財調査報告書第291集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　日本道路公団

本間　宏ほか　1999　「上田郷Ⅵ遺跡（１次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告18』福島県文化財調査報告書第356集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　日本道路公団

井　憲治ほか　2001　「上田郷Ⅵ遺跡（２次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告22』福島県文化財調査報告書第375集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　日本道路公団

福田秀生ほか　2002　「後作Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告36』福島県文化財調査報告書第400集
福島県教育委員会　㈶福島県文化振興事業団　日本道路公団

第２編　上平Ａ遺跡

庄野靖寿　　1974　『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告第３集　埼玉県教育委員会

竹島國基　　1975　『宮田貝塚』福島県相馬郡小高町教育委員会

阿部　恵　　1980　「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚　宇賀崎貝塚　宇賀崎１号墳他』宮城県教育委員会

岩淵康治・佐藤則之　　1980　『仙台市富沢　三神峯遺跡発掘調査報告書－東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部Ｃ地点緊急発掘調査－』仙台市教育委員会　東北電力株式会社

鈴鹿良一ほか　1983　「松ヶ平Ａ遺跡（第１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第118集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

大熊町史編纂委員会編　1984　「第３章　第２節　上平Ａ遺蹟」『大熊町史　第二巻』 大熊町

鈴鹿良一ほか　1984　「松ヶ平Ａ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県文化財調査報告書第129集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

鈴鹿良一・山内幹夫ほか　1988　「羽白Ｃ遺跡（第１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸⅡ』福島県文化財調査報告書第194集
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第１号　日本考古学会
阿倍朝衛　1990「多面体を呈する敲石再論」『帝京史学』第５号　帝京大学文学部史学科
吉田秀享ほか　1990「八重米坂Ａ遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ』福島県文化財調査報告書第236集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　東北電力株式会社
川村　正ほか　1991『左道遺跡』七ヶ浜町文化財調査報告書第７集　七ヶ浜町教育委員会
麻柄一志　1991「夏の家と冬の家－縄文時代の季節的住み替えの可能性－」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学研究室
麻柄一志　1992「土屋根の検討」『魚津市立博物館紀要第３号』魚津市教育委員会
藤谷誠・高橋亜貴子　1994「八重米坂Ａ遺跡(第３次調査)」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第297集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　東北電力株式会社
吉田秀享ほか　1995「段ノ原Ａ遺跡」「段ノ原Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第312集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　地域振興整備公団
小暮伸之ほか　1996「猪倉Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第326集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　地域振興整備公団
鈴鹿良一ほか　1996「獅子内遺跡(第１次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ』　福島県文化財調査報告書第320集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　建設省東北地方建設局
福島雅儀・石本弘ほか　1996「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告８』福島県文化財調査報告書第322集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　建設省東北地方建設局
山岸英夫ほか　1997「獅子内遺跡(第２次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第338集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　建設省東北地方建設局
吉田秀享ほか　1997「山田Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第333集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　地域振興整備公団
山岸英夫ほか　1998「獅子内遺跡(第３次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅵ』　福島県文化財調査報告書第346集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　建設省東北地方建設局
山岸英夫ほか　1999「獅子内遺跡(第４次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県文化財調査報告書第351集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　建設省東北地方建設局
大沼克彦　2002『文化としての石器づくり』学生社
真鍋健一　2003「馬場前遺跡の複式炉を構成する礫の産地について」『常磐自動車道遺跡調査報告34』　福島県教育委員会　㈶福島県文化振興事業団　日本道路公団
御堂島正　2003「石器製作の使用痕－トラセオロジーの視点から－」『月刊　考古学ジャーナル』３月号　Ｎｏ.499　ニュー・サイエンス社

第３編　道平遺跡

渡辺一雄・大竹憲治編　1980『道平遺跡－道平地区団体営圃場整備事業に伴う発掘予備調査』大熊町文化財調査報告Ⅱ　福島県双葉郡大熊町教育委員会
渡辺一雄・大竹憲治編　1983『道平遺跡の研究－福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査－』　福島県大熊町教育委員会
大熊町史編纂委員会編　1984「第３章　第１節　道平遺蹟」『大熊町史　第二巻』　大熊町
山内幹夫ほか　1984「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』福島県文化財調査報告書第132集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
山内幹夫ほか　1985「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告19』福島県文化財調査報告書第148集　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
馬目順一ほか　1988「山所布Ｂ遺跡」『楢葉町史』福島県楢葉町

写　真　図　版

第１編　後作（うしろさく）Ａ遺跡

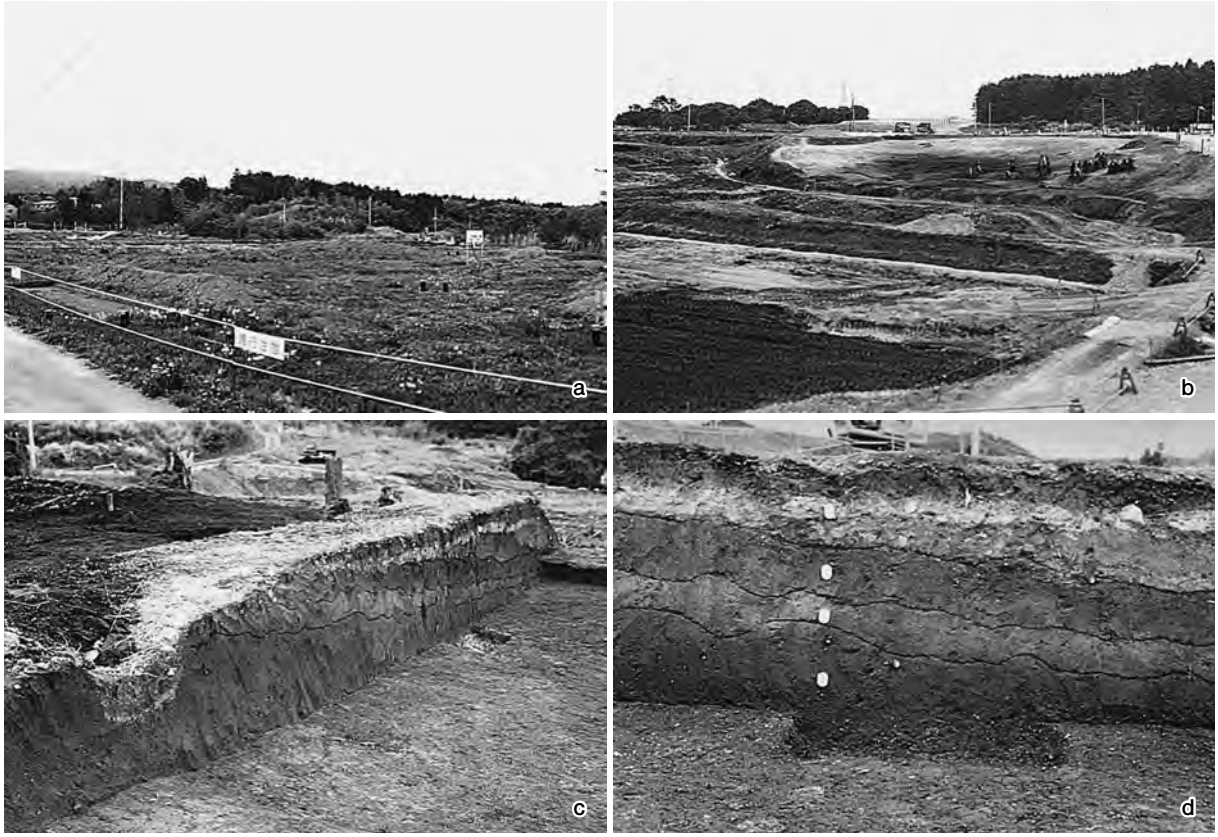
（２次調査）

写 真 目 次

1　後作Ａ遺跡調査区全景(東から)　……157
2　後作Ａ遺跡調査区全景(南東から)……157
3　調査前全景，調査区遠景，基本土層 …158
4　基本土層拡大(東から)　……158
5　33～38号土坑全景 ……159
6　33～38号土坑断面，作業風景 ……160
7　33・36・38号土坑出土遺物 ……161
8　第１遺物包含層出土遺物（１）・
　遺構外出土遺物（１）……161
9　第１遺物包含層出土遺物（２）……162
10　第１遺物包含層出土遺物（３）……162
11　第１遺物包含層出土遺物（４）……163
12　第１遺物包含層出土遺物（５）・
　遺構外出土遺物（２）……163
13　第１遺物包含層出土遺物（６）・
　遺構外出土遺物（３）……164
14　第１遺物包含層出土遺物（７）……164

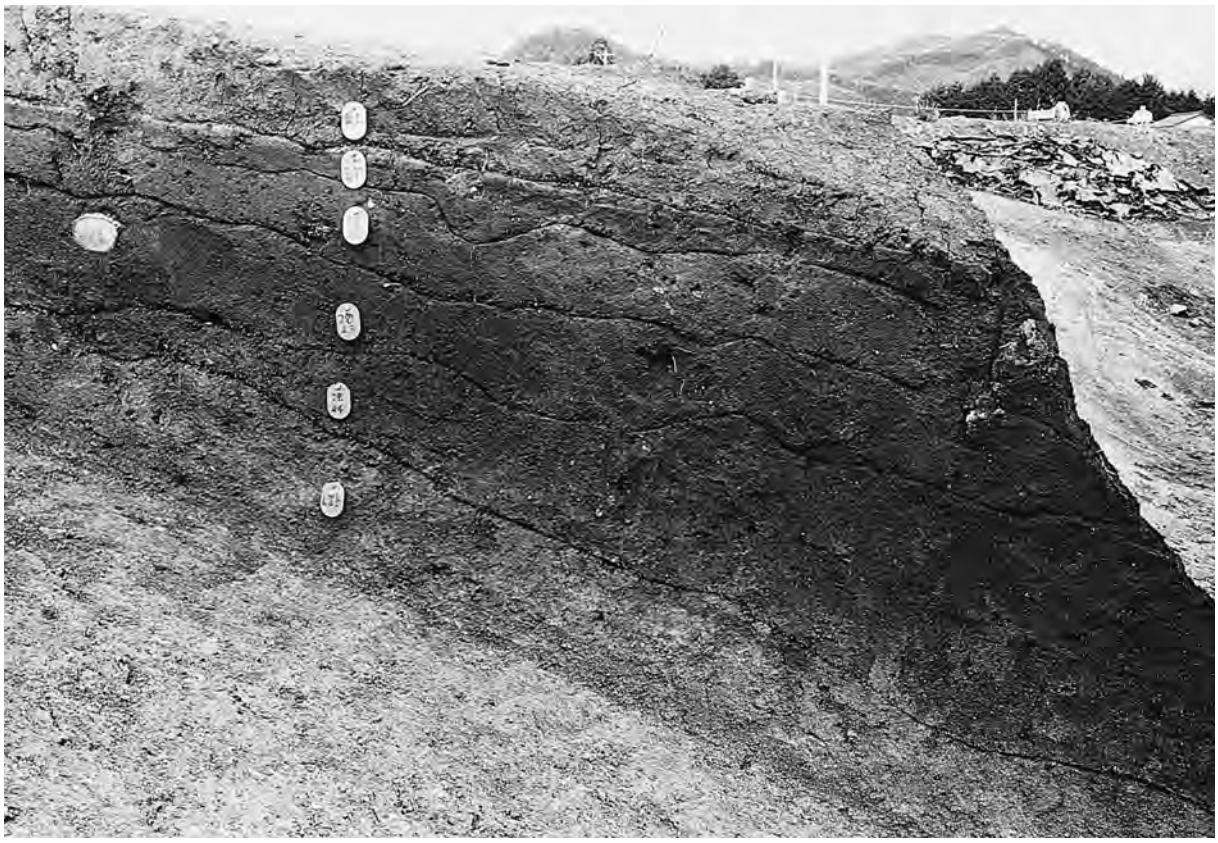
1　後作Ａ遺跡調査区全景　（東から）

2　後作Ａ遺跡調査区全景　（南東から）

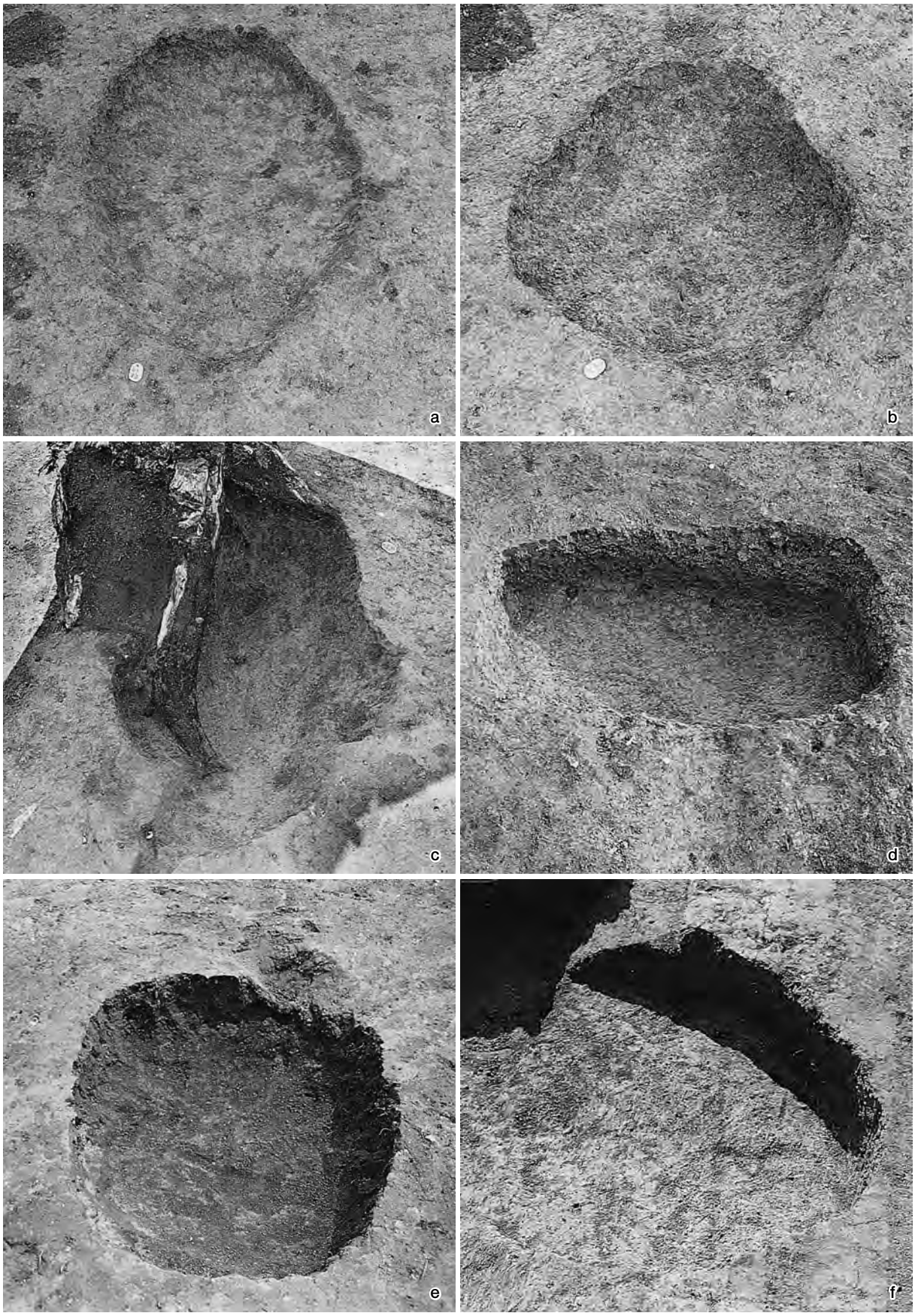


3　調査前全景，調査区遠景，基本土層

a　調査前風景（南東から）　b　調査区遠景（北から）
c　基本土層（南東から）　d　基本土層（東から）

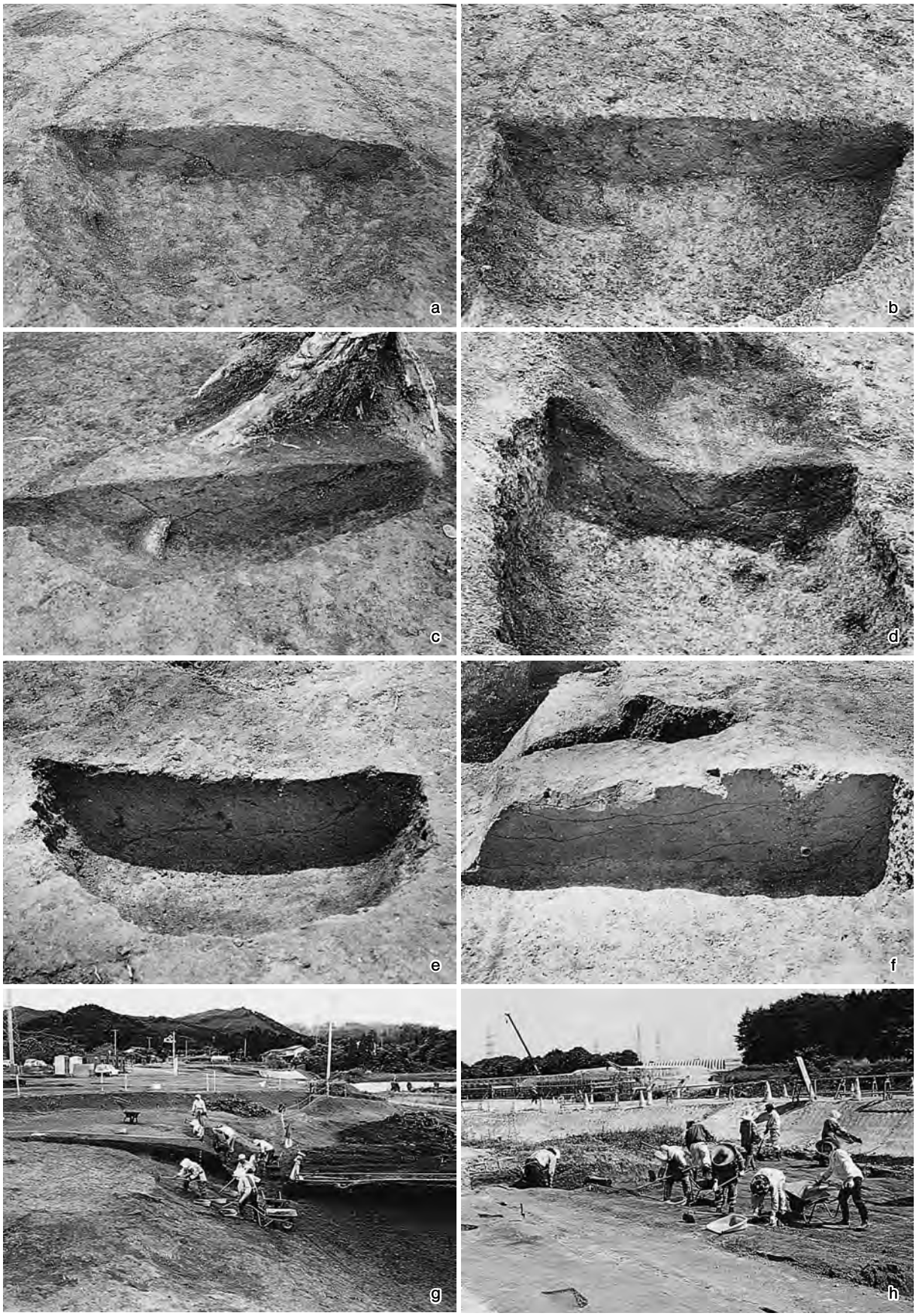


4　基本土層拡大　（東から）



5　33～38号土坑全景

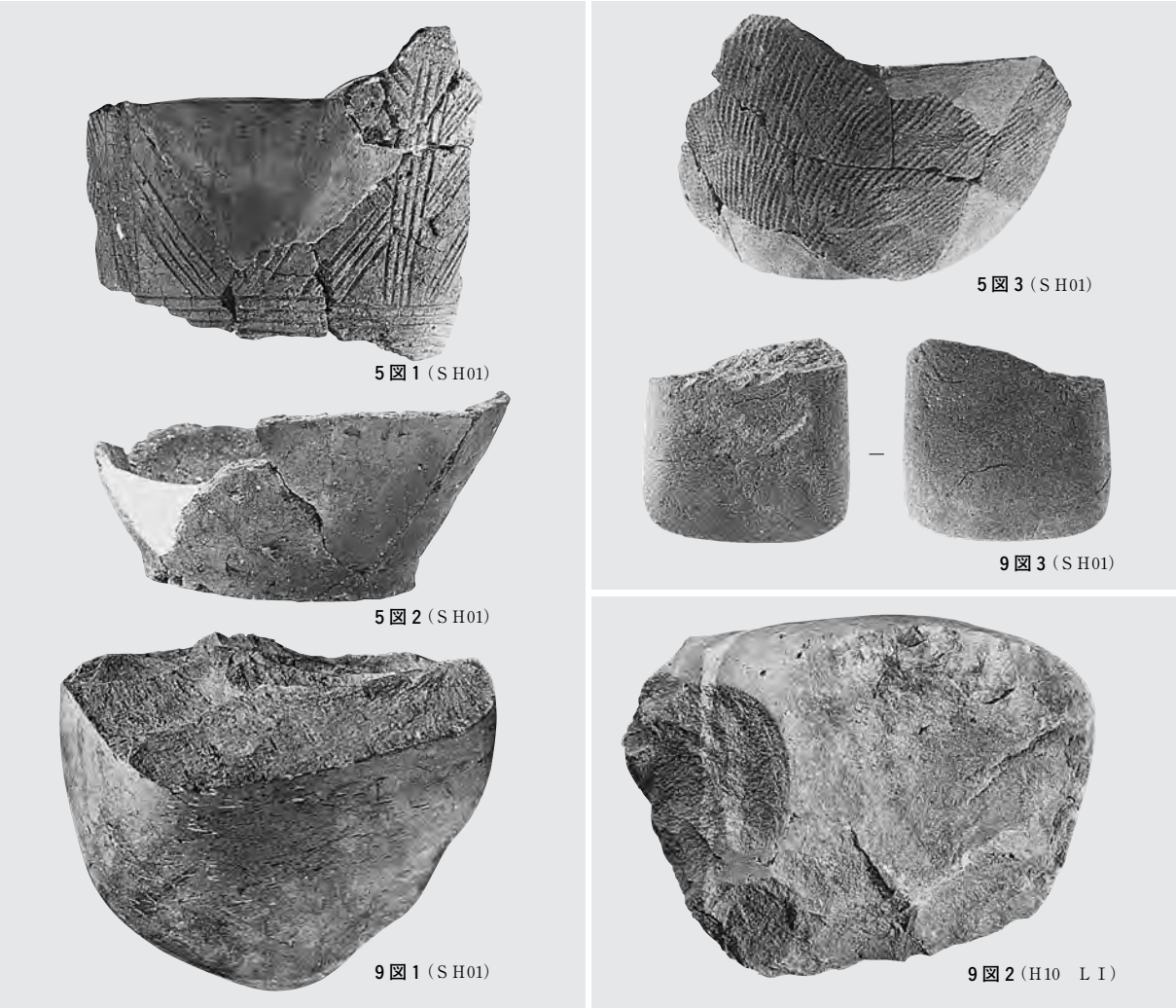
a　33号土抗全景（南から）　**b**　34号土抗全景（西から）
c　35号土抗全景（東北から）　**d**　36号土抗全景（北から）
e　37号土抗全景（北から）　**f**　38号土抗全景（東から）



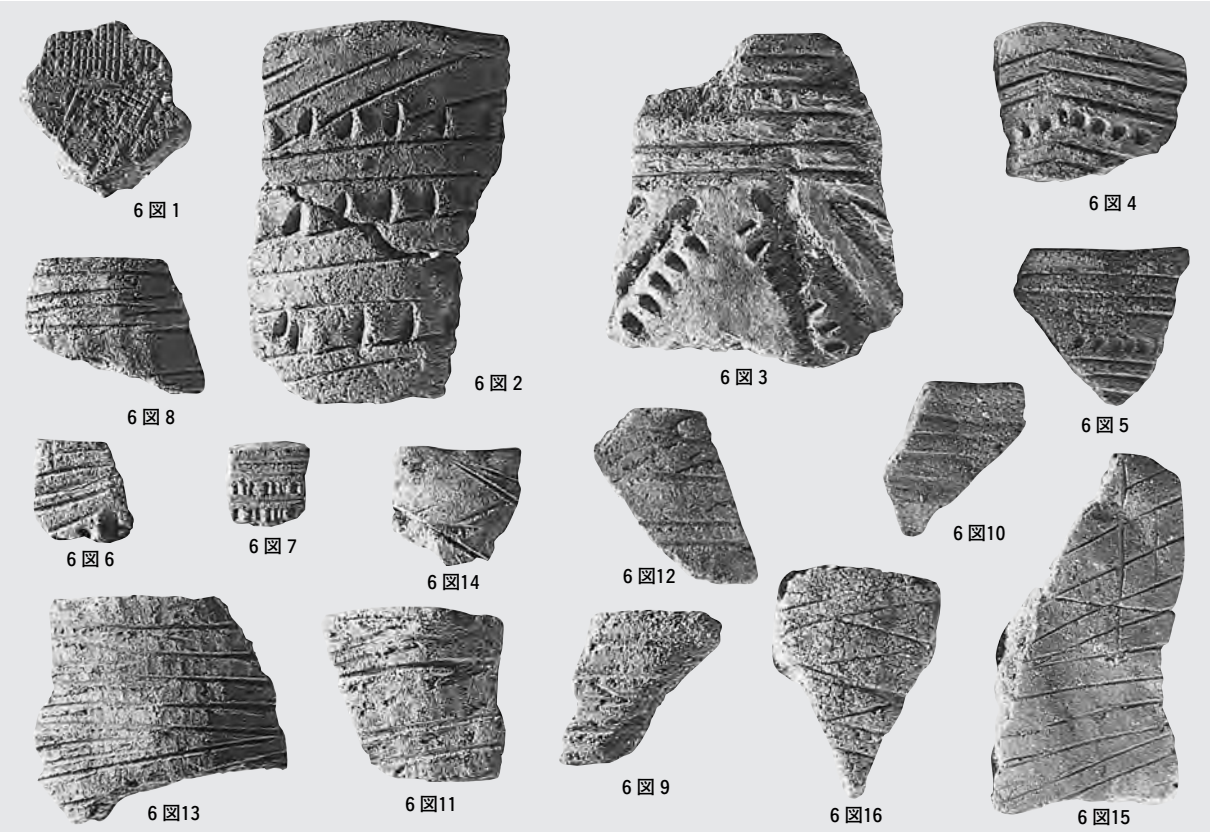
6　33～38号土坑断面，作業風景

a　33号土坑断面（南から）
b　34号土坑断面（南から）
c　35号土抗断面（北から）
d　36号土抗断面（東から）
e　37号土抗断面（北から）
f　38号土抗断面（東から）
g　作業風景（東から）
h　作業風景（西から）

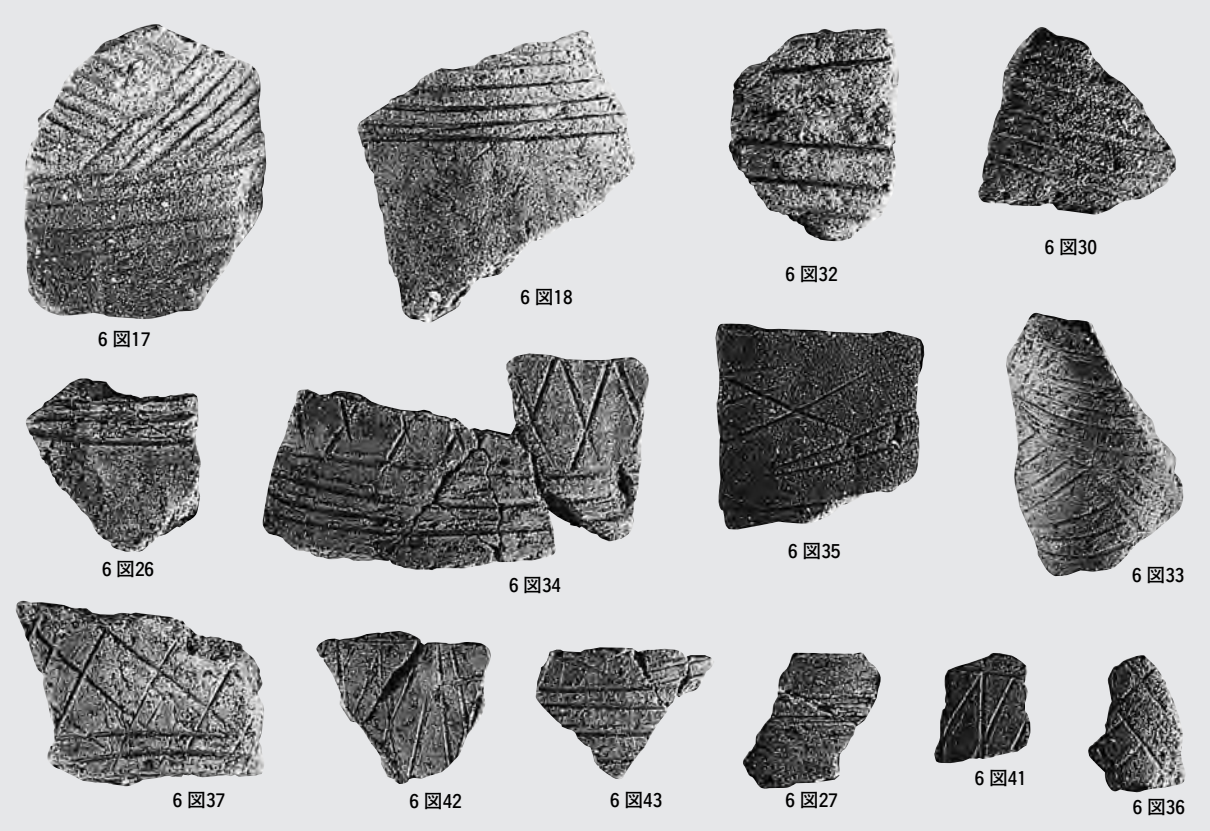
7　33・36・38号土坑出土遺物



8　第１遺物包含層出土遺物（１）・遺構外出土遺物（１）

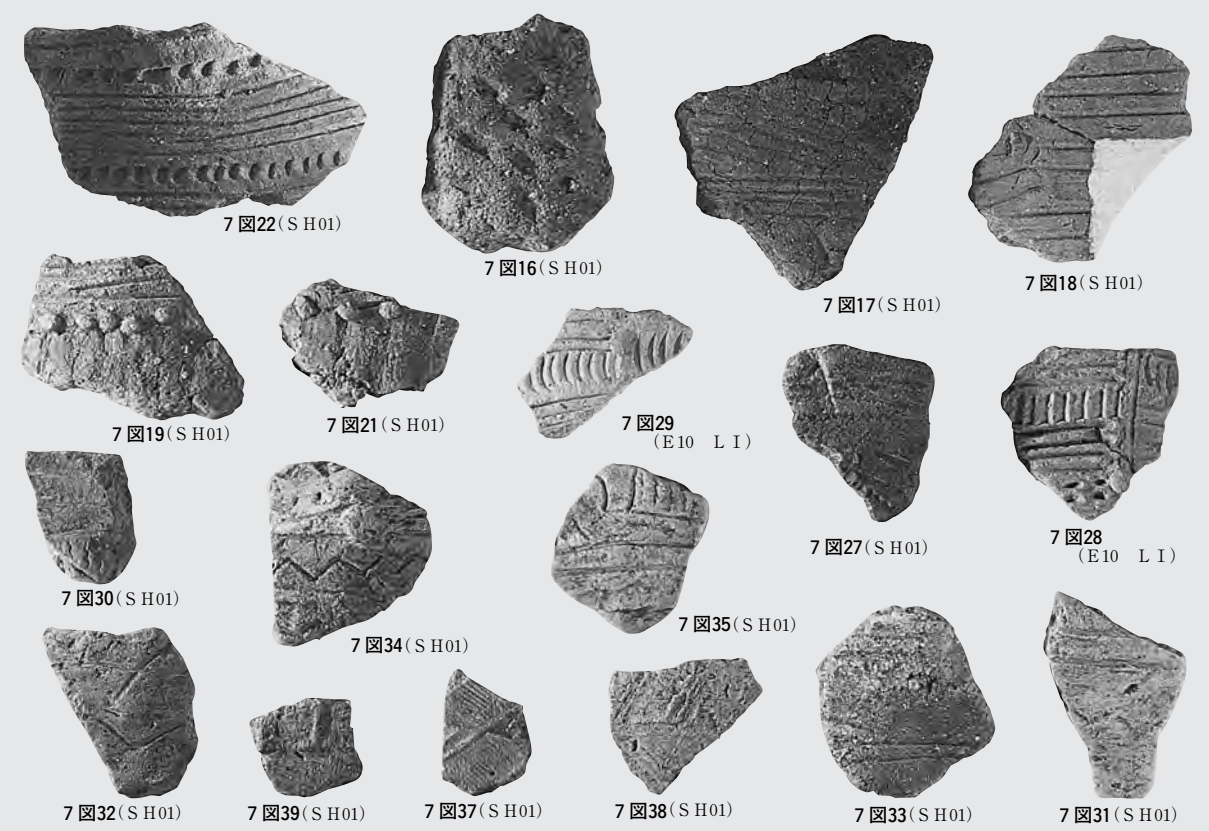


9　第１遺物包含層出土遺物（２）

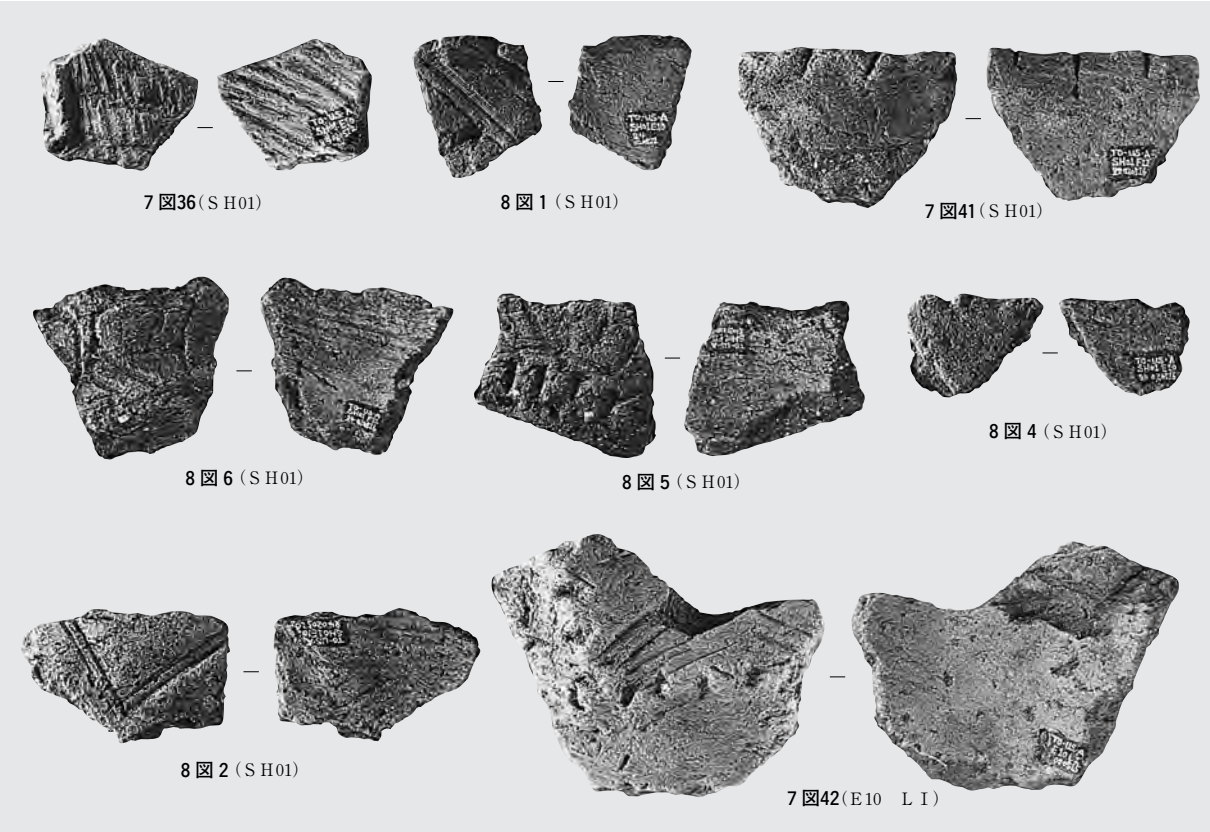


10　第１遺物包含層出土遺物（３）

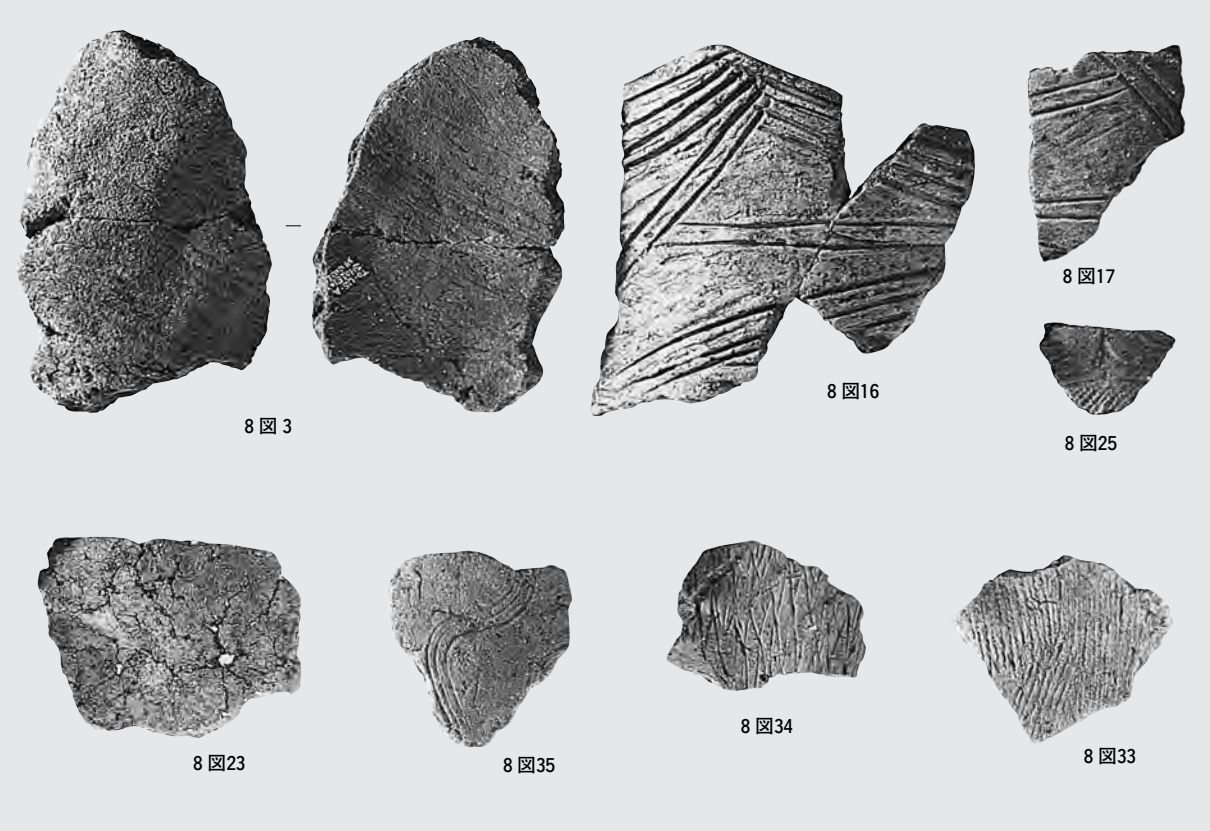
11　第１遺物包含層出土遺物（４）



12　第１遺物包含層出土遺物（５）・遺構外出土遺物（２）



13　第１遺物包含層出土遺物（６）・遺構外出土遺物（３）



14　第１遺物包含層出土遺物（７）

写　真　図　版

第２編　上平（うわだいら）Ａ遺跡

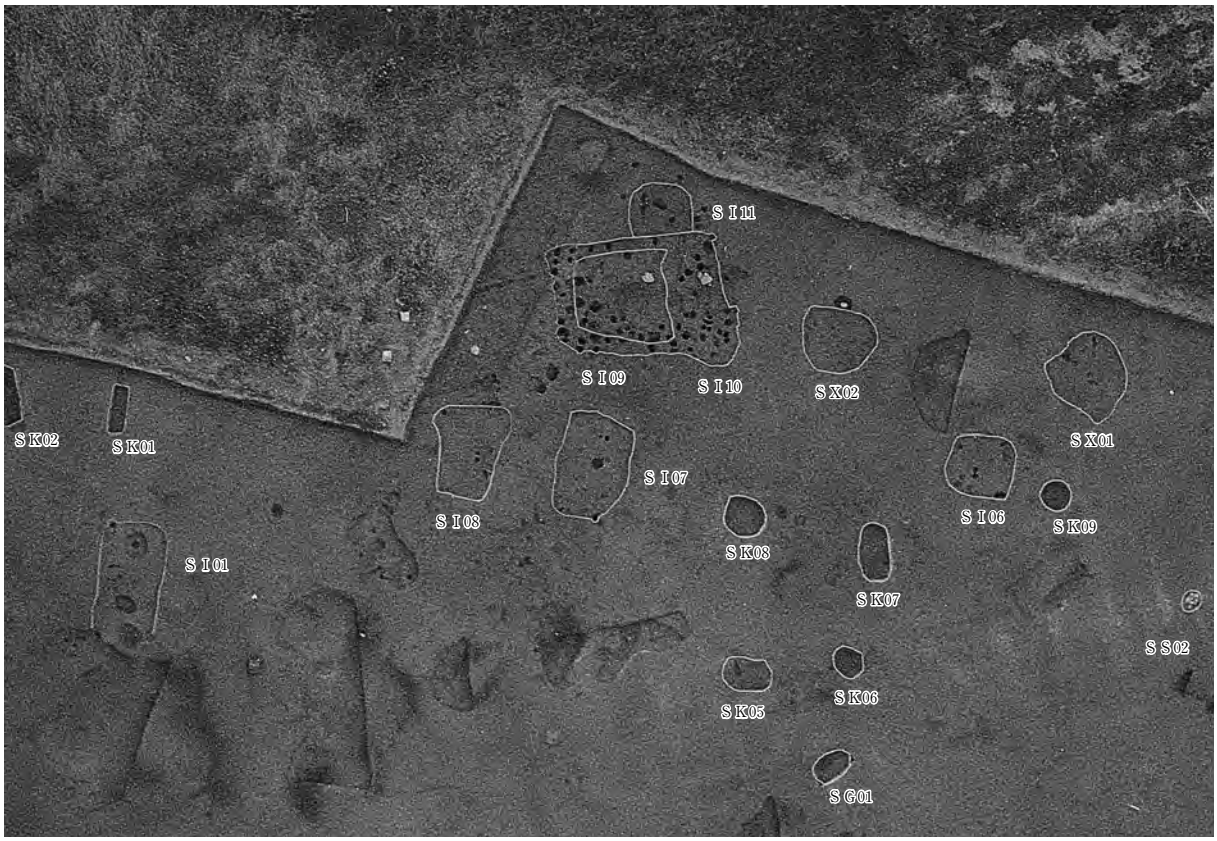
写 真 目 次

1　上平Ａ・道平遺跡の位置(上空から)……167
2　調査前全景(北から)　……168
3　調査区遠景(西から)　……168
4　調査区南西部近景　Ｆ12～14・Ｇ13～15
　グリッド付近(上空から)……169
5　調査区北部近景　Ｆ～Ｈ10・11グリッド
　付近(上空から)……169
6　基本土層　Ｈ９・10グリッド付近
　(南東から)……170
7　基本土層　Ｊ８グリッド付近(西から)　170
8　１号住居跡(南から)　……171
9　１号住居跡細部　……171
10　２号住居跡(南から)　……172
11　２号住居跡細部　……172
12　３号住居跡(東から)　……173
13　３号住居跡細部　……173
14　４ａ号住居跡(南から)　……174
15　４ａ号住居跡細部　……174
16　４ａ・ｂ号住居跡(西から)　……175
17　４ｂ号住居跡細部　……175
18　５号住居跡(南から)　……176
19　５号住居跡細部　……176
20　６号住居跡(北から)　……177
21　６号住居跡細部　……177
22　７号住居跡(西から)　……178
23　７号住居跡細部　……178
24　８号住居跡(北から)　……179
25　８号住居跡細部　……179
26　９号住居跡(南から)　……180
27　９・10号住居跡細部　……180
28　10号住居跡(北から)　……181
29　10号住居跡細部　……181
30　11号住居跡(北から)　……182
31　11号住居跡細部　……182
32　12号住居跡(西から)　……183
33　12号住居跡細部　……183
34　13号住居跡(南から)　……184
35　13号住居跡細部　……184
36　14号住居跡(東から)　……185
37　14号住居跡細部　……185
38　15号住居跡(南西から)……186
39　15号住居跡細部　……186
40　16号住居跡(南から)　……187
41　16号住居跡細部　……187
42　17号住居跡(南から)　……188
43　17号住居跡細部　……188
44　１号竪穴状遺構(北から)　……189
45　２号竪穴状遺構(東から)　……189
46　３号竪穴状遺構(東から)　……190
47　１～３号竪穴状遺構細部　……190
48　１～４号土坑　……191
49　５～８号土坑　……192
50　９～12号土坑　……193
51　13～16号土坑　……194
52　17～20号土坑　……195
53　21～24号土坑　……196
54　25号土坑，１・２号集石遺構，
　１号焼土遺構　……197
55　１号木炭窯跡(北東から)……198
56　１号木炭窯跡細部　……198
57　１・３号住居跡出土遺物　……199
58　４ａ号住居跡出土遺物　……199
59　３～８号住居跡出土遺物　……200
60　９号住居跡出土遺物(１)　……201
61　９号住居跡出土遺物(２)　……202
62　９号住居跡出土遺物(３)　……203
63　９～12号住居跡出土遺物　……204
64　10・12～17号住居跡出土遺物　……205
65　１号竪穴状遺構，１・３・５・８・10
　・18・21・23号土坑，１号木炭窯跡
　出土遺物　……206
66　遺構外出土遺物(１)　……206
67　遺構外出土遺物(２)　……207
68　遺構外出土遺物(３)　……208
69　遺構外出土遺物(４)　……209
70　遺構外出土遺物(５)　……210
71　遺構外出土遺物(６)　……211
72　縄文土器細部　……212

1　上平Ａ・道平遺跡の位置［平成11年10月撮影］　（上空から）

2　調査前全景　（北から）

3　調査区遠景　（西から）



4　調査区南西部近景　Ｆ12～14・Ｇ13～15グリッド付近　（上空から）

5　調査区北部近景　Ｆ～Ｈ10・11グリッド付近　（上空から）

6　基本土層　Ｈ９・10グリッド付近　（南東から）

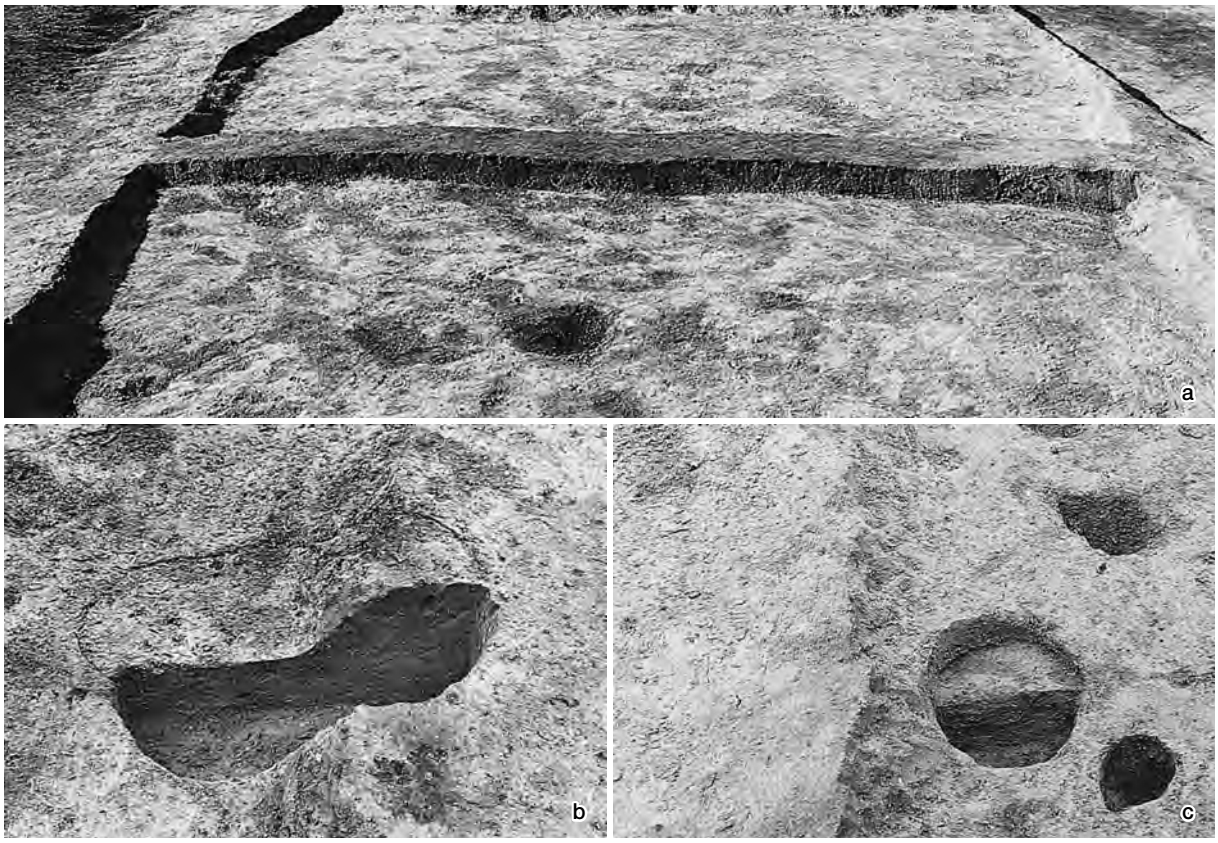
7　基本土層　Ｊ８グリッド付近　（西から）

8　１号住居跡　（南から）

9　１号住居跡細部

a　断面（南から）
b　Ｐ２断面（南から）　**c**　Ｐ２全景（南から）

10　２号住居跡　（南から）



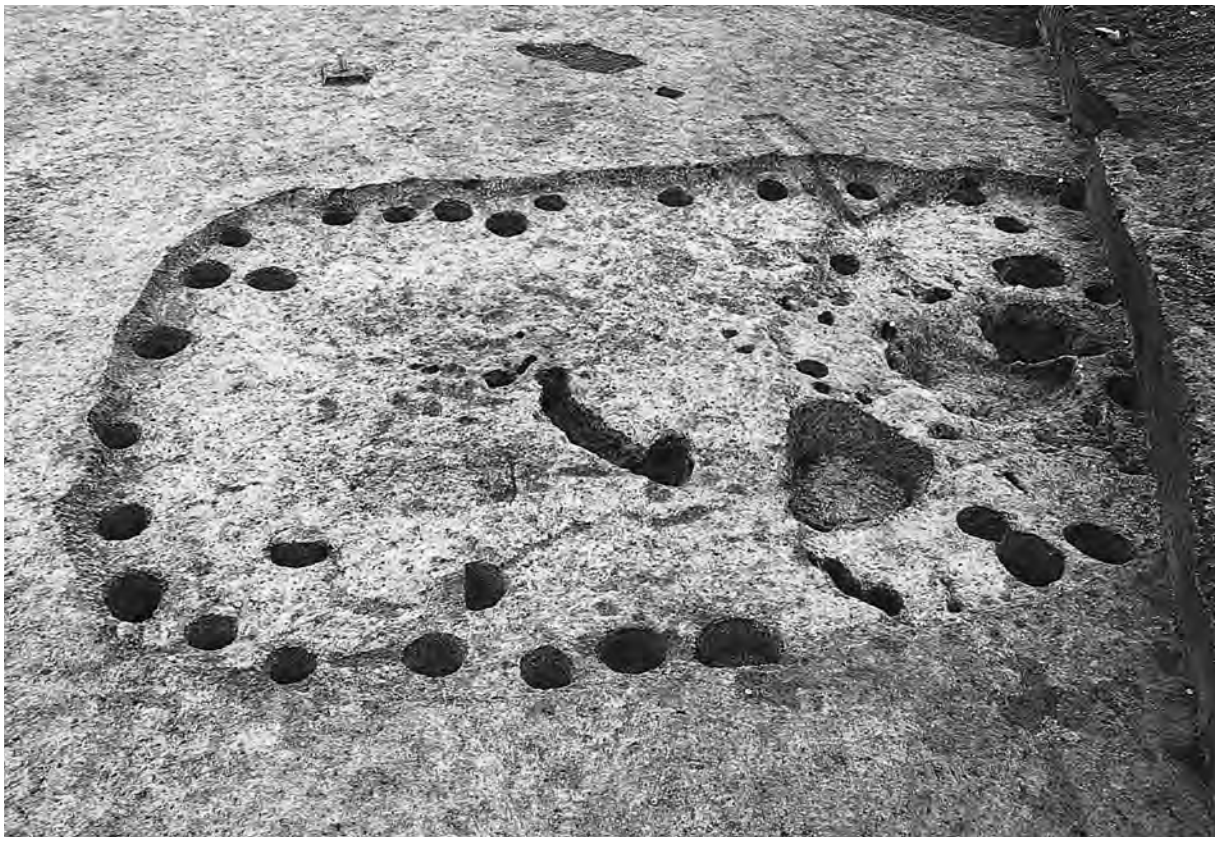
11　２号住居跡細部

a　断面（南から）
b　Ｐ２断面（南から）　**c**　Ｐ３断面（南から）

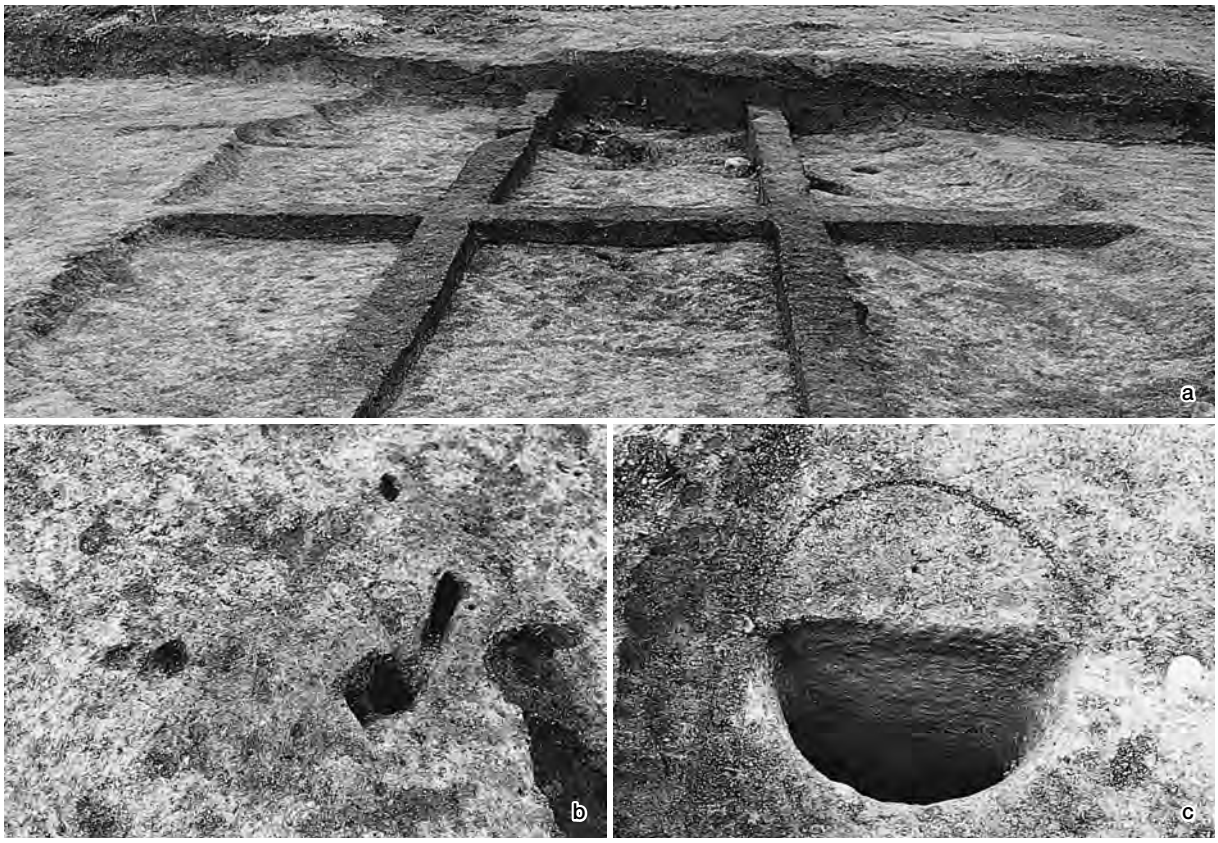
12　3号住居跡　（東から）

13　3号住居跡細部

a　断面（西から）
b　炉跡全景（南から）　c　炉跡断ち割り断面（南から）

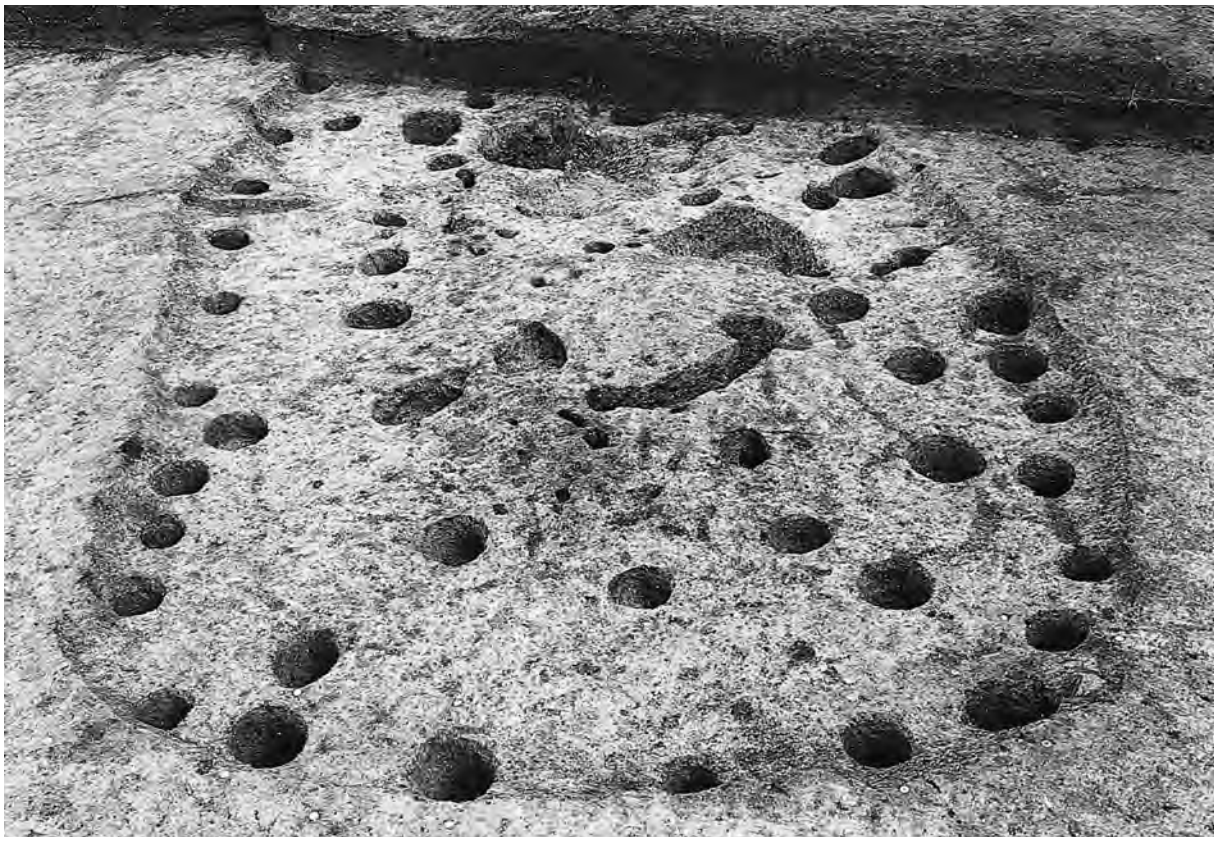


14　４ａ号住居跡　（南から）

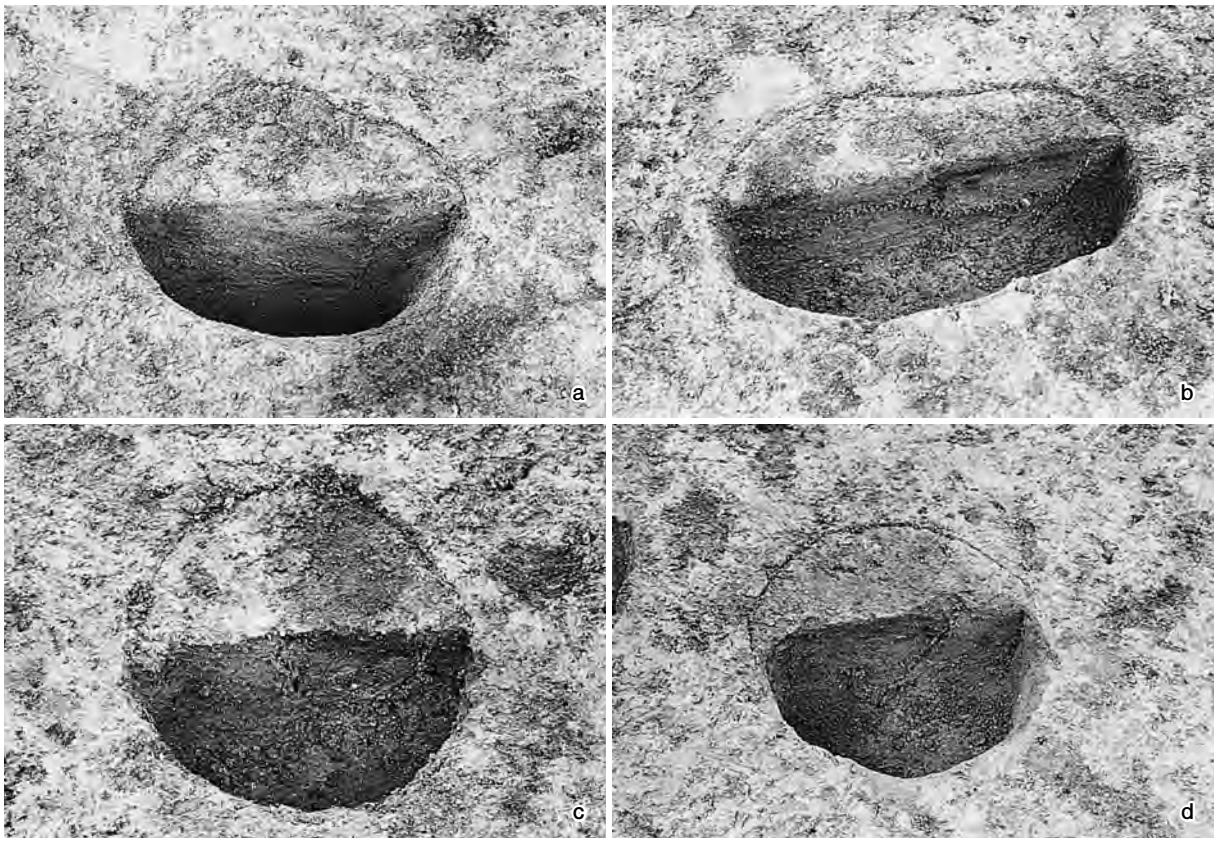


15　４ａ号住居跡細部

a　断面（西から）
b　Ａ炉全景（南から）　**c**　Ｐ10断面（南から）



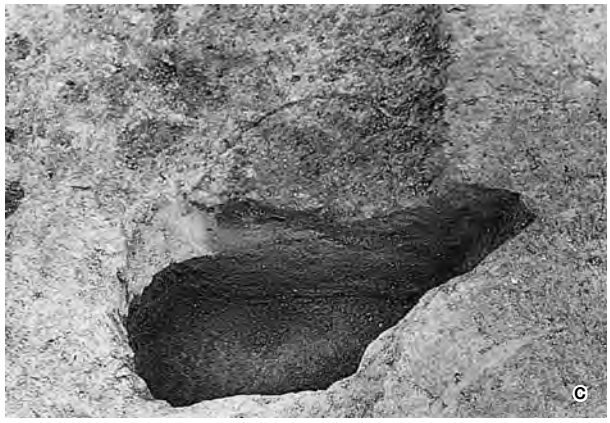
16　４ａ・ｂ号住居跡　（西から）



17　４ｂ号住居跡細部

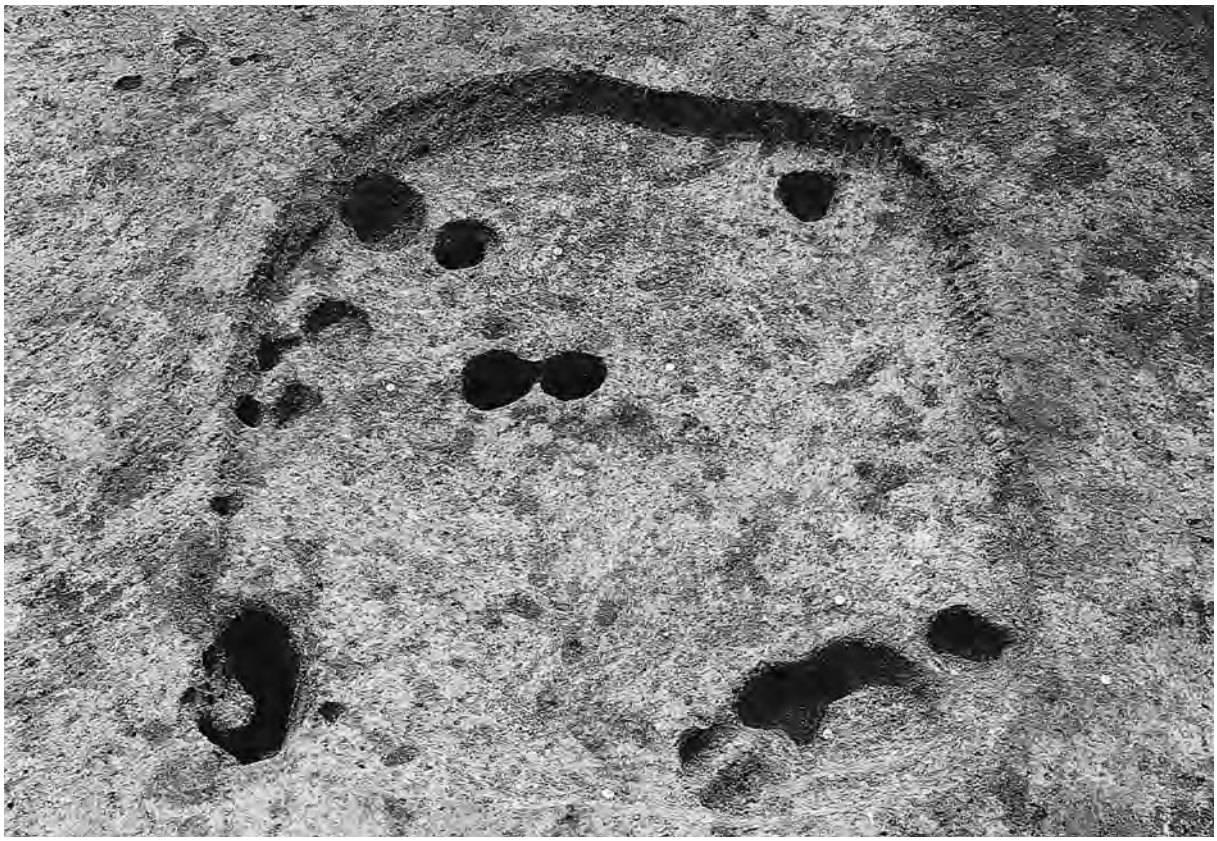
a　Ｐ２断面（西から）　**b**　Ｐ３断面（西から）
c　Ｐ５断面（南から）　**d**　Ｐ７断面（東から）

18　５号住居跡　（南から）

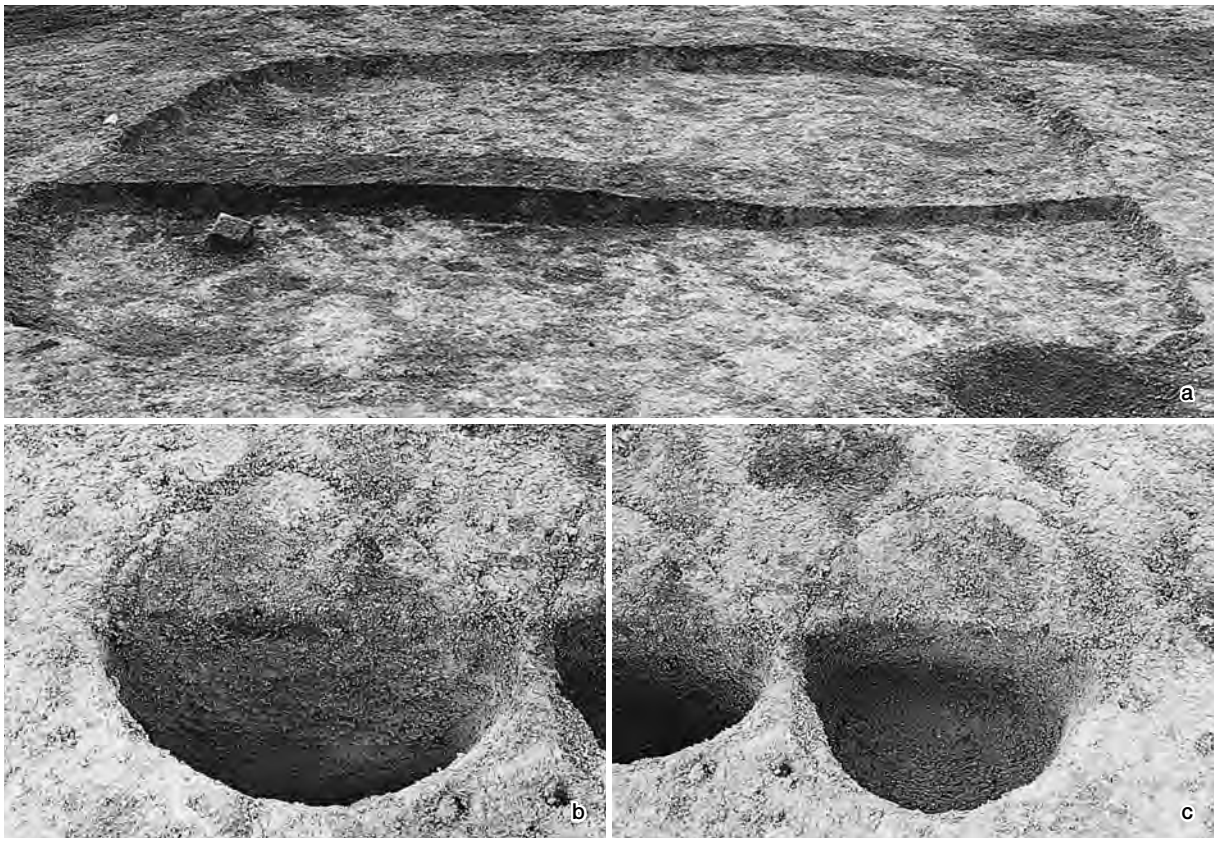


19　５号住居跡細部

a　断面（南から）
b　Ｐ１断面（南から）　**c**　Ｐ５断面（南から）



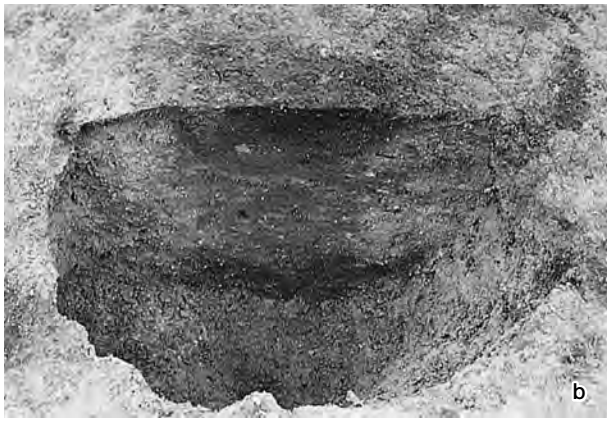
20　6 号住居跡　（北から）



21　6 号住居跡細部

a　断面（南から）
b　Ｐ６断面（南から）　**c**　Ｐ７断面（南から）

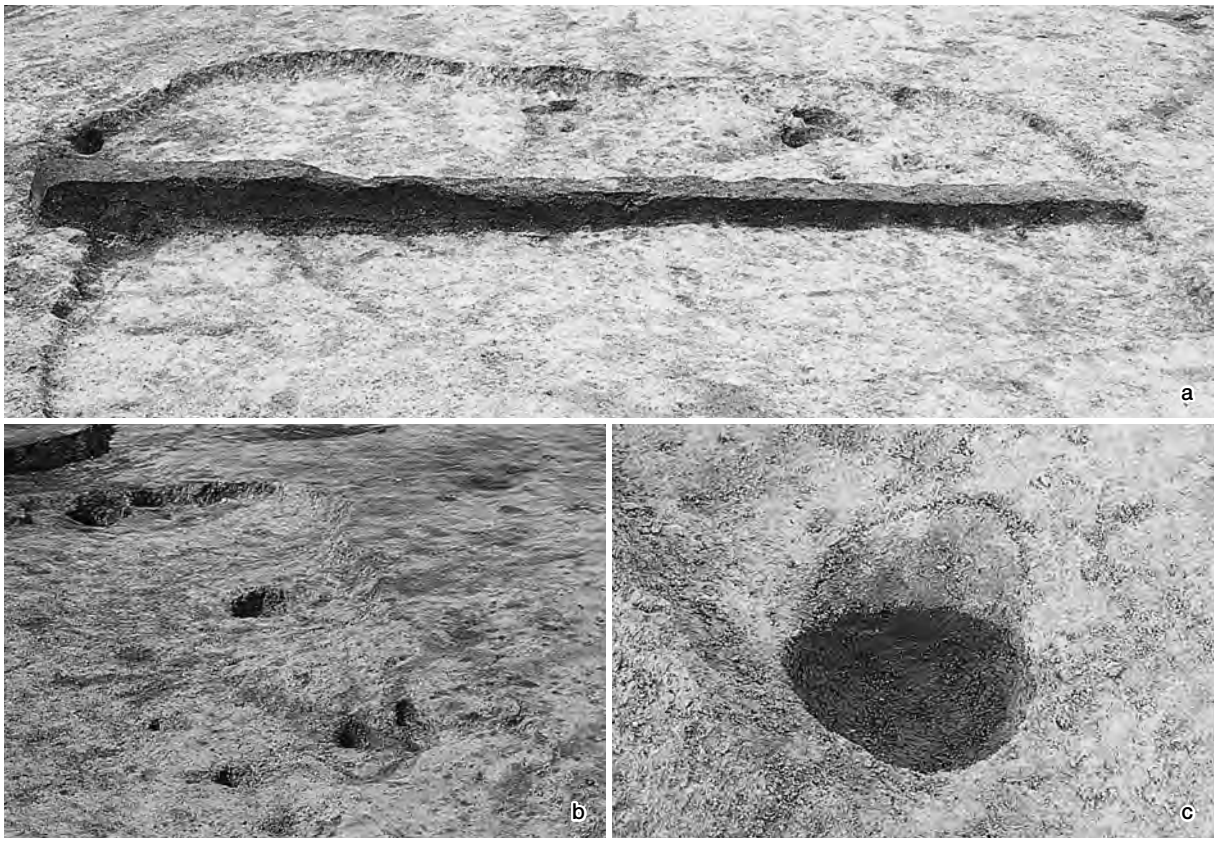
22　７号住居跡　（西から）



23　７号住居跡細部

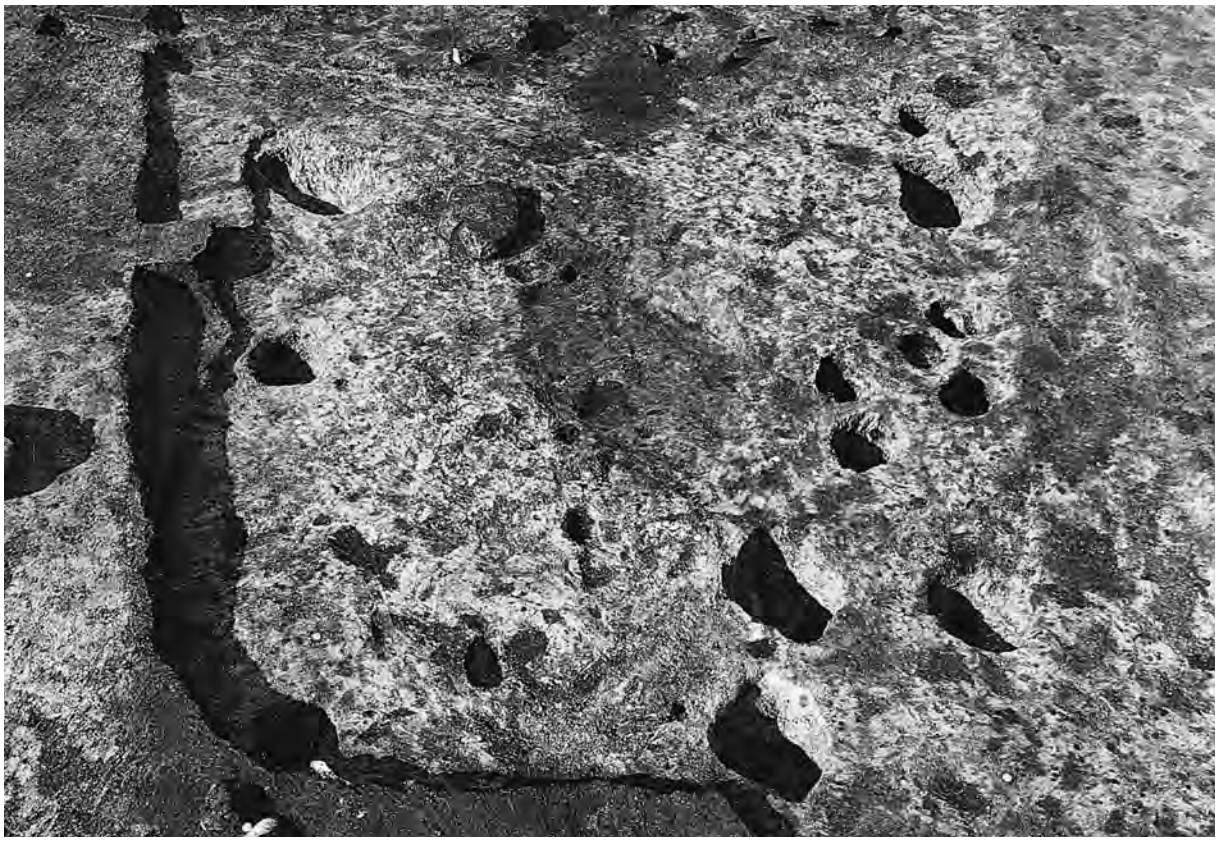
a　断面（南から）
b　Ｐ１断面（南から）　**c**　Ｐ２断面（南から）

24　8号住居跡　（北から）

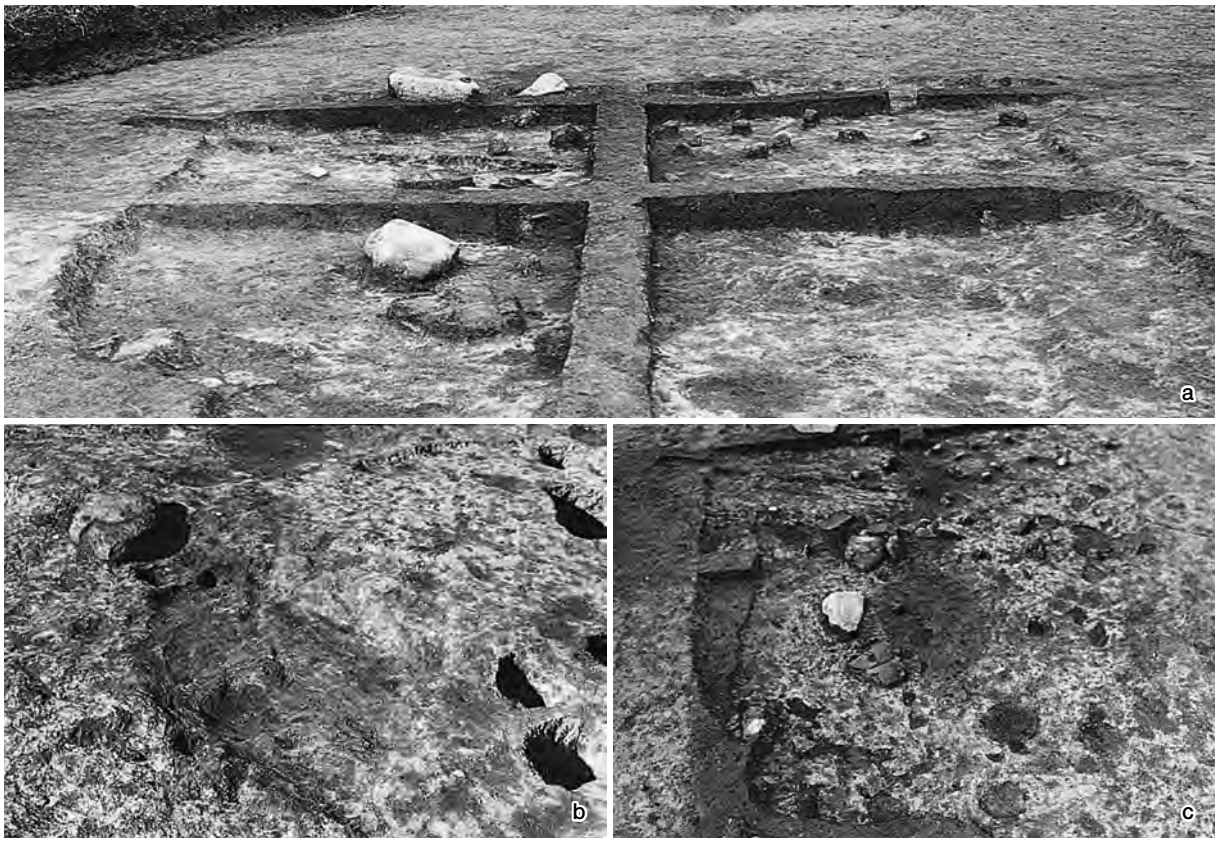


25　8号住居跡細部

a　断面（南から）
b　段状遺構（東から）　**c**　P１断面（南から）



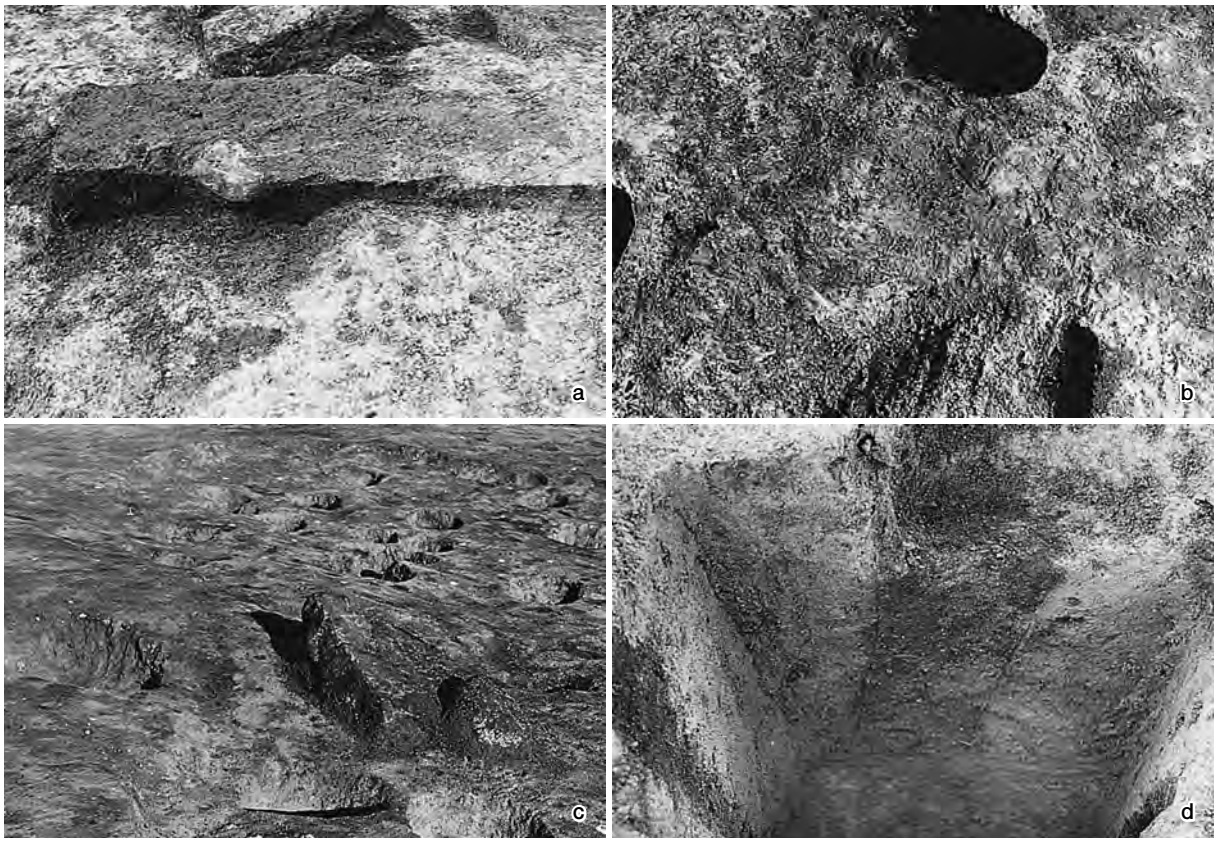
26　９号住居跡　（南から）



27　９・10号住居跡細部

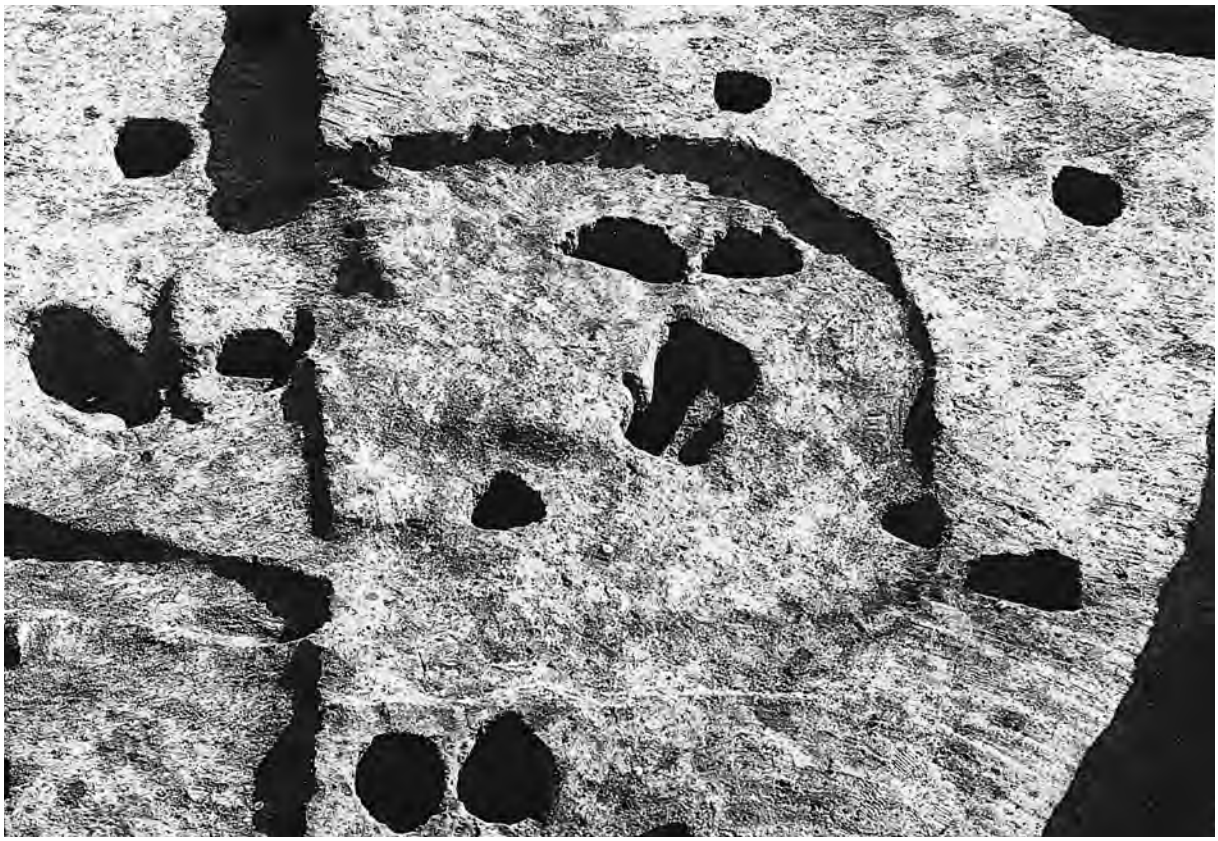
a　９・10号住居跡断面（南から）
b　９号住居跡炉跡全景（南から）　c　９号住居跡ℓ１遺物出土状況（南から）

28　10号住居跡　（北から）

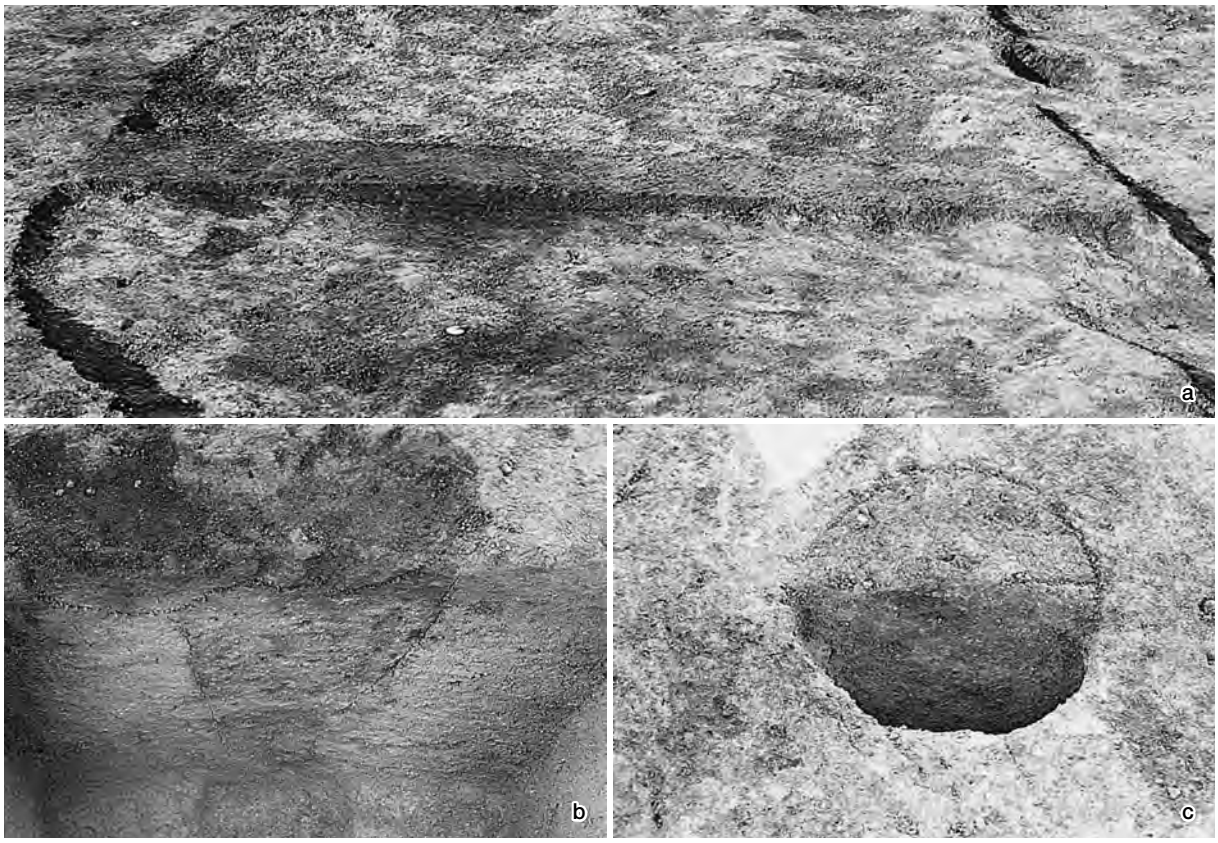


29　10号住居跡細部

a　断面拡大（東から）　**b**　炉跡全景（南から）
c　段状遺構（西から）　**d**　P 19断ち割り断面（東から）

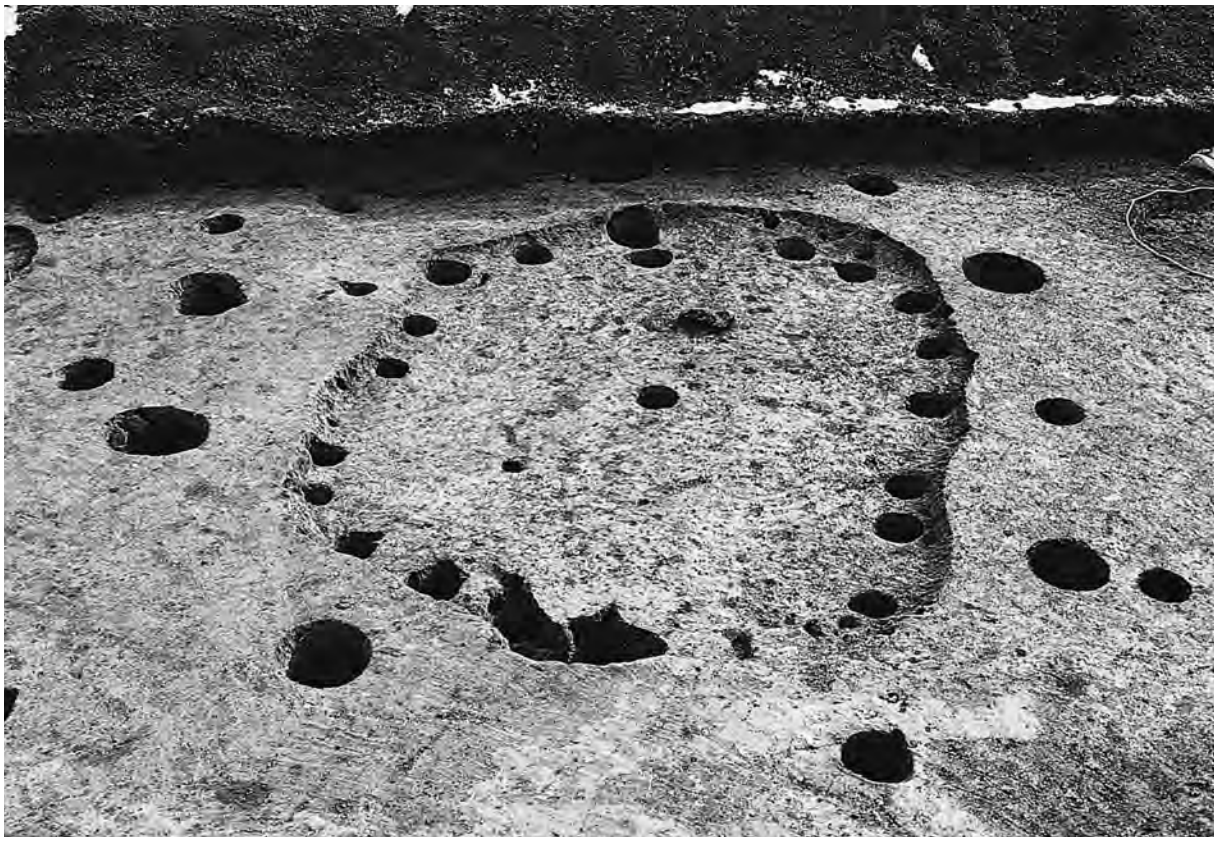


30　11号住居跡　（北から）

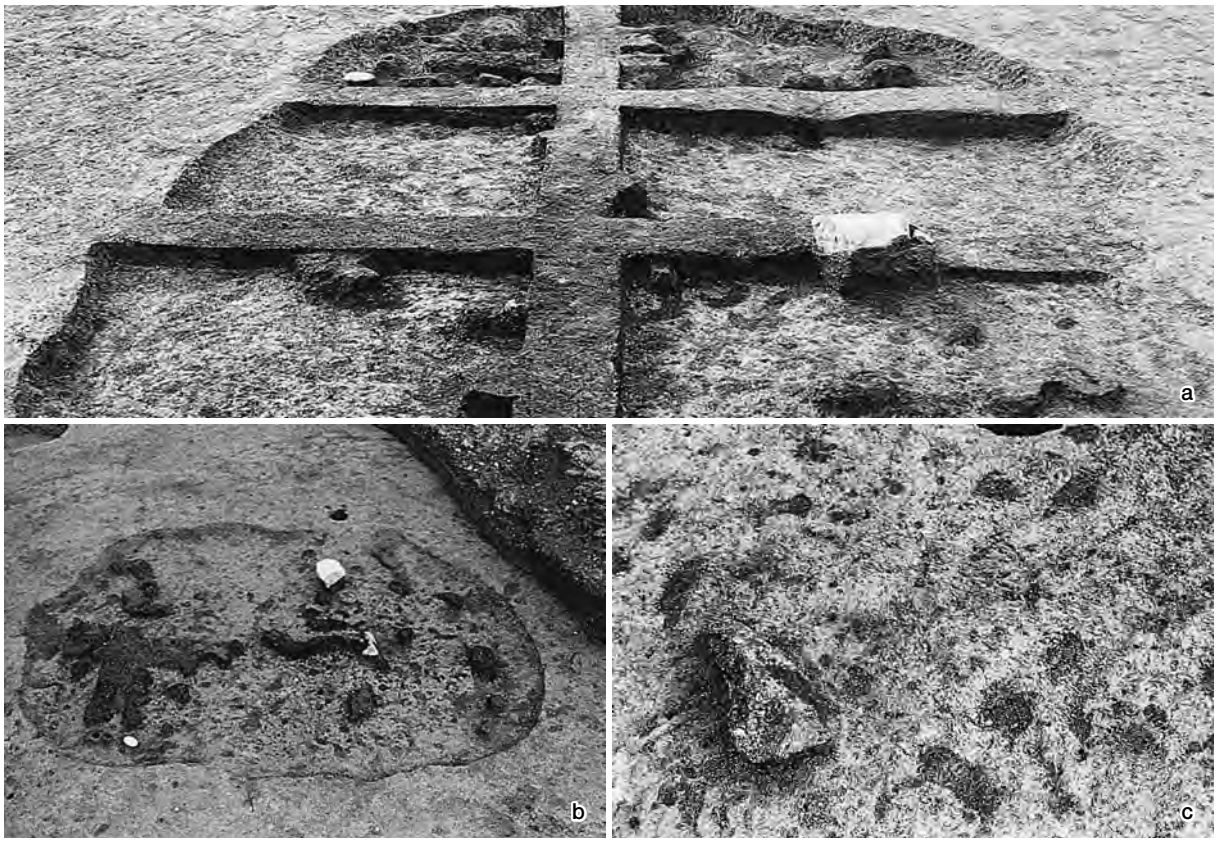


31　11号住居跡細部

a　断面（南から）
b　Ｐ１断ち割り断面（東から）　**c**　Ｐ４断面（南から）

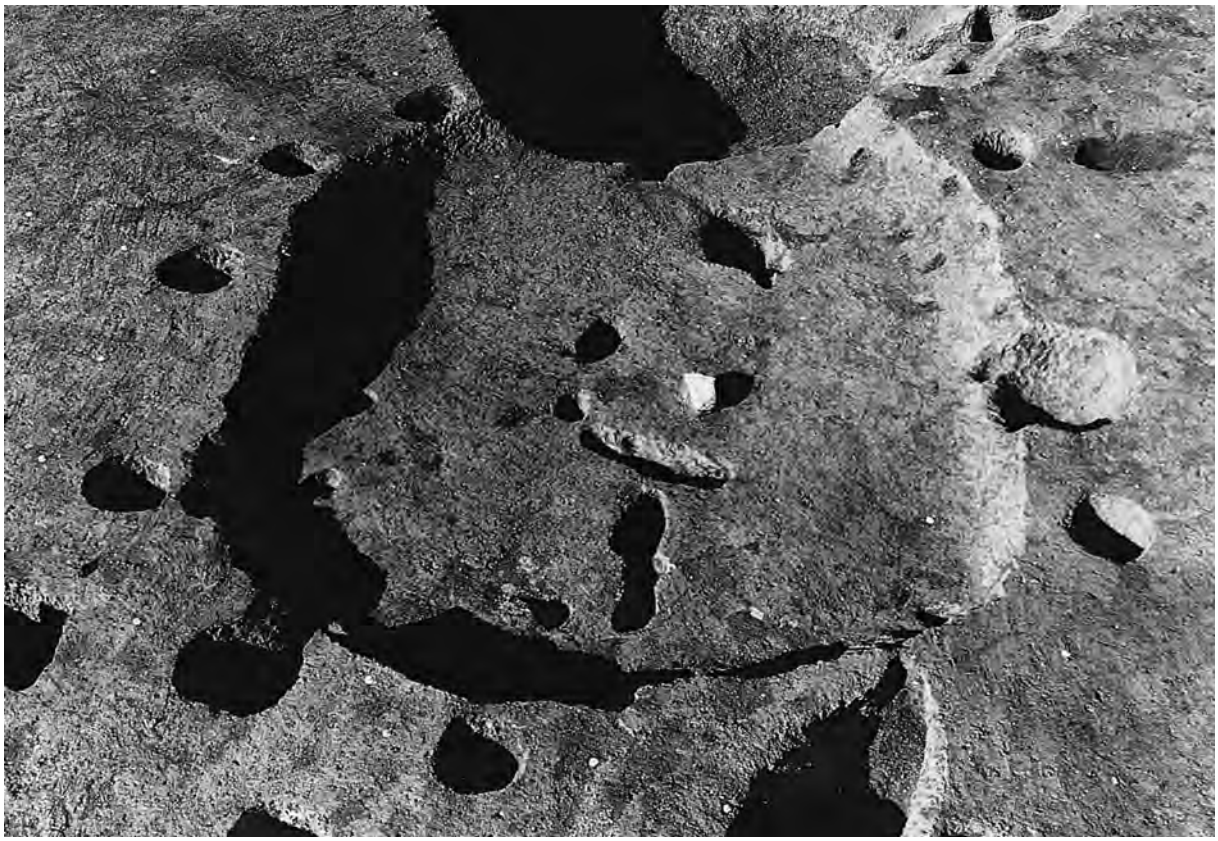


32　12号住居跡　（西から）



33　12号住居跡細部

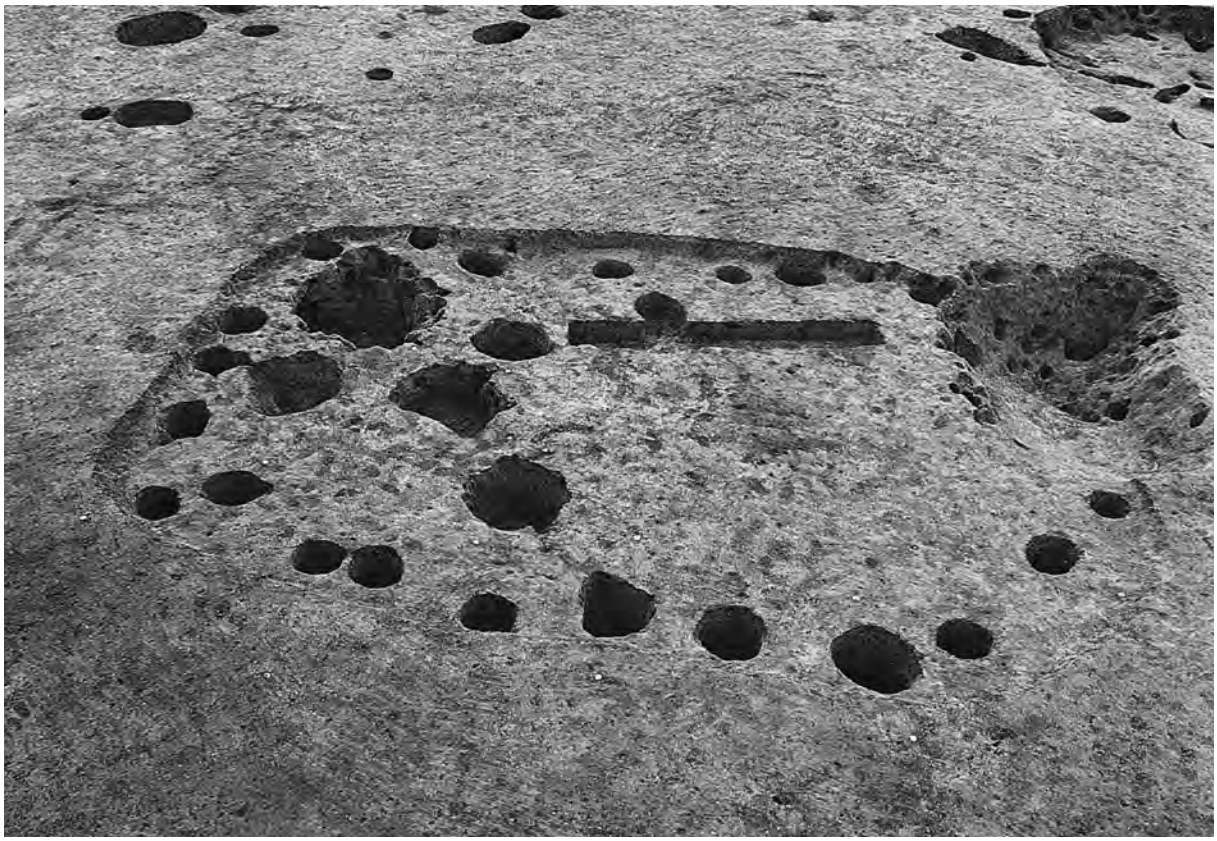
a　断面（東から）
b　炭化材・焼土塊検出状況（南から）　c　炉跡全景（南から）



34　13号住居跡　（南から）

35　13号住居跡細部

a　断面（東から）
b　Ｐ３断面（南から）　**c**　Ｐ５断面（南から）

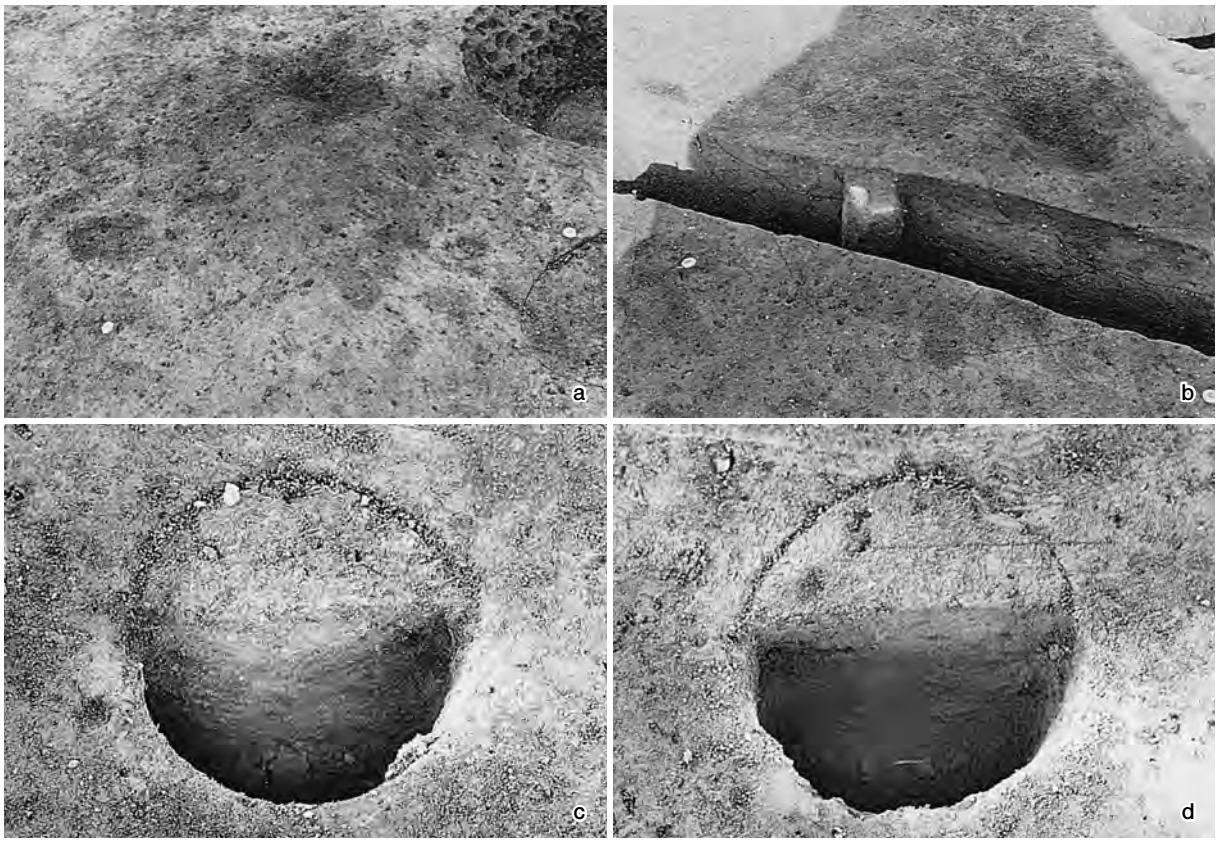


36　14号住居跡　（東から）

37　14号住居跡細部

a　断面（南から）
b　炉跡全景（東から）　**c**　Ｐ４断面（南から）

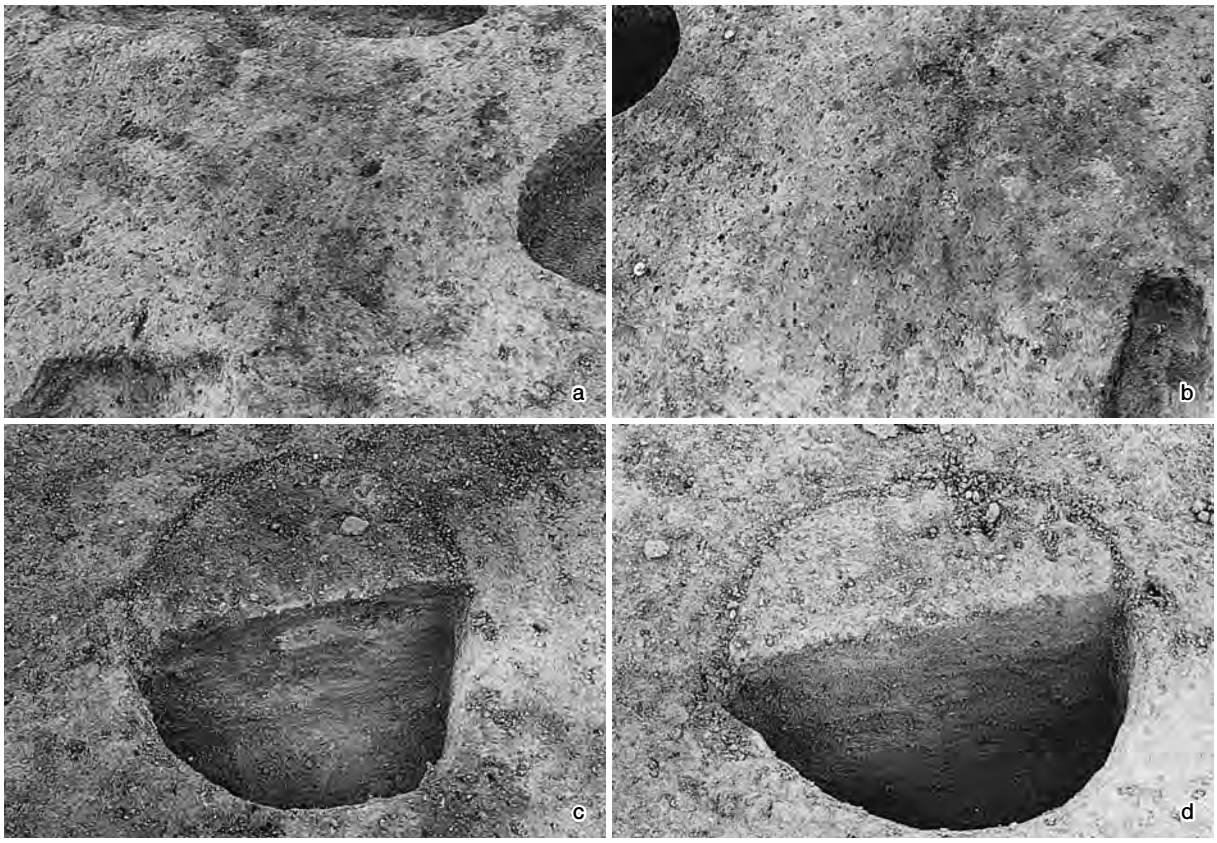
38　15号住居跡　（南西から）



39　15号住居跡細部

a　炉跡全景（南から）　**b**　炉跡断ち割り断面（南から）
c　Ｐ６断面（南から）　**d**　Ｐ７断面（南から）

40　16号住居跡　（南から）



41　16号住居跡細部

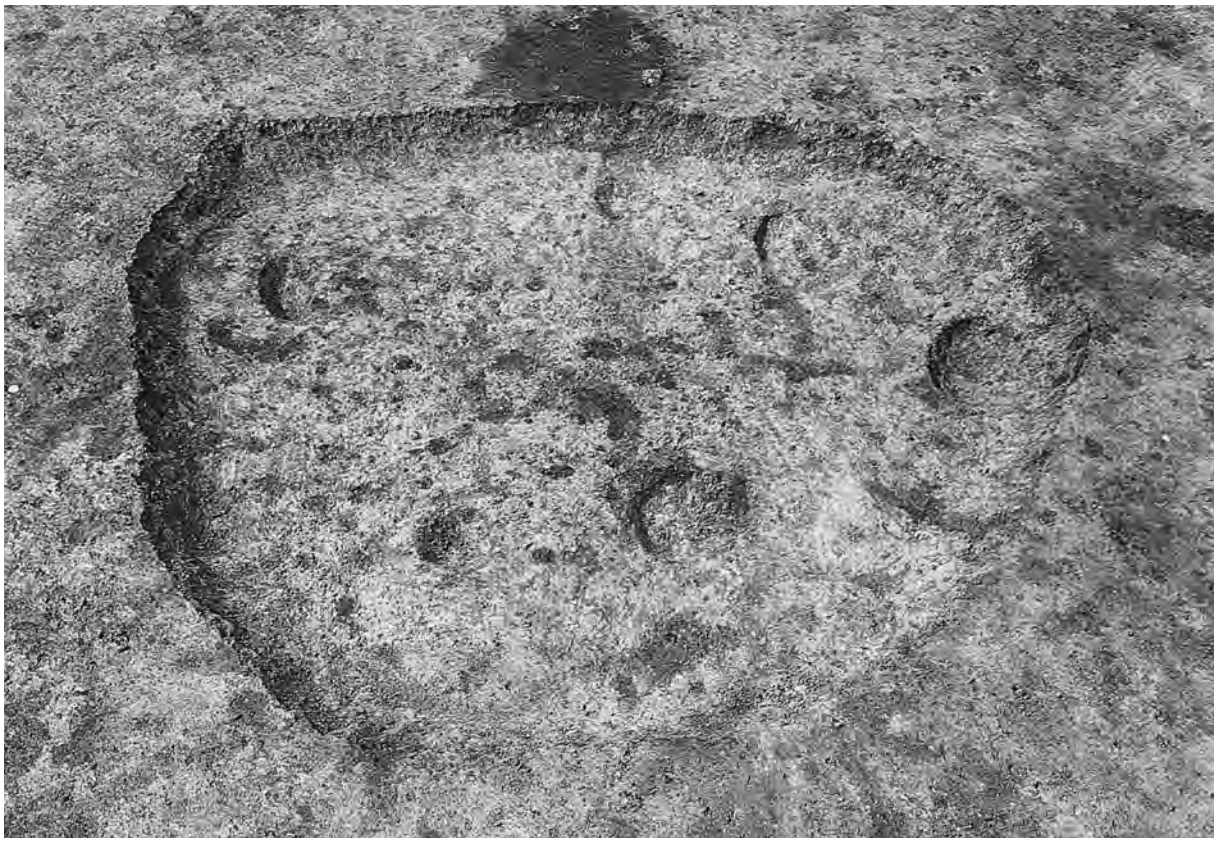
a　A炉全景（南から）　**b**　B炉全景（南から）
c　P７断面（南から）　**d**　P８断面（南から）

42　17号住居跡　（南から）

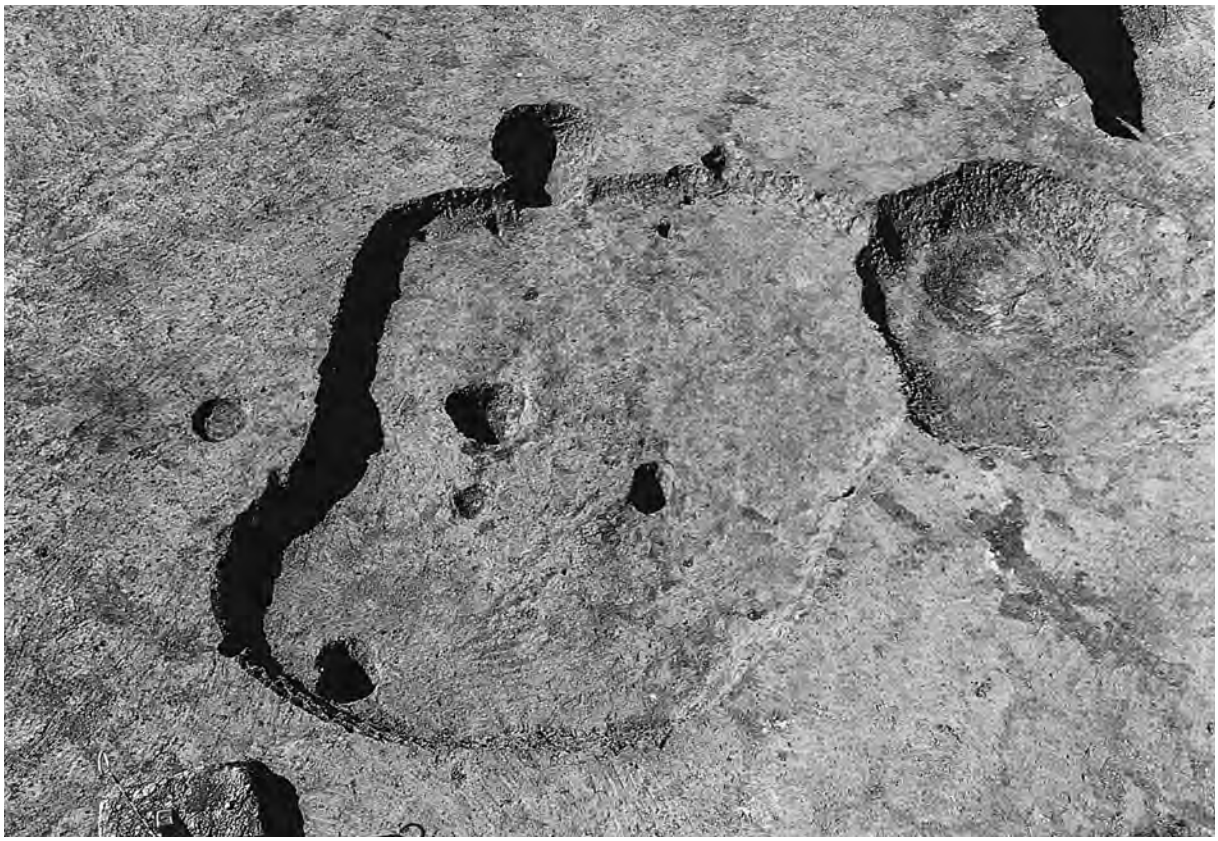
43　17号住居跡細部

a　断面（西から）
b　Ｐ１断面（西から）　**c**　Ｐ10・11断面（西から）

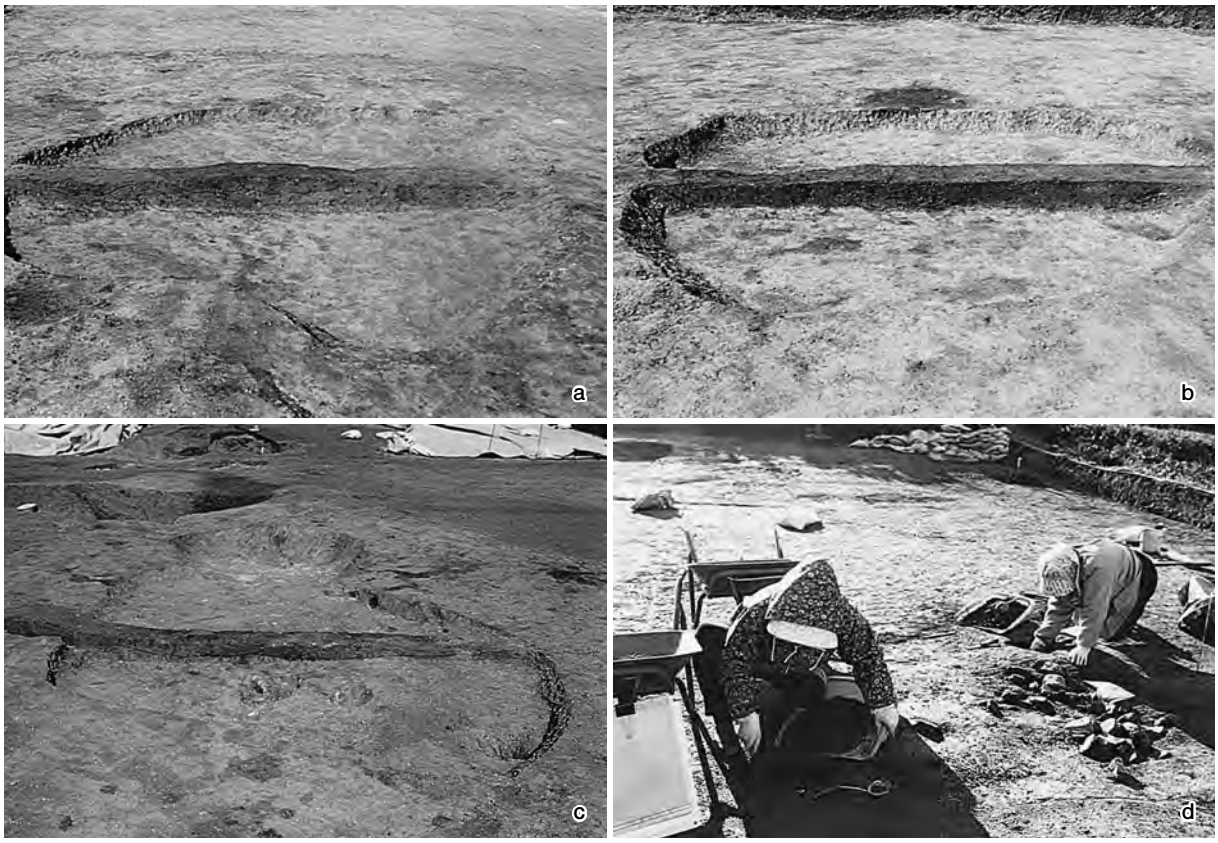
44　1号竪穴状遺構　（北から）



45　2号竪穴状遺構　（東から）

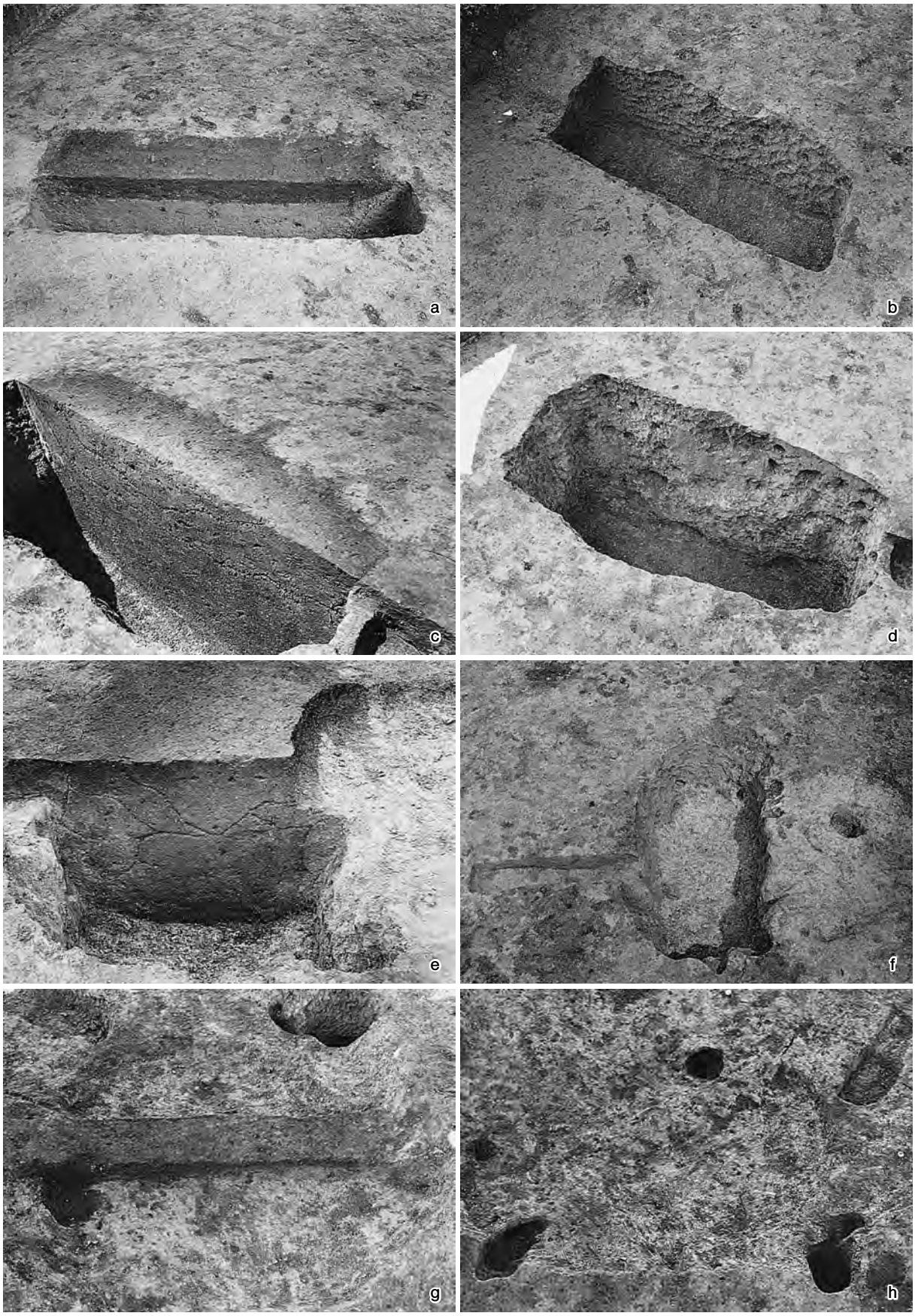


46　３号竪穴状遺構　（東から）



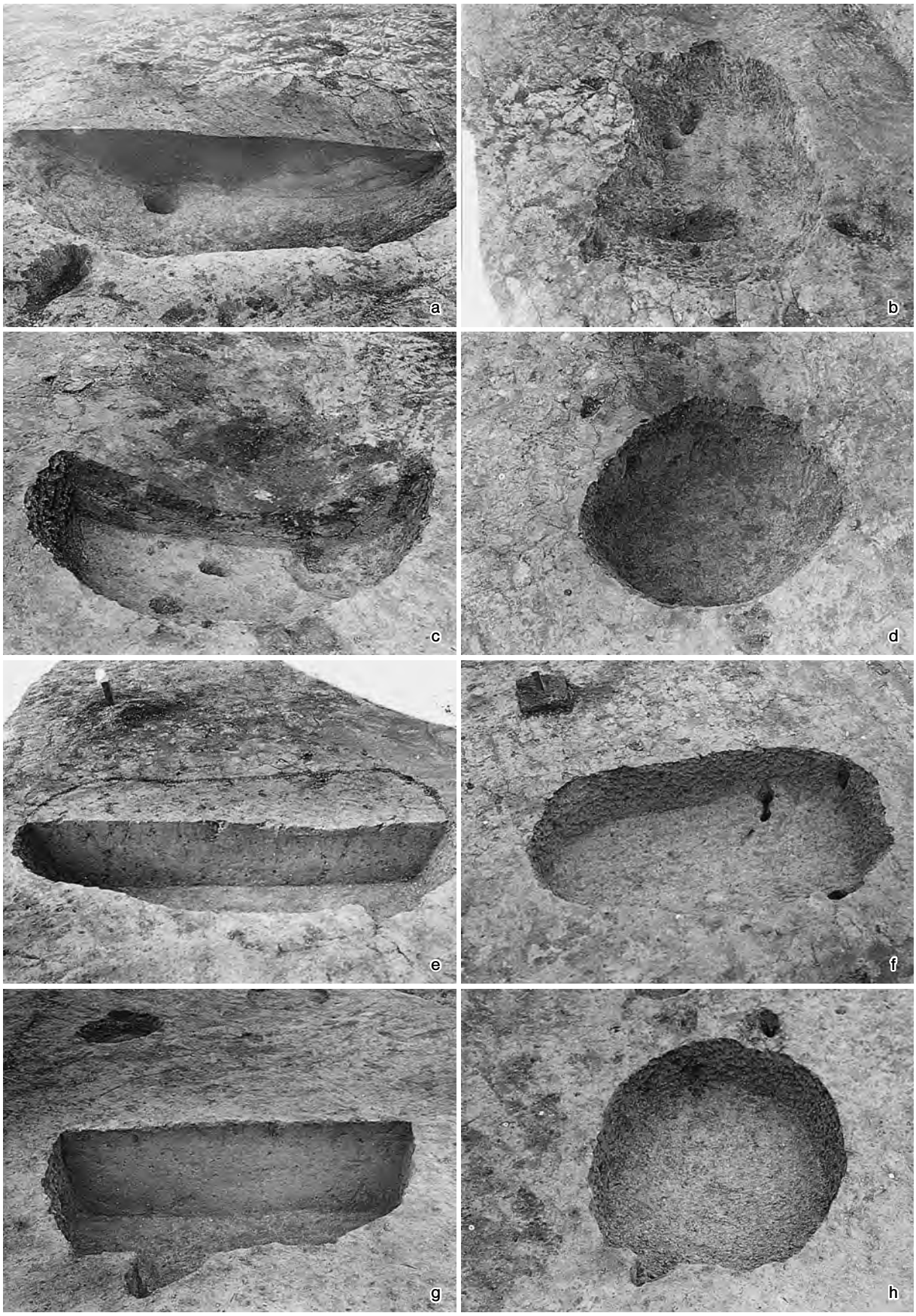
47　１～３号竪穴状遺構細部

a　１号竪穴状遺構断面（南から）　**b**　２号竪穴状遺構断面（東から）
c　３号竪穴状遺構断面（南から）　**d**　作業風景（東から）



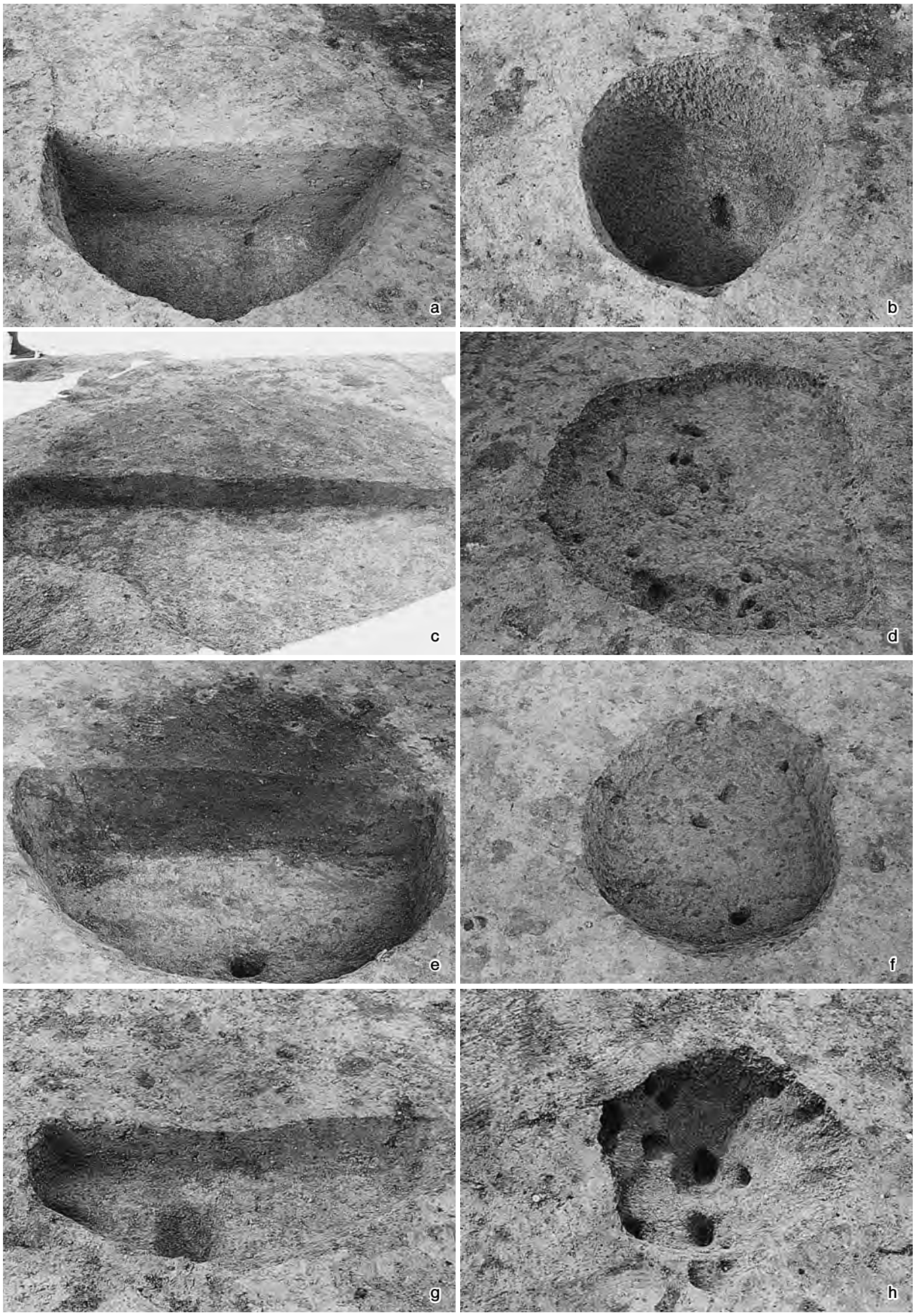
48　1～4号土坑

a　1号土坑断面（南から）　**b**　1号土坑全景（南から）
c　2号土坑断面（南東から）　**d**　2号土坑全景（南から）
e　3号土坑断面（西から）　**f**　3号土坑全景（西から）
g　4号土坑断面（南から）　**h**　4号土坑全景（東から）



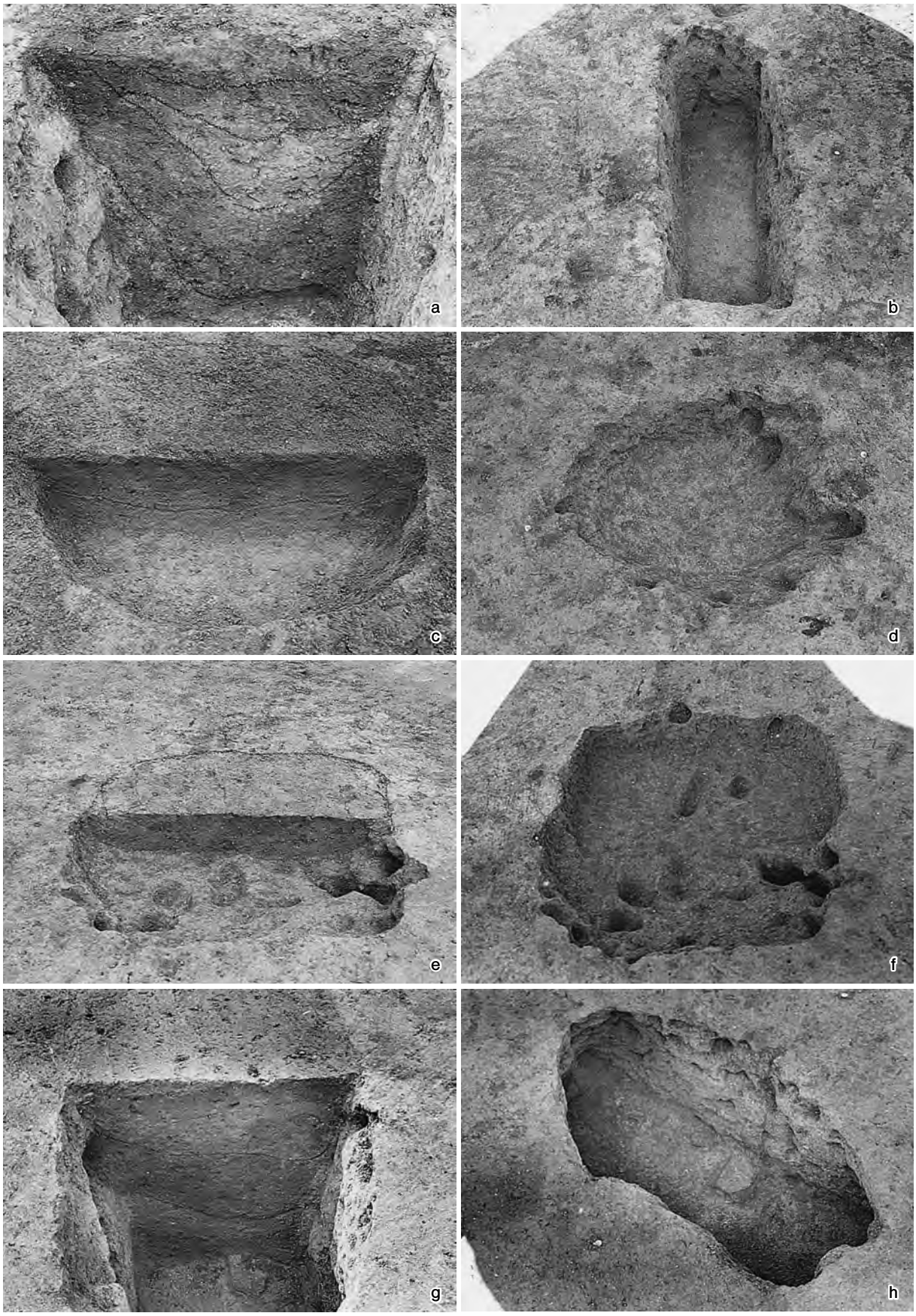
49　５～８号土坑

a　５号土坑断面（東から）　**b**　５号土坑全景（南から）
c　６号土坑断面（南から）　**d**　６号土坑全景（南から）
e　７号土坑断面（南から）　**f**　７号土坑全景（南から）
g　８号土坑断面（南から）　**h**　８号土坑全景（南から）



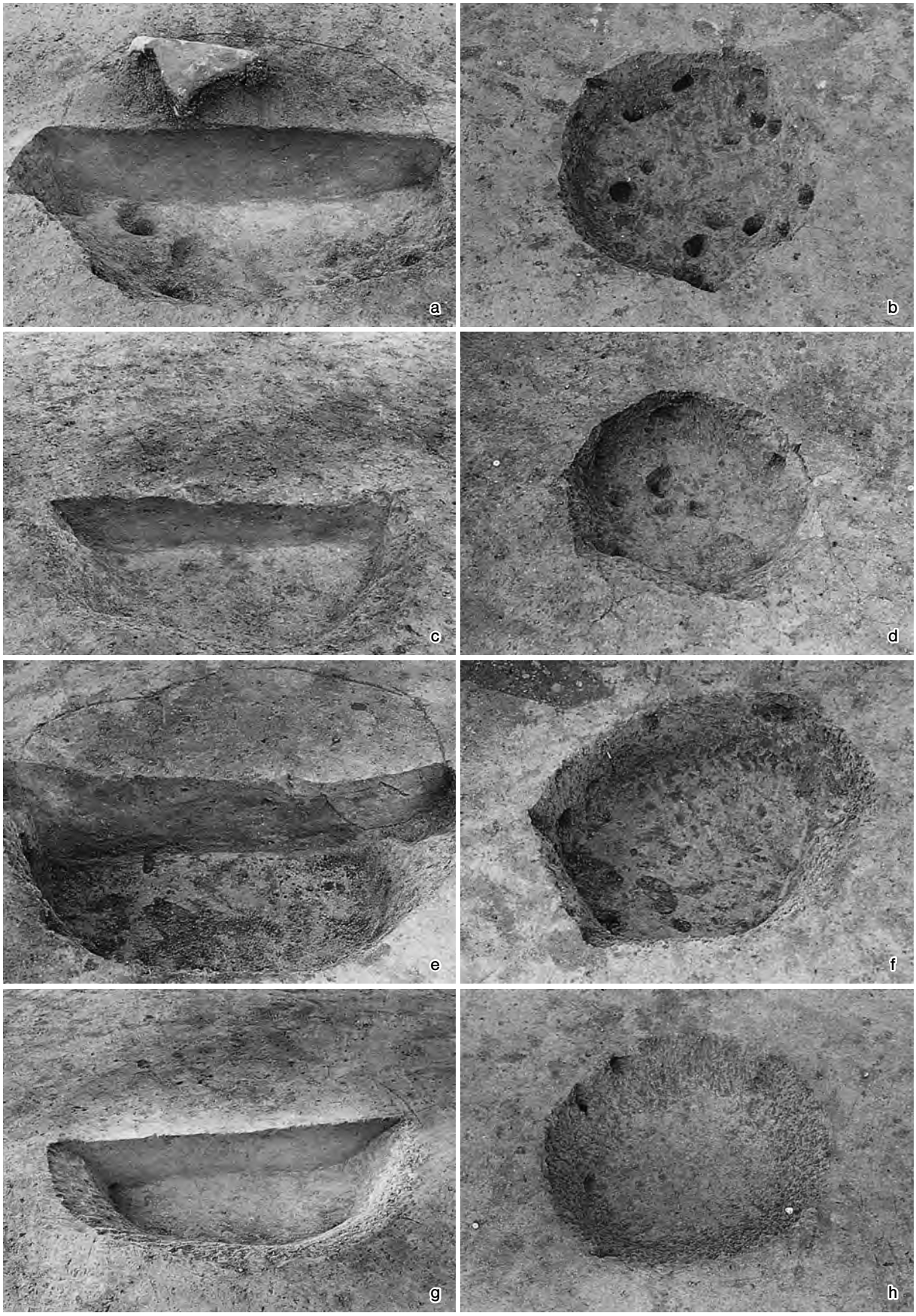
50　9～12号土坑

a　9号土坑断面（南から）　**b**　9号土坑全景（南から）
c　10号土坑断面（東から）　**d**　10号土坑全景（南から）
e　11号土坑断面（西から）　**f**　11号土坑全景（西から）
g　12号土坑断面（東から）　**h**　12号土坑全景（南から）



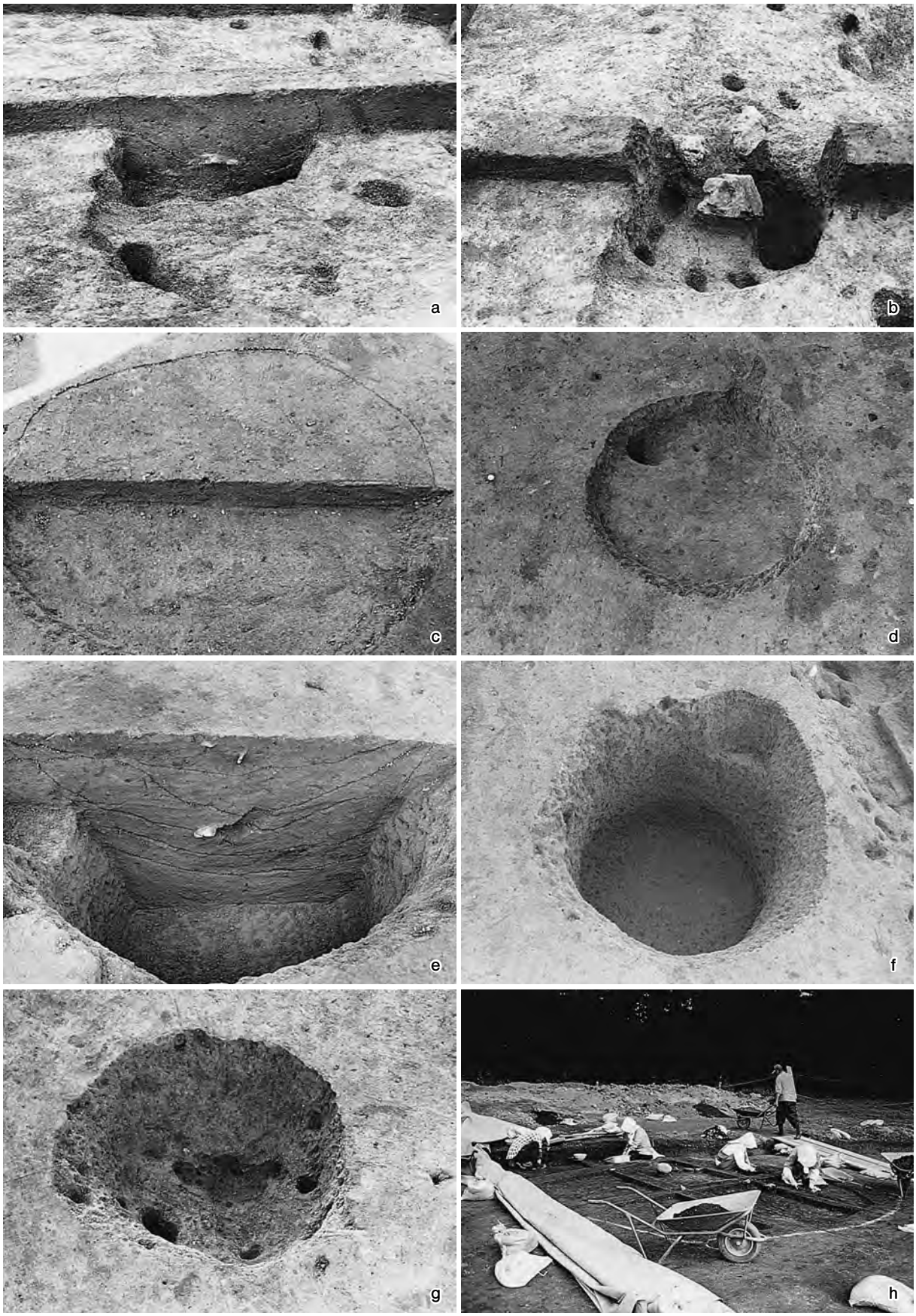
51　13～16号土坑

a　13号土坑断面（南から）　**b**　13号土坑全景（北から）
c　14号土坑断面（南から）　**d**　14号土坑全景（南から）
e　15号土坑断面（南から）　**f**　15号土坑全景（南から）
g　16号土坑断面（東から）　**h**　16号土坑全景（南から）



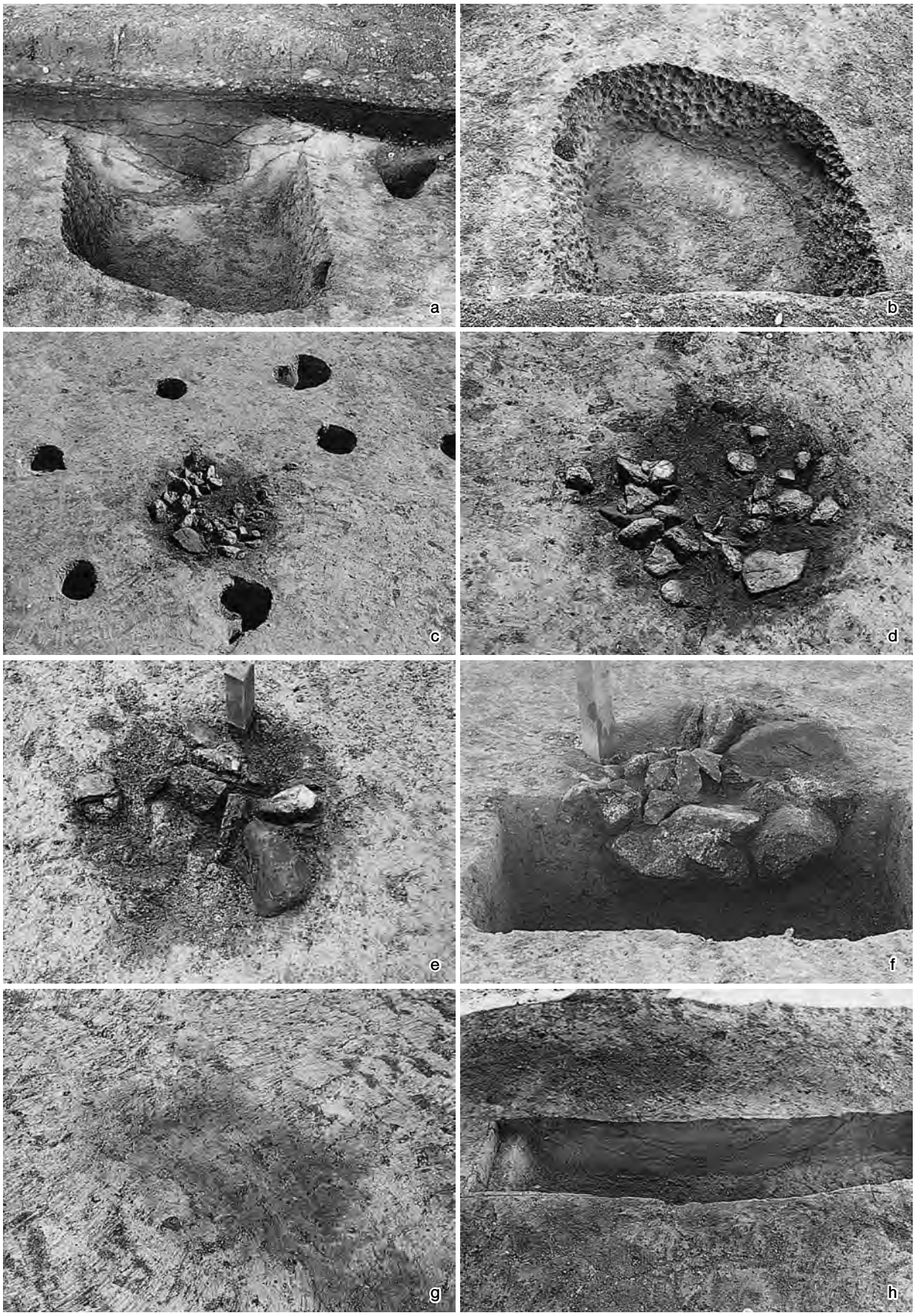
52　17～20号土坑

a　17号土坑断面（東から）　b　17号土坑全景（南から）
c　18号土坑断面（南から）　d　18号土坑全景（南から）
e　19号土坑断面（南から）　f　19号土坑全景（南から）
g　20号土坑断面（南から）　h　20号土坑全景（南から）



53　21～24号土坑

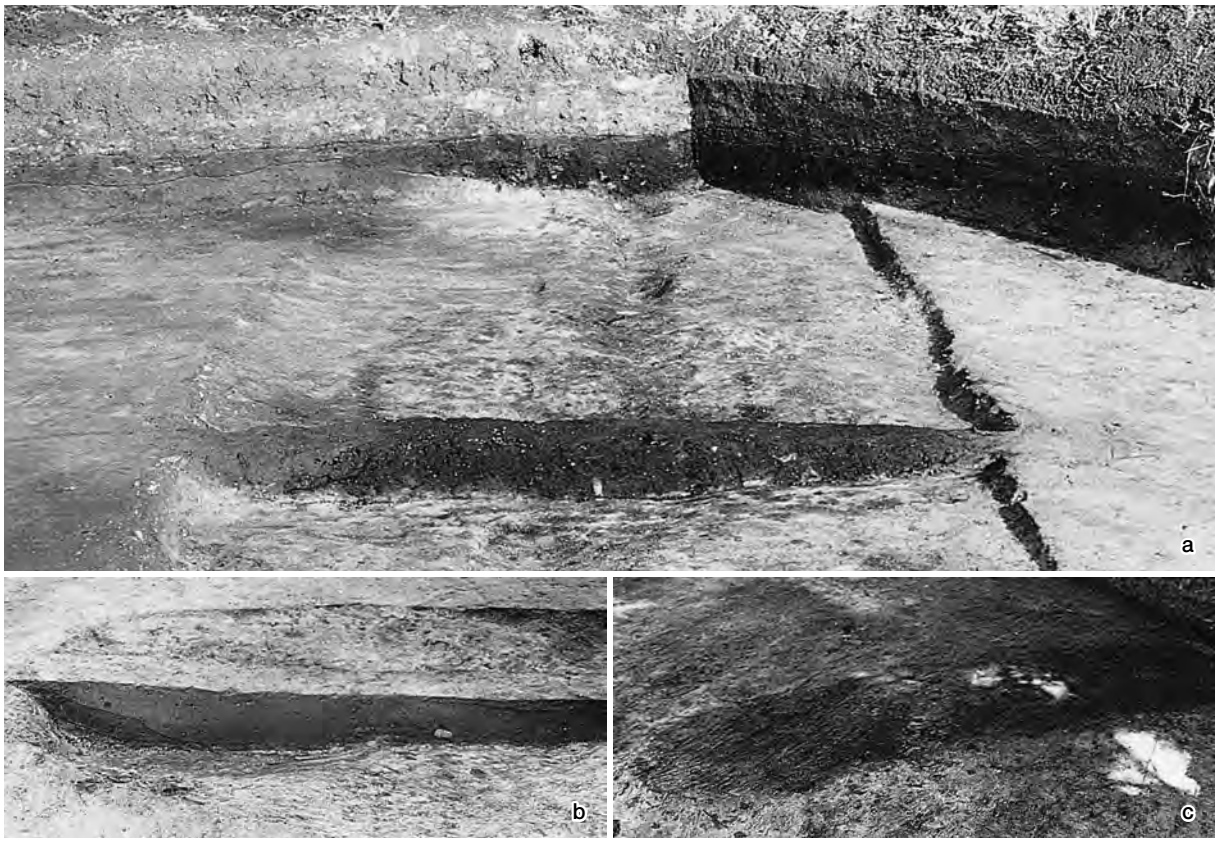
a　21号土坑断面（南から）　b　21号土坑全景（南から）
c　22号土坑断面（南から）　d　22号土坑全景（南から）
e　23号土坑断面（南から）　f　23号土坑全景（北から）
g　24号土坑全景（東から）　h　作業風景（北西から）



54　25号土坑，1・2号集石遺構，1号焼土遺構

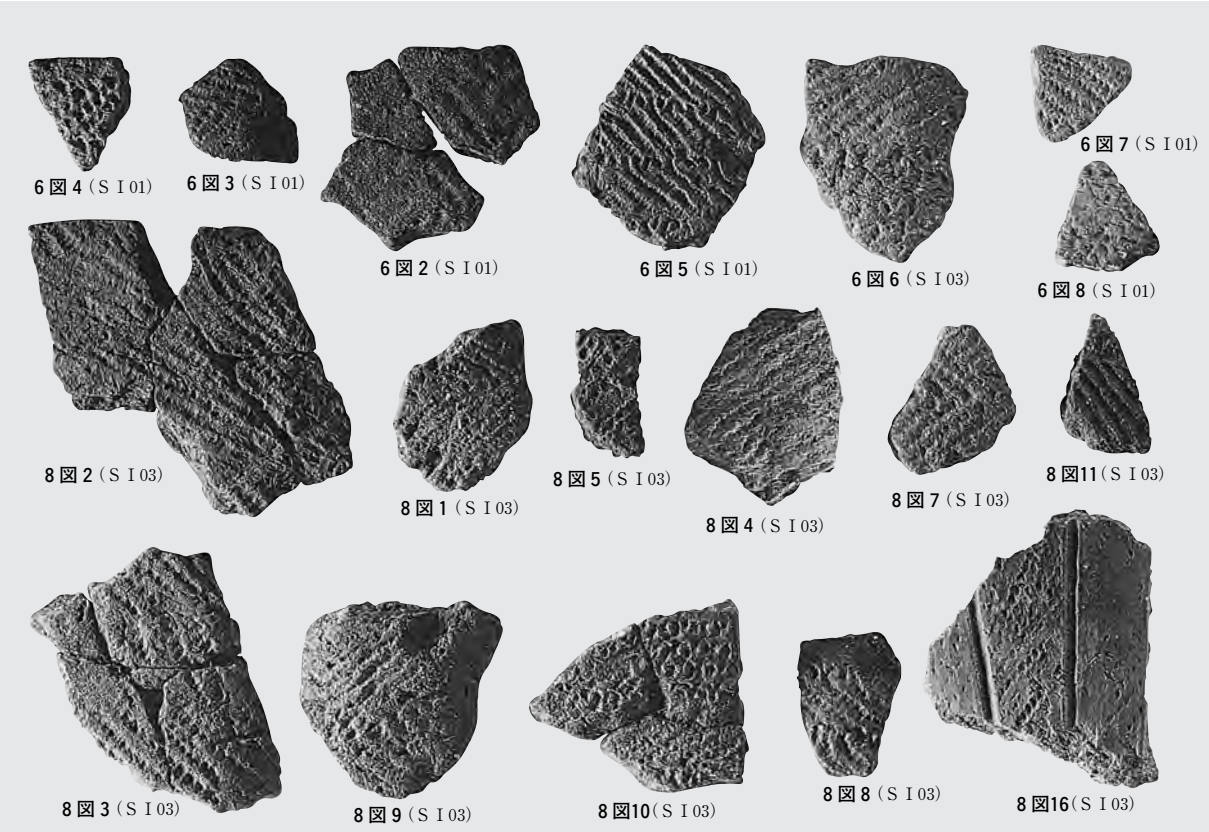
a　25号土坑断面（西から）
b　25号土坑全景（東から）
c　1号集石遺構全景（北西から）
d　1号集石遺構集石部分拡大（北西から）
e　2号集石遺構全景（北から）
f　2号集石遺構断ち割り断面（東から）
g　1号焼土遺構全景（南から）
h　1号焼土遺構断ち割り断面（北東から）

55　１号木炭窯跡　（北東から）

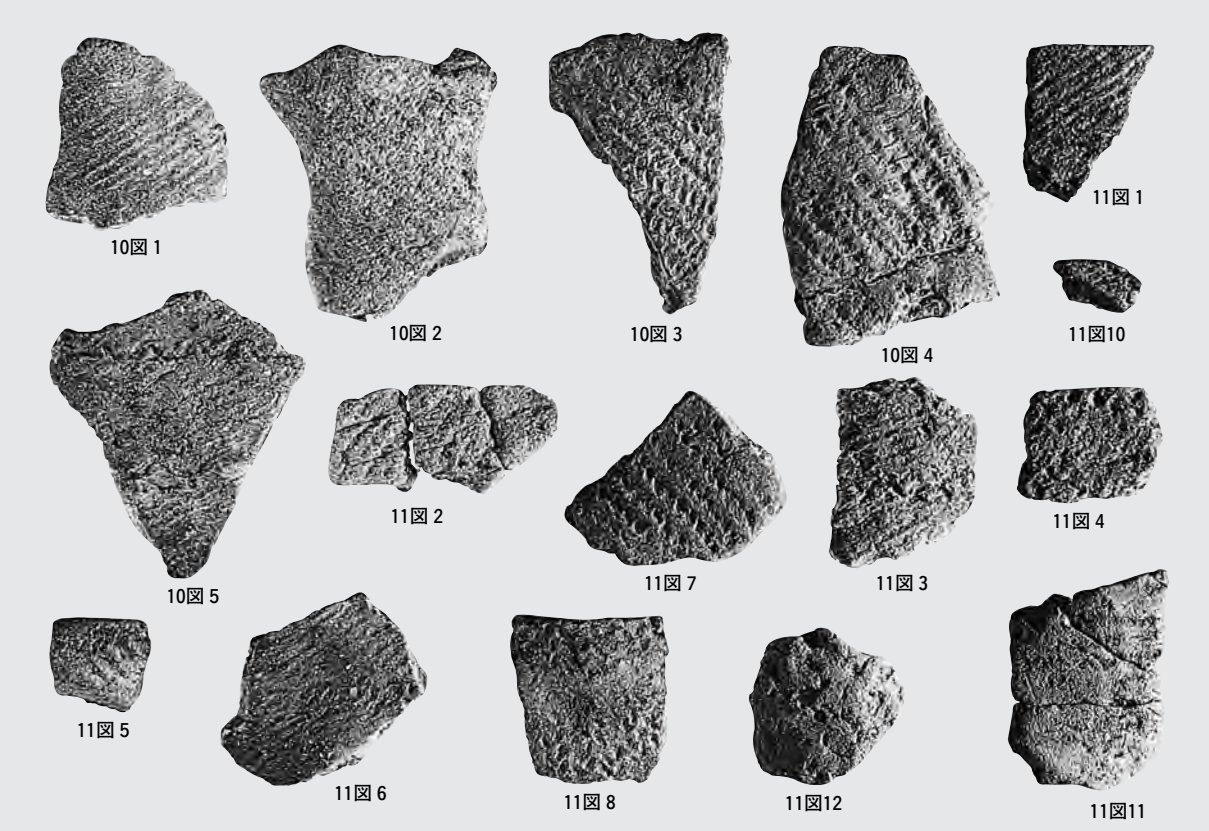


56　１号木炭窯跡細部

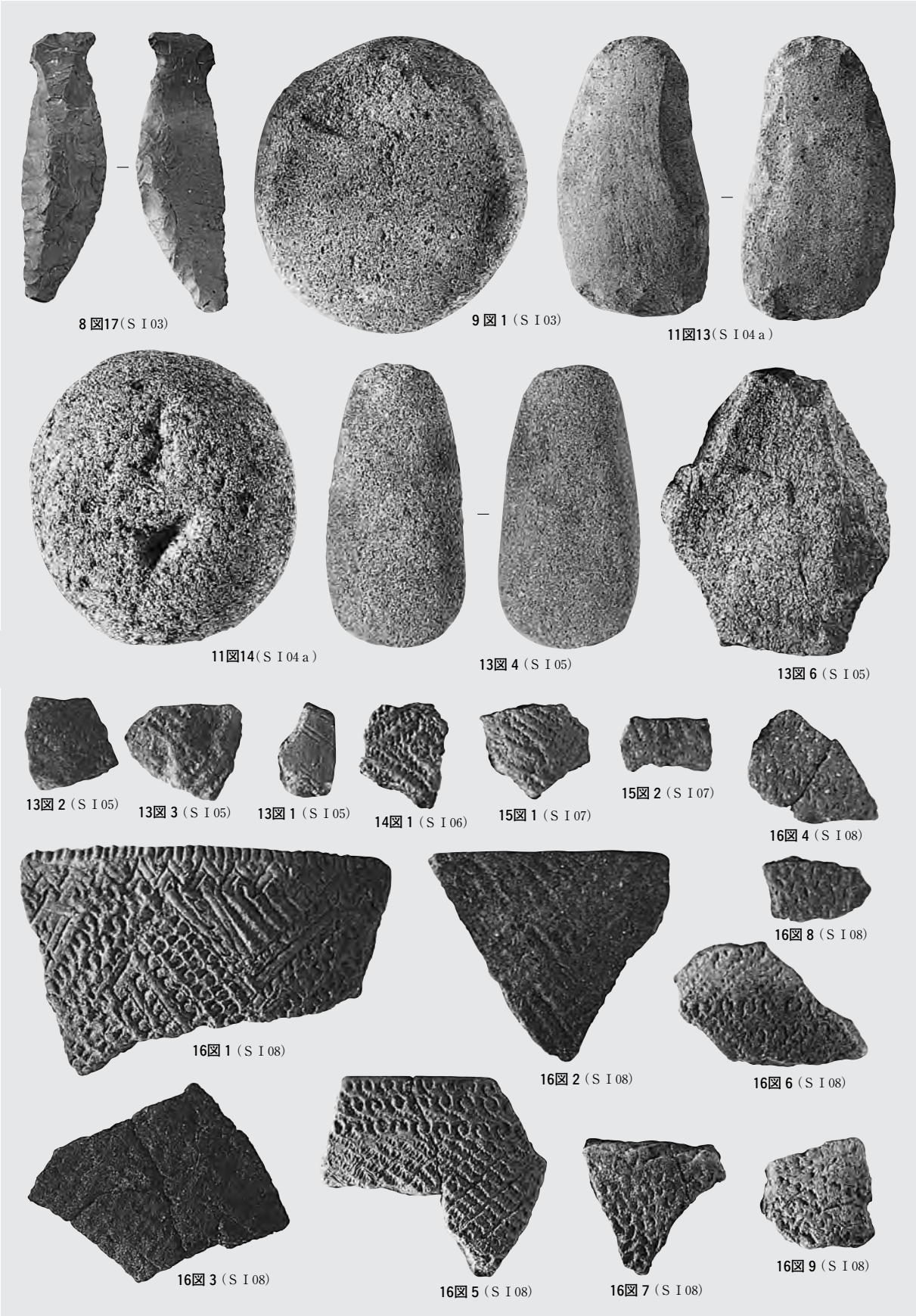
a　１号木炭窯跡断面（北西から）
b　１号木炭窯跡断面拡大（南から）　**c**　１号木炭窯跡検出（南西から）



57　１・３号住居跡出土遺物

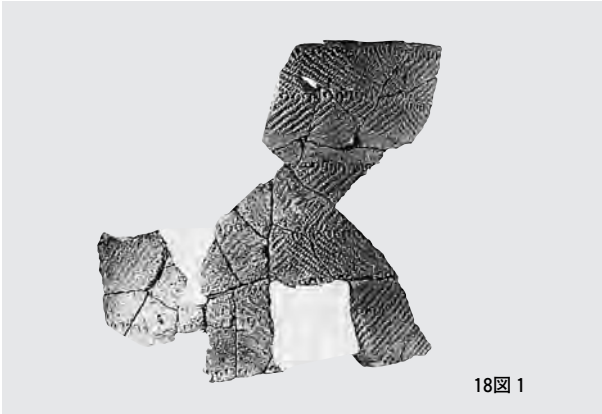


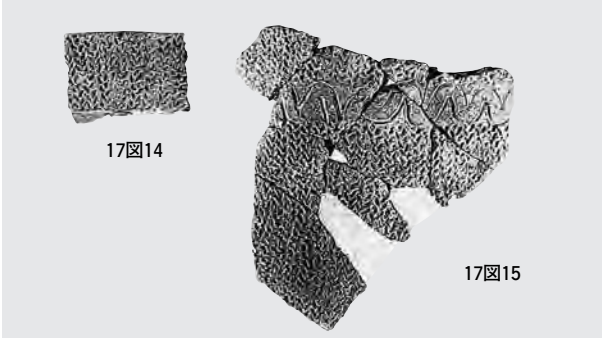
58　４ａ号住居跡出土遺物

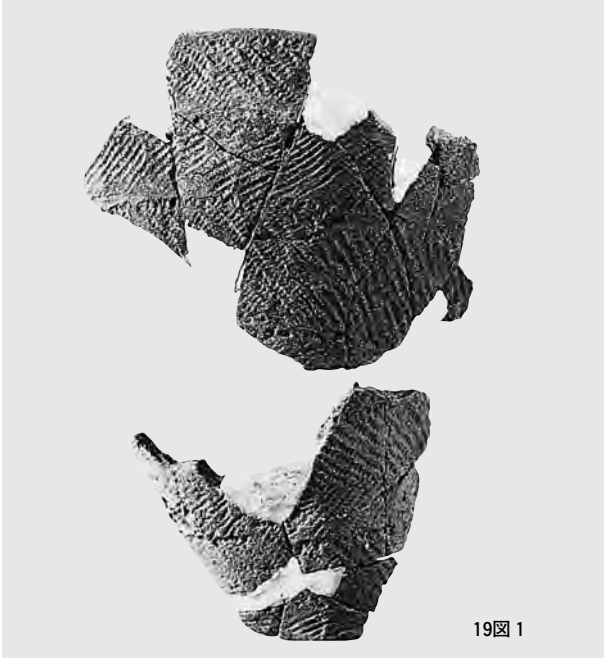


59　３～８号住居跡出土遺物

18図20


18図 1

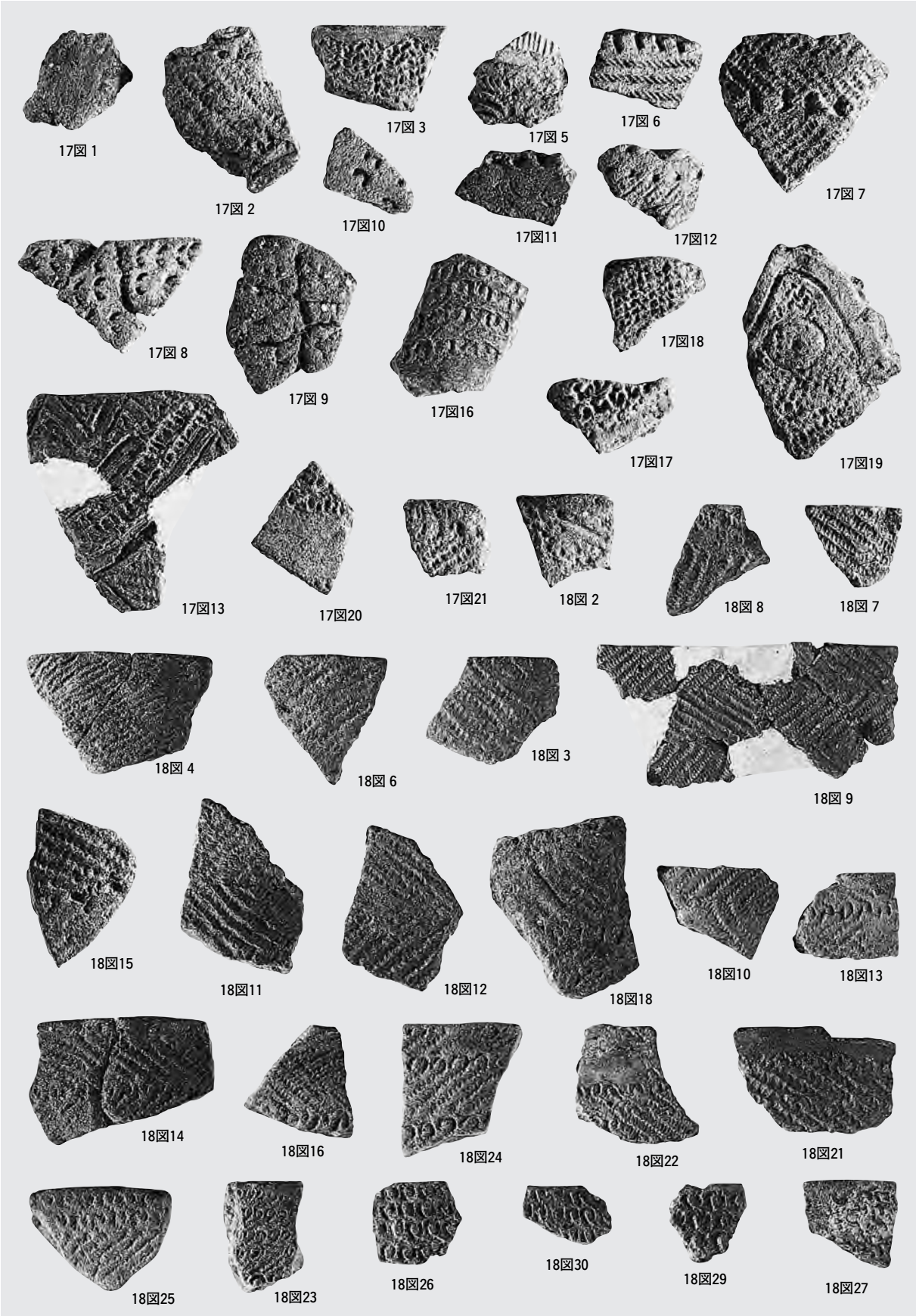

17図14
17図15


19図 1

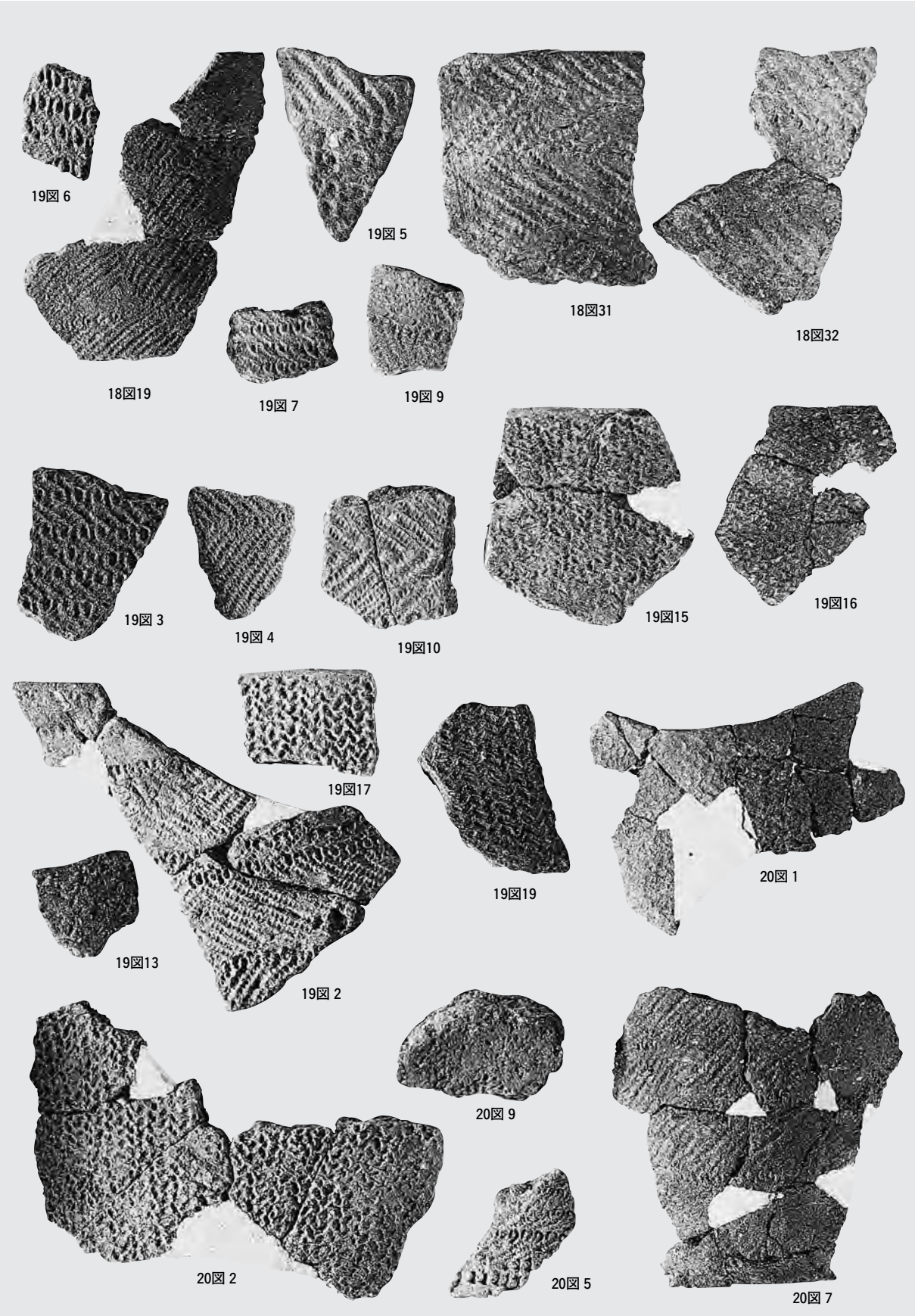
19図14

20図13
20図18
21図 3

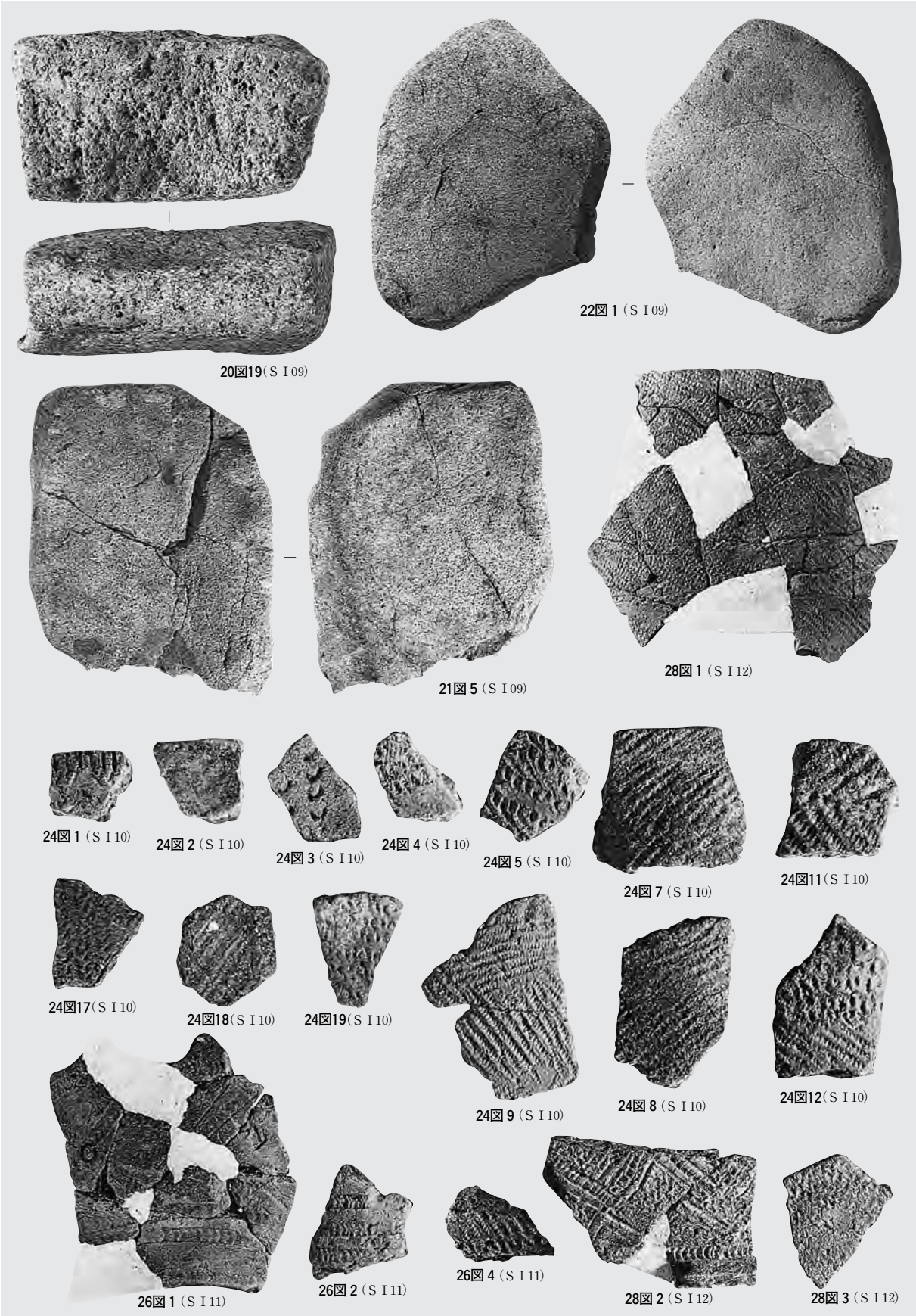
60　9 号住居跡出土遺物（1）



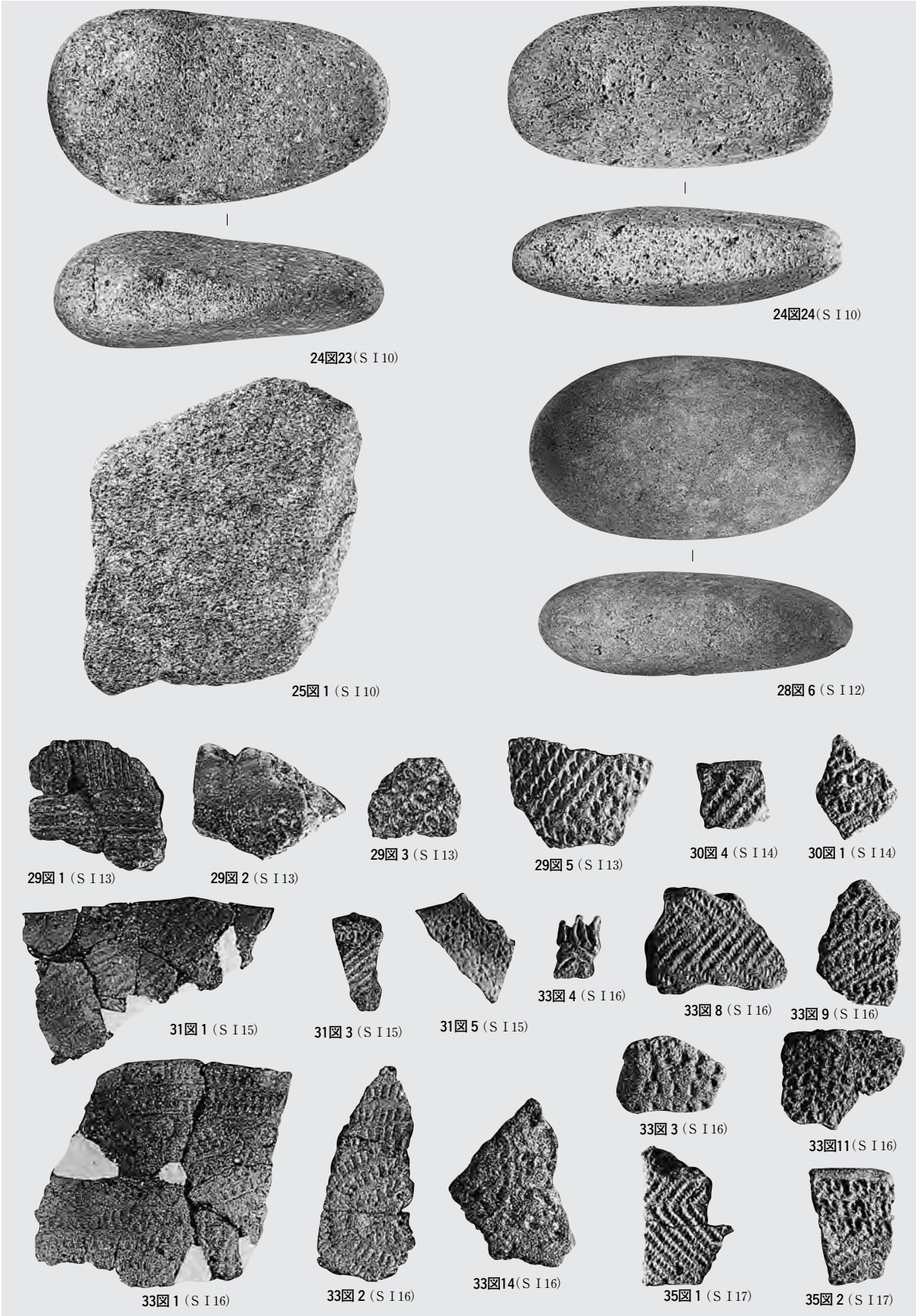
61　９号住居跡出土遺物（２）



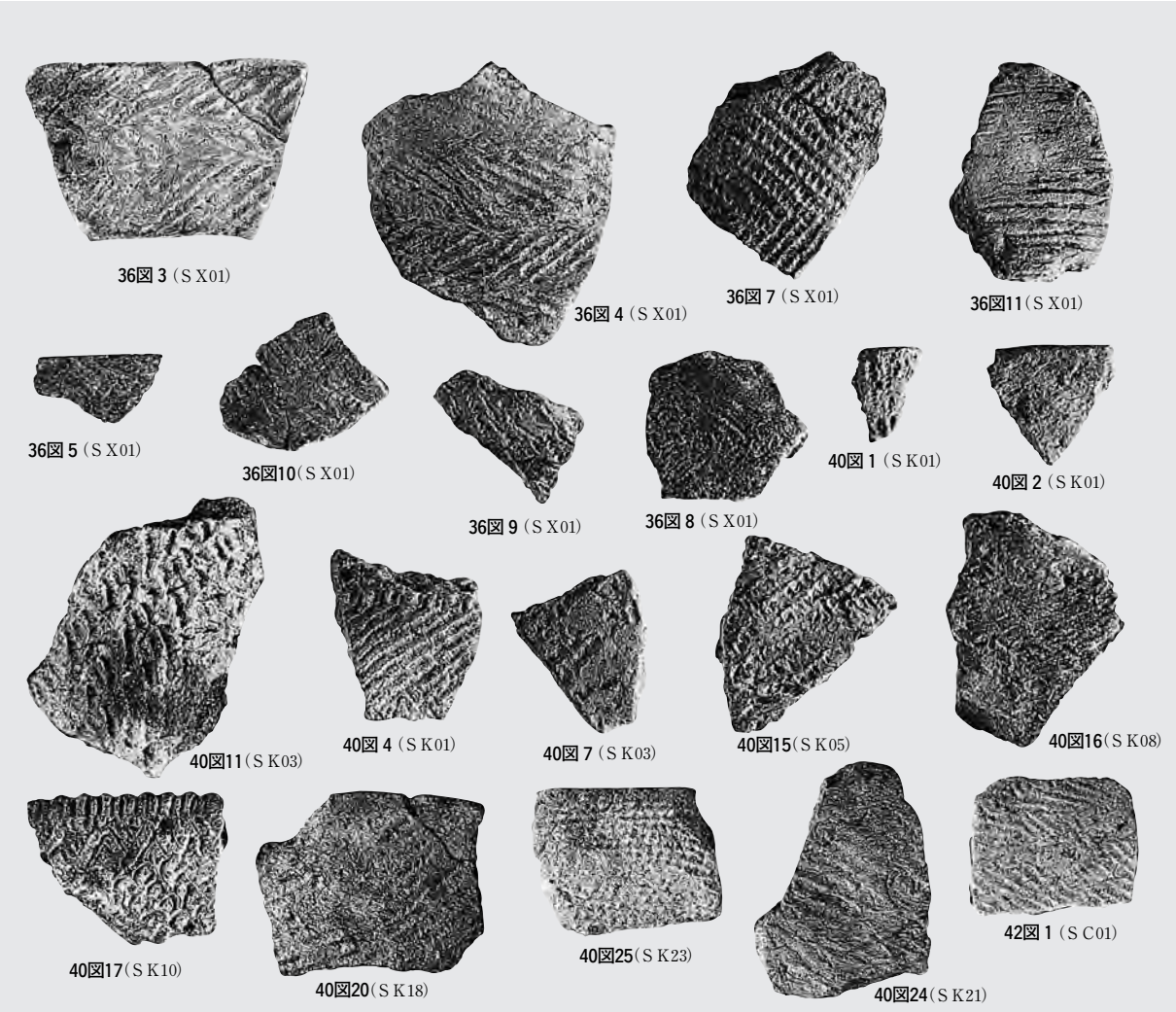
62　9 号住居跡出土遺物（3）



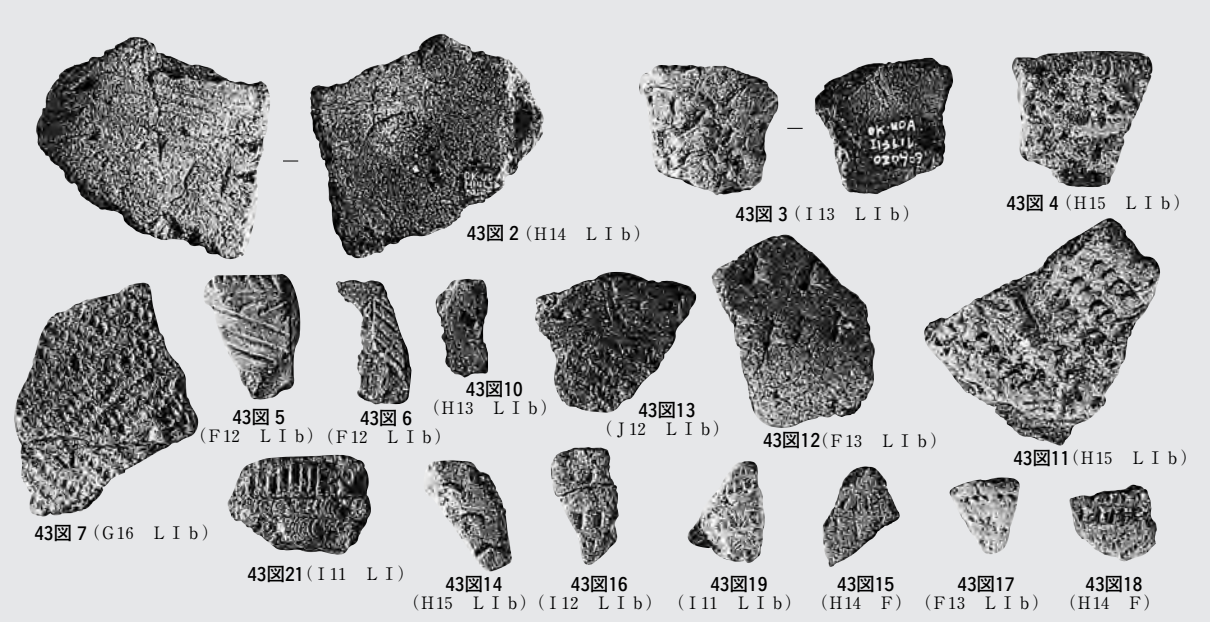
63　９～12号住居跡出土遺物



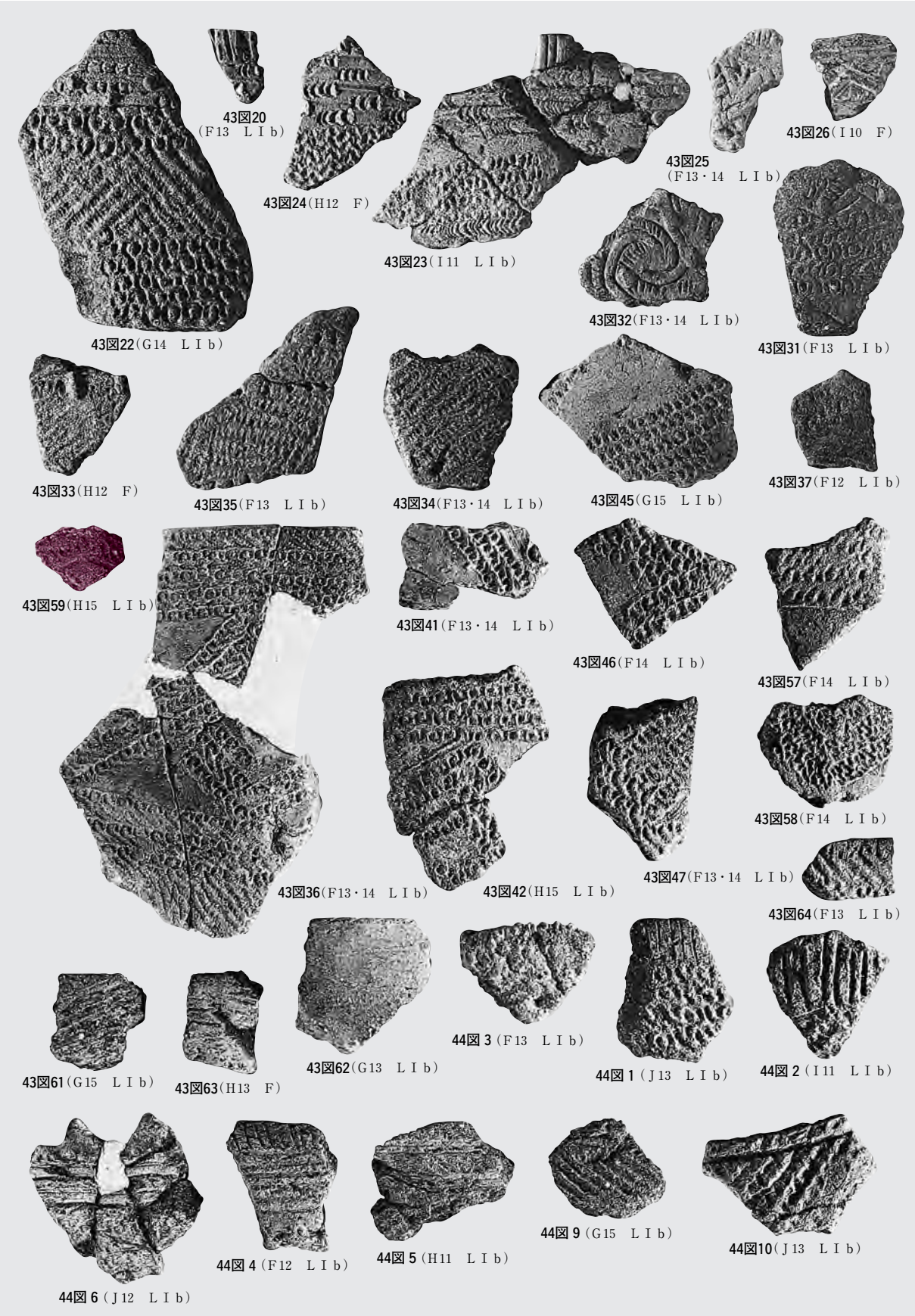
64　10・12～17号住居跡出土遺物



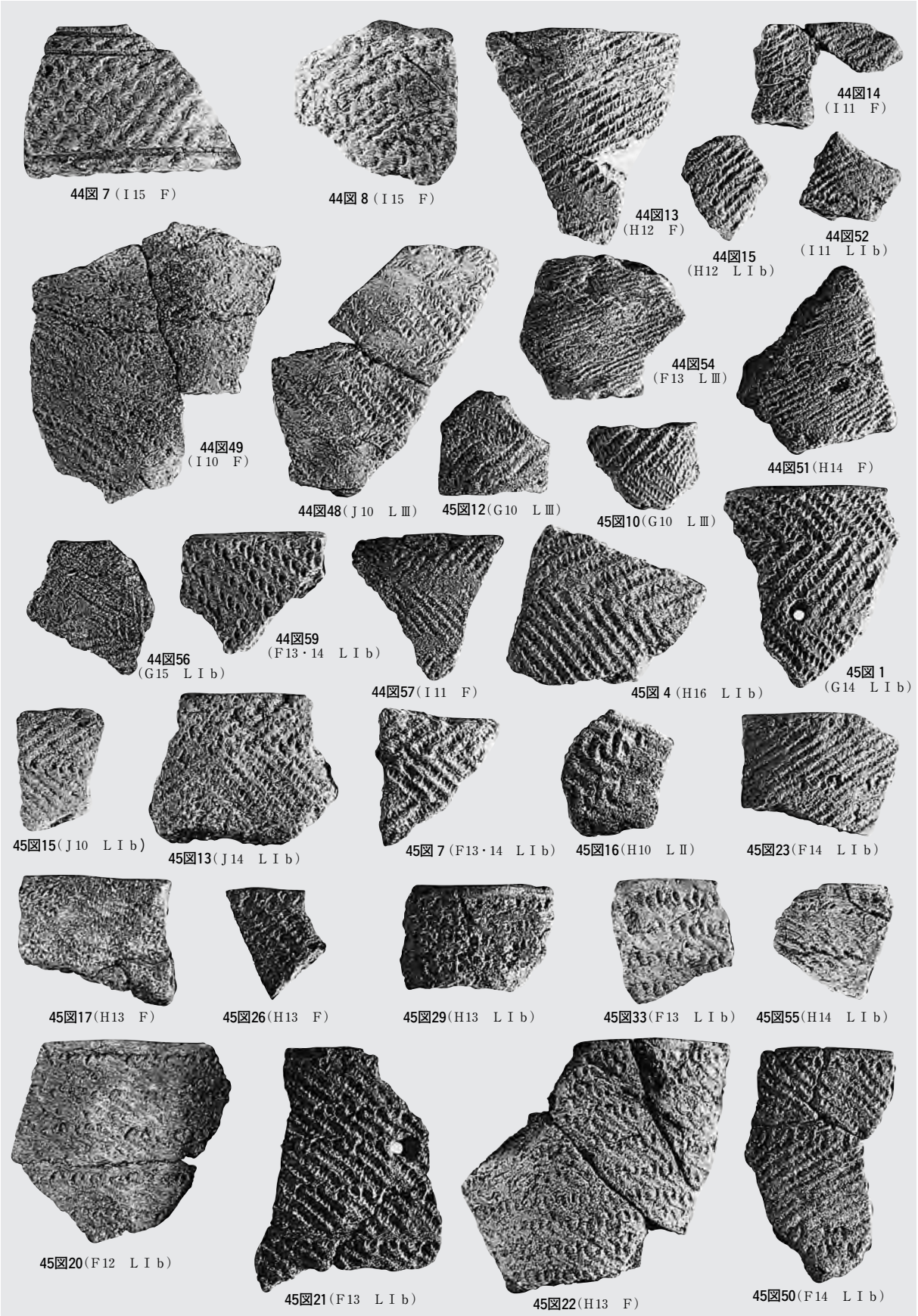
65　１号竪穴状遺構，１・３・５・８・10・18・21・23号土坑，１号木炭窯跡出土遺物



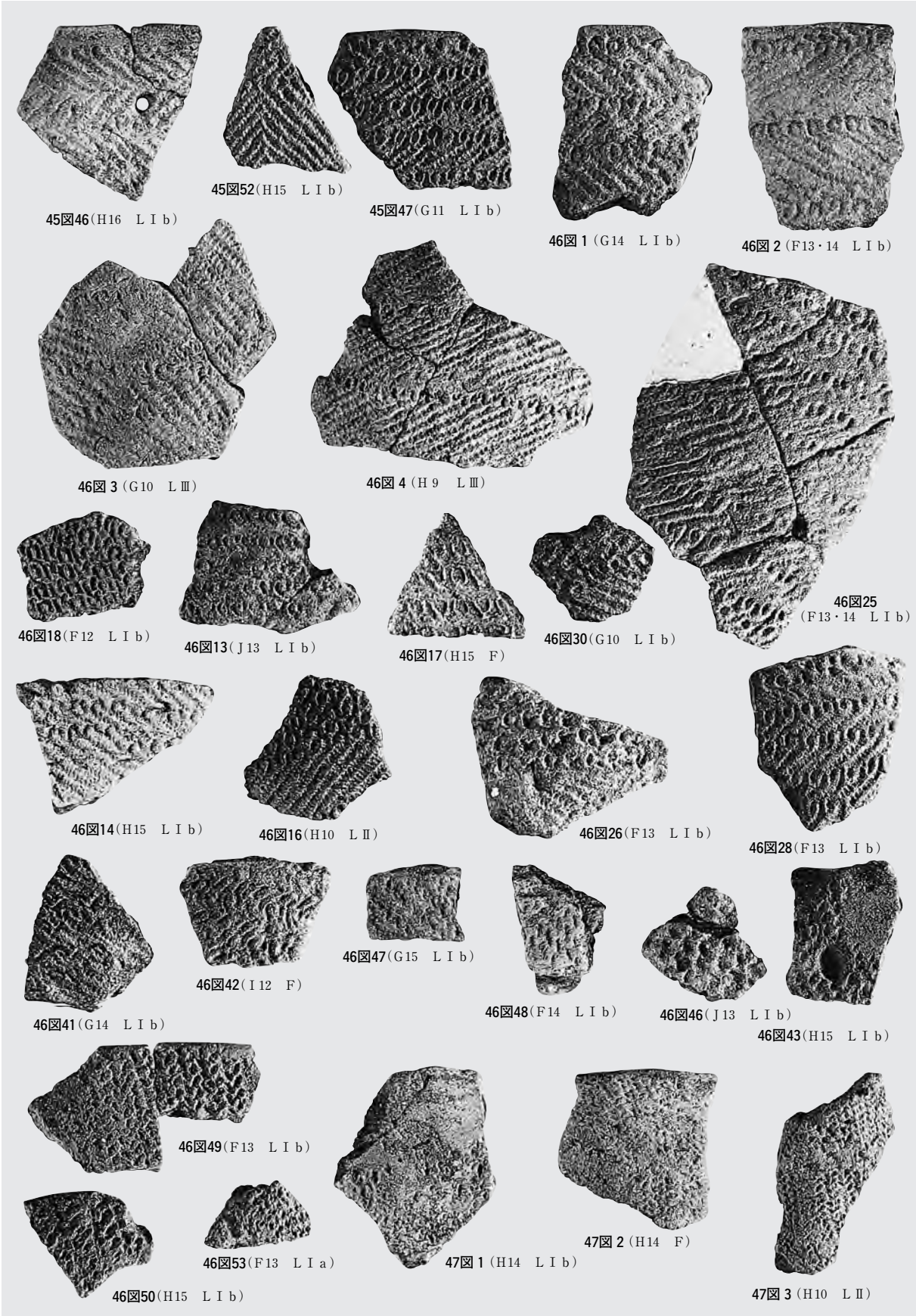
66　遺構外出土遺物（１）


43図20（F13　LⅠb）
43図24（H12　F）
43図23（I11　LⅠb）
43図25（F13・14　LⅠb）
43図26（I10　F）
43図22（G14　LⅠb）
43図32（F13・14　LⅠb）
43図31（F13　LⅠb）
43図33（H12　F）
43図35（F13　LⅠb）
43図34（F13・14　LⅠb）
43図45（G15　LⅠb）
43図37（F12　LⅠb）
43図59（H15　LⅠb）
43図41（F13・14　LⅠb）
43図46（F14　LⅠb）
43図57（F14　LⅠb）
43図36（F13・14　LⅠb）
43図42（H15　LⅠb）
43図47（F13・14　LⅠb）
43図58（F14　LⅠb）
43図64（F13　LⅠb）
43図61（G15　LⅠb）
43図63（H13　F）
43図62（G13　LⅠb）
44図 3（F13　LⅠb）
44図 1（J13　LⅠb）
44図 2（I11　LⅠb）
44図 6（J12　LⅠb）
44図 4（F12　LⅠb）
44図 5（H11　LⅠb）
44図 9（G15　LⅠb）
44図10（J13　LⅠb）

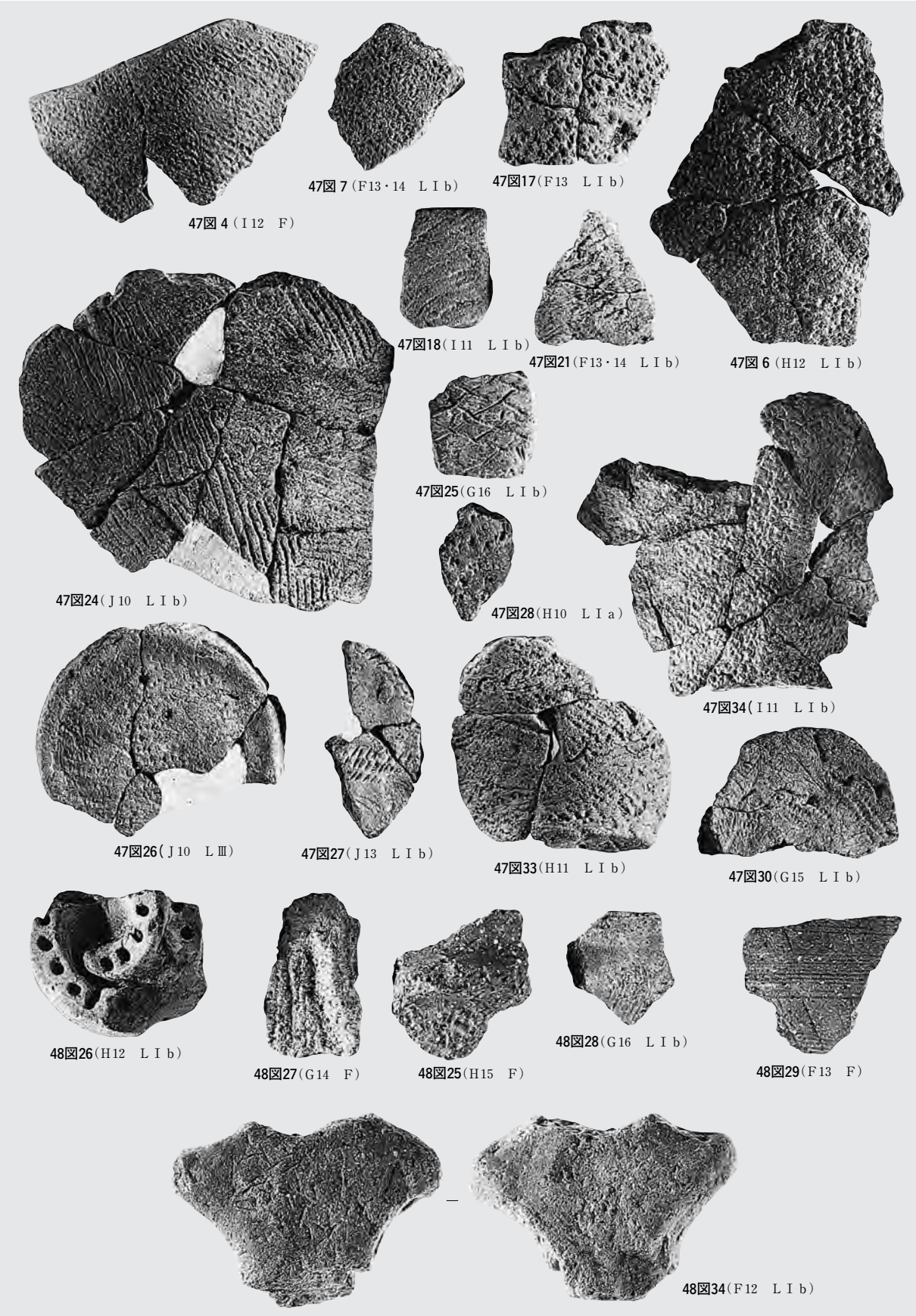
67　遺構外出土遺物（２）


44図７（Ｉ15　Ｆ）
44図８（Ｉ15　Ｆ）
44図13（Ｈ12　Ｆ）
44図14（Ｉ11　Ｆ）
44図15（Ｈ12　ＬＩｂ）
44図52（Ｉ11　ＬＩｂ）
44図54（Ｆ13　ＬⅢ）
44図49（Ｉ10　Ｆ）
44図48（Ｊ10　ＬⅢ）
45図12（Ｇ10　ＬⅢ）
45図10（Ｇ10　ＬⅢ）
44図51（Ｈ14　Ｆ）
44図56（Ｇ15　ＬＩｂ）
44図59（Ｆ13・14　ＬＩｂ）
44図57（Ｉ11　Ｆ）
45図４（Ｈ16　ＬＩｂ）
45図１（Ｇ14　ＬＩｂ）
45図15（Ｊ10　ＬＩｂ）
45図13（Ｊ14　ＬＩｂ）
45図７（Ｆ13・14　ＬＩｂ）
45図16（Ｈ10　ＬⅡ）
45図23（Ｆ14　ＬＩｂ）
45図17（Ｈ13　Ｆ）
45図26（Ｈ13　Ｆ）
45図29（Ｈ13　ＬＩｂ）
45図33（Ｆ13　ＬＩｂ）
45図55（Ｈ14　ＬＩｂ）
45図20（Ｆ12　ＬＩｂ）
45図21（Ｆ13　ＬＩｂ）
45図22（Ｈ13　Ｆ）
45図50（Ｆ14　ＬＩｂ）

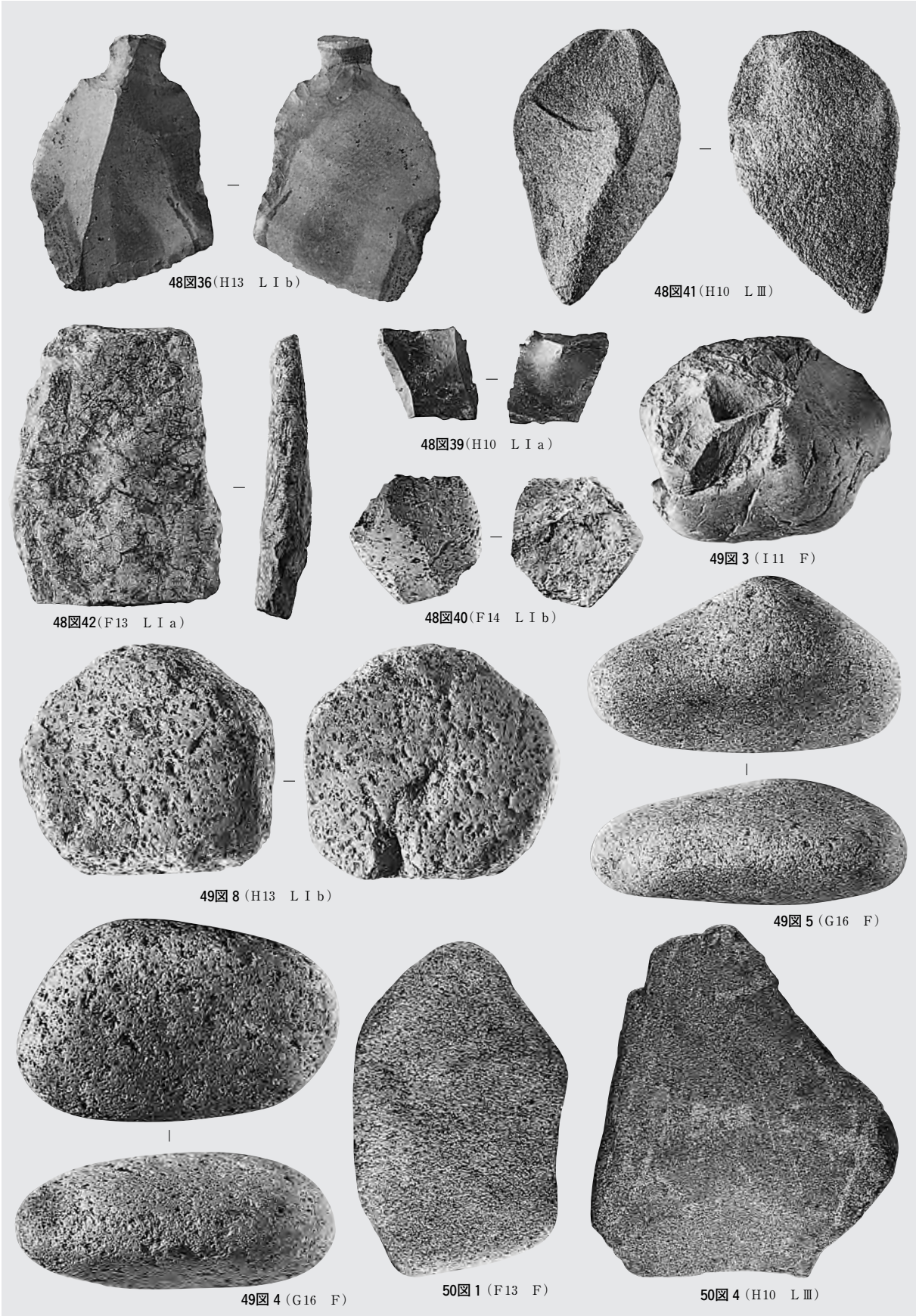
68　遺構外出土遺物（３）


45図46（H16　ＬＩｂ）
45図52（H15　ＬＩｂ）
45図47（G11　ＬＩｂ）
46図１（G14　ＬＩｂ）
46図２（F13・14　ＬＩｂ）
46図３（G10　ＬⅢ）
46図４（Ｈ９　ＬⅢ）
46図25（F13・14　ＬＩｂ）
46図18（F12　ＬＩｂ）
46図13（J13　ＬＩｂ）
46図17（H15　F）
46図30（G10　ＬＩｂ）
46図14（H15　ＬＩｂ）
46図16（H10　ＬⅡ）
46図26（F13　ＬＩｂ）
46図28（F13　ＬＩｂ）
46図41（G14　ＬＩｂ）
46図42（Ｉ12　F）
46図47（G15　ＬＩｂ）
46図48（F14　ＬＩｂ）
46図46（J13　ＬＩｂ）
46図43（H15　ＬＩｂ）
46図49（F13　ＬＩｂ）
46図53（F13　ＬＩａ）
47図１（H14　ＬＩｂ）
47図２（H14　F）
46図50（H15　ＬＩｂ）
47図３（H10　ＬⅡ）

69　遺構外出土遺物（４）


47図４（Ｉ12　Ｆ）
47図７（Ｆ13・14　ＬＩｂ）
47図17（Ｆ13　ＬＩｂ）
47図６（Ｈ12　ＬＩｂ）
47図18（Ｉ11　ＬＩｂ）
47図21（Ｆ13・14　ＬＩｂ）
47図24（Ｊ10　ＬＩｂ）
47図25（Ｇ16　ＬＩｂ）
47図28（Ｈ10　ＬＩａ）
47図34（Ｉ11　ＬＩｂ）
47図26（Ｊ10　ＬⅢ）
47図27（Ｊ13　ＬＩｂ）
47図33（Ｈ11　ＬＩｂ）
47図30（Ｇ15　ＬＩｂ）
48図26（Ｈ12　ＬＩｂ）
48図27（Ｇ14　Ｆ）
48図25（Ｈ15　Ｆ）
48図28（Ｇ16　ＬＩｂ）
48図29（Ｆ13　Ｆ）
48図34（Ｆ12　ＬＩｂ）

70　遺構外出土遺物（５）


48図36（H13　ＬＩｂ）
48図41（H10　ＬⅢ）
48図39（H10　ＬＩａ）
48図42（F13　ＬＩａ）
48図40（F14　ＬＩｂ）
49図 3（Ｉ11　F）
49図 8（H13　ＬＩｂ）
49図 5（G16　F）
49図 4（G16　F）
50図 1（F13　F）
50図 4（H10　ＬⅢ）

71　遺構外出土遺物（６）

26図１
（ＳＩ11）

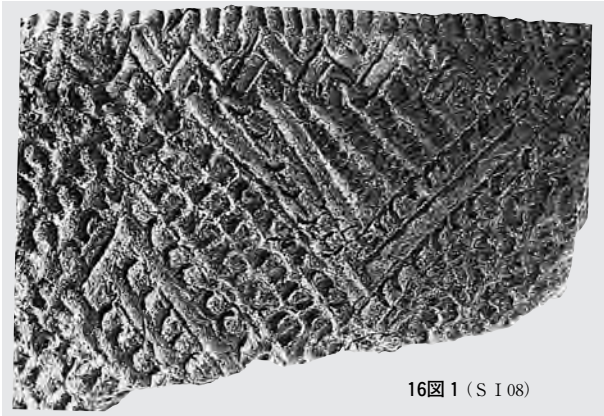
28図２
（ＳＩ12）

33図１
（ＳＩ16）

33図２（ＳＩ16）

43図23（Ｉ11　ＬＩｂ）

43図22
（Ｇ14　ＬＩｂ）


16図１（ＳＩ08）

43図31（Ｆ13　ＬＩｂ）

72　縄文土器細部

写　真　図　版

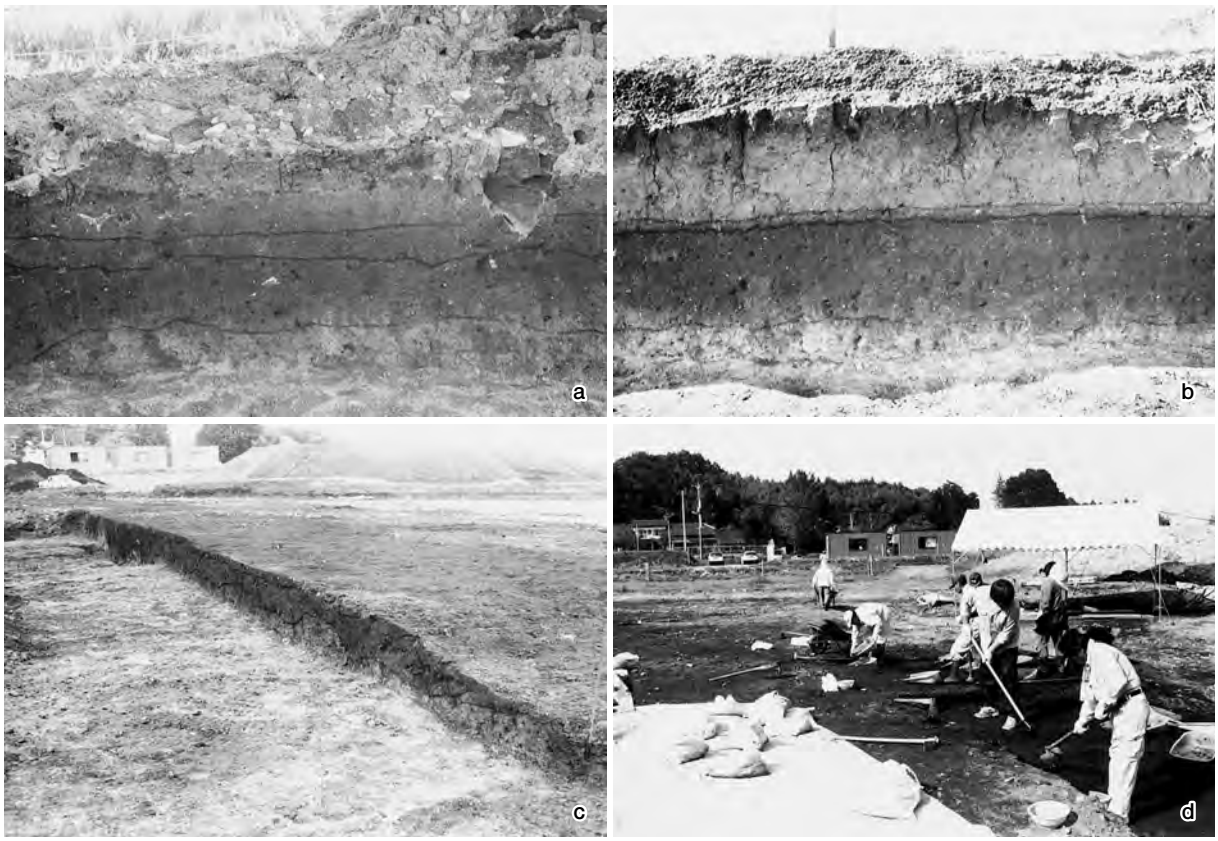
第3編　道平（どうだいら）遺跡

写 真 目 次

1　道平遺跡遠景(南から)　……215
2　調査区全景(北西から)……215
3　基本土層と作業風景　……216
4　１～４号土坑　……216
5　遺構外出土遺物（１）　……217
6　遺構外出土遺物（２）　……218

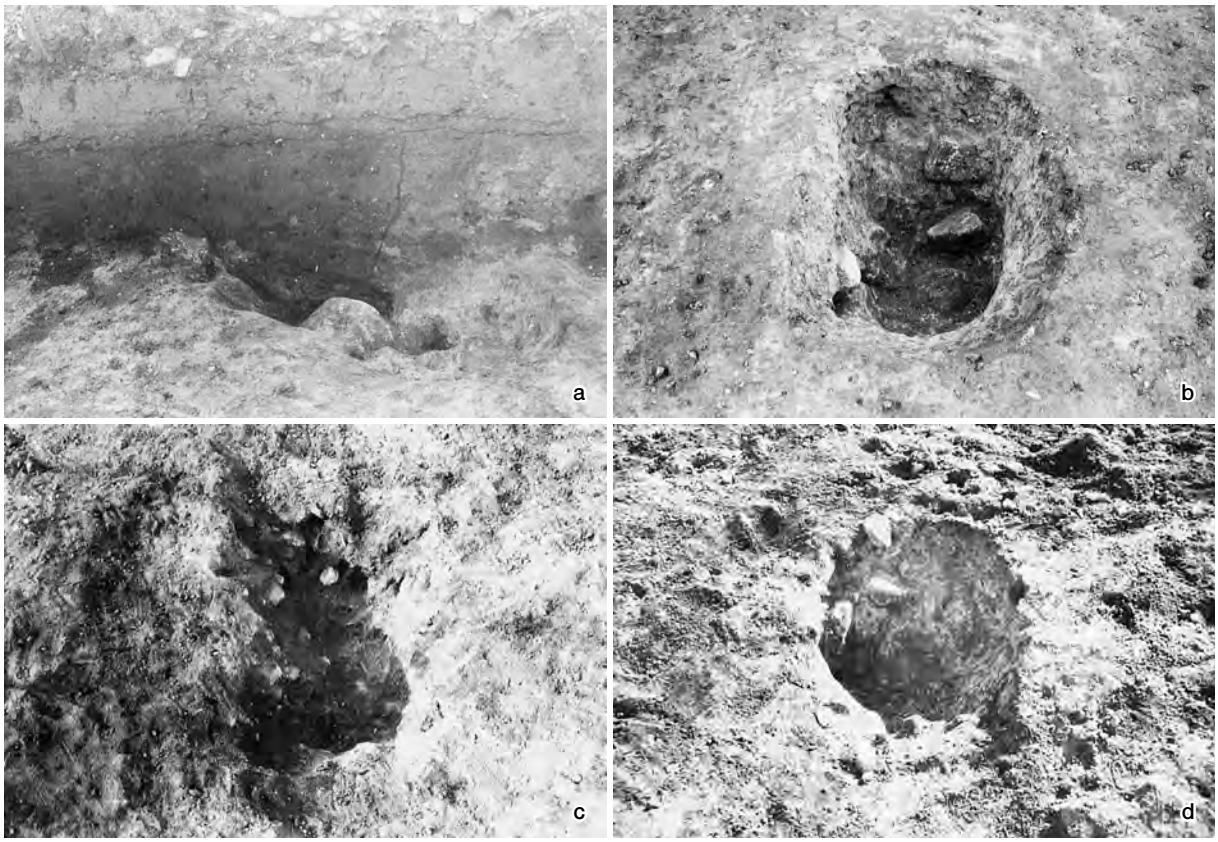
1　道平遺跡遠景　（南から）

2　調査区全景　（北西から）



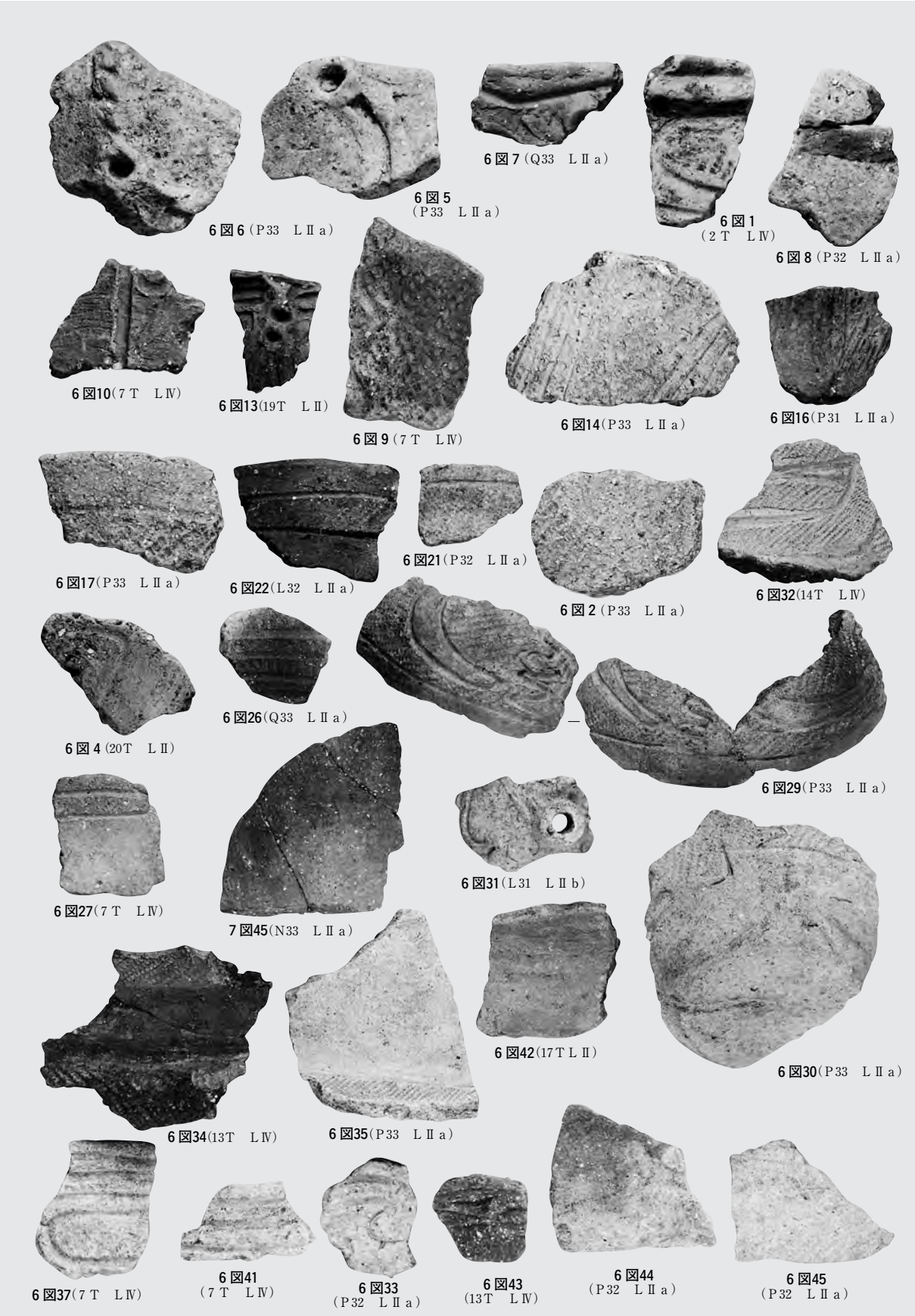
3　基本土層と作業風景

a　基本土層ＡＡ'（北から）　b　基本土層ＢＢ'（東から）
c　Ｏ33グリッド土層断面（南から）　d　作業風景（南から）

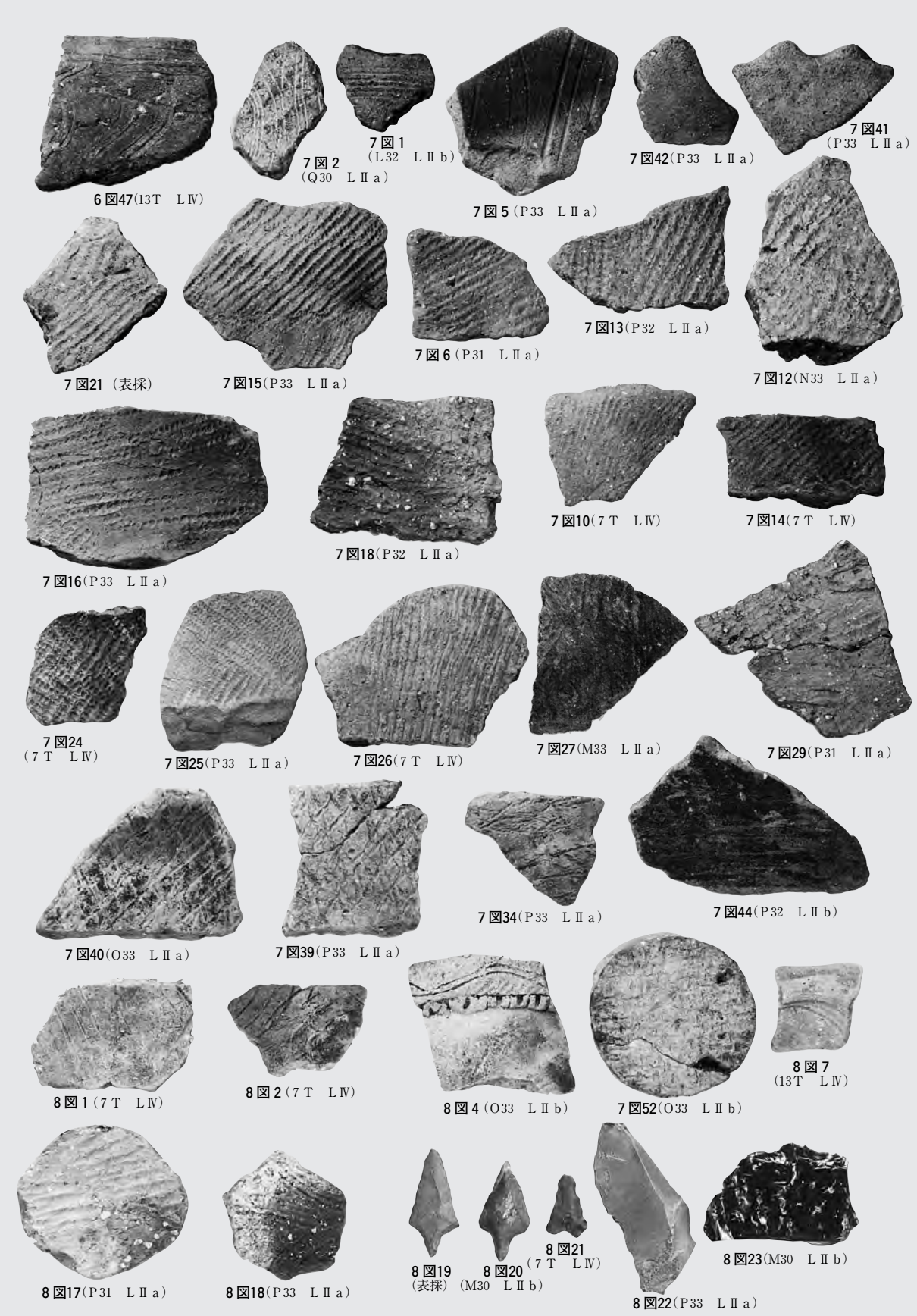


4　１～４号土坑

a　１号土坑断面（東から）　b　２号土坑全景（西から）
c　３号土坑全景（東から）　d　４号土坑全景（北から）


6図6（P33　LⅡa）
6図5
（P33　LⅡa）
6図7（Q33　LⅡa）
6図1
（2T　LⅣ）
6図8（P32　LⅡa）
6図10（7T　LⅣ）
6図13（19T　LⅡ）
6図9（7T　LⅣ）
6図14（P33　LⅡa）
6図16（P31　LⅡa）
6図17（P33　LⅡa）
6図22（L32　LⅡa）
6図21（P32　LⅡa）
6図2（P33　LⅡa）
6図32（14T　LⅣ）
6図4（20T　LⅡ）
6図26（Q33　LⅡa）
6図29（P33　LⅡa）
6図27（7T　LⅣ）
7図45（N33　LⅡa）
6図31（L31　LⅡb）
6図42（17T LⅡ）
6図30（P33　LⅡa）
6図34（13T　LⅣ）
6図35（P33　LⅡa）
6図37（7T　LⅣ）
6図41
（7T　LⅣ）
6図33
（P32　LⅡa）
6図43
（13T　LⅣ）
6図44
（P32　LⅡa）
6図45
（P32　LⅡa）

5　遺構外出土遺物（1）


6図47(13T　LⅣ)
7図2
(Q30　LⅡa)
7図1
(L32　LⅡb)
7図5(P33　LⅡa)
7図42(P33　LⅡa)
7図41
(P33　LⅡa)
7図21(表採)
7図15(P33　LⅡa)
7図6(P31　LⅡa)
7図13(P32　LⅡa)
7図12(N33　LⅡa)
7図16(P33　LⅡa)
7図18(P32　LⅡa)
7図10(7T　LⅣ)
7図14(7T　LⅣ)
7図24
(7T　LⅣ)
7図25(P33　LⅡa)
7図26(7T　LⅣ)
7図27(M33　LⅡa)
7図29(P31　LⅡa)
7図40(O33　LⅡa)
7図39(P33　LⅡa)
7図34(P33　LⅡa)
7図44(P32　LⅡb)
8図1(7T　LⅣ)
8図2(7T　LⅣ)
8図4(O33　LⅡb)
7図52(O33　LⅡb)
8図7
(13T　LⅣ)
8図17(P31　LⅡa)
8図18(P33　LⅡa)
8図19
(表採)
8図20
(M30　LⅡb)
8図21
(7T　LⅣ)
8図22(P33　LⅡa)
8図23(M30　LⅡb)

6　遺構外出土遺物(2)

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく37
書名	常磐自動車道遺跡調査報告37
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第414集
編著者名	山内　幹夫・宮田　安志・国井　秀紀・門脇　秀典・坂田　由紀子
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部　〒960－8116　福島県福島市春日町５－54　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会　〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	西暦　2003年　12月　19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
後作A （2次調査）	福島県双葉郡 富岡町大字上手岡 字後作	543	00055	37° 22′ 27″	140° 57′ 55″	2002年 4月23日 ～ 6月12日	2,500㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
上平A	福島県双葉郡 大熊町大字大川原 字南平	545	00015	37° 23′ 10″	140° 58′ 0″	2002年 7月29日 ～ 12月24日	3,300㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
道平	福島県双葉郡 大熊町大字大川原 字西平	545	00014	37° 23′ 26″	140° 57′ 59″	2002年 9月2日 ～ 12月4日	2,400㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後作A （2次調査）	集落跡	縄文時代 弥生時代	土坑　6基 遺物包含層　1カ所	縄文土器（縄文時代 弥生土器　早期） 石器	調査区北端部から発見された遺物包含層は，縄文時代早期に形成されたものと考えられる。出土した縄文土器は，主に田戸下層式・田戸上層式土器である。
上平A	集落跡	縄文時代 中世	竪穴住居跡　17軒 竪穴状遺構　3基 土坑　25基 集石遺構　2基 焼土遺構　1基 木炭窯跡　1基 小穴　26基	縄文土器（縄文時代 土製品　前期前葉） 石器	縄文時代前期前葉の遺構と遺物が確認された。竪穴住居跡は直径約30mほどの広場を囲むように馬蹄形に配置されている。また焼失住居も1軒検出されている。
道平	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	土坑　4基	縄文土器（縄文時代 弥生土器　後・晩期） 土師器 石器	遺跡は縄文時代後・晩期の集落跡だが，今回の調査区は遺構・遺物ともに稀薄な部分である。また，遺跡内に平安時代の遺構が存在する可能性が新たに確認された。

福島県文化財調査報告書第414集

常磐自動車道遺跡調査報告37

後作Ａ遺跡（２次調査）
上平Ａ遺跡
道　平遺跡

平成15年12月19日発行

編　集	財団法人 福島県文化振興事業団	（遺跡調査部遺跡調査課）
発　行	福島県教育委員会	（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
	財団法人 福島県文化振興事業団	（〒960－8116）福島市春日町５－54
	日本道路公団東北支社いわき工事事務所	（〒970－0101）いわき市平下神谷字仲田100
印　刷	株式会社 山川印刷所	（〒960－2153）福島市庄野字清水尻１－10

本報告書は中性紙を使用しています。